

大分県文化財調査報告書 第一六〇輯

大分の中世城館

第二集 文献史料編 2

大分県教育委員会

大分の中世城館

第二集 文獻史料編
2

序文

平成七年度から開始した本県内の中世城館の現地調査も平成十二年度で終わり、そのまとめとして本報告第一集「文献史料編1」を平成十三年度に刊行しました。本書第二集「文献史料編2」は、それに続くものであります。

大分県教育委員会では、すでに「大分県史料」の中世文書を刊行しましたが、この度、本報告書が加わることにより歴史研究や生涯学習の面において益々活用が期待されるところです。

特に、本書の編纂に当たっては、宣教師フロイスによつて書かれた「日本史」や同時代史料であるイエズス会宣教師の書簡群を主としており、この史料から、あらためて本県における中世城館の姿を想像していただくとともに、当時の社会の緊迫した状況をお伝えできるものと思います。

併せて、府内や臼杵など大友氏の館の詳細な史料も豊富に掲載したことから、「文献史料編1」に納められた同時代の中世文書とは、また、異なる趣があります。第一集、さらに引き続き発行する第三集以降の実地調査報告と併せてご利用いただくことでより中世城館の研究が深化し、さらに地域の歴史遺産として、活用に結びつくことを、願っております。

最後になりましたが、調査にあたりお世話になりました関係各位に対し厚く御礼申し上げます。

平成十五年三月三十一日

大分県教育委員会教育長

石川公一

凡例

1. この報告書は、国庫補助事業「大分県中世城館等発掘調査事業」の報告書第二集文献史料編2である。ここには大分県内の中世城館に関するものと見られるイエズス会宣教師の書簡・報告書・年報、フロイスの記した「日本史」、ならびに第一集文献史料編1の補遺を収載した。

2. 本報告書の構成は、凡例、目次、宣教師記録部、古文書部・記録部補遺からなる。

3. 史料の出典について、特に記載のないものは、松田毅一監訳『十六・七世紀イエズス会日本報告集』（同朋舎出版）によった。

4. 宣教師記録部の史料の表記は以下の基準によつている。

(1) 史料は関係箇所を段落単位で掲載し、段落が離れている場合には（中略）を記した。

(2) 文字や表記は出典の通り掲載したが、必要に応じて編者の案を行間に（　）で記した。

5. 古文書部・記録部補遺の史料の表記は以下の基準によつている。

(1) 書式・体裁は原本を尊重したが、紙幅の都合により行替などについてはこの限りでない。

(2) 文字は原則として常用漢字に改めたが、人名等で編年の参考となる場合は、常用漢字以外も使用した。

(3) 合字については（より）はそのままとした。

(4) 本文には、適宜読点・並列点を付けた。

(5) 異筆・追筆・端裏書・裏書は「　」で表し、右肩に（異筆）・（追筆）・（端裏書）・（裏書）と傍注した。

(6) 虫損等で文字が判読できない場合は、□□□□　あるいは■■■■で表した。

(7) 本文のなかで、編者が用いた記号のうち、（　）は誤記・誤脱等に対する編者の案、（マク）は文意が通じないものに付した。また、○は編

者の説明にかかるものである。

(8) 补遺一五「豊州城堡記」については、変体仮名は基本的に平仮名に直したが、者（は）・江（え）・而（て）はそのままとした。

(9)

補遺一五「豊州城記」には頭注・傍注・割注がある。このうち、頭注については対象となる箇所付近に※を付し、記載箇所の項目末尾に一括別掲した。傍注についても、一部項目の末尾に掲載したものもある。また、割注については、活字を小さくすることで表現した。なお、本文に訓点が施された箇所があるが、紙幅の都合から省略した。

5. 本報告書の作成にあたっては、豊田寛三（大分大学教授）・飯沼賢司（別府大学教授）・吉本明弘・高陽一・野村智史（以上別府大学大学院生）の諸氏の御協力を得た。

6. 本報告書の編集は、三重野誠（大分県立先哲史料館）・櫻井成昭（大分県立歴史博物館）が行つた。

目 次

- エズス会司祭および修道士宛書簡
- 一五七七年九月一日付、口之津発信、フランシスコ・カブラルの、イエズス会総長宛書簡
- 一五八七年十月十六日付、臼杵発信、ルイス・フロイスの、ポルトガルのイエズス会司祭および修道士宛書簡
- 一五七八年十月付、臼杵発信、ルイス・フロイスの、日向に滞在するフランシスコ・カブラル宛書簡
- 一五七八年十月付、ルイス・フロイスの、日本在留のフランシスコ・カブラル宛書簡
- 一五七九年十二月十日付、口之津発信、フランシスコ・カリオンの、イエズス会司祭および修道士宛書簡
- 一五七九年、臼杵発信、フランシスコ・カリオンの、下（の地方）在留の司祭および修道士宛書簡
- 一五八〇年十月二十日付、豊後発信、ロレンソ・メシアの、イエズス会総長宛、一五八〇年度・日本年報
- 一五八一年九月十五日付、日本発信、フランシスコ・カブラルの、イエズス会司祭および修道士宛書簡
- 一五八二年二月十五日付、長崎発信、ガスパル・コエリュの、イエズス会総長宛、一五八一年度・日本年報
- 一五八二年十月三十一日付、口之津発信、ルイス・フロイスの、イエズス会司祭および修道士宛書簡
- 一五八四年一月二日付、ルイス・フロイスの、イエズス会総長宛、一五八三年度・日本年報
- 一五八四年一月二十日付、長崎発信、ルイス・フロイスの、アレシャンドウロ・ヴァリニヤーノ宛書簡
- 一五八四年九月三日付、長崎発信、ルイス・フロイスの、イエズス会総長宛、一五八四年度・日本年報
- 一五八五年八月二十日付、長崎発信、ルイス・フロイスの、イエズス会総長宛書簡
- 一五八五年十一月十三日付、長崎発信、ルイス・フロイスの、イエズス会総長宛書簡
- 宣教師記録部
- 一 一五五四年、ゴア発信、ペドゥロ・デ・アルカソヴァの、ポルトガルのイエズス会修道士宛書簡
- 二 一五五七年十月二十九日付、日本（平戸）発信、ガスパル・ヴィレラの、インドおよびヨーロッパのイエズス会員宛書簡
- 三 一五五七年十一月一日付、日本発信、ルイス・デ・アルメイダの、ベルシヨール（・ヌーメス）宛書簡
- 四 一五五八年一月十日付、コチン発信、ベルシヨール（・ヌーメス）の、ポルトガルのイエズス会修道士宛書簡
- 五 一五六一年十月八日付、豊後発信、ジョアン・フェルナンデスの、イエズス会修道士宛書簡
- 六 一五六二年十二月十日付、ゴア発信、バルタザールガーボの、ポルトガルのイエズス会司祭宛書簡
- 七 一五六三年十一月十七日付、横瀬浦発信、ルイス・デ・アルメイダの、イエズス会修道士宛書簡
- 八 一五六四年十月十四日付、豊後発信、ルイス・デ・アルメイダの、インドのイエズス会修道士宛書簡
- 九 一五六五年十月二十五日付、福田発信、ルイス・デ・アルメイダの、（イエズス）会修道士宛書簡
- 一〇 一五六九年十月十一日付、豊後発信、ベルシヨール・デ・フィゲイレドの、インドのイエズス会司祭および修道士宛書簡
- 一一 一五七〇年十月二十五（十五）日付、平戸発信、ルイス・デ・アルメイダの、イエズス会司祭および修道士宛書簡
- 一二 一五七五年九月十二日付、長崎発信、フランシスコ・カブラルの、ポルトガルの管区長宛書簡
- 一三 一五七六年九月九日付、口之津発信、フランシスコ・カブラルの、ポルトガルのイエズス会修道士宛書簡
- 一四 一五七七年六月五日付、臼杵発信、ルイス・フロイスの、ポルトガルのイ

三〇 一五八六年十月二日付、臼杵発信、ペロ・ゴーメスの、アレシャンドウロ

(・ヴァリニヤー) 宛書簡

三一 一五八六年十月十七日付、下関発信、ルイス・フロイスの、アレシャンドウロ・ヴァリニヤー宛書簡

三二 一五八八年二月二十日付、有馬発信、ルイス・フロイスの、イエズス会總長宛、長宛書簡、(一五八七年度日本年報)

三三 一五八九年二月二十四日付、ガスパル・コエリュの、イエズス会總長宛、一五八八年度・日本年報

三四 一五九六年十二月十三日付、長崎発信、ルイス・フロイスの、一五九六年度・年報

三五 第九章(第一部一〇章) バルタザール・ガーゴ師が豊後に帰つた次第、およびさつそく彼に生じた苦難について

三六 第一四章(第一部一六章) 山口が破壊され、コスメ・デ・トルレス師が豊後に赴いた次第、ならびにメストレ・ベルショール師がその伴侶たちとともに一五五六年に日本に到着したこと

三七 第二七章(第一部四七章) インドから二名の司祭が渡来し、その一人がさつそくルイス・デ・アルメイダ修道士とともに豊後へ派遣された次第

三八 第三一章(第一部八二章) 豊後で布教が進展した次第

三九 第三三章(第一部一〇六章) 豊後国主が次男をキリストンにした次第、および甥の土佐国主一条殿も受洗した次第

四〇 第三四章(第一部一三章) 親賢の養子シモン勝之四郎殿が改宗したために豊後で生じたことについて

四一 第三六章(第二部一章) 豊後国主大友殿とその息子義統が、国主がまだ異教徒であった時に、己が諸事、ならびに教会のことでいかに振舞つたかについて

四二 第三七章(第二部二章) 国主がイザベルを離別し、別の女性を娶つたこと、彼女のために説教させ、洗礼を受けしめ、彼女がジュリアと名づけられた次第

四三 第三八章(第二部三章) 国主がキリストンとなり、フランシスコの名が与えられた次第

四五 第四四章(第二部九章) 嫁子の野津における所業、談話および誘惑に抗して採った方法について

四五 命じた幾つかのことについて
第四一章(第二部六章) 嫁子が野津に赴いたこと、および豊後におけるキリストン宗団の進展について

四六 第四二章(第二部七章) 嫁子がその妻になる奥方の洗礼に關して行つたことについて

四七 第四四章(第二部九章) 嫁子の野津における所業、談話および誘惑に抗したこと、新たに豊後の教会とキリストン宗門に対して迫害が始まったことにについて

四八 第四七章(第二部一三章) 国主フランシスコが行つた誓願、親賢が行ったこと、豊後で我らの同僚たちに生じた他の迫害、および労苦について

四九 第五〇章(第二部一六章) 嫁子が悪習と偶像崇拜に熱中し、(人々の)の改宗に反対することに熱心になつた後、教会に対する迫害が生じた次第

五一 第五一章(第二部一七章) 豊後で我らの同僚たちに生じた他の迫害、および労苦について

五二 第五二章(第二部一一章) 豊後国で起つた他の暴動について

五三 第五三章(第二部二二章) 巡察師の豊後への旅と途次の危険、および臼杵の修練院に命令を与えた次第

五四 第五四章(第二部二三章) 巡察師が府内の市で(設立)を命じた学院、および他に生じた幾つかのことについて

五四 第五五章(第二部三八章) 志賀殿が改宗するに至つた端緒と動機について

五六 第五六章(第二部四六章) 本年、豊後での出来事について

五六 第五七章(第二部五五章) 豊後の妙見城で引き続き生じた幾つかのこと、および国主フランシスコがその息子たちに行つた一訓話について

五七 第五八章(第二部五六章) 同年、豊後で生じた他のことについて

五八 第五九章(第二部六一章) 本年、豊後での改宗に際して生じた幾つかのことについて

五九 第六〇章(第二部六二章) 豊後での改宗に際して生じた他の幾つかのことについて

六〇 第六一章(第二部六三章) 志賀ドン・パウロの改宗、および彼がキリストンになる際の騒擾と苦難について

六一 第六二章(第二部六四章) ドン・パウロ(?)の迫害と反抗について

六二 第六三章（第二部六五章）ドン・パウロに対する迫害と反抗が進展した次

第

古文書部・記録部補遺

補遺一 正平六年十二月廿九日

補遺二 正平八年七月廿三日

補遺三 嘉慶貳年六月 日

補遺四 八月一日

補遺五 明応八年十一月廿二日

（天文三年）三月十一日

補遺六 三月十三日

補遺七 三月十三日

補遺八 三月十三日

補遺九 三月卅日

補遺十 卯月三日

補遺一一 二月八日

補遺一二 二月八日

補遺一三 二月八日

補遺一四 二月八日

補遺一五 二月八日

（天正十五年）三月廿二日

七七

第六五章（第二部七二章）豊後の改宗において生じたことについて

七六

第六六章（第二部八〇章）副管区長の司祭と豊後の嫡子との間に生じたこと

と、および国主フランシスコが関白の許へ薩摩に抗する（ための）援助を

乞いに赴いたこと

第六七章（第二部八四章）豊後国の破滅が始まった次第

六六

第六八章（第二部八五章）敵が臼杵に到達した次第、ならびに我ら（の身）

に生じ始めた困苦について

六七

第六九章（第二部八六章）府内の学院、および臼杵の修練院の司祭や修道

士たちが豊後国を退去するに決した次第

第六八章（第二部八七章）豊後の最後の破壊、および本年当初の出来事について

六八

第七〇章（第二部八七章）豊後の最後の破壊、および本年当初の出来事について

第六九章（第二部八九章）豊後の嫡子の改宗、本年、キリストになつた

他の貴人ら、およびイザベルの死去について

七〇

第七二章（第二部九五章）国主フランシスコ（大友宗麟）の逝去について

第七三章（第二部一〇二章）豊後に滞在していた司祭たちが、すべて退去

した次第、ならびに副管区長が密かに同地へ二名の司祭と二名の修道士を

ふたたび派遣した次第、および同所で生じたことについて

七一

第七四章（第二部一一二章）当一五八八年に豊後で引き続き生じた幾つか

のことについて

七三

第七五章（第二部一二一章）豊後国主吉統が（一五）八八年にキリスト

に対して行なつた他の迫害について

七四

第七六章（第二部一二二章）豊後の背教した国主吉統が、ジョランを初め

として七名のキリストに殉教死を命じた次第

七五

第七七章（第二部一三一章）豊後で生じたこと、ならびに同地に駐在する

司祭の追放について

七六

第七八章（第二部一三二章）豊後国主吉統が、すべての司祭を同国外へ放逐した次第

第八〇章（第三部三九章）当（一五）九三年に豊後で生じたことについて

曾根崎通秀軍忠状

少貳頼尚書下写

宇都宮親景代申状

木付頼直書状

大内義興感状

杉興重書状

大友家加判衆連署奉書

大友家加判衆連署奉書

大友宗麟感状

田原紹忍書状

豊臣秀吉朱印状写

吉川元長書状

岡本頼氏戦場日記

豊後国他領様子聞合帳

豊州城記

- 3 -

一
一五五四年、ゴア発信、ペドウロ・デ・
アルカソヴァの、ポルトガルのイエズ
ス会修道士宛書簡

國主の書状ができると、すぐ私は当地から六十里の平戸に向けて出発したが、通訳を同伴せず、ただ手真似によるのみであった。この間、常に陸路により十八日を要した。私が到着して二日後、さっそく、バルタザール・ガーゴ師とジョアン・フェルナンデス修道士の身に多大な苦難が降り掛かったが、それは以下のようであった。我らが山口より豊後に到着した時、國主を殺そうとする三人の有力な大身のために同地は騒乱状態にあつた。そして、一五五三年の四旬節の第二日目になると、騒ぎはいつそう由々しい状態になり、キリシタンらが司祭のもとに来て、市が焼かれて略奪されるであろうから司祭の財貨を隠すようにと言つた。司祭は國主が陥った苦しみを思い、ジョアン・フェルナンデス修道士を彼の家に遣わし、もし、國主と話すことができるならば、デウスは善き望みを持つ者に恵みを与え、あらゆる苦難から救い出すのであるから、殿下は大いに勇氣を奮うべきであり、司祭は國主をその敵から救うようデウスに祈願することを伝えるよう命じた。ジョアン・フェルナンデスが宮殿に着くと、そこには貴人たちが溢れ、皆いとも騒然として、誰が謀反人で、誰が味方であるのかも知らず、ただ、手勢を率いて謀反人を討とうとする幾人かの重立つた貴人のみ判明していた。そしてジョアン・フェルナンデスは國主と話すことは無理であろうと考え、ことによれば

一五五七年十月二十九日付、日本(平戸)発信、ガス・バル・ヴィレラの、インドおよびヨーロッパのイエズス会員宛書簡

メストレ・ベルシヨール師がインドへ向けて出発する時機に至り、我らは深い愛情と、次回には（デウスの）栄光の中で相見える期待をもつて別れを告げ、司祭の別離により我らの心中にある（悲しみ）よりも、さらに大なる喜びを感じた。定航船が出帆した後、我らは主（なるデウス）が安全に彼を運び給わんこと、ならびに主の榮えある十字架の旗が異教の闇を照らすため我らに力を授け給わんことを祈つた。間もなくして、從前行なつていたような説教、そのほかの聖儀が続けられたが、（主君に対する）密かに企てられた謀反のために人々は動搖したので、来訪者はそれほど多くなかつた。我らが到着する数日前、国主（大友義鎮）は謀反を指図した大身數名を殺させ、彼自らは安全に対処するため、或る城のようない島に引き籠つた。もし国主が死ねば、我らは死や別れきなくなるのは必定と見たが故に、これらの艱難はギリシタンには大なる動搖を、また、そのほかの人々には少なからざる恐怖をもたらした。聞くところによると、こ

友人數名であつたが、主（なるデウス）は御慈悲により時、逃れた者數名および、國主と親戚關係にある死者の事は收まり、貴人らは（再び）國主の庇護に与り、國主も彼らを赦して助けたので、幾らか平穏になつた。國主が己れに對して謀反を起こし、或いは裏切つた身分ある者を罰する方法は以下のようである。國主が謀反人の死（刑）を決定すると、その同日謀反人は解放され、同人には何れの日に死ぬべきかが伝えられる。謀反人は、もし殿下が望むならば、自害するであろうと答え、國主が同意すれば、彼はこれを大いなる名誉と考へる。所持する最良の衣服を着て短剣を持ち、これを胸から腹の下まで刺し、次いで腹を一方の側から他方へ十字形になるようくちつて死ぬ。かかる方法で死ぬ者は謀反人として名譽を失うことなく、その者の相続人と家は従前通りとなる。以上のことはずべて惡魔が彼らの死後、地獄においてさらにひどい苦しみを与えるための策略である。また、もし國主が自害してはならぬ、人に命じて殺させるであろうと答えれば、謀反人はこの伝言を受けた後、彼の家臣や友人、子女ら全員とともに、自邸において武器を取つて戦う準備を行なう。國主は市の指令官および執政者のような役職にある者に十分と思われる兵員を与えて派遣し、同人が右のような（反逆の大身を殺しに行なう）戦闘を見守る。（まず）矢を射かけ、その後接近して槍で攻撃し、最後に刀で戦う。かくして謀反人は己れの家臣や子女、家族とともに死ぬのであり、彼の家は焼かれ、その一族の記憶はことごとく消滅し、彼らはその蒙昧さ故に地獄に墮ちる。いかなることも名譽を第一とするため、彼らはこのことにおいてまったく盲目である。國主

は我らが到着する前に、己れに反抗した数人をこのようにして殺した。

(中略)

この四旬節の時期に、我らは殺され、家々が焼かれようとしたために、たいそう動搖した。すなわち、国主はその地から五里の所にある彼の城に身を置き、盜賊は数多いが、彼らに対する裁きも牢獄もなく、彼らの司祭たる仏僧は我らを殺すように彼らを扇動している。我らはほとんど冬の間と四旬節の間、毎日（殺される）時を予期し、我らの主（なるデウス）が知り給うことだが、我らは殺されることを確信していたので、昼間と同じ身なりで眠ることも度度であった。それ故、修道院にある物を片付け、とりわけミサのための葡萄酒は床の下に隠し、他の物はなるだけ安全な場所に置いた。食事はいつも苦

く、口に入れたものが死についての思いと混ざり合いながら（喉を）下つたことが幾度に及んだかは我らの主（なるデウス）が知り給うている。我らは終夜、順番を決めて警備せねばならず、今もなお、たいそう難儀しながら行なっている。國主は（人を介して）、我らの身は我らで護るべきであり、かの地より我らを援助することはできぬ、はなはだ遺憾であると伝えてきた。

三 一五五七年十一月一日付、日本発信、 ルイス・デ・アルメイダの、ベルシヨーラ（・ヌーネス）宛書簡

のため我らの主なるデウスの御加護を切に願うのはもつともことである。尊師も御承知の通り、当修道院は彼が我らに与えたものであるが、かつては彼の家であり、すべて杉材で造られている。もし我らがこれと同じものを造るとすれば、二千クルザードをもってしても果たし得ないであろう。また我らが用のある所へ行くための乗馬を必要とする度に、快く我らにすべてを提供するので、彼はさらに多くのものを与えようと望んでいるかに思われる。何事においても我らの大なる友人であるが、たとえ彼がキリストンの君主であつたとしても、我らの必要とするものをこれほど心安く与えるとは信じられぬほどである。

四 一五五八年一月十日付、コチン発信、
ベルシヨール（・ヌーメス）の、ポルトガルのイエズス会修道士宛書簡

數多の災難の中につれて司祭は、彼とジョアン・フェルナンデス修道士の生命が大いなる危険にさらされ、また領内がはなはだ荒廃しているのを認めたので、福音書にある、一つの市において迫害を受ける時は他の市に逃れよ、との助言を容れて、ジョアン・フェルナンデス修道士および数名のキリストンを伴つて豊後に赴いた。同國は山口から五十里の所につて、バルタザール・ガーゴ師、ならびにドゥアルテ・ダ・シルヴァ、ルイス・デ・アルメイダ両修道士が滞在しており、私が到着した時は彼らの全員がいた。かの災難の記憶が彼に深い悲しみをもたらしたので、彼はさめざめと泣きながら私にそれ

を語り、このような陰謀を企んだ悪魔に対して聖なる熱情に燃え、今から百年後に山口を元の状態に戻すことは期待し（得）ないと言つた。しかし、彼がデウスの御旨に己れを一致させていたことと、再び蛇の頭を踏みにじらんと願つてゐることは、とりわけ注目に値するものであつた。これは、我らが豊後に到着する二カ月前のことである。また、司祭（トルレス師）と修道士が豊後に来て間もなく、すなわち我らが到着する十五日前に、豊後國主は謀反の疑いがある国内の大身らを火と武器によつて攻撃し、重立つた十三名の大身の家を焼き、その家族と家臣をも滅ぼした。かくして、人々の言によれば「記憶するところでは」、その夜、双方で七千名が死んだといふことである。これらの大身の死により、豊後國主は豊後から七里の或る山中に逃れ、今なお同所にいる。また、領内は戦さと、それに対する不安から非常に混乱し、キリストンらは落ち着かず、所領は大なる恐怖に陥つてゐたので、司祭らは鳩のように素直であるのみならず、蛇のように鋭敏になり、夜間は終始、順番を決めて警備し、キリストンらを側に置くことが必要となつた。数多の苦難の中で、デウスの（救いの）御手に欠けるところはなく、司祭と修道士らは皆、眞の慈愛において結ばれ、デウスを敬い、己れを嫌惡して自らを節し、世俗のことに執着せず、また、尊師らが想像しうる限り完全な従順と清貧を示すことにより、偽らざる慰安を得てゐるようと思われた。私は度々、彼らに認められる行状の完全さ、すなわち現世への軽蔑や危険に動じぬ心、（また）苦難における慰安、信心の涙から、己れがいかに遠く隔たつてゐるかを思い、それはことごとく私を恥入らせるものであつた。

この國主は我らに多大な恩恵と深い友情を示したので、我らが精神的なこと、ならびに現世のことについて、彼

五 一五六一年十月八日付、豊後発信、ジョアン・フェルナンデスの、イエズス会修道士宛書簡

復活祭後の第二日曜日に、私は祝祭に来ていた多数のキリストンとともに、豊後から九里の所にある朽網の町に向かって出立した。同町には二百名のキリストンがおり、その地の領主は我らの大なる友人である。三位一体の日曜日まで滞在して、若干名をキリストンとなし、すでに帰依している人々に説教を行なつた。同所では既述の通り、彼らの一人が自費で一教会を建てたが、これは國主の宮殿であった当市の教会に勝るとも劣らず立派なものである。

六 一五六二年十二月十日付、ゴア発信、バルタザールガーラゴの、ポルトガルのイエズス会司祭宛書簡

(豊後の) 国主はマラッカからこの(副王からの)贈

物を携えた人に六百クルーザード以上を与えた。同国主は我らと甚だ親密であり、深い愛情をもつて我らを遇し、もし我らが彼の言うことに反することをよしとするならば、それを行なうようにと言つて、たいそう親切に助言を与える。我らが或るキリストンたちのためや、何らかの必要から國主に話をすると、彼はたゞ身分の低い者であつてもキリストンを己れの家臣と見なし、名を与え

る。(名を賜ること)は日本人にとつて尊重すべき榮誉であり、それ故に彼らは(人々から)知られることになり、國主は彼らを引見するため招き入れるのである。國主は度々、キリストンの家臣を介して教会に伝言を送っている。また、当地より送つた書簡の中には、彼のこと

を伯爵と呼ぶものもあるが、それは当地の領主らが自らは平凡な名を用いることを常としながら、外の人々が然るべき名誉を与えることを望んでいるからである。彼は先年盜賊により略奪された博多の国を平定するため五万の兵を派遣したが、もし彼自ら赴くならば、十万を率いて行つたであろう。日本からの諸書簡により私が察するところ、彼は山口の諸国をほとんど占領している。この山口ではその國主となつていた彼の一兄弟が殺された。

國主は二十万の兵を動員する(ことができる)であろう。彼自身の領地に多くの大身を擁しており、その数はスペインの最も有力な貴族より多く、その他にも伯爵や城主、武将が多数いる。彼においては常のことであるが、貴族であるポルトガル船の総司令官カビラン・モールが訪れるとき、彼らは貿易を行なうので國主の港に行き、國主を船に招いて歓迎する。この時、ポルトガル商人たちは彼と親しく交わり、彼も笑い楽しみ、商人らに食物を与えるが、司令官は彼(國主)に少しも媚びることなく帽子を脱いで立つており、これが甚だ長時間に及ぶのである。

七 一五六三年十一月十七日付、横瀬浦發信、ルイス・デ・アルメイダの、イン

ドの修道士宛書簡

私は七月二十五日に豊後に到着し、バウティスタ師や修道士らが元気にしてゐるのを見出した。到着して二日後、我らはこの豊後の市から七里の白杵に國主を訪ね、彼は司祭と修道士らを大いに歓迎し、バウティスタ師や修道士らへの庇護を求めるコスメ・デ・トルレス師の伝言にたいそう満足の意を表した。また、我らが恩恵を授かっている大身數人にバウティスタ師を紹介するため、彼らのもとにも赴き、彼らと別れた後、當市に戻つた。司祭は同所で日本語を学び始め、私は、当修道院がこの七年間補修を受けておらず幾分傷んでいたので、マルタ(Marta)の仕事に取り掛かつた。この頃、コスメ・デ・トルレス師は、戦争状態にある有馬國主と他方の貴人に宛てた書状を豊後國主から是非とも貰い受けるようにならにしたためてきた。私はすぐに政庁に行つたが、その時彼は外出しており、多数の貴人が都の絹織物、その他のたいそうな進物を携えて門のところで彼を待つていた。彼は(帰つて)来るや否や一同を見回し、私を見つけるとすぐ私の名を呼んで招き、邸内に連れて行つた。彼は私を己れの側に座らせ、司祭の伝言を聞くと、私に向かつて、かの大身らが和睦すべく即刻二名の貴人を両者のもとに派遣するであろうと言つた。然して彼はその場で司祭宛ての書状一通をしたため、それにより彼が即座に和睦を間違ひなく管理する旨、伝えた。このことや、その他のことを彼が私と話すうちに一時間が経過していくたあらうが、彼は(その間)己れと話すため街路で待つていた大身を一人として(邸内)に入れることを許さなかつた。我らを遇する際のかかる榮譽は日本人が我らによりいつそらの敬意を抱く原因となるものであり、またデウスへの奉仕に関わることに益するが、もし國主が前述のような好意をもつて我らを遇さねば、彼らはこれほ

市に帰り、国主はそれから数日後、我らに榮誉を与えて我らに対する愛情を國民に知らしめるため毎年行なつてゐるようすに、自國の重立つた大身らを伴つて我らの修道院を訪れた。これに先立つて彼は、(訪問の際に彼が)都からの使節を同伴することを伝え、彼(国主)に対するのと同じ名譽と歓待を(使節に)与えるよう(我らに)請うとともに、これに際しては食事をまず初めに使節に供するなど、よりいつそ敬意を表すことを望むものであり、それは(使節を)名代として遣わした人物に、かかる榮誉を与えたいと欲するが故であることを伝えてきた。(彼が)この豊後の市に来た当日、バウティスタ師は彼を訪ねて、我らに榮誉を受けようと欲していることを感謝した。彼は、用意が出来ている(ので)、我らがよいと思ふ時に己れを招くようにと言ひ、すべては彼の意志に従つて行なわれた。また、彼の家臣らがデウスの教えを奉じる上で必要な某かの恩恵を、彼は非常に喜んで我らに与え、この(使節が訪問する)ことにより、また彼(国主)が(使節に)懇請することにより、(使節は)甚だ重立つた人物にして、都ではガスペル・ヴィレラ師に便宜を計り、かつ大いに援助するであろうから、同使節が修道院を訪問し我らがその好意に与ることを喜ぶべきであると述べた。以上は豊後国主が我らに与えた恩恵であり、彼がいとも偉大な領主とあらば、これらの恩恵は少なからざるものである。願わくば、我らの主なるイエズス・キリストが彼に真理を悟らせ給わんことを。アーメン。

八
一五六四年十月十四日付、豊後発信、
ルイス・デ・アルメイダの、インドの
イエズス会修道士宛書簡

八 一五六四年十月十四日付、豊後発信、
ルイス・デ・アルメイダの、インドの
イエズス会修道士宛書簡

我らは豊後国主（大友宗麟）の領地に向け乗船したが、少なからず苦痛と悲しみを伴つてのことであった。といふのも、当地の迫害されているキリストン宗団が敵のただ中にあつて、司祭も修道士もいなければ、彼らを慰める者とてなく、彼ら自身もこの上迫害されるのを恐れて残留する希望を抱いていないことを知つたからである。我らの主なるイエズス・キリストに彼らの加護を祈りつつ夜間に出发し、翌日、高瀬と称する豊後國の町に到着した。司祭は同所に留まつて、かの新たなキリスト宗団を書簡により励まし、主（なるデウス）があのようによく迫害されている人々について、いかなる決定を下し給うのか見定めることにした。この町に着くとすぐに司祭は私を（当地から）我らの（里程によれば）三十二レーヴェアの所にある豊後へ送り出したが、それは司祭が同所に滞在しており、病のため旅路に就くことができず、同所に滞在することについて土地の執政官に書状をしたためくれるよう依頼することにした。私は豊後に到着するとさつそく、我らの（里程における）約六レーヴェア離れた国主の居所である臼杵に向かい、司祭の言葉を伝えた。彼は司祭が己れの所領にいることを甚だ喜び、同様に書状を送り、司祭のことを依頼した。さらに二カ月後、

その地の人々がキリストになつていなかることを知ると、彼の署名を付して金で飾つた板二枚を司祭に送付したが、それぞれの板には三つのことが告示されていた。その第一は、領国の民は大なる者から最も小さき者までことごとくキリストになりうること、第二はデウスの教えが説かれる地方ではいかなる妨害も侮辱も加えてはならず、（もしこれに背く時には）罰せられること、第三はすべての領国においてデウスの教えが永遠に説かれるのを彼は満足かつ喜びとすることであり、他方の板にも同じことを記した。彼が二枚の板を送付したのは、一修道士にその内の一枚を与えて、高瀬から七里にある別の大きな町へデウスの教えを説きに行かせることも命じたからであつた。彼がデウスの教えを奉じることなく大いに親愛の情を示すのは驚くべきことである。或る仏僧らが、かくも公然と寺院を罵り、また人間を喰うとか、その訪れた国々は滅びるとの悪評を持ち、その他数多の悪を秘めた輩を支持することは國主の格を落とすことになるので、所領から我らを追放するように請うたところ、彼はすかさず答えて、「予は一二、三年來寺祭らを領内に置いており、彼らが訪れる前は三カ国の領主であつたが、今や五カ国を領し、また（以前は）金錢に窮していたのが、彼らが來た後には日本のいづれの國主よりも裕福になり、したがつて予の臣民たちもそうなつた。彼らのお陰で何事も予にとつて好ましく、切に望んでいた子を得ることができた。汝らの教えを領内で支持することによつていかなる利益が生じたか申してみよ。かくなる上はこのことについて予に話さぬよう汝らに申し付ける」と言つた。それ故、彼らは恥入つて國主の前から立ち去つた。

九 一五六五年十月二十五日付、福田発信、

ルイス・デ・アルメイダの、（イエズス）
会修道士宛書簡

確かに國主に対してもこれ以上のことは有り得なかつたであろう。主（なるデウス）が御慈悲によりこの堺の市から収め給うた実は、主の教会にとつては貴重な薔薇であり、今日まで日本においてキリストになつた教養豊かにして謙遜深き者の一人である。また、甚だ偉大な医師で、同市の諸人から非常に尊敬されている。主は御恵みにより、彼が世を捨てて（イエズス）会に入るべく光明を授けることを嘉し給つた。しかし、彼は諸人からよく知られているがために、堺や都に留まつていなければならぬことを甚だ不満に感じていたので、豊後か、他の地方で主に仕えて死ぬため、自分を連れて行つてくれるよう私に請うた。直ちに私は彼に己れの所有物のいつきを同じく医師である彼の息子に譲らせ、彼には都の絹で作つた甚だ豪華な衣のみを持たせた「私が彼に（その衣を）携えておくようと言つた」。というのは、大身と話したり、コスマ・デ・トルレス師の伝言を運んで行く時には、その（使者となる）者は十分に身なりを整え清潔にすることが肝要だからである。すなわち、これまで当地の大身らは外見にのみ基づいて事を行なうの（が常）であり、これに従つて人に敬意を払う。実際に私が見たように、彼が堺では（立派な）衣装をまとい、（従者を）伴つていたのが、今では修道院で慎み深く穏やかにデウスへの奉仕に従つているのは、大いにデウスに感謝すべきことである。彼はコスマ・デ・トルレス師の命により、すでに説教を始めており、キリストは皆、そのよき振

舞いに心を引かれている。彼が奉仕を持続し全うすべく來ることができなかつたので、司祭が同地に赴いて、聖靈の祝祭を行なうことにより彼らの望みを叶えることが必要と思われた。同地では告白を聞き、聖体を授けて過候に恵まれて十三日間で豊後の学院に到着したと言えば十分である。同地で私はいとも親愛なる司祭および修道士から例のごとく慈愛をもつて迎えられ、キリストは皆、都の宗団が發展しているとの朗報に接して大いに喜んだ。到着から四日を経て、私は豊後國主を訪ねるため、この豊後から七里の臼杵の市に赴き、彼から大いに歓迎された。豊後のキリストはその大半が臼杵の市に移っているが、同市に祈禱する場所がなく、キリストらがそれを切に求めているので、私は教会を建設するための地所を（与えてくれるよう）彼に請うた。國主は居城近くの、海に沿つた市内の最優良地を我らに与えた。その土地は基礎造りをする必要があつたので、彼と、同地の主たる執政官で我らの友人である某貴人がその工事を進んで引き受け、聞くところによれば、現在、作業を進めているとのことである。このほか、彼らは修道院の建設に必要な人手を提供した。我らは、この工事が当市の多数の大身をして真理を知るに至らしめんことを、我らの主において期待している。

一一 一五七〇年十月二十五（十五）日付、
平戸発信、ルイス・デ・アルメイダ
の、イエズス会司祭および修道士宛
書簡

この頃、豊後國主が戦さに勝つたとの知らせが我らのもとに届いた。すなわち、國主輝弘は山口に至ると同地が手薄であるのを認めたので、多くの地域を占領し始めた。この報が暴君の軍勢に届くと、或る夜、同軍勢は十分に人目を避けて覚られることなく退却した。豊後國主の武将たちはこれを知ると、彼らは大軍團を擁していたので、およそ一ヶ月で十カ所の城が陥落した。これにより、彼は目的であった二カ国（豊前・筑前）の領主となつた。領国を平定した後、当地でもつとも大なる肥前国の多数の大身たちから、この度の戦さで受けた危害に対し

政府の所在地である臼杵のキリストは全員が府内に來ることができなかつたので、司祭が同地に赴いて、聖靈の祝祭を行なうことにより彼らの望みを叶えることが必要と思われた。同地では告白を聞き、聖体を授けて過ぐる四旬節の熱情を新たにした。当教会は政府（の所在地）にあることにより、地元の人や他国人が多数訪れ、絶えず説教に耳を傾けているので、司祭は長く同地に留まり、この時には身分あるはなはだ親戚の多い貴婦人二名が帰依した。それ故、さつそくこれに続いて彼女らの嫁や孫が説教を聴きに訪れたが、それはキリストとなるべく説教を完全に理解するためであり、彼女らはその望みを保持している。

一〇 一五六九年十月十一日付、豊後発信、

ベルシヨール・デ・フィゲイレドの、
インドのイエズス会司祭および修道
士宛書簡

て報復することとし、さつそく、軍勢をかの方に差し向けた。領主ドン・バルトロメウは豊後国主が彼と隣合う他の領主（竜造寺隆信）を滅ぼすため来襲し、これを倒した後、その勝利により彼に（も）戦さを挑んでくることを恐れ、これに対抗するだけの力を持つていなかつたので、彼はコスメ・デ・トルレス師に彼が豊後国主と親密になれるよう計ることを請い、もし（国主が）それをよしとするならば、彼は戦さにおいて己れの兵を挙げて助力するであろう（と言つた）。豊後国主はかつて何事であれ我らに対して拒絕したことがなかつたよう、その懇請もコスメ・デ・トルレス師に全面的な容認を示したもので、ドン・バルトロメウはたいそう喜んだ。彼の兄弟である有馬国主もまた、彼らが幾らか暴君に便宜を計つていたので、司祭が彼らとその兄弟が豊後国主と親交を結ぶのを取り持つたことについて深い謝意を表した。

（中略）

冬の勢力はすでに衰えたように思われたので、二月十五日、私は前述の事柄を国主と交渉するため豊後を発つたが、雪と風は私の出発のため蓄えられていたようである。すなわち、多量の雪を伴う西風が吹き始めたのであり、雪は三日間絶えることなく私の顔を叩き続けた。然して顔を覆うといよいよひどくなり、雪は風に激しく煽られたので、微小な孔として雪の入り込みどころはなかつた。國主の居所に至るまで歩き続けたこの三日間は確かに私と同行者たちにとって相当な苦難であったが、誰がために堪え忍ぶのかを思えば、いつさいの苦しみは喜びに変わるのである。

私が日田に到着すると、それを知った國主は私に、教会が必要としていることはいずれも、（誰か）人を派遣すれば事足りるが故に、かくも難儀な時期に豊後から私自

ら來ることを望むとは心苦しい限りであるとの伝言をよこし、また、雪が多く寒さが厳しかっため、身体を被う掛け布を私に与えた。これは秋月の太守が彼に贈つたもので、自らは未だこれを用いたことはなく、日本の君候にてつて掛け布は豪華な品であった。また、夜間就寝時に用いる灰色の朱珍製の頭巾で、裏に当地で甚だ珍重される毛皮を付けたものや酒二樽、猪半頭を私に贈つた。当地には非常に大きな猪がいるため、その（贈られた）猪は私が見た内でも最大級のものであった。私は彼に謝意を表し、翌日訪ねたが、来訪の目的を知ると、私がかくも些細な事柄のためにはなはだ苦労したことを氣の毒に思つてはいるようであった。それゆえ、國主の邸宅では、我が父母の家を訪ねたとしても及ばぬほどの歓迎に浴した。彼は直ちに右筆を呼び寄せ、書状をしたため（させ）て、それに署名した。右筆は書状を私のところに持つて來て読み上げたが、（その内の）一通は私が求めたものより遙かに良かつたとはいえ、私が想い描いていたのとは異なつていて、右筆がすぐにそれを国主に知らせたところ、彼は私が言う通りに作成するよう命じた。かくして実行されたが、これは彼が己れの命じた事柄が我らの意にそわない場合、それについて教えられるとき常に喜ぶことを私が知つていたからである。

（中略）

私はこの集落からキリストンの島々を訪ねるため平戸に向けて出発した。そこにはバルタザール・ダ・コスタ師が駐在しており、私は二十日間滞在してキリストンの集落を数多く巡り、絶えず説教を行なつたが、我らの主なるキリストの思召しにより彼らは多大な利益を得た。滞在中、豊後国主は私に書状を送り、（私が）日本の上長として渡來したフランシスコ・カブラル師を訪問するな

らば、私と話すべき重要な事柄があるので彼の城に立ち寄ることを請うた。この上長が到着したとの知らせと豊後国主の招きにより私は平戸を発ち、もつとも近道になるとから多くの山の間を通つて行つたが、國主の居所に至るのに三日を費やした。この三日間、昼夜を問はず雨が降り続き、また（途中の）村々で足を止めなかつたので、我らは他にならずもなく非常な危険を冒して大きな河川を渡つた。というのも、疫病で多数の人が死んでいたからであり、或る集落では夫婦や子供、従僕が病にかかって死んだが、恐怖のために彼らを埋葬する者もなく、それ故に我らの同行者である異教徒らが土地の人々と話すことを好まなかつたからである。國主の居所に赴いて上長司祭の渡来について彼と話したところ、彼は司祭に書状と何か品物を贈ることにしたが、教会を維持するに足る俸禄以外に贈る物がないと言つた。かくして、彼は近い内に戦さが終わつたら、直ちに教会を維持するための俸禄を与えるとの書状をしたためた。次いで私は彼のもとを辞し、フランシスコ・カブラル師が到着した志岐（Xequi）に向かつた。同地には都から来ることのできないルイス・フロイス師を除くすべての司祭が集まり、日本キリストン教会の幸福のため多くのことを協議した。司祭らが去つた後、フランシスコ・カブラル師は日本の諸教会を訪問することを決意し、このために私を同伴者に採用した。

一一 一五七五年九月十二日付、長崎發信、
フランシスコ・カブラルの、ポルト
ガルの管区長宛書簡

我らが豊後に帰着し、國主、その他の大身らを訪問した後、幾つか説教を始めたが、これにより我らの主は約五、六十名がその御助力を賜つて洗礼を授かることを嘉し給うた。國主の長女 (princesa) とその一姉妹も教会を訪れて説教することを請うた。その後、長子が他の兄弟一人を連れて来て、兩人とも聴聞しキリスト教になる希望を示し、残りの説教を聞き終えたと言つた。國主の甥にして婿である土佐 (Toza) の國主は或る謀反のため妻である (豊後國主の) 長女とともに豊後の政庁にいたが、この三ヶ月間説教を続けて聞き、数多くの質問と議論をした後、我らの主の思召しにより、デウスの教えが唯一真理であることを完全に悟り、キリスト教に入ることを決意した。然して洗礼を授けることを度々私に請うたが、このような人の場合、洗礼を遅らせるのが良いので、洗礼を急がず、さらに理解を深めて行くべきである、等と答えた。しかし、私は豊後を発つて、この肥前国に行く必要ができたため、彼は再び洗礼を切に求め、私は彼が病にかかるか、或いは彼が自國に戻ることになれば、その時には同地にいるジョアン・バウティスタ師が洗礼を授けるように定めた。かくして我らの主の御計らいにより、同国の或る重立った大身らが彼に国を治めさせるため招き、彼は行くことになったので、洗礼を授けることを司祭に請い、はなはだ善きキリスト教たることを示した。その様子は司祭が私にしたためた書簡によつて察せられる。我らの主が彼に勝利を授け給うならば、彼は日本の大國の一つである彼の領国をことごとくキリスト教にするよう尽力する覚悟である。彼に伴う艦隊の船にはいずれも異教徒の旗が掲げられていたが、彼は乗船するや否や、國主やすべての大身の面前で己れの船に

十字架の旗を掲げさせ、他の旗を伴うことを望まなかつた。我らは彼が (同國に) 到着し元気にしていいる旨の書状を受けた。かの国がことごとくキリスト教になるよう我らの主が彼に勝利を授け給わんことを。河内の國主は長子や奥方とともにこの度キリスト教になつたが、領国を奪われた。私は他の国々から、デウスの教えを説きに来るよう切に求められるが、彼らを助ける者もなく数多の靈魂が失われる事が解つてゐるだけに、彼らには涙なしに答えることができない。私はジェレミアス (Jeremias) の言葉、「幼き子どもたちはパンをせがんだが、彼らにパンを与える者はいなかつた」を想起す。デウスへの愛により尊師に請うのは、我らはもはやインドから援助を受けることができない以上、せめて貴地より日本に援助を差し向けることである。なぜなら、働き手の不足により幾千の靈魂が失われるからである。また、豊後國主は異教徒ながら、我らは彼より受ける恩恵に対しそうな恩義があるので、同國主やドン・バルトロメウに書状をしたためることもはなはだ必要なことであろう。本書簡をこれ以上冗長にすることは控える。我らの主なるデウスが尊師に愛と恩寵を受け給わんことを。アーメン。

一一三 一五七六年九月九日付、口之津發信、 フランシスコ・カブラルの、ポルト ガルのイエズス会修道士宛書簡

我らが臼杵に戻つた後、府内の修道院にはジョアン・バウティスタ師とギリエルメ修道士が残つた。同所で彼らは府内や周囲の村々から洗礼を求めて来る多数の人々に説教し教理を授けるため、日本人修道士ロケとともに駐在しているが、市内におけるよりも周囲の村々においてよりいつそう大きな成果を収めた。私は説教のためジョアン修道士を伴つて臼杵に向かい、同地に到着後は毎日、聴聞を求めて来る異教徒のために三回、四回、五回、六回と説教を行なつた。というのも、ここは國主の居住地であり、日本の諸国から多数の人が来ているため、我らには行なうべきことが多いからである。たとえ、他国からデウスの教えを求めて来る異教徒にそれについて説く以外のことをしなくとも、彼らが各々の国に帰れば、司祭がはなはだ遠方なるが故に行くことのできない所にまで創造主に関する知識を伝えるのであり、しかも常に多数の人が帰依するので大きな効果があつた。かくして、我らは (臼杵に) 戻つてからはほとんど毎週日曜日に洗礼式を行ない、キリスト教の数は増加した。また、我らをもつとも喜ばせたのは、それらのキリスト教が一般的には高貴な人々だということであつた。尊師よ、偶像崇拜がいとも栄えていた日本の主たる国の一において、偶像崇拜が次第に減り、我らの主なるデウスの名誉が増してゆくのを目の当たりにして我らが得た慰安を察せられたい。多数の家臣を持つ大身数名を含む約二十名の青年は、毎週日曜日のミサと説教の後、各自が (毎週交代で) 他の人々に食事を饗し、その日はデウスのことに関する談話に當て、異教徒が抱く疑問に対する回答を学び、その場にいる間は他の話をしないことを定めた。この修練により彼らは心の鍛錬と信仰に関する知識の面で大いに向上し、今や臼杵には異教徒のみならず、仏僧さえも彼らとは議論を欲しないほどである。それは議論を望んだ或る仏僧らが論破されたからであるが、今國を治めて

いる（國主の）長子は異教徒の貴人を多数呼び寄せ、キリストンの一人を招いて、全員が彼と議論し、デウスの教えに関する疑問を呈することを命じた。彼らは全力を注ぎ、長子自ら審判となつた。デウスはそのキリストンの貴人に大いなる恩寵を授け給うたので、彼は全員を負かしたのみならず、長子はデウスの教えはすべての教えの筆頭なるが故に、何よりもこれを汚すことは不可能であり、いかにしても説教をことごとく聽かねばならないと言つた。かくして、従前はデウスの教えは豊後でもつとも下賤なものになつてゐたのが、今や侮辱していた人々自身がデウスの教えのみ真理であり、もしこれほど厳しく難しいものでなければ諸人がそれを奉じるであろうと言つてゐる。しかし、白杵においても、またその付近の村々においても、キリストンになるため聴聞を希望するすべての人へ応じることができなかつた。悪魔はこのようないふ隆盛ぶりを見、また、人々が己れを棄てて創造主に従いつつあるのを認めたので、能う限りこの成果とデウスへの奉仕を妨げることに努め、國主の妻なる奥方をその道具として取つた。彼女は仏と異教徒のことにはなだ熱心であり、常にデウスの教えと我らの敵になつてゐる。数年前から彼女は國主が我らを国外に追放するよう努めているがこれを果たせず、今、彼女が非常に崇敬する異教徒の宗旨と仏が我らのために徐々に減少し、破壊されており、また反対に、家臣が改宗してデウスの教えが弘まりつつあるのを見て、彼女とその娘らは忍耐を失つた。彼女は言葉と行為によつてデウスの教えに対する惡魔のような憎悪を示し始め、絶えずデウスの教えとキリストンのことを中傷し、あらゆる手立てを用いて國主に（デウスに対する）好意を失わせ、心を動搖させよう努めたが、いかに力を注いでも老國主と若き國主に

ウスの教えに対する不快感を抱かせることは決してできなかつた。この頃、長子が白杵市外にいた時、新たにキリストンになつた家臣の内の一人が宮中にいて他の人々と口論した末、刀を抜いて一人に致命傷を負わせた。然して大きな騒ぎとなり、國主が宮殿にいなかつた上に、宮中で刀を抜くだけで本人とその近親者が死なねばならないのは動かし難い法であるが故に事件はいつそ重大になつたが、その青年は父とともに逃げた。彼がキリストンであつたことから、奥方はこの機に乘じ、キリストンは主君に仕えぬ上に従わざ反抗的であると言つて事件をさらに深刻なものにした。この出来事から十五日後、同じく新たに帰依した貴人が別の争いで一人を殺した。これにより大身や武装兵が多数集まつたので、國主が駆けつけ、彼らを静めるため仲裁せねばならなかつた。また、長子が新たに帰依した青年の一人に不快感を覚えたので、彼を都の一大身のものに嫁いだ長子の姉妹に仕えさせた。或る時、同大身はこの青年に偶像の絵を捲しに行くよう命じたが、青年はこれに対して、己れはキリストンであつて、そのような絵を求めに行くことはできないので、他の者を行かせるよう請うと答えた。大身はそのまま返答を考慮して他の者に行くことを命じたが、國主の娘はこれを知ると、彼女の母とともにデウスのことに対する憎悪を抱いていたので好機が訪れたと考え、それから数日後、わざわざ件の青年を呼び寄せ、彼に或る仏僧の僧院に行って守りと称する偶像の聖宝を求めるなどを命じた。彼は、それは己れが仕えるデウスの教えに背くことであるから、他の人を遣わすよう請うと答えたが、事はすでに謀られていたが故に、彼女は行くことを執拗に求め、もしそれを望まないならば、誰か家臣を遣わすように言つた。青年はこれに対しても、それは悪魔のもの

であり、何の役にも立たないからそうすることもできないと答え、結局、生命を失うか、もしくは守りを求めて行くかと「彼女は言つた」。そこで青年はたとえ首を斬られようとも、神に背いて罪になるようなことを決してしないと返答したが、彼は相手をはばかることなく自由に戻る予定であつたため、彼はすぐには殺されず、國を治めている長子が帰り次第、彼に裁きを加えるため留保された。その後に認められたことによれば、奥方はこれを機に長子によつて家臣全員と國主を（かつての異教徒に）立ち戻らせ、以後は二度とキリストンになれぬようにしていくことを決意したようであり、然して一人の使者にキリストン一般に関する大なる非難の条項を託して國主の居所に遣わした。その条項とは、彼ら（キリストン）は神を迫害するばかりで役を果たさず、それ故に古い習慣は除かれ、人々は領主に背き、國が滅びるということや、その他同様のことであり、また、我らがそのようなことを説いているのであるから、國が騒乱に陥らぬようにするためには、我らを全領國から追放する必要があるといふもので、國主を怒らせるため事を能う限り誇大にした。だが、我らの多年にわたる親友であるが故に、彼を動かすことができず、むしろ彼は弁明者となつて炎を消すことに尽力した。老國主をまったく動かすことができないのを知つた彼女は長子が母親にいとも従順にして姉妹らとはなはだ親しい青年であったことから、彼に事を行なわせようと決心した。長子はこれまで我らとデウスの教えに深い親愛の情を表していたが、母や姉妹たち、その他異教徒の貴人が多くのことを言つたので、件の青年の殺害を命じることに決した。

このようになつた以上、キリストンらは主君に従わぬ

くなるので、今後は決してキリストを（領内に）存在させぬことが定められた。長子が帰る前の数日間、かの青年は父母や親戚、友人らの涙と説得に絶えずさいなまれば、奥方が命じた通りに仏僧の僧院に行つて守りを求めるべきであり、そうすれば赦されるであろうと言われたが、青年は天国と永遠の生命を見つめていたので、父母の涙を軽んじ、親戚や友人の度重なる懇願を顧みなかつた。彼らはその時だけでも（命じられたことを）実行すると言えば奥方は満足し、以後は（このような命令について）増長することはないであろうし、ただ白杆のキリスト教団が滅びる原因とならぬようにするためならば、命令を実行するのは好ましいことであると言つた。しかし、青年は生きた石の上にしつかりと立つていたので、惡魔の手先らがキリストの建物を破壊しようとして起きた激しい風雨の力によつても決して彼を動かすことはできず、彼はむしろ不屈の魂をもつて、デウスに背くことになるからいかにしても同意するつもりはないと言え、己れの創造主のために生命を挺することを大いに喜んだ。彼は夜に教会の我らのもとを訪れ、同所で我らは彼を励まし力づけたが、実際には彼のほうこそ搖るがぬ覺悟と信心によつて我らを励まし感化したと言うべきである。長子が帰る前に意を決して何處かに隠れることをどんなに請うても、彼は決してそつしょとはせず、デウスは彼がデウスへの愛により死ぬことから逃れるのを望み給わないと言つた。結局、長子は帰着後、母や姉妹らの勧めにより彼を殺させたが、この悪しきイザベルは直ちに他のすべての貴人に（異教に）立ち戻ること、およびこれに従わぬ者は死ぬことを命じ、いつさいを終わらせるよう計つた。この時、異教徒が抱いた喜びははなはだ大きく、また彼らがキリスト教に対して多くのことを言つ

たので、若干の心弱きキリストに少なからず恐怖を感じさせた。彼ら（異教徒）は今や明白に神仏の力が認められると言い、神仏はキリストにより侮辱されたので長子の心を変えさせ、キリストや南蛮の仏僧（我らは）このように呼ばれているので」の傲慢を罰するのだと説言や行為で訴えた。我らは専ら、異教徒が教会に来襲して同所にいる人をことごとく殺すことを予期したので、我らが期待をかけるデウスに祈りつつ準備を始めた。我らが得た最大の喜びと慰安は、キリストの新たな騎士たち、特にもつとも高貴な人々が示している勇気と信心を見ることであり、彼らの中には多額の俸禄を有する者もあつたが、彼らは大いに喜んで己れの生命と俸禄を棄てることを望んだ。また、或る者は他の人々の家を巡つて励まし力づけ、皆はなはだ年若く、幾人かは十七、八歳を超えないにもかかわらず、教えに殉じて創造主のため生命を投げ出す希望以外のことを話さなかつた。

しかし、エスデヴアンと称する件の青年は、殺される前夜、告白して死の準備を整えるため我らの教会を訪れた際、己れの家臣に対し、何よりも彼を護らぬよう命じた。すなわち、日本では主人が死ぬ時、家臣もまた全員が主人を護つて死ぬ習慣になつてゐるからであつたが、彼は決して武器を取らず、跪いて両手を掲げ、大いに喜んで死を待つことを強く決意していた。だが、私は彼に数日間、身を隠しているよう頻りに請い、その間に騒ぎは過ぎて我らの主なるデウスがすべてを主へのより大きくなるのを妨げるのか判らず、彼は殉教から逃げるつもりはないと答えた。しかし、彼に多くの理由を示してこの事件の決着を見るまで今のところは身を隠すほうがよいことを説き、そのため聖人の前例を数多く引き、これは我らの主なるキリストの勧めであつて、このような時に奥方と娘が彼らを殺そうと欲すれば、彼がキリスト教とともに殉教を遂げられるよう、その旨の伝言を彼に発することを誓つてゐると言つた。以上の説明により彼は同意し、府内に赴き同所で伝言を待つてゐた。我らは事態の経過を見、デウスに祈つた後、國主と長子に訴えることを決意し、彼のもとに伝言を送つた。その要旨は以下のようである。すなわち、かの青年が同一件で國主の娘に従わなかつたことについて彼に罪はないとするものであり、その故は、デウスの教えは日本のすべての宗旨のようないふりでなく眞実の教えにして、これにおいてのみ諸人が救われるのであるから、デウスの命に背くことや偽ることは少しもなく、むしろキリストはこの真理のために生命を投げ出さねばならず、我らの主なるデウスに背いて地上の主君に従うこととはできないからであるという伝言であった。これにより我らは彼ら（國主と長子）のキリスト教の家臣はデウスに背かない事柄については、デウスの命じるところであるからそのすべてにおいて彼らのために死ぬまで従い奉仕するが、教えに反することについては彼らに従わず、その種の件で使者にもならないことを知るべきであると言つて誤解を正した。

然して、この条件でキリスト教が彼らの領国にいることを彼らが望むか否かを見定めるため、また、我らもまたこれから実行すべきことを知るため、そのいづれであるかを明確に知らせるよう求めたが、その間、我らは國主

らの心を握り給うている主（なるデウス）に御助力を請うた。以上の伝言を長子に持参しうる者は異教徒以外に無く「というのも当時キリストンはこのような使者の役を果たすことができなかつたので」、異教徒は皆キリストンに反対していたが故に、國主にそれを伝えるのは非常に困難であった。だが、我らは長子にはなはだ寵され、我らとも親しい某貴人に助けを求め、同人は伝言を取り次ぐため赴いたところ、長子は大声を上げて騒ぎ、青年の殺害を命じていたので、貴人は伝言を取り次ぐのを躊躇したが、もしこれを延期して青年が殺されてしまえば何の役にも立たないと考えたので取り次ぐ決心をし、その件に関して司祭の伝言を承つてきたが、これを聞く希望があるか否か考えられたいと言つた。我らの主は御自らの名譽のため、また悪魔を当惑させるため同貴人を導き給うていたので、長子は伝言を聞くとともに死刑を延期することに心を動かされた。長子は伝言を聞いた後、「予が父と話すまで汝は司祭に返答してはならない。もし司祭が汝に返答を求めたならば、今まで予に話す暇がなかつたと答えよ」と言つた。私はすでに同じ覚書を老國主に送つていたが、彼は絶えず我らに多大な好意を示し、書状や庇護を授けることによつてデウスの教えを日本にかくも弘めたことについては、デウスに次ぐ布教手段になつていた。まさしく常に我らの父となり、定航船が遭難して日本の司祭や教会への補給が絶えた時、彼はこれを知ると直ちに書状を私に送り、すべての教会や司祭、修道士に供給するために必要な銀はことごとく彼が送るので嘆かぬようにと伝えてきたほか、他の事件においても我らに対する愛情をよく示した。然して、この度の事件になると直ちに書状を私に送り、すべての教会や司祭、修道士に供給するために必要な銀はことごとく彼が送るので嘆かぬようにと伝えてきたほか、他の事件においても我らに対する愛情をよく示した。然して、この度の事件について、彼は我らに道理があると答え、さらに、デウスの教えがいかに神聖であるかは以前から知つており、も

し彼がその教えをはなはだ良いものと考えなかつたならば、息子をキリストンにするため私に託しはしなかつたであろうし、また、そのようにしたのは、彼の所領に多数のキリストンが住み、デウスの教えがなおいつそう弘まるために外ならず、かの一件において青年が命に従うのは好ましからざることであるのはよく判つてゐるとはいえ、（従えぬ）理由をもつと穏やかに説明しなかつたのは彼（青年）の過誤であり、それがために長子と奥方は憤慨したのであるが、彼（國主）が責任をもつて長子を宥め、すべてを都合良く取り計らうと述べた。デウスは大いなる力を持ち給うが故に、この問題に関して、間もなく長子の使者が國主のもとを訪れ、惡魔や奥方、娘、その他惡魔の一派に苦しみを与えた。長子は教会の伝言を持参した貴人を介して、彼がその伝言を受け取つたこと、およびデウスの教えがいかに純粹にして神聖であり、かつまた態度が明瞭にして多くの道理を有するかを十分に理解したことを我らに伝え、その故は、彼にも神仏が存在せず、すべては愚かなことであるのを知つてゐるが、これを崇敬するは儀礼のためであり、國の古くからの習慣を絶やさぬためなるが故であり、また、青年を罰しようと欲したのはデウスの教えを滅ぼすためではなく、ただ青年が返答した際の無礼により、他の人々への見せしめにするためであつたが、その（従わない）理由とキリストンの義務を理解したので、今後は彼も父たる國主も奥方も、その他何びともキリストンにそのようなことを命令せず、むしろデウスの教えが弘まるのを大いに喜ぶものであり、青年についてはこれを赦し、責任をもつて彼に再び國主の娘の寵を受けさせることとし、たとえ宮殿に行かぬとも自由に行動することができると言い、さらに、貴人の中には神仏崇拜に関する義務によつて土

地や俸禄を授かつてゐる者がいるので、青年が（キリストンの）義務を保ちうる何らかの方法を早急に定める必要があり、すべては私（司祭）が命じる通りにするのでその方法について進言するようにと言つた。彼はほかにも多くの言葉を述べたが、これにより我ら一同は少なからず心を動かされ、彼が暗黒を棄て、神の光を求めて得るよう我らの主が彼に恩寵を授け給わんことを切に願つた。

一四 一五七七年六月五日付、白杵発信、 ルイス・フロイスの、ポルトガルの イエズス会司祭および修道士宛書簡

奥方には親賢と称する兄弟があり、同人は兵力や権勢、富、政治においては前述の国々の中で二番目、もしくは三番目に位置している。彼には己れの家督を継ぐ息子も娘もなかつたので、当地から都に赴き、某公家の子である親虎（Chicatorta）という名の少年を養子にした。公家は全六十六カ国の正しく君主である内裏（Dairi）に直接仕えていることから、名譽においては日本を代表する人々である。親賢は非常に名高い人であるが故に己れの望み通りに養子を選ぶことができ、六、七歳になる件の少年をこの豊後に連れて來た。我らの主（なるデウス）は将来のため彼に望みうる限りの良き才能を受け給うたようである。というのも、その容貌が諸人に好まれたのみならず、父が彼に学ばせたすべてのこと、すなわち、楽器の演奏や歌、読み書き、絵画、剣術、その他の武術の実践において、師匠らは彼がいつも短期間で自分らを凌ぐ

ようになつたことを明言しているからである。また、仏僧がはなはだ難儀しつつ一生をかけて学ぶシナのまつたところによれば、字体の完全なこと、および（知つてゐる）文字の数においてこの豊後の諸国中で彼に勝る学者は一人もないとのことである。然して彼はこのような生来のはなはだ良き才能が数多くあり、とりわけ非凡な思慮と知識を有するが故に、国主と奥方は娘を稼がせる上で彼に勝る王侯は日本にいないと考え、彼女が年頃になつたら稼がせることを彼の父と取り決めた。それは当（一五）七七年のこと違ひないと思われ、彼は十六歳で国主の娘は十三歳になる。その少年が十四歳の時、父は彼を国主が政事とともに居住する白杵の教会に連れてい行き、彼がキリスト教になることを喜ぶので、彼のため説教することをフランシスコ・カブラル師に請うた。正にこの時、彼らの邸の膝元で一人の異教徒の婦人が悪魔に取り憑かれ、ひどく苦しめられたので、彼女を見た者は驚き恐れを抱いた。仏僧らは彼女のため多くのことを行なつたが、誰も彼女を救うことができなかつた。主（なるデウス）は教会により悪魔がたやすく追い払われ、彼女とその夫、子供たち、および家族がキリスト教になることを嘉し給うた。親虎はこれを知ると、神の功徳によらねば起り得ないことをすぐ悟り、この不思議な業の光明に助けられたので、教理についての説教をすべて聴きたいと（言つて）新たに懇願した。修道士が説教するため彼の邸に赴いたが、説教を聴いた後、彼は恩寵と彼の鋭敏なる才能と理解力のおかげで、すべてを完全に理解し、キリスト教になることを決意したと言つた。

彼の伯叔母である奥方は彼の決心を知ると直ちに反対し、いかにしても彼がキリスト教にならぬよう妨げた。

父はその姉妹と一緒にになって彼を大いに苦しめたが、彼は己れの悟つた真理に反対することも背くこともできなければ、そこでキリスト教になることを許し、彼を藁屋に閉じ込めるか、或いは都に戻る許可を与えるよう請うたので、彼を虜囚のように閉じ込めた。彼らは何びとであれ彼と話すことを禁じ、彼を思い止まらせるため非常な不快を与えて苦しめたが、彼を誅めさせることができないと悟ると、彼の父が治める豊前国に彼を遣わすことを命じた。これはデウスのことについて人の助けを得られないようにするため、かつまた彼を援助しうる者と話すことがないよう見張るためであった。

（中略）

彼の父である親賢は彼をキリスト教との交渉から遠ざけて幾月にもなるので、彼が当初抱いていたキリスト教になることへの熱情はもはや消えたものと考え、彼を呼び寄せたところ、彼は七十名の馬に乗った人々に伴われて來た。当地の政事の重立つた大身らが彼を出迎え、盛大な歓迎を行なつたが、彼は司祭がジョアン修道士を伴つてすでに同地に來ていることを知つていたので、さつそ

く書状と伝言を人に託して密かに司祭のもとに遣わし、今や当地に來ているので他の新たな妨害が生じる前に洗礼を授かることを強く希望すると伝えた。親賢は息子が來たらすぐに彼とともに或る事柄を片付けることを望んだが、それはさして重要な事ではなく、彼に対しても負目を感じていたので寛大になつて來た。然して親虎は以前から父に憤慨していたので國主のもとに行き、父から受けて侮辱や苦痛をことごとく覚書にして携え、その月日と時刻、場所、同席した人々を列挙し、一つ一つの件について十分な説明を加えた。國主はこれに驚嘆したのみならず、一人の少年にかくも鋭敏な才知と希有な知識を

認めてすつかり納得し、父が求めていたことを彼に承諾させることができず、彼を家に帰らせた。ほかに手立てがないことを認めた父は当地に重立つた家臣の一人を己れの名代とはせずに派遣し、ジョアン修道士に、親虎は父親に従順ではなく、当方より話して彼が理解を示さなければ、他人が言うことにはなおさら耳も貸さないであろうが、彼には書面により、（父に従うのは）デウスの教えに反することではなく、むしろ（それをしないのは）罪となり、己れの救いを妨げるので、たとえ異教徒であつてもすべて父に従うとともに國主への奉公に最前を尽くし、重要な職務においては必要とあれば身を挺するのは厳格なる義務であることを忠告するのが良いと言わせた。書状を彼のもとに持つて行くと彼はこれを読んで頭上に掲げ、涙を流しながら懐に納めて、父の命に従うであろうと述べた。その後、彼は書状をしたため、己れに与えられた忠告について深く感謝した。この時、彼の父や家の貴人と兵士は皆大いに喜び、彼が即座に教会の忠告に従つたのを見て少なからず驚嘆した。

（中略）

悪魔の手先たちはドン・シモンに生命が危ういことや、彼の名譽と地位、富が失われるなどを説いたにもかかわらず彼を説得し得ないのを認めると、はなはだ狡猾にも彼がもつとも悲しむことにより彼を誘導しようと企み、彼が大いに信頼している人に次のように言わせた。「汝の父である親賢は今日か明日、教会を攻撃してこれを炎と血に塗れさせることに決めており、必然的に汝の師たる伴天連たちは死ぬであろう。汝のために伴天連が殺されれば、教会（と）キリスト教は滅び、國は乱れ、汝の父も死に、またこの家も失われ、これに続いて他の由々しき不幸が生じるが、これらのいずれをとつても汝を説得

するには十分である。私は司祭らと話し、汝は国主の娘を迎えた直ちに彼女をキリストにして豊前国に多数の教会を建て、汝の所領で多大な成果を結ばしめる決意であることを伝えた。これにより司祭らは、心中に完全なる信仰を持つているなら、今は人に対して信仰を隠しても良く、事ははなはだ切迫してるので（攻撃が）実行移される前に急いで返答すべきであると言つてゐる」と。ドン・シモンは一室に籠つて、その日は終始悲嘆と祈禱のうちに過ごした。司祭らがそのような助言を与えたとは信じられず彼は大いに戸惑い苦悶したが、これに同意すればデウスに対して大きな罪を犯して己れの靈魂を失い、また同意しなければたちまち他の難難が降り掛かり、特に彼がデウスに次いで心に念じてゐる司祭らが死ぬことが判つてゐるため、かつまた彼は年若く、人間的にこのことを相談しうる人もいなかつたので、これほど重大な問題をうまく切り抜ける術は他にないと考え、書面により（今後は）父を不愉快にさせず、むしろ何事においても父に従うよう努めると返答した。敵たちはその返答をすでに（異教徒への）転向を承諾したこと意味するものと解釈した。彼の家や奥方の宮殿では異教徒らが知らせを受けて有頂天になり、諸人はこれによつてデウスの教えがやがて衰退するものと見て得意になつた。件の偽の伝言を彼にもたらした者は直にその虚偽が発覚するのを恐れ、その日のうちに他の土地に逃れた。

（中略）

これから私が述べることを明白に理解するためには、豊後国主に三人の息子と四人の娘がいることを知つておかねばならない。領国の世継ぎである第一子はすでに（国を）治めており、父は日本の習慣に従つてその地位を退き、善政のために必要なことについてのみ彼に助言を与

えている。第二子は今十六歳で、仏僧になることを決して望まぬことから、彼をキリストにするため國主自らフランシスコ・カブラル師のもとに連れて行き、彼にドン・セバステイアンの名を与えたが、これについては（尊師らも）先年來の諸書簡によつてすでに詳しく述べてゐる通りである。ドン・シモンとはなはだ親しく、同人は彼の伯父、親賢の子であるから彼とは従兄弟の関係にあり、また、（ドン・シモンは）直に彼の姉妹と結婚することになつてゐるので義兄弟にもなる。これを踏まえて初めて理解されことだが、ドン・シモンは非常な知識をもつて一計を案じ、ドン・セバステイアンに彼と話すことを請う伝言を送り、自邸においては不可能であつたため路上で会うことを求めた。彼は密かに二人の家臣を伴つて父の家を出たが、ドン・セバステイアンは彼が非常に瘦せ細つた姿に変わり果て、彼に伴う家臣もごく少数であり、絶えざる苦難のために顔色が悪いのを見て大いに同情した。ドン・シモンは己れの父に宛てた書簡にしたためたことを簡略に述べ、最後に次のような言葉を添えた。すなわち、「以上のことを我が父に答えた今となつては、当地において予は異邦人なるが故に殺されるか、或いは追放されるしかなく、汝は国主の子で、予とははなはだ近い親戚にして友情に篤く、とりわけキリストであるが故に、また、私には人間に言つて汝の好意よりほかに頼るものがない故、予が必要とする時に援助の手を差し伸べることを汝に請う」と。ドン・セバ

ステイアンはその通りにするのであると答え、己れはキリストである以上、彼が追放されることになれば、何処であろうと彼に伴つて行くであらうと言つた。この時、ドン・シモンが考へていたのは、もし奥方や親賢がドン・セバステイアンも彼とともに國を棄てるつもりであることを知れば、彼らは国主がどれほどの息子を愛しているか判つてゐるので、少なくとも追放のことを口にはしないであろうということであつた。

（中略）

当地の政府にいたキリストの貴人はことごとく教会に籠るため集まり、崇高なる殉教を高く評価するが故にはなはだ熱心に殉教に加わることを望んだ。したがつて、どの人にも悲嘆や小心は少しも感じられず、むしろ喜び、非常に満足している様子であり、当教会の各所に集つて、殉教者の勝利と刀のひと突きにより授かる永遠の幸福についてひたすら話していた。そして心中の喜びをいつそよく示すため新しい衣服をまとつた。司祭は我らに対する強い要望を我らが武器をもつて拒んだと國主や異教徒らに思われぬよう、親賢が求めている司祭と修道士のみを残して（教会から）立ち去るよう彼らに幾度も請うた。彼らは修道士に答えて、司祭らが殉教を避けず、跪いて両手を天に掲げつつ殉教を待つ様は彼らを大いに慰め力づけるのであり、また神聖なものに思われると言ひ、また、もしこれが彼らの主君たる國主の命令したこと、或いは彼にとつて喜びとすることならば、彼らは皆大小の刀を放棄して司祭とともに首を刃の下に差し出すであろうが、これは親賢の不当な所行によるものであり、彼はカトリックの信仰を衰えさせようと教会を破壊し焼き払うことを欲しており、また、彼らは貴人としては彼と同格なるが故に決してこれに甘んじることはできず、全員が生命果てるまで教会を守るべきであり、これは國主の意志に反するものではなく、むしろ多大な奉仕になるものと信じてゐるし、この好機に生命を投げ出せば、間違いなく我らの主なるデウスは司祭や修道士とともに彼らに榮えある殉教の冠を授け給うものと確信していると

述べた。然して彼らは司祭に隠れて当所に多数の鉄砲や槍、弓矢、その他種々の武具を集めめた。

(中略)

また、この若き貴人の兄は教会の近くに住み、城のよくな家を有しており、その妻は奥方の姪であつたことから、彼に祭壇の聖なる器の入った箱を家に置いてくれるよう頼んだ。彼はよりいつそう高潔に、それを彼の家に送らぬように言い、なぜなら彼は栄光の死を疑わず大いに期待しているからであり、また、多数の男女の家臣を擁しているが、彼らも彼の母や妻も武器や鉄砲の最初の音を待ち受けており、そのただ中を突き抜けて教会に入り、殉教を迎えるようとしているからであると答えた。この殉教者になることへの熱情がいとも深く、キリスト教の統一性や歓喜についての噂が大いにその地に広まつたので異教徒をことごとく驚かせ、我らにとつては少なからず慰安の題材になつた。

一五 一五七七年九月一日付、口之津發信、 フランシスコ・カブラルの、イエズス 会総長宛書簡

私たちがこのように多くの人々の改宗によって得た満足は、誠に大きいものであった。しかしデウスの思し召しであろう、この満足感も、有馬の良き國主であつたドン・アンデレ（義貞）の死がもたらした苦しみによつて幾らか減じられてしまつた。この人は自分の守護聖人である聖アンドレアの祝祭を祝うために教会に来た。そして息子たちや重臣たち、彼らの中にはキリスト教である

者も異教徒である者もいたが、彼らと共に二日間を様々に祝い事をして過ごした。最後に彼は助骨に抜がつていた潰瘍がもとで身体の不調を訴え始めた。この病が二十日経つうちに、我らが望むように、彼を天国に連れ去つたのである。ところが、彼の跡継ぎである嫡男も他の家臣たちも異教徒であつたために、彼の死に際して私たちが同席することも、何らか手伝うことも許してもらえないかったので、詳細については報告できない。しかし私は、彼がキリスト教として、また一度もはずすことなくいつも身に付けていた十字架と共に死んでいったということを知つた。そして私たちの代わりに彼のもとへ案内された仏僧たちが、何とか彼を改宗させようとしたが、彼は主デウスの御加護により、惡魔の操る彼らの説得に応じることは決してなかつた。彼が息を引き取るとすぐに、彼の亡骸は大勢いる仏僧たちに引き渡された。前にも別弟で、この国の大部を支配している。新しい國主と殿たちは、すぐさま酷い迫害を始めた。十字架は鋸で切り倒され、新たにキリスト教になった者たちは、宗門を棄てて元に戻らなければ死刑にすると脅迫され、大部分の者は命じられたように棄教した。というのは、彼らはキリスト教になつてまだ日が浅く、宣教師も不足しているために、デウスの教えが十分身についていなかつたのである。けれども中には信念を変えず、デウスを棄てるぐらいなら死命することを、あるいは命を失うことさえ決意している者もいた。また信仰を外に向かつて告白し、死に抵抗する勇気は十分にはなかつたけれども、少なくとも心の内ではそれを否定しなかつた者もいる。彼らは夜中に来て自らの弱さを嘆き告白した。総長猊下、その時の私たちの、つまりアントニオ・ロペス師、ルイス修

道士、そして私の胸の中についた苦惱と不満はいかばかりであつたことか。というのは、私たちがこの有馬の国を訪ねて来た時も、似たような苦難にも見舞われたのである。私たちにはしばしば予告されていたことであるが、一刻と死が近づいて来るのが感じられたのに、デウスはその無比なる御慈悲をお示しにはならなかつた。それでも私たちは、弱い者には勇氣を与え、転んだ者には再び立ち上がるよう説得し続けた。こうして私たちはそこに留まつてゐたが、教会は焼き払われてしまつたので、そこから当地（口之津）に移らざるを得なかつた。ここから私は司祭と修道士を天草へ遣わした。そして私は豊後に赴いた。主デウスの思し召しであろうか、私のたどつたそこへの道は、どうしたことか私の考へていたのとは違ひ道であつた。これはひょとすると、私を道で待ち伏せして「私に気付かれないうちに」殺そと先回りしていた者がいて、その死から私を護るためにあつたのかかもしれない。この苦難と引き換えに、主は私たちに慰めを与えた給うた。主のお蔭で、私がこの書簡を認めているこの天草全土がキリスト教宗門を信仰するようになり、そこにある寺院やその他の異教徒的なものも後に残ることもなく、さらには、後で詳しく述べることにするが、人々はキリスト教になるか、さもなければ、他の者が受洗に來るのを妨げた者と同様に、あらゆる收入を失つて追放されることとなつた。というのは、この島の領主は六年前にキリスト教になつたのであるが、それでもこの時まで異教徒が大勢残つており、自分たちの寺院や僧院を維持してきた。同じくそこには仏僧たちが仏像を持ち收入を得て居残つていた。[先にも述べたように]彼らは他の異教徒たちが改宗することや、既に改宗した者たちがキリスト教宗門の戒律に従つて行動することを妨害し

た。それを引き起こすもどとなつたのが、まさにこの国の領主の妻であった。というのは、彼女は元々異教徒で、キリストンには特に敵意を持つており、これまで私たちを迫害してきた。そして多くのキリストンがキリストン宗門に背を向けるように仕向けた。彼女は日本の宗派にいたく心服し、よく理解もし、経典にも心得があつた。ところが主デウスの御業が、昨年彼女がこの国を訪ねて来た折に、彼女の意志に反することではあつたが、説教を聞いてもらうことができた。この説教を聴いた後、彼女のかたくなな態度は徐々に和らげられ、ついには彼女が改宗し、彼女と共にまだ異教徒であつた者もそのほとんどが改宗することとなつた。すべてはこの人次第であることが判つたので、私は非常に努力して彼女に信仰の何たるかを理解してもらおうとした。彼女も大きな関心を抱いていたので、それをたやすく受け入れた。私が豊後からこちらへ戻つて来た時に、自分の告白を聴いて欲しいと求められてからもう三ヶ月になろうとしている。しかしその前に、彼女がこのような秘跡にまつわる事どもに精通していることが必要であつたので、日本人の修道士を彼女の許へ遣わし、二、三日間、彼女に告白と贖罪について説かせた。これらの事を彼女が会得した後で、告白し恩寵を得て救われるためには、なさねばならぬ二つのことがあると彼女に伝えられた。一つは、彼女が異教徒であつた時に家臣たちから不当に徴収した法外な利息をすべて払い戻すことである。というのは、日本の殿たちの間では、家臣や他人に百を貸し付けるとすると、返済の折には百六十を要求できるのが普通のことになっている。そしてそれは罪でないどころか、良い行いであると見なされている。もう一つは、これも日本では普通に行われていることであるが、彼女が奴隸として使つて

いた女性たちを、それぞれの夫のもとへ帰すことである。というのは、女性は夫に逆らつて、夫の家から逃げてそのまま奴隸として居続けてしまうからである。このような女性たちを彼女は沢山抱えていた。この二つの彼女に求められたことは、ここでは初めてのことであるが、日本で守つていくには大変難しいことであるが、彼女はそれに従うことを決心した。彼女には、先ずこの二つの障害を取り除かない限りは、告白することができないことが判つた。こうして彼女は告白することになったが、彼女は短期間のうちに我々の教義を大変良く会得した。そして彼女は我々に好意を示して、夫に働きかけて、異教徒が自分たちの領地に留まることに夫が同意しないように計らつてくれた。さらに彼は仏僧たちに、キリストンになるか——その場合、彼らの収入はすべてもとどおりのまま、彼らはその多くを所有できる——あるいは拒絶して領地から追放されるか、その二つしかないことを判らせた。そうすることでき彼は、信仰普及の障害となるものすべてを取り除こうとした。そして直ちに人に遣して、彼らの偶像や経典を取り上げて教会に持つて来させた。中には自分の僧院や収入をさつさと放棄して去つて行く仏僧もいたが、他の多くの者はキリストンになり、偶像や仏画を引き渡した。そして今まで彼らは日本人ジョアン修道士の説教を聴きに来るようになり、日に二回はこの教会に来る。しかし高慢な彼らにとってこれ以上の侮辱はないと感じられることがある。それは自らを地上の神と思っていた彼らが、今じつと立つたまま、二十歳そこそこの若者から教えをうけるということである。彼らの中には六十歳になる者もあり、それなりに威厳ある風采であるのだから。こうして、この領主の下にいる人々はデウスの恩寵により、

仏僧や偶像、その他異教的なものの障害のいっさいないキリストンになっている。そしてこのことは、この国が大きくて人口も多いだけにいつそう注目に値する。既におよそ三十の教会が建てられたが、さらに四十建てる必要があると思われる。今この国で不足しているのは、日本全土に一般に言えることだが、日本語のできる宣教師と人員である。猊下、主の御旨のまま、猊下から賜った良き御指示のお蔭で、この日本にも聖職者を養成する学院を建てることが叶うであろうと思える。当（一五）七年に、巡察師のアレシャンドウロ・ヴァリニヤーノ師がゴアから四十名を遣わしてくれた。そこで先ずは必要なことどもを調達した後で、残つてゐる者たちとこの仕事を第一歩を踏み出そうかと思う。このことから大きな成果がもたらされるであろう。というのは、日本全土が短期間に改宗することも大いにありうるからである。主デウスのお助けがあれば、この学院を豊後の国で始められるのである。なぜならこの国は、そこに暮らしているキリストンの数が大変多いということの他に、日本中でもつとも落ち着いた平和な国であり、またその國主も私たちに好意的であるからである。そして彼もまた、日本にも学院を設立することが必要があると判つたので、人を遣わして、どんなことがあつても自領でそれをしてもらいたいこと、だから場所はどこが最適であるかをよく考えて、それを自分で教えてくれること、またそれが、所領の全域であろうと、誰のものであろうと、直ちにそれを提供することを私に伝えてくれた。そこで國主が居城を構えている地を幾つか見て回つた後で、その中から海に近い國主の居城のそばにある地を選んだ。この地は大変健康に良く、泉も所々に湧き出ている。この地の中に自分の土地を数区画持つていた者たちには、別の所で

代替地が与えられた後、直ちにその地を国主から賜つた。こうして今ではこの新しい仕事を始めるより他に、なさねばならぬことは何もない。それを迅速に行いたいと思つてゐる。

一六 一五八七年十月十六日付、白杵発信、 ルイス・フロイスの、ポルトガルの イエズス会司祭および修道士宛書簡

日本にある十乃至十二の宗旨の内、重立つた大身や國主らが最も傾倒するのは禅宗である。同宗旨は靈魂の不滅と未來の刑罰を否定し、挙げ句には現世があるのみと考えてゐる。人間が完全に良心の呵責を消し去り、自制心を緩めて欲望に走るため、かつまた、これを説き勧めるため、(禅宗の人々は瞑想によつて千七百の道理を得るが、この道理はいとも巧みに整えられているので、ほとんど誰もが瞑想を行ない、道理を得、これを鵜呑みにするのであり、禅宗徒はこのことに一生を費やす。國主は(現世の)外にないことを確信しているので、彼はしばしば、司祭らは反対のことを説くが、予は今生の後には何もないことをよく知つてゐる、(司祭らは)諸國の良き統治のためそのことを隠してゐるのだと言つた。この豊後國主は同宗旨の庇護と知識において己が名声を広めることを望み、そのため、都にある紫(野)と称する禅宗の中心的僧院(大徳寺)に立派な建物(瑞峰院)を造り、その維持のため当地より多額の収入を充てた。また、当地白杵の城の前にも非常に立派な僧院(寿林寺)を別に建てたが、これには多額の経費をかけ、同所に住

まわせるため都から著名な学者(恰雲宗悦)らを迎えた。僧院に充てた封禄は豊後においては最高の部類に入り、建設に当たつては喜ぶあまり、いつさいを自らの手で行なうことを望んだほどで、日々の多くを同所で過ごした。彼は、十二、三歳になる第二子(親家)を同所に置いたが、これは彼が成人すれば僧院の長として収入を得るためであつた。ところが、少年は僧院においてひどい仕打ちを受け、仏僧になることを心底から嫌つていたので、國主は彼を鎮め、いつさいのことにおいて己れに従わせんには、彼をキリストianにするよりほかに良い手だてはないと考え、彼を僧院から出して洗礼を受けさせた。すなわち、彼がドン・バステイアンであり、彼についてはすでに通信したが、今は当城下にいる。國の武士や重立つた大身はいつそ國の歓心を買うため禅宗に帰依し、國主も他の人々にそうすることを勧めていたが、この間、フランシスコ・カブラル師は彼のために絶えずミサを捧げて止まず、日本の他の司祭らにも同じことを命じ、彼のようなきわめて著名で、(イエズス)会に多大な恩恵を与えた人物を失うことを非常に悲しんだ。しかしながら、彼が件の宗旨に対して喜びと熱意を示していることは、人間に言えば、彼の改宗にかける期待を我らから奪い、かつ遙か遠くに追いやるものである。

さらに次のようなことがあつた。國主は、彼の奥方イザベルとの間に多数の子女をもうけていたが、この邪悪な奥方に憤りを感じていた。彼女は生來、不寛容な性格であるため、かつまた、彼も全くの必要性から多年の間耐えきれず、自殺しようとして短刀を側に置いていたので、彼らは昼夜、彼女を見張つていた。老國主は以上のように处置した後、異教徒の我らに対する迫害と憎惡は依然として続いており、我らには全く意外なことであつたが、國主は非常に長い伝言を当地の

て火に投じ、彼女の息子なる世子と國主の心を我らから引き離すため、デウスの教えと教会に對して罪と偽りを重ねたが決してその望みを達することはできなかつた。我らの主なるデウスは正義を愛し給う故、このイザベルの傲慢に對して罰をもつて報いることを決め給うた。これらのことから、現世において加えうる最大の罰であつた。それは以下のようにある。老國主は以前から諸事を整え、身を置くべき新しい家屋数棟を慎重に城外に建て、國の政治を息子に譲ると、さつそく彼はその家に移り、奥方と共に政府にいた一人の貴婦人を密かに呼び寄せた。彼女は國主の息子ドン・バステイアン(親家)の妻の母で、すでに四十歳を過ぎ、多少病弱であつたが、國主はこの女性を夫人として迎え、奥方は離縁されて政府に留まつた。ここで(尊師らは)、イザベルがその時までは數多の國の主であり政府では大いに崇められていたのが、このように突如として格を落し、現世の榮誉を失ない、なおかつ從前は己れに仕えていた者が新たな奥方に選ばれたのを見て、彼女が(これから)行なおうとするはなはだしきことを察しうるであろう。彼女には多数の有力な縁者がるので、親戚や身分の高い大身らがござつて、彼女を元の地位に戻すよう國主に強く働きかけたが少しも説得することができなかつた。それ故、さつそく、各地から娘達や親戚が集まり、老國主は一度決したことは固守する人であり、彼女が己れの大なる不幸に耐えきれず、自殺しようとして短刀を側に置いていたので、彼らは昼夜、彼女を見張つていた。

老國主は以上のように處置した後、異教徒の我らに對する迫害と憎惡は依然として続いており、我らには全く

司祭に送り、次のような意向を伝えてきた。すなわち、然るべき理由によりかの婦人をキリストンにすることを望むので、彼女に説教を聽かせるためジョアン修道士を派遣するよう請うものであった。同修道士は日本人であり、幼少の頃から修道院で養成されて我がカトリックの信仰について十分に教えを受けている。司祭は、我らの主なるデウスが御慈悲により、國主が説教を聞く好き機会を与えたのを見、これが我ら一同にとって積年の希望であったので、ただちに府内の司祭および修道士らに伝言を發し、我らの主なるデウスが國主に御恵みを垂れて彼にキリストンの教えを聞く意欲を起させ給うよう、彼らがいつそう熱心にミサと祈りを捧げ、また、数日間作業の功德を積むことを命じた。ジョアン修道士はアヴェ・マリアの（時刻の）少し前に、國主が彼に同行させるため遣わした一人のキリストンと共に当地を出立し、我らは当修道院に留まつて説教の効果を祈つた。國主は自ら（説教に）立ち会うことを希望し、修道士が驚くほど熱心かつ興味を抱いて耳を傾けた。毎晩、カテキズモの説教が終わると、國主はふたたび話を始め、夜の十時もしくは十一時まで続いた。説教を聞くごとにいつそう理解を深め喜びを増していったので、時として重要な用件に関する書状や書類のため、あるいは大身が面談に訪れることによつて、はなはだ多忙であつても聴聞を続けるためいつきいを放棄した。ある時、期せずして翌日に外出する必要が生じたので、以後の説教を聞き逃さぬため明後日に来るよう修道士に言つた。また説教が我らの主なるキリストの御降臨とその聖たる御受難の神秘に及ぶと、奥方に向き直り、予が思うに、これはキリストの最も善きことにして必須のことであるから、目を閉じてこれを信ずる以外いかなる考え方必要としない、

と言つた。新しい奥方とその娘になるドン・バステイアの妻がカテキズモの説教をすべて聽き終えた後、國主は司祭に、教会は遠く離れており、奥方は病弱で、洗礼を受けるため自ら赴くことができないので、彼女のものと来て洗礼を授けることを請うと伝えた。司祭はこれに對し、殿下の命ずるようにこちらが出席することは容易なので、そのようにする、その前に申し上げたいことがある、すなわち、彼女がキリストンである以上、正式な夫人となるには、殿下が異教徒といつても、デウスの教えは「すでに聽聞されたように」何事においても完全かつ厳密であるから、生命あるかぎり彼女と共に暮らす決心をすることが必要であり、加えて言えば殿下が将来キリストンとなる場合には、離縁した最初の夫人との結婚はすでに正当な理由により非合法かつ無効なので、救い主への大いなる侮辱となるものであり、ふたたび同棲することはできないと答えた。國主はこれをすべて了解し、このような大きい変化をする時は必ず事前に必要なことをよく考えたうえで行なうと言つた。そこで司祭は二、三名の日本人修道士に命じて、奥方の住いに移動式の祭壇を整えさせ、また、洗礼のため当所にある最良の器具と装飾品を運ばせた。國主は喜び、天蓋の設置と祭壇の飾り付けを指図し、かくして二人に洗礼を受け、奥方はジュリア、その娘はキンタと名付けられた。國主は家事にでも立ち会うかのように全く態度を変えることなく一言も発せず、ただ奥方の改宗を深く喜ぶのみであった。

このことはたちまち人々の間に流布し、離縁されたイザベルも事の次第を知つたが、國主が死ぬまでジュリアと一緒に暮らすことをまず誓わなければ、司祭は彼女の洗礼を執り行わないとの話を聞くに至つて我らに対する憎悪は、従前は幾分抑えられていたのが、今や極みに達していた。

官殿中にいる数人のキリストンが密かに我らを訪れ、彼女の述べたことを伝え、修道院では物を食べる際には毒に注意し、また、夜間は教会に放火されぬよう十分に警戒するように忠告した。しかし、我らはいつさいを我らの主なるデウスに委ねて、その保護のもとに戦つた。洗礼後、國主の求めにより、ジョアン修道士が毎週日曜日の午後、彼のもとに行つて説教することが命ぜられ、これは五、六ヶ月続いたが、少なからず説教の成果が認められた。すなわち、既述通り彼は熱心な禪宗徒であったので、その規定により毎日かの千七百カ条のいづれかにおいて瞑想することを常とし、瞑想で得たことを彼自らが長老に語るか、あるいはこれを書面にし、所定の小箱に納めて届けさせていた。（ところが）デウスの教えを聽いてこれを喜ぶようになつてからは、人間の作り出した偽物がいかに無益であるかを悟り、あれほど心を用いていた僧院に通うことをただちに止め、瞑想についての書状を送ることも全廃した。これは仏僧らにとつて少なくからず悲嘆と苦惱の種であった。かくして國主は或る場所や大身らの饗宴において、神と仏を敬い崇める人々の狂氣と無知について、はばかることなく語り、デウスの教えの秘儀が深淵なこととキリスト教國の善き政治を数多の言葉で讃えた。その後、國主は都の職人に命じて非常に美しい珠のロザリオや聖遺物を入れる珍しい黄金の十字架を造らせ、また、救世主の聖像を描かせた。この間に薩摩國主は戦さにおいて、一方を豊後國と接する日向国を奪つた。敗れた日向國主（伊東義祐）は、豊後（國主）と親戚になるため、彼の孫たちや若干の兵を伴つてこの豊後に逃れてきた。豊後の世子（義統）はただちに彼を宿泊させるため、ここから三里の所にある大きな僧院とその生活に要する収入を彼に与え、世子自らは日向

国を奪い返す用意を整えると、およそ七万の兵を率いてかの国に向かつた。同国はこれを横切る大河によつて二分されていたが、世子が到着する前に、全国に轟く彼の大なる威勢の評判（を聞いた）だけで、河の手前にある十七の城が降伏したほか、薩摩と連合していた同国の主と嫡子はかの国にある神、仏の僧院と神殿を焼いて破壊することを命じ、そのように実行された。

（中略）

フランシスコ・カブラル師が下シモ（の地方）への往復に一ヶ月以上要することなく当地に帰還すると、それから二日後、国主は彼に伝言を送り、帰還したことをお常に喜んでいること、および、（洗礼）の希望をもつて待ち望んでいた故、さつそく翌日にも洗礼を授けるよう願う旨を伝えた。また、司祭が洗礼をいつそう盛大にするため府内から司祭と修道士を呼び寄せる考え方などを知つたので、彼は、かくも遠方より来るのは難儀であるから彼らを招かず、一般の人に対すると同じ方法で行なつてもらいたいと伝えさせた。彼の請願は申し分のないものであったので、時機を見てここ臼杵の小さな教会の聖堂のみを整えた。栄光の博士聖アーヴィング・スチヌスの（祝）日、彼は六、七名の青年武士のみを伴い、駕籠に乗つて当修道院に来た。青年武士らは彼に奉仕する者たちで、すでにカテキズモの説教をすべて聞いており國主と共に洗礼を受けるため随行してきた。（司祭が）長い説教をして、彼がこれまでの説教で聴いたことの要約を述べた後、彼は深い喜悦と謙遜をもつて聖なる洗礼を受けた。司祭は従前の願いに従つて彼にフランシスコの（教）名を授けた。彼は己れのいる場所に深甚の敬意を抱いていたので、聖堂の中に留まることを望まず、その外で紙と墨を

もつて受洗すべき者たちの名を自らの手で記し、ミサに列席した。これは彼にとつて最初のミサであったが、この後、頻りに求められてふたたびミサを聴くため聖堂の一隅に身を置いた。当日、我らは彼を当所に招いたが、彼は賜つた洗礼と歓待に深い満足を表し、後にはわざわざ人を遣わして謝意を伝えた。後に或るキリストが語つたところによると、国主は教会から私邸に戻ると、心は刷新され、（以前と）異なる眼で物を見ているかのような思いで捕らわれ、また、駕籠の中から路上の多数の人を見た時、彼らは皆異教徒であり、キリストにならねば、やがて死して永久の罰に処せられることを思い、我らの主なるデウスより授かつた多大の恩恵の中でわが身を省みる時、涙を禁じ得なかつた、と述べたそうである。翌日の金曜日、嫡子は國主を御殿に招いて、種々の鳥や動物（の肉）を用いた非常に立派な饗宴を開き、これには重立つた大身が多数列席していた。國主は前日に洗礼を授かり、明確な規則を全く知らなかつたが、決して肉を食べるのを望まず、諸人を大いに驚かせた。嫡子には急遽、魚の料理に改めることが必要となつたが、これは大したことではなく、國主は洗礼を受ける久しく前の、異教徒であつた頃から金曜日と土曜日には断食を行なつていた。

（中略）

（嫡子は）デウスのことを大いに好んでこれを高く評価し、（イエズス）会員に深い親愛の情を抱き、諸人が皆驚嘆するほど慈愛をもつて会員を遇している。修道院に来る時、いとも親しく司祭や修道士と語り、あたかも彼らの一員のようである。本年の初め、彼は当所の司祭に沢山の進物と共に伝言を送り、「自分は今や諸国を統治しているが、父君は何事においても絶えずデウスの教えと

司祭らを庇護した。予も父君に劣らず、むしろ叶うならば父を凌ぐと意を決したので、司祭が学院を豊後に設置することに決定したならば、予の政庁があるこの臼杵一隅に身を置いた。これは彼にとつて最初のミサであったが、このようにして司祭らを庇護する意志があることをいつぞう明らかにするであろう」と伝えた。司祭は箇条書を彼のもとに送つたが、その内の一つは、領国で司祭らがいかなる教えを説いているのか知るため、暇がある時にデウスのことやカテキズモの説教をすべて聴くべきである、というものであつたが、彼は箇条書を受け入れ、手づから署名した。また、当方の司祭らが学院用地を定めたことにより、嫡子は臼杵からおよそ半里の所に広大な地所を与えた。この地所は主たる大身の一人と、一部を所有する他の仏僧らから取り上げ、彼らには別の十分な収入を与えて満足させた。その場所は海邊で、はなはだ美しい海岸を擁しており、当地方で最も良質の水の泉がある。嫡子は、工事が始まれば、自らここに従事するため大身を多数率いて行くであろうと伝言した。当地の我が教会の側に異教徒の家屋が数軒あり、放縱に振舞う彼らに幾分煩わされていただが、嫡子は修道院の便宜をいつそうちの側から多々懇願するところがあつたが、彼は耳を貸さず、我らに家々の地所を与える、その主たちには別地所を与えて満足させた。

（中略）

国の大身数名が右の所行の理由を嫡子から聞くことを望んだ。嫡子は答えて、仏僧らは國の隨を食らい、贅沢な生活をし、労働に従つて戦さで死ぬ貧民や兵士を嘲笑する。もし、彼らが宗規に従つて生活するか、あるいは

来世において賞罰を加え、現世において繁栄と富を与える神・仏があるならば我慢することもできようが、仏僧らの生活は偽善と悪徳に満ちており、経験からすれば彼らの祈禱と犠牲は何の役にも立たず、彼らを黙認するのは愚の極みであると思われる。というのも、都の地方では信長も同様のことをしているが、それがために、かつて神・仏から罰を蒙ったことはなく、むしろ彼を巡る諸事はいつそう繁栄しているからである。それ故、仏僧らには結婚するか、もしくは兵士となることを勧告した。彼らの内、少なからぬ人数の者がただちにその勧告に従つて、兜や鉄砲を購入する者もあれば、武具や刀剣を購入する者もあつたが、売値が高いため彼らにはまだ苦痛である。嫡子が初めて戦さに赴いた時、己れに同行して戦さに従事するよう仏僧らに求めたところ、仏僧らの親戚は彼らが自費によつて他の者を代わりに出陣させることができたが、この二度目は親戚も、彼らの願いを聞かず戦さに行かせる決心であるという。府内に尼僧の僧院があり、彼女は日本において比丘尼と呼ばれ、多額の収入を得ている。人の言によれば、嫡子は日本の比丘尼らが日頃、行状が悪いことを知つたので、過日彼女らに贅沢な生活をさせぬため戦さに行く準備を整えるよう命じたが、せいぜい免除するとしても、彼女らが自費により従軍する者を派遣することくらいであろう、とのことである。当地において仏僧らはその学識により、かつまた地位と職務の威儀により今日まで大いに保護され崇められてきたが、彼らが群れをなして政庁や他の大身らの廻りを行き、これまで見せていたのはいつも異なる容貌をもつて、収入や僧院について慈悲を乞い、これに耳を傾ける者もない様を見るのははなはだ驚くべきことである。

(中略)

國の他の大身らが嫡子のもとに訪れ、戦勝および諸国における平和と安寧を賜る(よう祈願する)ため、毎年、立派に飾つた鍍金の新しい武具を都地方の神に捧げるのが、先祖以来、昨年までの習慣であり、これを彼に知らせるのは、すでに武具を贈る時が来たからである、と言つた。嫡子は、すでに寄進したものについては後悔しているが、新たに寄進することはない、予を欺く神や仏僧らに与えるよりも、予に仕え戦さにおいて助けとなる家臣に与える方がよいかからである、と答えた。日本には、盆と称し、第七月に死者のためになされる年中の主たる祭礼について、その十日乃至十二日前に或る阿弥陀の信奉者らが諸人の信心を促すため巡回するという習慣がある。これは夜の十時から夜半後の二時、もしくは三時まで(行なわれ)、鉢を叩いて非常に響きのよい樂を奏し、阿弥陀の宗旨の者は戸口に出で、仏僧らのもとに持つて行かせるために布施をする。当地においても一、二晩これをし始めたが、嫡子は城からこれを聞きつけたと見え、夜間に阿弥陀のことを歌う者を見出したならば何人であれこれを自由に殺すべきであるとの触れをただちに出させた。それ以後、信仰は途絶え、もはや夜分に歌う者もなくなつた。

府内の市には、豊後に従属する国々の中でもっとも名高い立派な祭りが二つある。その一つは戦さの神である八幡に、また、いま一つは他の神に捧げるものである。国主はいずれの祭りにも、絶対の義務により、赴いて行列に加わらねばならない。第二の祭りでは、彼は四、五万の武装した兵を伴い、己が威儀のいっさいをもつて臨み、盛大な儀式を行なう。嫡子が第一の八幡の祭りに赴く時に至り、国主と嫡子は府内に向けて当所を出発した。異教徒は誰しも、国主と嫡子が共に行列に加われば、祭

りに与える恩恵はさらに大きくなるであろうと考えたが、國主と嫡子は邸を出ると教会へ午餐をとるため赴いた。彼らは同所で修道士らと楽しんで当日を過ごし、祭りについて少しも話さなかつた。たちまち人々は互いに二人はキリストンになるため修道院に行つたのだと言い、彼らの祭りを少しも意に介さないことを大いに悲しんだ。第二の祭りになると嫡子は行くことを望まず、第一の祭りに加わらなかつたこと以上に人々を驚嘆させた。

(中略)

嫡子は母堂に覺られることなく密かに奥方を当修道院に連れて来て、祭壇の装飾品、その他の物を見せることを望み、そのため、教会に一子を捧げているキリストンの一貴婦人を呼び寄せた。これはまだ異教徒である彼女の侍女を一人として同伴させぬため、奥方は同婦人と三、四名の青年武士のみを伴つて城の後方から小舟に乗り、こちらには夜の十時か十一時に來訪した。フランススコ・カブラー師は教会を十分に整えるように命じ、某修道士がクラーヴォを弾いたが、彼女はこれを聞いてはなはだ喜んだ。能うる限り歓待したので、嫡子と奥方は教会とデウスのことにいつそ好意を示した。嫡子がこのような時間に奥方を当修道院に連れてきたのは、奥方の教会を見ることの希望を満たすためというよりは我らに対する情愛とデウスに仕える者をいかに信頼しているかを示すためであったと我らは信じている。それとも、奥方が彼と結婚して以後、御殿より出たということが我らは一度も聞いたことがないからである。

一七 一五七八年十月付、臼杵發信、ルイス・フロイスの、日向に滯在するフ

ランシスコ・カブラル宛書簡

当地では、ほかにもはなはだ善きことがあつた。彼(嫡子)は私の手を取り、私にもたれかると大いに笑い、何故学院(の建設)に着手しないのかと尋ねた。この度、尊師が彼の父なる國主と共に土持に赴いたため中断したが、殿下が速やかに着工することを望むならば、尊師はこの件にいっそう努力されるであろうと私は答えた。予が学院のために与えた地所を汝は良いと思うか、また、その地所は司祭や修道士らを満足させているか(と問うた)。私はただ、かの大浜の泉の水はきわめて良いとだけ言つたところ、これに対して(嫡子は)、地所は便宜に欠けると思われる、何となれば、そこは幾分城から遠く、

予は己れの側近くにあることを望むからであり、また、同所には船がなくては行くことができず、一般人には多大の労苦となるからであるが、そうなると汝は何處がよいと思うか(と尋ねた)。私は返答にはなはだ躊躇し、いずれにせよ城に近いのがよいという以外判らないと言つたが、彼は幾度も(返答を)求め、我らは心中を察したかのように互いを見やつた。ついに彼は口を開き、その地に良い水はないと言い、私は(そこは)大浜に近いので水を汲み取らせるることは容易であると答えた。すると彼は笑いながら、予が父の僧院を学院の土台とする考えであることを汝がいかにして察したのか解らぬ、と述べ、デウスが万事なし給うであるが、予は城から学院の地所まで、(幾重かの)弧状の、はなはだ大きな橋を架け、当國の美となり、また名譽となすべく己れの力を注

ぐ決心であると語つた。尊師の御記憶にもあろうか、私が他のが当地で幾度も予言したことが今実現されるのであり、かの僧院はやがて栄えるサン・ミゲルの教会になるであろう。私は嫡子に向かつて、殿下が心中で考えていることを知らないが、殿下の父なる國主がかの宗旨に対しへいつそう献身と熱意を示し僧院を建設していた頃、一般民衆は皆異教徒でキリストの敵であつたにもかかわらず、件の僧院はいづれデウスのものとなるであろうと話していた由、たびたび人から聞いたと言つた。

一八 一五七八年十月付、ルイス・フロイ

スの、日本在留のフランシスコ・カ
ブラル宛書簡

(中略)

デウスについて多く話した後、(嫡子の)奥方は同夜洗礼を授けるよう私に請い、その後、人を遣わしふたび懇願したが、私はこれに対して、日本の仏僧は誰であれ、豊後の奥方が彼らの宗旨に入ることを請い、國主もまた同じことを求めたならば、たとえ彼女が宗旨について何も知らぬとしても仏僧は躍り上がつて喜ぶであろうが、キリストは全く異なる道を行く者であり、道理に基づくことのみを行ない、靈魂の利益をいつそう図るので、デウスの教えの汚れなく眞實で完全なことを認められるであろう、従つて、奥方は日本の宗旨の誤りと、我らの主なるキリストの生涯、御受難および奇跡についてもう少し学び、幾らか祈禱を覚えることとなり、必要な手立てにより準備が整つたならばただちに洗礼を授けるであろうと答え、さらに、私が少なからず彼女の救いを望み

飾品をただちに持つて来させるよう請うたが、私が他の理由を幾つか示したところ大いに満足し、それから彼は尊師と私を引見した部屋に私を連れて行つた。やがてそこに奥方が一人の婦人を伴つて現われ、嫡子は、予はなすべきことがあって行くので、汝は彼女と語つて悟らせるようになると黙つて立ち去つた。私は一時間近くにわたつて、かつて行なつた説教を要約した短い話と神・仏の虚偽について語つた。その後で彼女の問い合わせに答えたが、その第一は、太陽と月とはいかなるものか、何故日本人はこれらを神として崇めるのかということであった。この問題は好ましく、また、通常我らの示す理由には十分な説得力があるため、彼女はこれに関して知りたがつていたことをすべて理解した。その後、嫡子も聴聞を希望して戻つて来ると、我らの主たるキリストの十字架がヨーロッパで起こした奇跡を奥方に語るよう私に求めた。

ながら、すぐに洗礼を授げないのは、國主、嫡子ならびに奥方が万事において今後キリストとなつていく君侯の模範になることが必要なためであり、結局、デウスの教えは善か悪かであり、もし悪ならばこれを受け入れる必要はなく、またもし善ならばこれを隠す必要はなく、むしろ善ゆえに宣布すべきである、日本の教えは虚偽であるために仏僧らはこれを秘匿するに努めるが、デウスの教えは聖なる洗礼がそうであるように、明らかでありますとも崇敬すべきものであるから、國主は教会に来てこれを授かったのであり、同様のことを彼女がするのは、他のすべての婦人により模範を垂れる上で好ましいことであろう、と述べた。嫡子は、それは非常によいことと思われるし、道理であるから、翌日に教会を整え装飾品を準備させるのがよく、日中に洗礼を受けに行くか、されば、彼が出陣を目前に控えており、奥方はお供と華麗さを伴わずに教会へ行くことができないので、さらによいと思われるならば、(翌)朝、携帯式の祭壇を設け、その場で洗礼を受けるであろう、そしてこれはただちに布告され、全所領に知れ渡るであろうと答えた。また嫡子は彼女が洗礼の後ですぐに大修道院長ミサを聴くため、教会においても洗礼を受けるならば、これによつて彼女の信心をいつそう深めることができるので予は喜ぶであろうと言つた。この時、私は他の希望することにも彼らを促そと欲し、そのため、尊師も御承知の通り諸侯に對して必要な手段を用いた。すなわち、彼が、ミサについて、神聖ではなはだ敬うべきものであると語つたのを機に、私は(ヨーロッパの)諸国王と王妃がいかに、ミサの秘蹟を尊重しているかを説き、稀に(説教を)毎日聽けぬ時があり、いつそう容易に聴聞できるよう彼女は邸内に教会を設け、邸外の別の教会に行けぬ時は、同

所で日々ミサに与り、日曜日と祝日に説教を聴くことを述べると、この話はたちまち嫡子の気に入るところとなり、そこで彼は私に向かつて、予はそれを聞いてはなはだ喜ばしく思う、さつそく(翌)朝にも、小聖堂を邸内に造らせるべく大工を呼び寄せよう、この城の土地は広くなく望み通りの小聖堂を立てる余地もないでの、少なう程度のものにするであろう、と語つた。それから嫡子は、さつそく職人らには小聖堂の建設を急がせ、これが竣工したならば、その旨を戦場の彼のもとに伝えさせることとし、たとえ何處にあらうとも、デウスの御助けにより右の聖堂において執り行なわれるべき奥方の洗礼に列するため当地に戻ることを決定した。ここで尊師は右のことがどれほど大事なるかを察せられるであろう。すなわち、キリストの武士数人が私に断言することには、同夜、國主はただちに禪宗の僧院を我らに与え、(イエズス)会の者やデウスへの奉仕に対してほかにもいつそう多大な好意を示したとはい、いずれも彼の御殿や城の中に小聖堂を立てさせるまでには至らなかつたのであり、かかる事情を知る者は、キリストであれ異教徒であれ、皆(嫡子の言動に)驚嘆し、やがて豈後全国においてキリストにならぬ者が一人としていなくなるのは明白であると言つてゐることである。

一九 一五七九年十二月十日付、口之津発信、 フランシスコ・カリオンの、イエズス 会総長宛、一五七九年度・日本年報

以上のことが野津において起つてゐた間、邪惡な奥方イザベルは多数の大身らと共に、いかにしてキリスト宗団を撹乱し、若き國主の考えを改めさせるかについて大いに協議し、奥方の母堂で彼女に劣らず邪惡な老女シタントなつたならば、嫁とも娘とも思ひぬと言つて種々のことをしたので、彼女は徐々に熱意を奪われ動搖を來した。その一方、日向の戦さに向かつていた数人の大身は嫡子に對して、日向においていつも大なる戦さが起きている時に、嫡子がデウスの教えを庇護することに没頭しているのはよくない、戦さや領国の政治に係わるいつら戦さに赴くため政厅を離れて荒野に身を置き、戦さに必要な品物いつさいを全軍に整えさせるよう努めていることは汝らのよく認めるところであり、デウスの教えに係わることはその妨げにはなつてい、汝らはデウスの教えを重視せぬが、これについて汝らがいつそ正しく意見を述べうるため、まず初めにデウスの教えが説いていることを聴くべきである、と言つた。彼らはこの返答にあまり満足せぬまま、日向に向かつたが、若い國主は邪惡な老女たちが彼の夫人に対してもくるんでいることを聞いたので、彼女を救おうと決意し、夫人とルイス・フロイス師に書状を送り、司祭がたびたび夫人を訪問して、彼女の決心を守らせるることを請うた。結局、彼は(今後)起こりうることについて、いつさいの疑念を晴らすことを望み、同司祭に対し、己れの洗礼はさほど急がないので、せめて妻に洗礼を授けること、および、聖カタリナの祝日に執り行なうことを懇願した。多数の伝言を

交わした後、その通り行なうことが決定した。二人の邪悪な老女はこれを覺り、もしこのようなことがなされば、彼女らは腹を切つて自ら命を絶つであろう、強いてキリシタンとなることを望むのならば、国主がキリシタンになる時まで待つように、と言つた。若い国主はこれを聞くと、すぐさま奥方のもとに行き、あらゆる手だてをもつて彼の母がこれに同意するよう説得に努めたが、彼女は強く拒んで譲らなかつたので、若い国主もまた怒つて、どのようなことがあつても実行する決意を固めた。

それ故、政厅内に、はなはだ大きな不和が生じ、件の若き妃はいかなる決心をなすべきか判らずにいた。結局、論議を多く重ねた後、ルイス・フロイス師の意見により、洗礼は中止することが決定されたが、確かにこれは、彼女が受洗した後、（異教徒に）立ち帰らぬためのデウスの御計らいであった。洗礼の代わりに彼らは宮殿に設けた小聖堂において、助祭と副助祭を伴い、オルガンの歌(em canto dorgão)に合わせて盛式ミサを行ない、若い国主やその奥方、同席した人々は大いに心慰められた。彼らは盛式ミサの儀式を見てたいそう喜んだが、二人の邪悪な老女にはあまり愉快なことではなかつた。その後、国主は司祭らを讐応し、彼らの行なつたことについて深く感謝して野津に戻つた。

（中略）

敵が我らに対し思ひ通りに悪事を働けなかつたのは我らの主（なるデウス）の御恵みのほかに、三つの事柄が妨げとなつた。その第一は、若い国主が我らから離れ、（かつての罪に）陥つたとはいえ、我らを迫害することも、またキリシタンに（異教徒へ）立ち戻るよう命じることもせず、ただ冷淡になり、キリシタン宗団を抑圧するでも庇護するでもなく、偶像を崇めて供物を多く捧げ、

仏僧や妖術師とよく話したが、棄教した者については何も仏僧らに知らせなかつたことである。第二は、老国主が最後に大身の数人に送つた由々しい伝言であつた。すなわち、司祭とキリシタン宗団への迫害を止めるべきであること、また、彼はキリシタンであり、キリシタンとして死ぬべきであるから、もし司祭とキリシタン宗団に迫害を加えたり、なんらかの害を与えるならば、まず第一に彼を殺してから始めるのがよく、従つて、恐喝と非道は止めるべきであると伝えた。彼は政治を息子に譲つたとはいえ、諸人は彼の優れた知識と思慮を非常に尊敬していたので、この伝言によつて彼らは大いに考え込んだ。（我らの）救いとなつた第三のものは、豊後全国で最も有力な大身で、数日前に死んだ（田原）親宏と称する人であった。彼は、前述の国主に呈した条件について大身らが協議した際、親堅(アシカニ)が提示し、他の大身らが承認した二つの条件を決して認めようとはしなかつた。その条件の一つは、司祭らは領国に甚大なる害を加えているから国外へ追放するというものであり、第二は、政厅の所在地である白杵の教会を破壊し、同所に二度とキリシタン宗団を作ることを許さぬといふものであつた。親宏が認めなかつたので、これらの条件は嫡子に提示されなかつたが、これは我らの主（なるデウス）の格別なる御摂理と思われた。親宏はかつて我らの友になつたことはなく、我らのことも知つてはいながら、親堅(アシカニ)の敵であり、親堅(アシカニ)が司祭らと敵対しているのを知つたので、彼に楯ついて我らを庇護することにしたのであり、それ故、他の条件を認めて右の二ヵ条には同意せず、後には自分修道院の司祭を訪ねて、この一件についてすべてを話し、我らの友になることを望み、我らを援助して、我らに反することには同意しないであろうと述べた。

（中略）

右のいとも大なる嵐が過ぎた後、別の嵐が生じ、これは直接キリシタン宗団や司祭らに対するものではなかつたが、諸人はこれを前回に劣らぬ危険と見なした。それは（田原）親宏と称する豊後の大身（のこと）であつた。彼についてはすでに述べたが、豊後の諸大身中、最も重立つた人である。彼は諸国が反旗を翻し、豊後が窮迫しているのを見ると、これを機に、数年前に国主が彼より没収して（田原）親堅(アシカニ)に与えた多大の封禄を取り戻そうと欲し、若い国主（義統）にも老国主（宗麟）にも全く告げることなく、或る日突然に彼がいた政厅所在地を発した。その後に若い国主のもとに使者を遣り、彼が（政厅を）去り、彼（親宏）の所領に向かつたことを伝え、父である（老）国主がかつて彼から没収し（今は）親堅(アシカニ)の所有となつてゐる別の領地を返還するよう求めた。この大身が（政厅を）発つたことは、特に、諸国の大身が謀反を起こしたとの知らせが日々届くこの時期にあつては、諸人のはなはだ恐れるところであり、従つてこの親宏が謀反を起こすのは確かなことと思われた。もし彼が謀反を起こしたならば、彼はいとも強大であり、豊後はたいそう荒廃し、他の諸国においては数多の戦さを抱えていることから親宏は手勢とともに容易に侵入して思ひのままになすことができる所以で、豊後の国主にはもはや一つとして手だてはなかつた。また、戦さでは最初の合戦において見出したものは、何人であれ、また寺社であれ敬うことなくいつさいのものを破壊し焼き払うのが日本の慣例であるから、親宏は直接、キリシタン宗団と司祭を敵としているわけではないが、親宏と共にやつて来る兵士は皆異教徒で我らの敵なので、修道院が略奪のうえ焼き払われ、司祭らが殺されるか虐待される危険に

（中略）

陥るのは確実なことであつた。

また、以下のことが右の恐怖をさらに大きなものとした。すなわち、かの国の一において謀反を起こし、すでにその大部分を占領した主たる大身は、親宏の娘を娶つた婿であるから、彼もまた反旗を翻すことは疑いないと思われた。そこで、政庁所在地である白杵の市の大半と、豊後で一番大きな府内の市では、人々が立ち退き始め、各人はできる限り家財を救おうと努め、これを他の場所に移した。というのも、両市は中心的な市であるから、右の大身が事を起こせば第一に両市を攻撃するに違いないからであった。従つて両（市の）修道院にいた我が会員らは大いに混乱し、修道院の内外を問わず、或る人は一方に逃げるよう言い、また或る人は他方に逃げるよう言つた。國主は事の行方が分からず躊躇していたが、時々刻々と恐るべき知らせが種々届くため、両市はいとも騒然となつて大いに混乱を來した。我が会員らは、もし同所に留まれば殺されるし、他の場所を求めて同所を出たとしても異教徒らが彼らの退去を見れば、一方では家財を奪うため、また他方では我らに対する憎悪によつて混乱に乗じて彼らを殺すことは、容易であろうから、いかにすべきか分からずにいた。キリストンの中には、一つの事を勧める者もあれば、別の事を勧める者もあつたが、ついにフランシスコ・カブラル師は退去することを危険と見なして同所から出ぬことに決め、敵が迫つて他に手だてがないと認めた時、携えて逃げられるように、よりいっそう重要な財産をまとめさせた。我が会員らはふたたび準備を整え、祈禱によつて我らの主（なるデウス）の御助けを願つたが、主は事を鎮め給うた。すなわち、國主はかつて父が親堅（マサニ）に与えた所領を再度取り上げて元の領主に返したので、親宏は満足して静まり豊後と

和睦したが、司祭がした決心は我らの主（なるデウス）の定め給うたことであつた。もし彼らが同所から出ていたならば、司祭が生命守るために他の場所に遣わした二人の修道士が経たのと同様、はなはだ大きな危険に曝されていたであろう。数人の異教徒が結託して右の修道士らを殺して所持品を奪おうと欲したが、彼らに同行していた一人のキリストンが偶然その企てに気づいて彼らの安全を図り、同伴していた数人の青年と共に武器を取つたので異教徒らは敢えて実行しなかつた。

親宏が静まつことにより、司祭らが落ち着きを取り戻したのみならず、ほかにもはなはだ良いことがこれに続いた。すなわち、親堅（マサニ）が有するものはほとんど皆、親宏のものとなつた件の所領から（得たもの）であったので、これを没収された後、彼の封禄と名誉は下がり、その上、諸人が日向における敗戦の罪を彼に負わせていましたが、かかわらず、彼が軍勢の中での責務について十分な償いをしなかつたことから、徐々に衰退を深め、彼の甥に当たる（若い）國主が彼を殺すよう命じることが懸念されたほどであった。それ故、政庁を去り、大いなる侮辱と不名誉に甘んじつゝ己れが小さな領地に帰ることが得策と考えた。その後、親宏は彼を迫害し始めたので、彼はやむなく多数の書状を老國主とその奥方のジュリアに送り、己れがしたことを大いに償つて老國主の恩恵に与るように努め、今後はキリストン宗団と司祭を迫害せぬばかりでなく、領内に教会を建て、希望する者は皆キリストンとなることを許すと約束したが、國主はフランシスコ・カブラル師に書状をしたため、アハブ（注、イスラエルの悪王、旧約聖書、列王紀略、上、第十六章第二十九節以下参照）があれほど屈服したのを見て喜ぶべきであるが、これまで彼をあまり信用しなかつたし、望

みをかけてもいないと伝えた。

（中略）

老國主に続き、前述の野津のリアンは彼に劣らぬ堅さと熱情を示した。すなわち、彼は嵐と迫害の只中にあって、いつそうの熱意を抱き、夫人と共に勇氣を失うよりも死ぬ覚悟をなし、この人の大いなる才知と熱情により、艱難極まる中、その地のキリストン宗団は絶えず増加し、数回洗礼を行なつた。従つて、今、同所には千名を超えるキリストンがいるであろう。彼はその行ないを続けているので、我らはやがてかの地の村々がことごとくキリストンとなる時が来るものと期待している。そのほか彼は最初に建てた教会よりもさらに収容力のある教会を新たに設けることを望んでおり、この人について知りうるところによれば、いかなる労苦においても決心に揺るぎなく堅固であることが期待される。既述のように、彼は同地方一帯を受け持つてるので尊重すべき人物である。彼の親戚の多くは一姉妹を筆頭に、迫害の際に彼の熱意を削ぐため全力を尽くし、嫡子や政庁の人たちが（異教徒）立ち戻った時に、彼のみ（信仰を持ち）続けているのは分別なく愚かなことであると言つたが、彼らはいつも堅固な石を前にして空しく終つた。結局、彼は家族と共に進み、慈善事業を多数行なつてゐる。当地の人はその身分に相応して皆、非常に貧しいので、このような事業は日本においては稀にしか見られぬことである。彼は夫人と共に八日ごとに告白して聖体を授かり、司祭が多くいる時にはさらにたびたび行ない、盛んに断食をしている。結局、彼は司祭らにいとも馴れ親しんでいるので、キリストンとして何事にも老國主の足跡に従つてい

（中略）

この豊後国には、既述の通り、二つの司祭館のみを有し、その第一は政庁所在地の臼杵に、また第二はそこから四里の府内の市にある。同所でキリシタンになる人のほかに、司祭たちはその周囲近くにある多数の町に出向いて（人々をキリシタンに）改宗させ、すでに五千名近くをキリシタンにしているであろう。しかし、とりわけ臼杵において改宗がすすんでおり、同所では迫害が鎮まつた後に三十名以上の貴人がキリシタンとなり、その中には、かつて我が教えの大敵や迫害者であった者が多数含まれている。

（中略）

戦さについて述べれば、四ヵ国情勢は非常に危険なもので、勝利が何処に帰するのか不明である。吉報や凶報が伝えられているが、若い国主は己れの顧問の大半と共にひどく急迫し、ことごとく大なる危険に曝されたので、過日、老国主に助けを求めることとした。老国主は嫡子が（異教徒に）立ち戻つて以来身を退き、戦さにも政治にも従事することを望まず、いつさいを彼らに委ね、彼らは隠居（インキョウ）、すなわち世を捨てたと言つて、己が靈魂のことのみ従事することを望んだ。しかし、彼の助言と権威は諸国の鎮定に必要なため、嫡子が自ら四、五里離れた老国主の居所に赴き、彼に対し、この戦さを鎮めるために能うる眼りのことをしたが、好い成果をもたらすほどの知恵も力もなく、それ故に老国主がこの戦さを引き受け、重立つた領袖らのいる所へ御自ら向かわれんことを懇願する旨、嫡子およびその重臣たちの名において述べることにした。老国主はたいそう勿体をつけ、この件について多々助言を得て、結局、二つの条件をもつて戦さに臨むことを承諾した。第一の条件は、勝利を得た時、いつそ大たる名誉に浴するため若き国主も総指令

官として彼に同行し、彼自らはその顧問として密かに行くことであり、第二の条件は、老国主がこの件を引き受けることを望んだのは若い国主とその顧問たちであるから、彼ら一同万事において彼の決定に従い、その命令を実行すべきであり、もしこれに背けば直ちに戦場を引き揚げ、以後は二度とこの件に関わらないというものであつた。一同は両条件を承諾したので、彼はさっそく、或る場所にいた約三千の兵に陣所の移動を命じて、四千の兵が駐屯する己れの一城の近くに配置した。この移動については、若い国主は顧問らとすでに幾度も協議し、その是非を決めかねていたが、老国主の決定は当を得たものであるように思われた。両国主は今、戦さに赴く準備をなしているが、（老）国主が指揮官として、また嫡子を伴わずに戦さに行くことを嫌つたのは、より多くの兵を投入するため、かつまた戦さに敗れた時にキリシタンを総大将とする軍勢は勝つことができぬと言われないためであり、これはまことに正しい思慮であった。我らはこの二人の出陣によって彼らの側がいつそう強くなり、敵方が弱くなることを主（なるデウス）おいて期待している。

（中略）

二〇 一五七九年、臼杵發信、フランシスコ・カリオンの、下（の地方）在留の司祭および修道士宛書簡

この間、老国主と嫡子は自らの決心と望みを固く守つていたので、懸念すべきことはあまり起きなかつたが、その傍ら、我らが唯一懸念するのは、誰かが国主に対し謀反を起こした豊前の数人と戦うことを行つたが、國主は親宏の心を知つたので大いに満足し、親宏の請うことのいつさいを行なうよう嫡子に命じたとのことである。従つて我らは当地においていつそう安全を得たが、その協議に関わる人たちのことを知つてはなはだ心痛を感じざるを得ない。というのは、人々の確言するところによれば、政庁内においては「老国主は別の離れ屋敷に

住んでいるので、ここには嫡子とその奥方、およびイザベルが住んでいる」嫡子が戦さのため府内へ行けば、直

ちに兵士らは教会を襲うであろうし、老国主はこれを守り、或は教会内へ入ることは確實と思われるから、彼をも殺すであろうともつぱら話されているからである。彼らがデウスに対し憎悪を抱き、我らが仮の悪口を言つて彼らの宗旨に反対するので、このように我らの抹殺を謀つているのを認めて我らは喜んだが、このイザベルなる悪魔が嫡子を堕落させ、その清い決心を改めさせるほど大きな力を持ち、彼女、その他の人々の説得によつて、すでに異教の儀式を行ない、また、妖術師を頼み、仮僧を招き、その他仏に関わることについては従来のしきたり通りに行なうよう命じたことを知つて我らは非常に悲しんだ。彼の父なる老国主の苦痛は言い知れず、彼が一昨日、病いにかかったのも、確かにそれが原因であると我らには思われる。もし、嫡子が家臣の心を掴み、苦痛を逃れるのにもはや仕方がないと考えて右のことをするのであれば、これは大なる悪事であるが、さらに進んで教会を迫害し始めるならば、この哀れな青年のため大いに嘆き悲しむべきことである。彼は己れの難題を救済すべき手段のために、かえつてこれを取り逃す羽目となり自ら破滅するであろう。なぜなら、最も大事な時に彼は唯一、眞の救済と健全を持ちうる主（なるデウス）を棄てたからである。かくも多大な苦難と迫害の只中で司祭は主（なるデウス）が（我らを）この嵐より救い出し、大いなる平穏をもたらし給うことを非常に期待している。

というのも、デウスは昔えより人間の想像しえないところへ物事を導き給うのが常であり、人間の力によつては、もはや望みなしとする時もいつさいの期待をデウスにかけるならば、我らに救いと援助を与え給うからである。

（中略）

当（書簡）を終るに際し、尊師は政庁においては今や戦さの行方を見るため、妖術師らに相談する以外に何もなされていないことを知るであろう。彼らは皆、臼杵の教会と政庁内の小聖堂がある限り、不幸の根元は明らかであるから尋ねるまでもない、と答えていた。嫡子はこれら女妖術師に夢中であることから察するに、少なくとも小聖堂を破壊するか、或は祭壇を広間の用に充てることを命じる恐れがある。主（なるデウス）がより大きな奉仕と人々の利益になることをなし給わんことを。老国主はこれにもかかわらず、いよいよ信仰を固め、過日、それを大いに示したことには、我が教会において聖体を授かつた後、誓願を立て、我ら一同をたいそう驚かせた。そして彼は司祭の面前で、たとえ日本の諸人が（異教徒に）立ち戻り、キリストと司祭らが信仰を棄て、さらには、〔この上〕教皇さえもが棄教するとしても、国主は決して信仰を棄てず、（異教徒に）立ち戻ることも、また、ひと度得た信心を棄てることも決してないことを我らの主（なるデウス）に誓った。子息の墮落は彼を非常に悲しませたので、一昨日子息が彼を訪ねて行つたが、会うことを望まず、嫡子が重要なことについて国主に相談したいと述べると、それには堪えぬと答え、嫡子の奥方が來ることも、また、せめて孫との面会を請うたが、これすらも彼は許さなかつた。

彼はさつそく巡察師に書状をしたため、このいとも良き知らせを伝え、かの人物のために当初は豊後が滅びるかに思われたが、彼の死によつて今では安全になつたと思われると述べた。事実、その通りになつたが、これはシスコは大いに喜び、我らの主（なるデウス）に感謝して止まなかつた。

それから数回後、紹鉄はもはや悪意を隠すことができなくなつたので、大いに略奪を働き、多数の人を殺し、手当り次第に物を破壊し始め、豊後の敵であることを露にした。彼はきわめて有力で、はなはだ勇気あり策略に長けているので、彼が豊後に對して反旗を翻したことが分かると、諸人は大いに恐れをなし、豊後はことごとく滅亡するものと考えるに至つた。国主フランシスコはさつそく、我が会員らのもとに行き、司祭と修道士らを招き、彼らが国主、およびこのために集まつたキリストと共に声高にパーテル・ノステルを五十分、アヴェ・マリアを五十分唱え、この國のため心から我らの主（なるデウス）の御慈悲を乞い、また、これのみに望みをかけ、ほかには救いの手だても逃れる場所もないと述べた。我らの主（なるデウス）は祈りを聴き入れ給い、八乃至十日も経たぬうちに、紹鉄は容易に攻撃できない堅固な場所に籠つたが、彼は大きな不信と恐怖を覚え、豊後の地を出て筑前国において他の者と合流することにした。しかし、デウスのお裁きと国主フランシスコの策により、彼は家臣から見放され、わずか八十名を伴つて逃れたところ、豊後の国境にある日田の人たちが彼を襲い、彼とその同伴者をことごとく殺した。これにより、国主フランシスコは大いに喜び、我らの主（なるデウス）に感謝して止まなかつた。

親貫が大いに力衰えたためであった。これによつて国主フランシスコはかつての信用と権威をさらに大きくしたので、今や諸人は從前に勝る恐怖と服従を彼に示し、國主の知慮によつてのみ豊後は支えられていることを公に認め、嫡子である彼の息子も今は國主と和して従い、國主の愛情と、彼がいかにして國をあるべき状態に保つてゐるかを知り、彼なくしては國を保ち得ないことを悟つた。親貫の悪しき根を完全に絶やすため、國主フランシスコは数日前から彼と二つの城を擁する別の武将を攻囲しており、國主自らは竜造寺と戦うために豊後と筑後の国境に赴くことを決意した。というのも、同國において彼の側についている大身および豊後の他の大身らが皆、この戦さを終わらせるには他に手ではないと言つて、これを切に求めたからである。國主はすでに老い、はなはだ疲れ、辛苦に飽いてゐるが、この進軍を決意した主な理由は、彼が述べているように、諸領国において我が聖教が弘まるこことを強く望むからであつた。今日まで豊後に起つたことはすべて、デウスのいとも格別なる御摺理であることは明らかである故、我らは我らの主（なるデウス）において、万事が順調にいくことを信じている。國主フランシスコ自ら、巡察師に語つたように、二年前、彼の軍勢が日向において敗れたことは、他の人たちは神、仏の罰と見えたが、彼にはデウスの偉大な智慧の格別なるお計らいと思われた。なぜなら、かの戦さで豊後の最も有力にして重立つた大身らが死んだが、彼らはデウスの教えの大敵として同盟していたのであり、もし彼らが勝利を得ていたならば、國主は彼らを抑えることができず、彼らは我が教えと豊後のキリストン宗団を滅ぼすことに全力を注がずにはおかなかつたからである。彼らの死によつて大きな艱難が生じたとはいへ、國

がふたたび平穏になれば、きわめて大きな改宗がなされるであろう。

（中略）

（既述の人の）洗礼が行なわれる一日前に巡察師はフランシスコ・カブラル師、その他同伴の人たちと共に府内に到着した。豊後にいる我らが得た喜びは大変なものであつた。我らはいとも長きにわたつて彼（の来着）を希望し待ち望んでいたのであり、尊師もその喜びがいかなるものか察せられるであろう。（巡察）師は数日、府内に逗留し、そこから三里の所にあつて親貫の幾つかの城を攻囲していた嫡子（義統）を訪ねた。司祭は彼から深い親愛の情ともてなしをもつて迎えられた。（同所から）さつそく、老國主（宗麟）がいる臼杵に向かい、國主は司祭の到着に非常な満足を示したが、司祭はちょうど良い時に到着した。というのも、國主はこの度の戦さの遂行と終結について、彼の子息や顧問の大身らと協議するために出発しようとしていたからである。彼は祝祭を行なうため聖フランシスコの祝日を待ち望んでいたが、祝祭ははなはだ莊厳になされ、巡察師はいとも華やかにオルガンと多数の装飾をもつてミサを捧げ、國主は殊の外に喜んだ。ミサが終わると、彼は司祭と修道士一同を自邸において盛大に饗應し、翌日、彼はさつそく子息のもとに向かった。（巡察）師は府内と臼杵にいる全司祭と協議し、これによつて我らの主（なるデウス）への奉仕と（イエズス）会の利益に関わる多数の事柄が決定され、日本の諸事とその管理（の方法）が定められた。とりわけ、ポルトガル人および日本人で最近入会を望んでいる人を迎えるため、臼杵に修練所（casa de provação）を設けることを決定した。右の入会希望者の内、五名はすでに同所に在しており、他の人々は下（地方）から来る。

現在、当修道院の上長であるフイゲイレド師は或る日、

病人の告白を聴くため出かけた。彼が招かれたのは領内で数多の騒乱と略奪が起きていた頃のことであり、非常な危険を冒してこの慈善の業を行なうために赴いたが、途中で多数の異教徒が現われて抜き身の槍や刀を手に彼を罵り、豊後の有力者たちは領内に教会と司祭が存在せぬこと、およびこれを見出したならば皆殺しにすることに決めたが、もし金錢を差し出すならば放免するであろうと言つた。しかし、司祭がこれに耳を貸さなかつたので、彼らは司祭を襲い、その近くにあつた山の裏手の林に連れて行き、そこで彼を殺す素振りを見せ、或は本当に殺すつもりであったのかも知れないが、司祭は、もし山の裏手に連れて行かれて人の目に付かなくなれば、ものはや救いの手だけがなくなると考えたので、前に進まぬ決心をして道に留まる、自分は銀を所持せず、また、（山の方へ）進むこともしないから、もし殺したければ、この場で殺すようによつて言つた。そこで彼らはふたたび相談し、殺せと言う者もあれば、この人は生かすべきではないから（首を）斬れと言う者もあつたが、最後に彼らの一人が、たとえ犬であつても、なおいつそう相談して殺すのがよいと言つた。恐らく彼らは附近の一城にいる領主がこの件で怒ることを危惧したと見え、事の次第を領主に伝えて彼の望む処置を尋ねることとした。我らの主（なるデウス）の御摺理により、右の領主は二十五年ほど前に或る謀反の際に國主が彼を殺そうとした時、我らの修道院に逃れて命拾いをした人であつた。その謀反において、國主は己れを殺そうとして反旗を翻した彼の父や大身二人、ならびにその子や家族全員を殺させたが、

彼は某司祭のおかげで命を救われ、ごく最近、フランシスコ・カブラル師の取りなしによって國主の赦しを得たことを思い起したので、件の司祭に害を加えぬよう命じ、すでに時刻が遅くなつて宿を提供し司祭を危険から救いだした。こうして司祭は無事に府内へ帰り、人を選ばず善をなせという諺を眞実とした。

一一三 一五八二年二月十五日付、長崎發信、
ガスパル・コエリュの、イエズス会
總長宛、一五八一年度・日本年報

豊後の修道院ならびに司祭館について

一一一 一五八一年九月十五日付、日本發信、
フランシスコ・カブラルの、イエズス会總長宛書簡

この国には学院コレジオ一校、修練院レジンド一ヵ所及び司祭館二ヵ所がある。学院は同國の首都である府内の市にあり、當市には國のいつさいの政治を司つてゐる嫡子（大友義統）が二ヵ月前から住んでゐる。学院には（イエズス）會員が十名おり、その内三名は司祭で、一名はラテン語の教師である。彼らの中に日本人修道士のパウロがいるため、ラテン語の授業のほかにも毎日、日本語の授業がある。

パウロは日本語並びに文章に優れ、書物の翻訳によつて當宗団に大いに尽してきた人物である。彼はすでに七十歳を過ぎてゐるが、かくも高齢であるにもかかわらず、その謙遜と徳の高さによつて我らを大いに教化して來たのである。それゆえ、我らの主が彼の生命を數年の間保ち給わんことを我ら一同が希望している。この市の周囲には多数の村があり、学院の者たちが異教徒の改宗とキリストの教育の両面において世話をしている。當宗団のキリスト並びに全日本のキリストの数については、巡察師が尊師に報告するであろう。

当豊後の地方において我々は本年、デウスの御恵みによりここ数年に比べていつそう平穏であり、したがつてキリスト宗団において結ばしめた果実はさらに大きく成長し（イエズス）会の事業は大いに進展した。竜造寺と豊後の國主との戦さはまだ続行しているとはいゝ、それは同國主の支配下にある諸国においてのことであり、豊後は平穏である。過ぐる年、（書簡に）書き記した（田原）親貫との戦さは終結し、彼は老國主に敗れて国外に追放され、國主は城塞に留まつて（兵力を）増強した。

老國主は世子と共に大軍を率いて豊後の国境に達し、叛起していた数人の大身をふたたび従属させたのであり、筑前国においては竜造寺ならびに秋月の軍勢と交えた一戦により、多数の敵兵を殺し、或いは敗走させて勝利を得たが、味方の損失は微少であつた。豊後國主は非常に強國な山（彦山）を占領した。この山には主要な寺院の一つがあつて当地方でもっとも崇められており、同寺院の周囲には約三千の仏僧の家屋があつた。國主フランシスコ（大友宗麟）は彼らを憎悪していたので、ただちに家屋をことごとく焼き払わせ、崇敬の対象であった寺院は灰と化した。この勝利の後、國主は慎しみ深くキリストに相応しい書状を巡察師に認め、その中で彼は、こ

のことすべてはデウスの御計らいであり、司祭方の祈りによつて賜わつたことで、己の才覚でもなければ力によるものでもないと告白し、デウスの恩恵に対して深甚の謝意を表わしたが、彼の領国において我らの主（なるデウス）が諸人より識られ敬愛されるよう能うる限りのことをするのでなければ、（デウスの）恩恵に報いようがないと語つた。以上のことにより、かつまた彼が智慮と采配を振つて当國に安寧を奪回したことにより、領國を子息（義統）に譲る以前と変わらず、諸人から尊敬された。

誰もが異口同音に國主フランシスコでなければ豊後は滅亡していたであろうと言い、國內の大身は皆、何事であれ彼の意見に従い、若い國主と事を取り決めるこつを望まない。若い國主（もまた）己れの幸福はすべて彼の智慮と政治に懸かつてゐることを覺り、父に対しても然るべき尊敬の念を抱いてゐる。

（中略）

臼杵の修練院について

臼杵の城下（豊後全土）でもっとも強固であり主要なる城下町の一つで、かつてはここに政庁が置かれていたが、現在は國主フランシスコが家族と共に住んでおり、彼の子息である國主は政府と共に府内へ移り、爾來三年になるには昨年、（書簡に）認めた通り修練院があり、同所は巡察師がかつて迎え入れた日本人六名とボルトガル人六名の（合わせて）十二名の修練士をもつて昨年の降誕祭の前日に開設された。

本年、修練院がその附屬の建物をも含めて落成したので、修道院は設備が増えて非常に便利になり、國主フランシスコが建てた教会に大いなる輝きを添えた。この教

会は、既述の通り、日本でもつとも豪華で美しいものであり、國主はこれに多大な熱意を注ぎ、都から職人を呼び寄せたほどであり、戦中においても彼の気掛かりはすべて、（必要な物を）調べて工事を控らせることであった。

結局、教会は四カ月で建ち、屋根を葺き、今では内装の作業を終えつつあった。我らの主はこの工事において彼を喜ばせるため、教会の建立を望んだ時に巡察師が都から豊後に帰るよう計らい給うた。彼は八日間、同所に滞在していくとも莊厳に礎石を祝福し、行列を催したが、これには府内の学院およびその他の司祭館の司祭ならびに修道士たちが加わり、（イエズス）会から（の参加者）は総勢四十名になつた。これはキリスト教および我らに無上の喜悦と満足をもたらしたことであり、異教徒には、数年前にはわずかに一人いるだけであったこの地にかけて大いなる驚きとなつた。ここ豊後諸国においては、若い國主の母にあたる悪しきイザベル、その他これに類する者共の反抗がいまだに尽きないが、願わくば（同國において）キリスト教が大いに發展するよう（我らの）主がこの善良なる國主に長寿を賜わらんことを。

（中略）

本年、臼杵城下の武士たちに資するため、毎週日曜日の午後、我らの修道院において集会を開き、同所で一時間、靈的な事柄について談話し、有益な教説によつて良い教訓を得ること、ならびに（同集会には）司祭一人か修道士が参加することが決められたが、これにより短期間で多大な成果を収めることができて認められており、この新しいキリスト教宗団にとつてはなはだ必要で重要なことと考えられる。彼らはたびたび、デウスの栄光となる特筆すべき事柄を語つてゐるが、もはや余裕がない

ため、（これ以後は）豊後の他の地方のキリスト教宗団および府内の学院について述べよう。

府内の学院ならびに由布の司祭館について

府内の市はおよそ八千人の住民を擁し、臼杵の城から我らの（尺度でいえば）四レーグア、すなわち日本の六里離れた所にある。この市は豊後全国の首都であり、同市には現在、若い國主（大友義統）がその政府と共に居住している。すでに（書簡に）認めた通り、昨年、この市に学院を開設したが、現在まで（イエズス）会員が十三名駐在しており、（その内）三名は司祭で、その他は修道士である。

二四 一五八二年十月三十一日付、口之津 発信、ルイス・フロイスのイエズス 会總長宛、一五八二年度・日本年報

（中略）

当臼杵および府内では、著しい増加のもとに布教事業が進行しており、はなはだ身分の高い人たちがキリスト教となつてゐるが、ここではその内の重立つた者を挙げよう。第一には國主の第三子が洗礼を受けた。世子は從前、彼の洗礼を妨害していたが、今では許可した上に世子は修道院に人を遣わして彼の弟の洗礼について丁重なる挨拶を伝えた。さらに私は國主フランシスコの甥（姪の子）で日向の國主であつた人（伊藤義賢）に洗礼を授けた。彼はゼロニモの兄弟であり、巡察師に同行した（伊

藤）マンショの従兄弟である。これは彼ならびに國主にフランスの願い出によつて洗礼を受けたもので、バトルロメウと名付けた。また、当地方の領主である臼杵殿の一姉妹と彼の長子の娘に洗礼を受けた。井田地方の領主で、國主の奥方イザベルの一姉妹と結婚している（井田）ソウエキにも洗礼を受けた。その他、名前は覚えぬが、身分が高い武士にも洗礼を受け、その内の一人は世子、老奥方および若い奥方の寵臣古庄一閑であった。奉行たちは彼を追放したが、世子は勢力をもち始めたことによって従前と変わらぬ寵愛をもつて四カ月前に彼を復職させた。右のことは世子の政府において我らの敵である異教徒らに対抗する上で少なからず助けとなることである。ここ豊後國の情勢は以前に比べ大いに異なつてゐる。というのも、諸僧院が滅亡の一途を辿り、それらの財産が兵士たちに与えられているからである。仏僧の中には兵士となる者もあれば、當国においては（自身を救う）手立てが尽きたために他の諸国にこれを求めてゆく者もある。府内の重要な僧院ははなはだ壯麗で當国中に光彩を放つていたが、巡察師が出立した直後に火災を起こし、後には何も残らなかつた。

（中略）

夜になるとキリスト教徒たちはすぐさま翌日の行列のために様々な形の燈籠を紙で作つた。それらの細工があまりに見事であったので私は日本人が刀物を用いて紙を切ることの巧みさをこれ以上に示すものを当地方では目にしたことがないと確信しているほどである。燈籠は皆それぞれに形が異なつて見え、その数は三千と見積られた。主な燈籠が三つあり、これを國主の子息パンタリアン（大聖堂と祭壇を備えていたが、その内の一つは教会の形をし、聖堂と祭壇を備えていたが、その内の一つは教会の形をし、

製で沢山の刺繡があり、柱もきわめて精巧であったので諸人を驚嘆させ、また教会の入口には血に塗れた苦行者（の像）が一体あつた。その他、日本の種々の物語に関するものも多数あつた。行列が始まる時、通りはことごとくアーチと多数の花に蓋われ、また大掛けな花火の仕掛けがあつてはなはだ多数で各種の花火が打ち上げられたので、諸人は花火が上がるといつせいに目を奪われ、これを見るのに向き直らぬ者はなかつた。金曜日に棘の冠を戴いていた少年たちはこの日は非常に立派な金銀の冠を戴いていた。舞が二度行なわれ、一度は國主の第三子パンタリアンの、またいま一度は國主の婿によるもので、舞に合わせた豪華な衣装をまとつていた。およそ三つの堡壘から多数の車輪、樹木、その他花火の細工物が出て行列に大いに光彩を添えた。人が大勢いたので夜になつて（人々を）外に出し門をすべて閉じたにもかかわらず、夜半に至る前に教会は満員になり、もはや一人も入ることができなかつた。この人々の大半は船に乗つて海（側）から入ってきたのであつた。國主フランシスコがこのこと万事に満悦したことは言葉に尽し難いほどであつた。その後、戦場にいた世子が行列に加わつた一人に、噂に違わぬ出来事であったといふのはまことかと尋ねたところ、かの有様はとても語り尽せるものではないが、多数の人が參集したこと、彼がその敵を殲滅しふたたびかつての地位を取り戻すにはこれのみでこと足りるからである。また第二には、同所のキリスト教徒が皆いとも従順なことで、大勢の人があつたにもかかわらず、言葉を発することなく扇子で指図するだけですべてが即座に整然となつたからであると言つた。結局、このおかげで多数の異教徒がキリストとなり、今説教を開

かせる機会があれば、さらに多くの人がキリストにならうである。

一五八四年一月二日付、ルイス・フロ

イスの、イエズス会總長宛、一五八
三年度・日本年報

豊後の國主の娘に仕えていたイザベルという名のキリストの娘は彼女によつて政府から遠く離れた身分の高い一貴族の家に追放され、同所には一人のキリストもいなかつたが、彼女は幼少の時洗礼を受けられたので、祈りを捧げることも、またキリストとしての他の務めをすることも止めなかつた。右の大身は今や豊後全国で第二位の人物であり、その一子（志賀親次）は年の頃十二、三歳になるが、彼女がたびたび跪き、十字を切つて祈禱するのを見て驚嘆し、なぜそのようなことを絶えず行なうのか頻りに問うた。彼が執拗に懇願するので、デウスのことやキリストの教えについて幾らか語つたところ、彼はたちまち心を動かされ、深い熱情とともにキリストとなることを望み、彼が自ら語るには、それ以後、父母に教わつた偶像崇拜、その他これに関わる諸々の行ないをいっさい止めたとのことである。また右の願いがますます強くなつたので、さつそく、かの娘から祈禱をすべて学び、これを暗記するために書き取り、密かに我らの主なるキリストならびに聖母の像、祈禱用のコンタツおよび携帯用の祝別されたコンタツ、その他キリストたちが信仰のために所持する品々を集め、自室で絶えず祈りを捧げ、洗礼を授けるように我らの主が導き給わ

んことを請うた。

この頃、父は彼を國主の姪と緒婚させたが、彼女もまた異教徒であり、キリストの女性を乳母としていた。

この（乳母なる）婦人は彼の信心を知つたので、その善き望みを堅固にしよう、能うる限り努力し、彼と語り、デウスについて知る限りのことを教えた。これは彼の信心と決意をいつそう堅固なものとし、こうしてこの六年間、変わらぬ信心をいまだに持している。そして彼の父母や、とりわけ同國でもっとも邪悪な偶像崇拜者で國土の大半を治める祖父（豊後の世子は実父よりも彼をいつそう尊び、かつ服従している）が日々、いかに彼を思い止まらせ、その志を棄てさせようと努めても（これを得ることは）できなかつた。彼には父の兄弟になる伯叔父が一人いて、豊後でもっとも善良なキリストの一人であつたが、彼はこの人物にたびたび書状を認めた。これらの書状はデウスの教えをほとんど何も知らぬ異教徒のものとは思われず、修道者の書状のようなものであつた。

彼は豊後で第二の家を継ぐのであるから、比べるまでもなく右の伯叔父より身分が高かつたにもかかわらず、書状の中で彼は伯叔父に対し、洗礼を受けてキリストをして自由に生きるため、彼を家臣としてその邸内に置くよう請い、もしこれを承諾するならば、即刻、己れの所領と家をすべて棄て彼の保護下に入るであろうと言つたが、伯叔父は司祭たちの助言によつて、彼の望みはかならずや達せられるであろうから、辛抱して我らの主が他の手段を定め給うまで待つようにと返答した。この伯叔父は、或る時、兄弟を訪問するため、その所領に赴いたが、伯叔父は司祭たちの助言によつて、彼の望みはかならずや達せられるであろうから、辛抱して我らの主が他の手段を定め給うまで待つようにと返答した。この伯叔父が、彼の両親は（伯叔父が）キリストであるため彼に勧めて受洗の望みをいつそう固くすることを危ぶみ、（伯叔父が）彼と語ることを決して認めようとはしなかつた。

少年はその望みが強いだけに、デウスのことについて伯叔父と語る機会を逸することが我慢ならず、夜間に家中の者が寝入った後、彼と語るために出向いた。伯叔父はそこからほぼ一里の所に住んでおり、道中、はなはだ難儀な川を二つ越え、夜の残り（の時間）をデウスのこと、ならびに良心について語った。これに關して相当学んでいた伯叔父は彼を助けることを大いに望み、自ら進んで聖人や殉教者の生涯について多くの話を聞かせ、これによつて彼（の心）を日に日に燃えたたせていた。夜の大半をこれに費やした後、明け方に（家の）人々が起き出す前に帰つたが、伯叔父が同所にいる間は終始これを続け、一夜として途切れることがなかつた。

伯叔父が帰つてから数日後、彼の父は他の重立つた大身たちと共に或る重要な問題を世子と協議するため政庁に赴かねばならなくなり、（この際）子を伴つて祖母である老國主の奥方を訪ねることとなつた。この好機は彼にとっていとも喜ぶべきことであり、他の武士たちと共に約二百名の家臣を率いて臼杵の教会に赴いた。彼は教会を見物に来たかのように、上辺はきわめて冷静ながら、胸中は（希望に）燃えていた。司祭と修道士たちは彼の身分に応じたもてなしをしたが彼は家臣の前ではあまり謝意を表わさず、帰宅すると一通の書状を伯叔父に送り、彼がぜひとも洗礼を希望していること、ならびに、それがため彼の身に生ずるいかなる艱難にも耐える覚悟であることを教会に行つて伝えるよう請い、また、司祭たちの慈愛を知つて感激するあまり、教会を出て家に着くまでの間、溢れる涙を抑えることができなかつたので授洗を求めるのであり、父から妨害されぬため何時でも密かに伯叔父の許を訪れるであろうし、洗礼を受けた後はこれがため生命を棄てる覚悟であるから親戚一同の怒りを

少しも意に介さぬことをしかと御承知おき願いたいと述べた。これに對して教会は、まず順を追つてデウスのことを聽聞することに可能な限り努めよ、これらを学んだ後でなければ何びとも洗礼を授けないしきたりであると返答した。同夜はたいそう雪が降つたが、彼は諸人が就寝した後、己れの決心を告げた唯一人の家臣を供として暗がりを教会へと出向いた。我が臼杵の教会には夜の十時に到着し、夜半後の四時までデウスのことを聴き、少しも眠らずこれについて語つた。一修道士がデウスについて語つたことを（聴いて）ただ歓喜したというだけで、彼がかくも機敏に終夜（聴聞を）続けるのを見て司祭や修道士たちは驚いた。また、司祭らがいつそ驚いたことに、彼を歓迎するため同所に日本人が非常に喜ぶ絵画や織物を多數準備し、時折、クラボを弾いて厳しい寒さを凌がせようとしたが、彼は一度たりとも絵画を見るため向き直ることも、また顔を動かしてクラボに耳を傾けることもせず、むしろデウスのことや靈魂の本質、数多の栄光なることを聞き、質問することに夢中で、デウスが御恵みを垂れて彼をかかる熱情のうちに燃えたたせ給うていることが認められた。四時になって彼に勧めて帰宅させることは難しく、司祭たちが再三、説得して帰らせなかつたならば、夜が明けるまで留まつていたであろう。彼はふたたび來訪して残りの話を聴き、合わせて洗礼を受ける決心をして去つて行つた。日中は彼の小姓たちが厳重に監視しているので公然と（教会に）来ることができず、可能な時になるだけ書状を教会に書き送ることで自ら慰めていた。

（中略）

彼がかの城下に滯在した間、彼に対する警戒がはなはだしく絶えず番人らに囲まれていたので、昼夜ともに家

少しも意に介さぬことをしかと御承知おき願いたいと述べた。これに對して教会は、まず順を追つてデウスのことを聽聞することに可能な限り努めよ、これらを学んだ後でなければ何びとも洗礼を授けないしきたりであると返答した。同夜はたいそう雪が降つたが、彼は諸人が就寝した後、己れの決心を告げた唯一人の家臣を供として暗がりを教会へと出向いた。我が臼杵の教会には夜の十時に到着し、夜半後の四時までデウスのことを聴き、少しも眠らずこれについて語つた。一修道士がデウスについて語つたことを（聴いて）ただ歓喜したというだけで、彼がかくも機敏に終夜（聴聞を）続けるのを見て司祭や修道士たちは驚いた。また、司祭らがいつそ驚いたことは、彼を歓迎するため同所に日本人が非常に喜ぶ絵画や織物を多數準備し、時折、クラボを弾いて厳しい寒さを凌がせようとしたが、彼は一度たりとも絵画を見るため向き直ることも、また顔を動かしてクラボに耳を傾けることもせず、むしろデウスのことや靈魂の本質、数多の栄光なることを聞き、質問することに夢中で、デウスが御恵みを垂れて彼をかかる熱情のうちに燃えたたせ給うていることが認められた。四時になって彼に勧めて帰宅させることは難しく、司祭たちが再三、説得して帰らせなかつたならば、夜が明けるまで留まつていたであろう。彼はふたたび來訪して残りの話を聴き、合わせて洗礼を受ける決心をして去つて行つた。日中は彼の小姓たちが厳重に監視しているので公然と（教会に）来ることができず、可能な時になるだけ書状を教会に書き送ることで自ら慰めていた。

国主フランシスコは生来、はなはだ虚弱な体質であり、また老齢でたびたび病に罹つてゐるので、彼の寿命に対する我らの希望は漸時薄らいで來ている。彼は信仰および修行、改宗への熱意においては以前と変わりなく、生命の終末に近づくに従つて、ますます己れの功德の元となりうる手段を種々講じ、臼杵の修練院や、府内の学院にたびたび通い、（イエズス）会の各人の父であるかのように大いなる慈愛を示している。彼は絶えず諸聖儀と祈禱を自らの支えとし、榮えある聖フランシスコの過ぐる祝祭を終練院に建てた新しい教会において執り行なうことを望んだ。その教会は我らが日本に有する最良のもの一つで、木造であるにもかかわらず、およそ三千クルザードを費やした。莊厳なミサと説教が終わると、司祭、修道士および教会の少年たちをことごとく私邸に招き、大いに慈愛を示したので一同驚嘆した。

彼は「すでに通信したように」臼杵から三里の津久見と称する町に居住している。同所に、今新たに私用の立派な家数軒を建て、その邸内にミサに与るため美しい礼拝堂^{ラトリオ}、もしくは小聖堂^{カペラ}を設けた。老後の休息所として世

子（義統）から彼が居住している右の地方を譲り受けることを望み、世子が昨年、これを与えたところ、彼は同地の主人となつた翌日、さっそく、修道士二名を呼び、同地方にある三つの僧院の仏像をことごとく破壊し、一つ残らず焼き払うことを命じたので、これを実行した。また、己れの近くに住まわせて同地方の二千名を超えると思われる異教徒に説教させるため、副管区長師から司祭一名と修道士一名を得たが、彼らの一部はすでに洗礼を受け、他の人々は今、教えを授かっている。同地の仏僧たちには使者を介して慈悲深い言葉で語りかけ、彼がキリストとなつてゐるのだから、彼らもキリストとなるよう勧め、身を養うに足るだけのものを与えると伝えた。皆、これを諒承し、今では教化に与つてゐる。この町は平穏なので、現在、司祭一名と修道士一名が駐在する既述モスティナーニの小僧院には、豊後国の仏僧たちが一つの木箱を宝物として密かに蔵していた。この木箱の中には別の立派な箱があり、釈迦の経本九巻が納めてあつたが、いずれの経本も金の文字で書かれ、彼らの習慣に従つてはなはだ興味深く製本されていた。これらの経本は（仏僧たちが）同所に所持していた先達らの信頼しうる文書によれば、作られてから二百七十年を経ているが、いまだに新しいものに思われる。その内一巻はインドの管区長へ送るが、同所から（総長）貌下のもとへ送られ、仏僧らが宗旨の書物をいかに尊重しているかの理解に供するであろう。このほかに、十九枚の紙を納めた箱があり、それらの紙には彼らが非常に尊敬する釈迦の主なる十九名の弟子が描かれていた。世子がこの地方を父の国主に譲与すると、豊後の仏僧らはただちに世子のもとに行き、彼らが宝物を失うのみならず、最悪の場合、焼かれる恐れがあるため、右の書物と肖像が司祭たちの手に落ちる

前に急ぎ取り出すことを懇願した。世子はさっそく、國主の許に人を遣わして書物と肖像を請うことを命じたが、よき老（國主）フランシスコは事前に知つていたかのように、世子が右の使者を出すよりも早く修道士たちに伝言し、かの寺院の中で最初に取り除き、或いは焼却すべきは書物と肖像であることを伝えた。そしてこれはすでに実行されていて、世子にはその使者が遅かつた旨を答えた。このほかに國主は修道士一名を他の二つの町に派遣し、同地の家臣一同に説教させたが、これによつて四百名以上がキリストとなつた。

國主には「第三子になる」キリストの子（田原親盛）があり、名をパンタリアンといつて年齢は十六歳であったが、父の兄弟になる伯叔父（田原）親賢の嗣子となつた。その伯叔父は先年通信したように、養子としていたシメアンがキリストとなつたためこれを離縁した人物である。このドン・パンタリアンはキリストとなつてすでに四年を経ているが、その思慮深さと生来の良き資質によつて、また、とりわけ善きキリストであるために國主から非常に寵愛されている。この人については詳細に通信することができるが、（本書簡）簡略にするため、幾つかの事のみを語ろう。彼は臼杵から道程にして

四里離れた城にいて、彼の伯叔父が認めないため、わずかに四、五名のキリストの家臣が侍しているのみである。伯叔父が彼に対し強硬な妨害を働くに従つて彼の信仰はそのたびに堅固になつていくよう思われ、司祭や修道士たちにたびたび書状を送つて絶えず己れのためデウスに祈ることを願い、信仰に疊りないことについては、これを棄てるよりも死ぬ覚悟であるから疑いなきようとに講じてゐる。彼の求めによつて司祭一人がかの地戦さでことごとく死んだ後、異教徒の世子（義統）は多くのことをなさず、老（國主）が統治することを止めて

二六 一五八四年一月二十日付、長崎發信、 ルイス・フロイスの、アレシャンドロ・ヴァリニヤーノ宛書簡

豊後の戦さに関しては、國主フランシスコ（大友宗麟）が政治を離れ、彼の身分高く勇猛な家臣の大半が日向の戦さでことごとく死んだ後、異教徒の世子（義統）は多くのことをなさず、老（國主）が統治することを止めて

喜のあまり、昼夜、司祭から離れず、デウスが天より御使いを降し給うた思いがすると語つた。復活祭の日には多数の異教徒に囲まれていて城を出ることができなかつたので、彼はキリストの家臣を集めて祭壇をいとも立派に整え、一同長い時間祈りを捧げ、各人の頭に薔薇の冠を、また首にはコントラツを懸けさせた。その後、彼らに饗応し、貧者に食物を与えるよう命じた。近隣の身分の高い異教徒の貴人が彼の居城に来た時、貴人は己れにとつていつそう都合がよくなるものと考へて彼に黄金の屏風を贈つた。屏風は内側に木の枠を張つた紙を折り曲げたもので、日本人にとつては部屋の壁掛けのようなものである。その屏風には異教徒たちが喜ぶ下劣な絵が画かれてあつたので、彼は険しい顔をして贈物に気を留めぬ素振りをし、他の点では非常に豪華であつたが、ただちにこれを面前で焼却させ、使者にはキリストはこのように卑しむべきものを見ないと言つた。彼は家臣がキリストとなることを非常に望んでおり、デウスの御恵みによつて彼らの絶対君主となつたならば、彼らが洗礼を受けることは間違いないと我らは信じてゐる。

からは諸事は衰退へと向かつたが、家臣の（世）子に対する尊敬と所為のいっさいはひたすら父（たる老国主）を愛するがためである。十月、豊後の軍勢は出陣し、彼に背いた家臣の秋月（氏）を攻めに行くと見せて、ほぼ國中が叛起している豊前國へ矛先を転じた。そこで軍勢を二手に分け、その一方の主将は同國の殿で名を野中殿といい、三千の兵を率いた。彼は敵の城の一つを攻め、二度にわたつて攻撃したが、何ら得るところがなかつた。彼は己れの手勢によつて城を攻略することを自ら申し出で、豊後の（もう一方の）軍勢を豊前に向かわせていたので大いに悔み心を痛めていた。國主の第二子が將を務める豊後の軍勢は件の城から道程にして二日の所に在つたが、彼の許に援軍を差し向け、これには豊後でもっとも勇敢な武将の一人であるリイノ（柴田礼能）が加わつていた。彼は到着するとただちに城に侵入して武力でこれを奪うか、或いは城壁の下で戦死することを申し出た。夜明け前にリイノは兵を率いて數人の敵がいた強固な前砦を襲つてこれを破り、城の近くに来ると、わずか四、五名のみを伴つて堀に掛かる橋を渡り城門に達した。多数（の敵）が槍を手に駆けつけ、彼と共にいた二人を殺した。彼は退くことを望まず執拗に内へ入ろうとしたところ、（敵の）槍が彼の目の人下を突いたので地に倒れたが、家臣たちが彼を無理矢理に抱えて陣営に連れ帰つた。異教徒の主将野中殿はリイノが己れにとつて友人でもあつたがため、負傷した彼を見て怒り、リイノが我がために傷ついたのであるから、その復讐をすべきであると言つて城を四方から攻めることを命じた。城を激しく攻めてたちまち城内に侵入し、守備に就いていた兵士二百名、および婦女子全員を殺し、一人として生かしてはおかなかつた。豊後勢では二十名余りが死に、その中には由布

ならびに玖珠地方のキリストン三名が（含まれていた）。

リイノはこれによつて大いに名を高めた。

右の城を陥落させた後、彼らはさらに六乃至七カ所の小城を抵抗に遭うことなく奪つた。全軍が一団となり、昨年、豊後の國主の義兄弟である親堅（おとし）が殺したカリブ（Calibu.J.S.Ca·:ibu）殿と称する殿の領地に向かつた。

この殿の家臣たちが彼の幼い一子と共にふたたび豊後に對して反旗を翻したのである。彼らはよく補修された城を構え、必要な軍需品を十分に備えていたが、豊後軍は一万五千名を超えていたので、城を四方から激しく攻め、ついには侵入して城に放火し、城内にいた者を全員殺害し、その中には殿の兄弟のロレンソ（がいた）。彼は一方の腿に銃創を受け、弾は内に残したままであつた。このようにして彼らは豊後に戻つた。以上は豊後に關することである。

一七一 一五八四年九月三日付、長崎発信、 ルイス・フロイスの、イエズス会総 長宛、一五八四年度・日本年報

白杵は世子（義統）が政庁と共に居を構えているところなので、國主フランシスコ（宗麟）は世子および國の大身たちの心を動かすには同所で諸聖務を行なうのが良いと考え（たので）、修練院長は修道士たちと共に聖柩を造ることを引き受け、國主は信心から、日本人が殊に信仰する聖土曜日の聖水盤を（造ることとした。）國主が同所に建てた新しい教会ははなはだ大きかつたにもかかわらず、枝の日曜日にはあまりにも多數が參集したので國

主はより大きな教会を造らせなかつたことを悔やんだほどである。前日の土曜日は、彼の奥方と娘たちを聖週の間、白杵に滯在させるため同所から二里の津久見から呼び寄せた。暗黒の勤めはできる限り整然と行なわれ、聖木曜日に至つて、キリストを葬る（場面）では墓が姿を現わしたが、これは今日まで日本で作られたものの中ではもつとも豪華かつ一見に値するものであり、日本人は驚嘆して目を離すことができなかつた。墓は礼拝所全体を占めるほど大きく、その造りは正方形でいつも高く均整もよくとれている。シウバラ（siubara）と称する紙で作つたはなはだ白い金剛石と、同じく紙で作つた碧のような石をすべて格子状に並べ、シナの黄金を散らし、六本の金を塗つた眩い柱の上に据えてあつた。正面はすべて白および碧玉色の金を散らした平らな石で、また礼拝所の両側は碧玉でできていた。祭壇の上には同じ細工のアーチが設けてあり、祭壇とキリストを納めた輿は建物の中でも中心となるべきものなので非常によく裝飾が施され、その上礼拝所の周囲には非常に豪華な屏風が廻してあつた。國主は大いに歓喜して夢中になるあまり、少しも聖器室から出ず、司祭や修道士たちと親しく語らつていた。

（中略）

國主の第三子で、十七歳くらいのドン・パンタリアン

は聖週の間、告白をしミサに与るため司祭一人を己れの城に置くことを請うた。彼は先年離縁したシメアンの代りにイザベルの兄弟である親賢が養子とした人である。この青年はデウスのことに大いなる信心と熱情を注いでいるので父の國主フランシスコから非常に愛されているが、暴君親賢の度重なる激しい反対に耐えつつ、迫害を受けるごとにその信仰と徳行はますます深くなつていつ

た。親賢は彼に自らの娘を娶らせたが、彼女がキリストになることを決して認めず、娘もまた父の機嫌を損なわぬようキリストになる希望を示さなかつた。しかし、パンタリアンは彼女を説得し、ペドウロ・ゴーメス師の許に使者を遣わして彼女に洗礼を授けるため来訪することを請うたので親賢は少しも喜ばなかつたが、司祭はその通りに実行した。

日本人修道士がパンタリアンの城で説教をしていた時に、豊後国の大身の一人の兄弟になる貴人が偶然そこに居合わせた。彼は名を式部殿といつたが、説教をすべて聞き終えると洗礼を受け、バスクアンと名付けられた。翌日、彼はペドウロ・ゴーメス師と日本人修道士一人を伴つて家に帰り、ただちに妻と家族、および家中の者全員に説教を聽かせ、およそ八十名が聖なる洗礼を受けた。

また、パンタリアンの城では、偶然彼を訪ねて来た別の青年貴族がキリストとなつた。すなわち、シメアンと称するこの青年は説教を聴いて奮い立ち、偶像崇拜において自分が行なつた数々の誤りを恥じ、以下のように行為を改めることとした。受洗後、彼は帰宅せずただちに自領の町や村々に向かい、そこにあるすべての寺院に放火した。突然のことであつたために、仏僧も俗人も驚いた。彼の父の兄弟であり、また、彼の家臣でもある人の寺院が領内にあつたが、ここに到ると彼は伯叔父の許に人を遣わし、自分はすでにキリストであり、領内では神・仏に關わる愚行をいつさい認めず、同寺院は伯叔父のもの故、自分が手を下すことは望まぬが、伯叔父が自ら命じて焼き払うことを請うと伝えた。伯叔父はあえて

これに答へず、むしろ異教徒の親戚や兵士たちと共に寺院を守ろうとした。シメアンは大いに憤つたので、寺院を焼くよりも伯叔父を殺すことを望み、かならずやその首を斬るであろうと言つた。その老人は偶像崇拜の保護者である親賢の許に行き、事の次第を報告した。問題は親賢の子から神・仏を守ることであったので、ただちに老人を保護下に置き、怖れるには及ばず、彼自らが守るであろうと言つた。しかし、青年は彼を殺す決心を枉げず、親賢は約束していたので彼を守ろうとした。親賢の婿パンタリアンは事が信仰に関わることであつたため青年に好意を寄せ、右の問題においては情を棄て、道理によつて身を処すべきであり、もしその上で何らかの危険が降り懸かつたならば、彼は生命を賭して防ぐであろうとシメアンに伝言した。

このような情況の下、ペドウロ・ゴーメス師はパンタリアンが守将を務める妙見の城に到着したが、幾つかの然るべき理由により、彼に書状をもつて助言する以外、おいて自分が行なつた数々の誤りを恥じ、以下のように行為を改めることとした。受洗後、彼は帰宅せずただちに自領の町や村々に向かい、そこにあるすべての寺院に放火した。突然のことであつたために、仏僧も俗人も驚いた。彼の父の兄弟であり、また、彼の家臣でもある人の寺院が領内にあつたが、ここに到ると彼は伯叔父の許に人を遣わし、自分はすでにキリストであり、領内では神・仏に關わる愚行をいつさい認めず、同寺院は伯叔父のもの故、自分が手を下すことは望まぬが、伯叔父が自ら命じて焼き払うことを請うと伝えた。伯叔父はあえて

（中略）
布教事業は次のような熱意のもとに進められていたが、これは悪魔にとってこの上ない悲痛であつたので悪魔はふたたび布教事業を完全とはゆかぬまでも、せめて多少なりとも妨げようとして新たに一計を案じた。修道士ジョンが、当時、戦さに向かう道中にあつた世子をオエイリ(Oeyri)の邸に訪ねた時、キリスト宗団の諸事について長く語つたが、世子は豊後国内では望む者をキリストとなす許可を与えたが、これは或る制約を設けた上でのことであつたと言い、その制約とは四種の人、すなわち、彼の顧問である老中、国の執政官のような國衆、重立つた貴人であるダルメアス(Darimeas)、および政府に仕える者を除外することであり、特に世子は、既述の通り、聴聞に与りながら仏僧たちが憤激して領内に騒乱が生じたため受洗を断念した朽網殿を挙げ、また、世子の親戚で、イザベルの孫であり、豊後第二の家の嗣子で、七年來キリストとなることを切望している人(の名)を挙げた。修道士はこれを聞くとすぐさま答えて、世子が今述べた制約は初耳であり、先般、寛大なる態度で一度は口にしたこと撤回したと人は見るから、国内において非難を招かずにはおかぬであろう。もし、殿下が舉

彼の一子に与えることが取り決められ、これはその通り実行された。その後、司祭はシメアンがおよそ二千名の臣民をキリストにする切望しているとの知らせを得たが、目下のところ、働き手の不足によりこれに応ずることができない。シメアンは信仰に関わることにいつも熱心であり、世子が(信仰に)反する命令を彼に下すとしても、すでに説教を聴いた今となつてはかならずや聖なる洗礼を受けるであろうと語るほどであつたが、事実、彼は(洗礼を)受けた。

げた四種の人たちの側から洗礼を求められた時は、たとえ（イエズス）会員の身にいかなる害が及ぶとも教会はキリスト教の習慣に従つて洗礼を授ける義務があると述べた。世子はこれに対し、温和な態度で、教会が宗教のためせねばならぬことを妨げはしないが、今は右の人々に（汝らが）進んで説得しても無駄なことであろう、と言つた。これを知った国主フランシスコは世子に対して大いに憤慨し、布教事業が同国において進展するか、あるいは己れが國を追われて二度と帰らぬかのいずれかであると公言した。しかし、世子は父の直接の庇護と援助を大いに必要としているため、またキリストン宗団が今や豊後国に深く根を張つてゐるので、世子は父との断絶を望まず、大身たちが洗礼を受けぬよう勧告することもないようと思われる。

二一八 一五八五年八月二十日付、長崎発信、

ルイス・フロイスの、イエズス会総
長宛書簡

がいなかつた。このことが市に伝わり始めたため、彼の家臣が教理を聴きに教会に来て少しずつ洗礼を受け、祈禱文を書いて持ち帰つた。国主は知らぬ振りをしてドン・パウロにその家臣をキリストンにするよう伝言を送つた。というのは彼の祖父はデウスの教えの大なる敵であり、

そのため国主フランシスコに嫌われ、この国の岬にある宇目(F.Vme)の砦に追放されたままであるが、国主がわざとこういう伝言をすれば、孫が祖父の意向を聞くだろからであるが、はたしてその通りになり、そして祖父は、憎悪を感じながら、汝は國主の命令通りにせざるを得ないだらう、と答えた。
(中略)

この時彼の祖父道輝は、國の岬にある宇目の砦を防衛しており、薩摩との戦さの懸念があつた。そこへドン・パウロは、四、五回使者を派遣し、祖父が嫡子に自分を中傷したことで非常に傷つけられたことを明らかにし、また祖父のような近い親類は、子孫がより繁栄するため、その世代を引き立て支援するのがどこの世界でも共通の慣習である。したがつて祖父のように老齢で経験豊かな者が、そのまつたく逆のことをするには理解できない、と言つた。そして、今祖父と話したい重要なことがあるので、御足労ではあるが、何かが生じ、その後では取り返しがつかなくなる前に、志賀まで来られるよう希望す
といふのは皆がドン・パウロはキリストンだとすでに言つており、彼の父もそのことにすでに同意しているので、嫡子がこれを知つた時、異常な言動をとらないためである。ドン・パウロは、國主の勧めで、彼がキリストンになる許可をくれるよう、嫡子に使いを出すことを決心した。彼は長年の間キリストンになることを望んでいたからである。しかしこの伝言をあえて嫡子に伝えに行く者

二九

一五八五年十一月十三日付、長崎発信、

ルイス・フロイスの、イエズス会総

長宛書簡

この間、豊後では、惡魔が國主フランシスコの娘の一人に地獄を見させようとする事件が起つたが、彼女が救われるための最良の手段を見つけたため、失敗することとなつた。他の年報で述べたとおり、嫡子には國主フランシスコとイザベルの間の娘で、二十歳を超えた妹が二人おり、今までイザベルの所にいた。嫡子は、若い方の妹を結婚させようと思っていたが、彼女は性格が違うとして結婚に同意せず、このことで嫡子は大いにいらだつていた。嫡子は、治療のため臼杵に来て、妹たちがいた部屋に入り、若い妹の方へ刀に手を掛けて、ずかずかと近づき、彼女を殺さんばかりの怒りの形相をみせた。母と他の女たちが助けに入り、ひとまずことを収めた。この時ちょうど國主フランシスコが臼杵に來ていたので、嫡子の脅しを受けたその妹は、夜になると御殿のすべての侍女を連れて、密かに抜け出し、日本では大きな悲しみを表わす（行為として）髪を切つて、父の所に匿つてもらひに來た。そして夜半近くになると姉の方もまた父の所へ來、こんな道理にかなわず、無分別で根拠もなく本当とも思われない事で嫡子が妹を殺そうとするからには、同じ事を自分にもするかも知れない。だから一人とも國主のもとに置いてほしいと、しきりに頼んだ。國主もそうしたいと思ったが、同時に慎重で、理性的だつたので、娘の胸中の不安をなだめ、嫡子が気付く前に、すぐ元の御殿に帰るようにさせた。イザベルも自分の息子の嫡子がその妹に対し、きつく当つたことをひどく悲し

み、御殿から出たいそぶりを見せたが、これも娘たちと行動を共にしたり、キリストになるほどではなかつた。朝になると、国主はその下の娘を、自分がジュリアといつしょに住み同人との間に別の二人の幼いキリストの娘をもうけている津久見に送り、すぐ改宗するよう命じた。彼女は長い間キリストになることを望んでいたので、この機会を喜び、キリスト変貌の祝日に、ペロ・ゴーメス師が同地に行つて洗礼を受け、ドナ・マセンシアと名付け、また彼女に仕えていた女性たちにも洗礼を受けた。

國主の嫡子は、戦さに戻る前に、妹のドナ・マセンシアと和解し、以前の親しみを取りもどしてから出発した。彼女は父の國主フランシスコの庇護や、彼女に良くしてくれた夫人ジュリアやキリストである家族の人々との接觸から離れなくてすむよう、國主フランシスコに、しきりに懇請し、全員が異教徒で、彼女の母もデウスの教えに強く反対している御殿に戻ることの不都合を申し立て、デウスの教えに従つて生きられるよう願い出た。しかし幾つかの重要な問題点があつたので、國主フランシスコは、彼女が戻つた方が良いと判断し、彼女が言い出した機会をとらえて、洗礼を受けた際すでに誓つた信仰を保つよう懇々と言つてきかせた。彼女は、父の言うことを涙をためて聞き、ただ次のように答えた。「これからかかる場合でも通れなくした。某日、老人は用心していなかつた時に、薩摩の國主の弟が大軍を率いて豊後に入るとすぐその城を攻めに來るとの報せ「これは故意にお見せする私の体の印が消えてしまつたと殿が知るような時がもし来れば、その時は私の心から信仰も消えたと疑われても結構です」と言つて寝所に引きこもり小刀を取りつて左腕に、日本文字でデウス、マリア、さらに端に十字架を彫り、その傷に少し墨をさした。そして立ち去る前に、彼女の信仰を保証するものとして、父にその腕を見せた。そこから、ドナ・マセンシアは駕籠に乗つて

多くの人と出立し、夫人のジュリアは歩いて、また幼い姉妹らは女たちに抱かれて約半里見送つてから引き返した。父の國主は、津久見から臼杵まで三里も見送り、臼杵の御殿にマセンシアを残して去つた。異教徒の姉の方も、以前からキリストになろうという良い望みを持つていたが、マセンシアがデウスの教えとキリストの良い行ないについて聞いて来たことを語つたため、またマセンシア自身が姉に祈りを教えたことが加わり、この姉も機会を見て洗礼を受けることを決心した。

(中略)

二ヵ月くらい前に豊後で生じた或る出来事は、それに次いで起つた皆が賛嘆するすばらしい出来事に比べれば、異教徒にとっては恥辱であり、キリストにとつては馬鹿げたことであつた。國主の嫡子は、ドン・パウロの祖父を豊後と日向の国境にある宇目と呼ばれる国境の城に配置したが、この者は既述の通り豊後における我らの最大の敵の一人である。この老人は頑健であつたが、実際難攻不落の所にある城の位置も信頼できず、山の峰を通る狭い道を數カ所、人力で切り崩させた。これで敵が攻めて来た場合、長くとどまつて修理しなくては、いかななる場合でも通れなくした。某日、老人は用心していなかつた時に、薩摩の國主の弟が大軍を率いて豊後に入ると、彼は多大の恐怖にとりつかれ、部下と協議もせずに突然逃げ出し、婦女子が後に続いた。彼に伴う部下がないのを振り返つて見もせずに、五里は止まることもなかつたが、そこに至つてもまだ安全とは考えなかつた。そしてあまりに急いでいたので、先の所に沢山持つていだ身のまわりの品を風呂敷に包む暇もなかつた。これは

そこに住んでいた貧しい異教徒たちが、残された品々で彼らの必要性を満たそうとしたのを、デウスが嘉し給うたように思われる。

このことが豊後に伝わって、不信感が加わり、嫡子が國の入口の防壁として城に配置した老人の憶病さが知れたが、これはすぐ彼の孫のドン・パウロの耳に達した。ドン・パウロには、数日前嫡子が彼に対して行なつた理不尽と不正を憤る理由があつたが、それ以上にデウスに仕え、キリスト宗団に良かれと願う気持が強いのと、彼の血の高貴さにより、全精力を傾注して、またたく間に、家臣三千から四千名を集め、彼の祖父が捨てた城に立てこもりに行つた。そこに着くと、老人が切り崩させた道に小石を埋めて修復させ、薩摩の者と共に、彼を自由に攻め昇れる橋と本格的な道を作つてやりたかっただけだと言つた。そしてその城に家臣と共に今日まで留まつているが、これが彼の名声をさらに高め、嫡子も彼をそのことで称賛こそしないが、ドン・パウロが特にまだ若輩であることから、火急の場合にそのような思慮を示すとは期待していなかつたものである。我ら司祭や修道士たちが、たびたびそこを訪れているが、これは彼がこれらの人々との話し合いによつて大いに励まされるためである。そして薩摩の兵は、この一件を知つたが、知らぬ振りをし、たとえそこを通つて攻め入ることを決めたとしても、そのような素振りも見せず、まだそういうことを決めていな振りをしている。

三〇 一五八六年十月二日付、白杵發信、

ペロ・ゴーメスの、アレシャンドウ
ロ（・ヴァリニヤー）宛書簡

豊後國主の息子、親盛は、名をパンタリアンと称するが、（田原）親賢（* Micaçata F. Chicacata）が隠居^{イシキヨ}となつたので、妙見の家をすでに継いでおり、すぐ重立つた者をキリシタンにした。そして今数千の人を持つ彼の領地^{リョウチ}の人がすべてキリシタンになろうとしている。

一一 一五八六年十月十七日付、下関發信、

ルイス・フロイスの、アレシャンドウ
ロ・ヴァリニヤー宛書簡

豊後に向けて、ここを出発し、修練院がある白杵に着いた。そこの司祭や修道士たちが長年の間待っていた副管区長と伴侶の人々の到着を迎えて、彼らの慰めと喜びは大きかった。各地から、ちよつとした贈物を携えて副管区長師を訪ねてくるキリシタンの数があまりにも多かつたので、まる一日を費やしてようやく全員に会い、もとより励ましを与えることができたが、特に遠くから来た人たちにとってはそうであった。二日後、副管区長師は、津久見「そこから三里の所」に、國主フランシスコとその奥方および子供たちを訪問するために行き、その後で白杵の城に嫡子を訪ねた。

我らの主は、嫡子の母イザベルの今までの魔力を断ち切る役目を、副管区長師のため保留することを嘉し給う

た。イザベルといつしょに御殿に住んでいた二人の娘、一人はマセンシアと呼ばれもう一人は未だキリシタンではないこの娘が、母に司祭の訪問を受けたいとしきりに頼んだので、ついにあきらめて了承せざるを得なくなつた。副管区長師は、ペロ・ゴーメス師と、ルイス・フロ

イス師、幾人かの日本人修道士やポルトガル人を連れて、まず嫡子を訪問した後、イザベルの所も訪問した。彼女は、二人の娘と共に、鍍金した座敷^{ザンショ}で司祭を迎えた。その数日後、副管区長が豊後から出発する際、一度は人を遣し、また贈物を届けて來た。このようにデウスは、ダイヤモンドのような硬い心も柔らげるほど強力だからである。夫人の家には、身分の高い六十人ほどのキリシタンの女性があり、その大半分は、彼女の娘マセンシアに仕えていたが、その他の者は彼女に仕えていた。夫人のデウスの教えに対する憎悪は、以前は極めて強く根深かったので、自分の邸でロザリオを持った女性を見ると、体面を忘れて、その者からロザリオをひつたくて火中に投げ込んでいた。が、今は皆の者が、夫人の前でロザリオを持ち、祈り、また日曜、および祝日には、ミサを聴きに行くキリシタンの女性に対し、夫人はデウスの掟を守るために働くかのようにとさらになづきになり、彼女が自分に適した方法で自ら救われるかどうか試してみると、第三者を通じ話してみたところ、夫人は、八幡^{ハチマン}「これは豊後で非常に崇拜されている戦さの神である」の家の出なので、キリシタンになることはできないが、今は前よりすでに物判りが良くなっているので、我らの主が、我らの良き原理に、良い結果を与え給うであろうと信ずる旨回答してきた。

三一 一五八八年二月二十日付、有馬發信、

ルイス・フロイスの、イエズス会總長宛書簡（一五八七年度日本年報）

これらの者は、互いに、また薩摩の國主とも同盟したので、すぐ他の殿や國衆を味方にし、日向の敗北後、突然豊後に敵対して決起して各地で戦さを起こした。薩摩は肥後に對しては数人の國衆を味方にし、竜造寺は境を接した筑後の国で、また秋月は筑前の国を大いに圧迫し始めた。豊後の國主は日向における大敗のため、このよう多くの方を防衛する兵力が足りなくなつたのみならず、豊後の国内においても「彼がキリシタンになつたため」大きな迫害を受け、多くの人が、このために彼の軍が壊滅し、命からがら逃げて何もしなかつたのだと云つた。事態がこのように變つて行つたので、豊後の国内においてさえ、二、三の大身が彼に叛いて激しい戦いを始めたので、彼はほとんど全てのものを失い、国外に放逐されそうになつた。しかし國主フランシスコは思慮深さと知恵で豊後の事態を収め、敵の頭が死に、二年間の戦さの末、その息子のために豊後の国全体を服従させることができた。しかしこの間、他の国々では、敵が大いに優勢を占めた。國主は、自分の国内でなすべきことが多く、助けに行けなかつたため、竜造寺は筑後の領主となり、また肥前の幾人かの國衆を従え、秋月は筑前全体のかの城が残るのみとなつた。薩摩の國主は、肥後の國は各方面から圧迫を受けた。竜造寺は筑後の領主になる

とすぐ、肥前の国で大村や有馬に対し戦さをしかけたが、すでに強大となつてゐたため、短期間に肥前の国衆たちのほとんどが彼の側についてしまい、結局大村も無理矢理か、又は自發的か服従することになった。その後、有馬もその領地の大部分がとられ、ほとんど服従した。戦いが各地で行なわれていつたため、（竜造寺は）肥後の国にも侵入し始め、そのことから彼と薩摩の国主の間に不和が生じ始めた。竜造寺が有馬を完全に滅ぼそうと決心し、大軍を差し向けていたところ、有馬は薩摩側につくと宣言した。そこで薩摩の国主は竜造寺に対する抗争の助けるため多数の兵を送つたが、三年前に書き送つたとおり、竜造寺自身が有馬との戦さに出陣した。我らの主のおかげで彼の軍は壊滅し彼も死に、ドン・プロタジオは彼から免れた。しかし、力の強い者たちは、応々にして他の者を助けるという名目で、できればその地の領主となるのが常であり、有馬の国主がこの勝利を得られたのも薩摩の国主「彼より強力である」の助けがあつたからで、彼はそのため一種の従属をすることとなつた。薩摩は、有馬の喉元を押える二城を有馬から没収することになり、そこに薩摩の守備兵を置いた。竜造寺の敗北と死去により、その息子は滅亡に瀕し、薩摩が短期間のうちに圧倒的勢力となつたので、その息子は薩摩の臣下として、わざかに最初の領地を残すのみとなつた。薩摩の国主は、肥後、肥前、および筑後の絶対的領主となつて行き、秋月も彼の側についたので、筑前・豊前の国々もほとんど彼に従い、残るところは幾つかの城と豊後の国のみとなつた。そこで八六年の書簡で報じた通り、彼はすでに八ヵ国（の領主となつて、後は豊後の国を滅ぼそうとしているだけであった。豊後は非常に弱体化し、立ち直る見込みもほとんどなく、薩摩の軍が豊後に攻め入れば、数人の領

主が立つて薩摩の軍を導き入れ、豊後の国主はどうすることもできないであろうと考えられてゐた。このため国王フランシスコは、自ら都に赴き、関白殿に薩摩に対抗する助けを求めた。関白殿はかの九ヵ国を自分の意見によつて分割し、彼らの間を調停しようと試みたが、薩摩について意図していたもの〔元にもどそうとしていた〕が達成できなかつたので、単に豊後の国主を助けるだけではなく、彼自らが大軍を率いて薩摩の国主と秋月を滅ぼそうと出陣を決めた。

（中略）

仙石は、少数の兵をもつて豊後に入つたため、助けになるどころかまったく壊滅されてしまつた。というのは守るために十分な兵も連れて来ず、豊後の危機に備えるに適した方策も慎重さも持たず、むしろ自ら放縱な生活をし、嫡子に薩摩は来ないに違いない〔すでに豊後に来ていて了のに〕と保証し、自分の兵に好き勝手にさせ、豊後の本来の敵より、豊後に害を与えたのである。嫡子は彼を信用し、彼の欲する以外の何事もせず、また老国主も、豊後はすでに安全になつてゐると見て、冬は津久見で休養するため「臼杵の城から二里の所」、奥方と家族を伴つて引き込んだ。他方小寺官兵衛殿は、より大きい兵力と慎重さや努力をもつて豊前の国に入り、短期間で数々の勝利をあげて、城を占領し、その国（のほとんど全）を屈服させ、その後筑前の国にも入つて秋月と戦つた。この勇敢な武将が来たことは、薩摩を大いに牽制しただけでなく、後に関白殿が薩摩に対し勝者となることに貢献した。しかし彼は寛大で、キリスト教の熱意を示し、同地にいた間悪魔に対しても、それに劣らず戦い靈魂の改宗に努めた。諸国を征服する際、下関の港〔ここは山口の国主の地である〕に着き、そこから毛利殿に兵を送る

よう要請していたところ、副管区長師がその下関の港にいるのを見た。というのは前の書簡で報じた通り同司祭は豊後を訪れた後であつたが、同地での労苦が多く、困窮しているのを見て、（イエズス）会の司祭や修道士たちで、修練院や、豊後の学院やその他方々の司祭館にいる多くの人々に逃げ道〔薩摩がその王国を占領するようになつた場合〕を与えようと望んで、山口の国主の国々に幾つかの司祭館を根気よく探してた。最初の司祭館は、この住み易く都や西国の九ヵ国への便が良い下関の港に設けることを希望し、次にフランシスコ・ザビエル師やコスマ・デ・トルレス師の時代からのキリストンたちが絶えず派遣を求めていた山口の市に置くことを決め、さらに別の司祭館は、狭い海を距てて豊後と向かい合つてゐる伊予の国、そこは毛利殿の叔父でその全領地の全権を委ねられて管理している小早川殿の国であるが、そこに置こうと決めた。副管区長師は、何日も前からそれらの司祭館を設置しようと毛利殿だけでなく小早川殿とも交渉していたが、望んでいたような結果は、まったく得られなかつた。小寺官兵衛殿が下関に着き、この交渉を促進すると、数日の内に目的を達成し、望んでいた三ヵ所の司祭館だけでなく、司祭たちや聖教の大いなる布教のための基盤、端緒となる他の特権や特恵を獲得した。この偉大な武将は、先年天下人関白殿と山口の国々の領主毛利殿の間の和平交渉を仲介したため、毛利殿とその叔父から高く評価され愛されており、また今回は天下人より大きな権限を持つて派遣されて來てゐるので、毛利殿の兵はこの戦さで彼に仕えることになつていて、彼は山口の国主に対し望むことは何でも上から下まで命令することができた。副管区長師が、豊後の司祭たちの安全と我らの聖教の布教のため前記の三ヵ所の司祭館を設け

るべく希望を官兵衛殿に話すと、彼はこれに深く讃同して司祭のために、目標としていた三ヵ所の司祭館の件を交渉し、毛利殿と小早川殿と共に、それらの土地を永代にわたつて与え、領内の他の人たちが払つているすべての税を免除し、兵を宿泊させる義務も、日本の習慣によつて仏僧らにも課されている町内の役務さえも免除した。最後に、我らの主イエズス・キリストの捷を、その九王國で自由に弘め、望む者はキリストとなる許可を与えた。この後、その小寺は、自ら副管区長師を伴い、山口の国主の毛利殿を訪れて礼を述べさせたが、国主は武将への敬意から、副管区長師を申し分のない愛と敬意をもつて接遇した。このようにして三つの司祭館ができて、副管区長師はそこに幾人もの司祭を派遣し、彼らは皆厚遇と信頼を受けてそこに入り、すぐに快適な修道院に整え、キリスト宗団を作り始めた。特に山口の市には良い修道院を設けたが〔デウスの特別の摂理により〕、これは後に大いに役に立つた。

(小寺) 官兵衛殿が豊前において秋月と戦い、仙石殿は豊後の国で注意を怠つていた間、薩摩の国主と武将たちは眠つてはおらず、逆に豊後の幾人かの殿に書状を送つて交渉し、冬の真最中に仕事に取りかかることにし、兄弟の(島津)中務(家久)殿に軍勢の一部をつけて豊後に向けて進撃を命じた。肥後と境を接する豊後の一部から進入すると、その地の豊後の殿たちは密かにすでに話がついていてそこから入るべきことを知つていたのだが、これらの殿たちは手引きをした上、豊後の敵だと公言して、いつしよにその地を焼き払い破壊した。このよう敵は急に進入してきたので老国主も嫡子も共に窮地に立たされた。というのはすでに十二月であり〔日本では冬の嚴寒の折〕敵が彼ら二人のいる所まで到達するに

は数多くの城を通過しなければならない筈であるのと、また豊後に仙石がいる以上安全で、彼らは薩摩はもうこの国への進入を試みないと思つて用心を怠り、彼らの身の上に起つたことに何の懸念も持つてなかつたからである。そして豊後に敵が入つたと知つた直後には、すでに包囲されていた。老国主は臼杵に「そこに、やつとのことで立籠る時間があつた」、嫡子は府内においてである。この侵入はあまりに急であつたため、臼杵の近辺では人々は妻子とわずかの食物をもつて、やつと城に入る時間しかなかつた。臼杵の修練院にいた我らの司祭や修道士たちは「二十人を超えた」自分の背に幾つかの品を背負つただけで、海路又は陸路で城に入り、敵が襲つて来たため、多くの品物を修道院に残したままであつた。一方我らの主のお蔭で、百俵を超える米を城の中に運び込むことができ、「これが城の中に入れられた最大の糧食であつた」あの時多くの人々の必要を確保することができたのである。

敵は豊後に入つた時、志賀ドン・パウロ殿〔同国の主要な国衆の一人〕以外に抵抗する者を見出せなかつた。彼は二十二歳を少し超えた青年であり、三、四年前、我らの主のすばらしい呼びかけでこの地でキリストとなつた。この殿はキリストとして強力に豊後側につき、その証拠を自ら示した。というのは、彼の父、および叔父は、近隣の殿たちといつしよに薩摩側についたので、彼らも突然四方より囲まれ、その窮状を嫡子に知らせて、助勢を求めたが、「嫡子は助力できない」と答えたので、全力をもつて豊後の各地を支える決心をして多大の努力と思慮を示した。最初は巧みな言葉で敵を引き留め、あたかも彼らと協定して彼らの味方になるような振りをし、この間自分の兵と若干の食料を集め、好機が到来すると突

然親類の近隣の殿を打つて出「この者は豊後に背いていた」、彼の多量の食料を貯えた城を占拠した。そしてそれを自分の城に取り込んだので薩摩やその他の敵に対抗することが広く明らかになつた。これが豊後のすべてが失われてしまつた訳ではない大きく主要な部分である。ところでは、薩摩の兵はすべての地方で前進が保証されるようになり、自分が中務が兵を留め、豊後に叛いた幾人かの殿といつしよに、その兵力の一部だけを豊後の奥深く送つた理由の一つである。これらの人々は、陸路進み、破壊や殺戮を行ない、多くの人を捕虜とした。そしてその地から臼杵に至るまではキリスト宗団も数多く、幾つかの教会もあり、彼らが行なつた破壊は涙なくしては語れない。多くのキリストの武士や貴人を殺しこうではなく、その妻子のかなりの部分を捕虜にし、その地方のすべてが、ひどく荒され破壊された。捕虜にされた者や殺された者の中には、野津で殺された柴田シモンとその息子がいる。このシモンは身分高い主要な武士で、良きキリストであつたが、彼のもとから捕虜、妻、孫たちと多くの者が連れ去られ、彼の家は近くにあつた教会と共に焼き払われた。良き老人リアンもまた、多くのキリストと立て籠つた砦を包囲され、彼らの家々と自費で建て直した立派な教会も焼かれた。結局持つていたものすべてを失い、もう少しの所で殺されるところを、妻と共に隠れ場所を見つけ、国主フランシスコと共に死のうと臼杵の城に向かつた。

井田地方の領主ソウエキ (* Ioyequidono J.F.Soyer) 殿も身分高い武士で良きキリストであり、嫡子の母の姉妹の一人と結婚していたが殺された。妻の方も多くの女性や子供と共に捕われの身となつた。柴田リイノ

とその息子も臼杵の集落に入つて行つたところを殺された「彼は國主が有していた武士や武将の中で最も勇猛な一人であった」。最後に、これらの地方のキリストン宗団全体に対する行なわれた破壊は語ることができないほどである。最後に臼杵の城に着き、敵は我らの修道院に宿泊したが、城を包囲していた三日間に、そのあたり一帯に多大の破壊を行ない、幾つかの教会を焼き、そこにあつたすべての十字架を切つた。そして最後に、國主フランシスコが自費で建てた立派で大きい教会と共に我らの新旧の建物すべてを焼き、臼杵の集落すべてが灰に帰し、我らがかくも長年にわたつて植え築き上げたものすべてを破壊した。デウスのお恵みと御配慮により臼杵の城は救われた。城は三方が海に囲まれて自然にも、また人工的にも強化された攻めにくい位置にあるが、當時守備隊もおらず、婦女子や庶民で一杯で、真冬の最中に入る家もなく、食物の備えもなく「先に述べたように突然、あわてて収容されたため」その苦痛はここで語ることができないほどである。もしあと数日包囲が続いたら露天と飢餓により陥落したであろう。しかし敵は府内からの援軍が襲つてきて負けるのではないがと恐れ、また人と物を掠奪した収穫^(ア)に満足して引き上げたのは、我らの主の力であろう。城をそのままにして引き上げたので、國主フランシスコと司祭たちは、そこに主の大いなる恵みを感謝した。司祭たちはこの間、城の窮状を助け立派な働きをする機会を持つた。國主フランシスコは、その奥方、およびそこにいたキリストンの娘たちと共に、人々の窮乏を助けるため、できることはすべてし、残つていなかったわずかの食料を彼らと分け、幾人かには衣服を与えて、他の者には道具類を与え、できる限り時間の許す限り助けた。そして司祭たちは告白を絶えず聴き、彼らに米や

その他の持つていた食物を分かち与えて、大いに援助した。

この時、若い國主は、関白殿の武将仙石及びその叔父の（田原）親賢と共に、不用心と仙石のまづいやり方のため、豊後と豊前の境にいた。彼らは敵の侵入の恐れがある最も弱い所に助けに行くべきだったのに、豊前の或る殿に対し不快感を持つていたため、別のあの地方（官兵衛殿がその兵と共にいたので安全であった）に行くことを望み、敵が豊後に入り、臼杵の城を囲んだという知らせを聞いてから、大急ぎで府内に帰つた。そして不用心だったことを悟り、兵も少なかつたので、種々協議したが何も決定できなかつた。この間國主フランシスコは、豊後の破壊と喪失を冷静に見て、司祭たちを慰め、城にいた修練院の人々も、また府内の学院にいた者たちも、主な品物だけ持つて山口の司祭館に引き上げ、彼らのものには一人の司祭と二人の修道士だけを、また方々の司祭館にほんの数人だけを残すようにと言つた。ペロ・ゴーメス〔同地方の長老であった〕司祭は、府内から臼杵に行き、國主及び司祭たちと良く相談した上、司祭たちが主な品物だけ持つて豊後から出発する方策を見出そうとした。これには多大の危険と困難が予想されるからである。第一に王国全体が反乱状態にあり、陸路を行けば盜賊が横行し「このような反乱状態の時は、それが普通である」、また海路では、臼杵や府内の司祭らを集めることは良い方法がなく、まだそれほど多くの人たちが安全、快適に乗船できる船もなかつた。第二に、仙石と嫡子は、府内中が恐慌をきたし人々が逃げ出そうとしているのを見つけて、誰も府内から出さず、家財も持ち出させない。これに背くものは死罪にすると命じていた。このため、下関〔副管区長師は長崎に行つていたので、そこにはルイ

ス・フロイス師が他の司祭といつしょに居た〕に使者を送り、フロイス師が豊前にいた小寺（官兵衛）に、司祭たちが家財道具を持って行けるよう幾隻かの船を送つてほしいと書状を書かせることにした。小寺はこれを知ると、自分の船を送るよう命じたが「その船は非常に目的にかなつていたのだが、遠く離れており、冬で、気候も風も逆だったので到着が間に合わないことを怖れ、豊後の寄港地にいる船、又はたまたま寄る船の船長宛に書状を認め、司祭たちを豊後から下関まで、その家財道具と共に安全に運んではほないと切に要請するよう書いてくれた。彼の権勢は大きかつたので、この書状の持つ重要性は小さなものではなかつた。この際、困つている司祭たちを助けようとのデウスの御配慮にも欠けるところはなく、府内から一里の所に、塩飽からの大きくて安全な二隻の船が到着した〔塩飽は日本では有名な港で、数多くの船があり、今はアゴスチノ弥九郎殿に属している〕、その内の二隻は異教徒の船長が生来良い人で、又アゴスチノのために何か役に立つてその好意を得ようと強く望んでいた点で最良のものであつた。この人は司祭たちが困つてゐるのを理解し、また小寺の書状とアゴスチノの役に立ちたいという思いに動かされて、彼にとつてもこれは良い機会だと見て、このような時期にしては安い価格で府内にいた司祭たちと臼杵にいた司祭たちを、その持物といつしょに彼の船で運ぶことを引き受けた。残された問題は、どのようにして乗船するかで、府内には禁足令が出ていたし、また臼杵からは三乃至四里離れており、司祭たちはそこまで小さな船〔これはその季節には、まだ海に盗賊もいることから非常に危険であつた〕で行く必要があつた。これらのすべてにもかかわらず、他に方法もないので、これらの危険を冒すことになった。

た。臼杵の司祭や修道士らは、乗船するに当つて主な持物だけを持つて大変な不便をしのんで行き、國主と共に城中には一人の司祭と二人の修道士だけが残つた。一方、府内にいた司祭たちは、寝具だけを持つて身一つで行つて良い、他の家財は持つて行かせない、後には司祭一人と修道士二人だけを府内に残す、という許可を仙石、および嫡子から得ていた。その学院には、裝飾品、書籍、教会の銀細工その他の用具など我らが豊後で持つていたもつとも主要な家財道具があつたので、これを隠して持ち出すのに大いに苦労した。色々な新機軸で船に持ち込む方法を探したが危険で苦労が多かつた。ここでもデウスの御摶理に助けられたことは、仙石に従つて若干の兵を連れて府内に来ていた一人の武士で良きキリシタンが偶然おり、この人が司祭たちの家財道具を救う手助けを引き受けてくれた。彼は人から尊敬されている上の人だったので、臼杵、および府内の司祭たちは最良の主な家財の最大、最上の部分を密かに持ち出せるように取り計つたので、臼杵、および府内の司祭たちは最良の主な家財を持つて乗船することができた。(イエズス)会員が三十三人、同宿や使用人を加えると六十五人であり、この間に、会の司祭と修道士が、豊後の様々な司祭館に十三人残つたが、これらの司祭館では、その後多くの労苦があり危機があつた。十二月「冬の厳寒の折で、人力ではどうしようもない反乱と困窮の時期」に、塩飽から、有名で、アゴスチノに感謝している船長をつけて、このよう快適安全な船を派遣し給うた我らの主の司祭や修道士たちに対する御慈悲は少なからざるものがある。といふに快適安全な船を派遣し給うた我らの主の司祭や修道士たちは、もし他の船であれば、このような時期に多大の危険に遭遇ついていたであろう。日本においては、このように戦乱が続く時は、逃走者すべてに襲いかかり、機會

があればその持ち物も命も奪うのが日本の習慣であるからである。

(中略)

この間、薩摩の兵は、豊後の國の破壊を中断することなく、(島津)中務は侵入して来た道の確保を終えた後、ドン・パウロを除いた南郡のすべての殿を味方にし、嫡子と仙石のいた府内に向かって兵と共に近軍したが、その抵抗のための準備は不十分であった。府内から二里の所に小さい城があり「そこは勇猛なキリシタンの武士のものであつた」、降伏しようとしたので敵に攻められ、勇敢に防衛したが、そのキリシタンの武士は、その兵と共に鉄砲の一斉射撃で死んだ。その死と共に兵は氣力を失い、夜になつて逃走し、次の日城は破られた。

この間仙石と嫡子はその城が包囲されていると知り、自分たちの兵を助けに送ることを決めたが、その兵力は少なく、良く訓練されておらず、緊急に集めることもできなかつたため、敵に占領されない前に、そこに到着するよう動かすこともできなかつた。ついに最後の時が来、

この間、上(方)からさらに多くの兵が豊後を救援するために到着した。関白殿が派遣する兵は益々増えて行き、彼自身も近いうちに来ることに疑いはなかつたので、

薩摩は豊後を放棄して自分の家へ引き込むことを余儀なくされた。しかし薩摩の兵が豊後を破壊した以上に、上(方)から来た関白殿の兵は多大な破壊や荒廃をもたらしそれを焼き破壊したので、その住民になされた破壊、敵が背後にあつて焼かれた家々から逃げる男女、子供たちを見るのは悲惨な思いであった。府内は人口八千人に近かつたが、日本の家屋は木造で、多くは板又は藁葺きの屋根なので、何ヵ所かに火が付くと、短時間ですべてが灰になつてしまふ。ただ二、三の末寺のみが残つたが、これは瓦屋根であり、少し離れた所にあつたので火が達しなかつた。我らの修道院も同様に離れていたため残つたが、後に、ここに尊敬されている一人の仏僧を置いた。このような次第なので市から逃げる多くの人々の叫び、涙、混乱がどれほどのものであつたか、尊師もされた子供、あちらでは夫に遅れた妻、また疲れた夫婦と、息子たちに助けてもらえないその老父母。この時府内にいた我らの司祭一人と修道士二人はやつとのことで生きのび、それそれが別の道をたどつて豊前に近い国主フランシスコの第三子パンタリアン(親盛)の城に着き、そこから後にまた山口に行つた。戦さと破壊は常に進んで行つていたため、あちこちの司祭館にいたその他の司祭たちも、余儀なく山口に引き下がるを得ず、豊後の国は荒され、破壊されてしまった。

この間、上(方)からさらに多くの兵が豊後を救援するために到着した。関白殿が派遣する兵は益々増えて行き、彼自身も近いうちに来るに疑いはなかつたので、薩摩は豊後を放棄して自分の家へ引き込むことを余儀なくされた。しかし薩摩の兵が豊後を破壊した以上に、上(方)から来た関白殿の兵は多大な破壊や荒廃をもたらしそれを焼き破壊したので、その住民になされた破壊、敵が背後にあつて焼かれた家々から逃げる男女、子供たちを見るのは悲惨な思いであった。府内は人口八千人に近かつたが、日本の家屋は木造で、多くは板又は藁葺きの屋根なので、何ヵ所かに火が付くと、短時間ですべてが灰になつてしまふ。ただ二、三の末寺のみが残つたが、これは瓦屋根であり、少し離れた所にあつたので火が達しなかつた。我らの修道院も同様に離れていたため残つたが、後に、ここに尊敬されている一人の仏僧を置いた。このような次第なので市から逃げる多くの人々の叫び、涙、混乱がどれほどのものであつたか、尊師もされた子供、あちらでは夫に遅れた妻、また疲れた夫婦と、息子たちに助けてもらえないその老父母。この時府内にいた我らの司祭一人と修道士二人はやつとのことで生きのび、それそれが別の道をたどつて豊前に近い国主フランシスコの第三子パンタリアン(親盛)の城に着き、そこから後にまた山口に行つた。戦さと破壊は常に進んで行つていたため、あちこちの司祭館にいたその他の司祭たちも、余儀なく山口に引き下がるを得ず、豊後の国は荒され、破壊されてしまった。

この間、上(方)からさらに多くの兵が豊後を救援するために到着した。関白殿が派遣する兵は益々増えて行き、彼自身も近いうちに来るに疑いはなかつたので、薩摩は豊後を放棄して自分の家へ引き込むことを余儀なくされた。しかし薩摩の兵が豊後を破壊した以上に、上(方)から来た関白殿の兵は多大な破壊や荒廃をもたらしそれを焼き破壊したので、その住民になされた破壊、敵が背後にあつて焼かれた家々から逃げる男女、子供たちを見るのは悲惨な思いであった。府内は人口八千人に近かつたが、日本の家屋は木造で、多くは板又は藁葺きの屋根なので、何ヵ所かに火が付くと、短時間ですべてが灰になつてしまふ。ただ二、三の末寺のみが残つたが、これは瓦屋根であり、少し離れた所にあつたので火が達しなかつた。我らの修道院も同様に離れていたため残つたが、後に、ここに尊敬されている一人の仏僧を置いた。このような次第なので市から逃げる多くの人々の叫び、涙、混乱がどれほどのものであつたか、尊師もされた子供、あちらでは夫に遅れた妻、また疲れた夫婦と、息子たちに助けてもらえないその老父母。この時府内にいた我らの司祭一人と修道士二人はやつとのことで生きのび、それそれが別の道をたどつて豊前に近い国主フランシスコの第三子パンタリアン(親盛)の城に着き、そこから後にまた山口に行つた。戦さと破壊は常に進んで行つていたため、あちこちの司祭館にいたその他の司祭たちも、余儀なく山口に引き下がるを得ず、豊後の国は荒され、破壊されてしまった。

の外に出た。多くの危険と不便をしのび、あの国があのようにはひどく扱われ、（イエズス）会が多く資力をつぎ込んだキリスト宗団もそうなつたことを深い苦惱をもつて見つめながら。

薩摩の兵が、豊後において、あのような破壊を行ない、また嫡子が豊前の城に引き込もつていた間、小寺（官兵衛）は挙手傍観していたのではなく、諸手で、片方の手では敵と死をかけて、もう一方の手ではできる限り改宗を伸ばそつと地獄と戦つていた。この武士が我らの聖教の捷を弘めようとした努力と熱意が、如何に大きいものであるか、また、その改宗（の業）が、我らにとつていかに有益であったかを簡単に述べることは難しい。（高山）ジエラード・ジョンソンの弟子〔彼の説得と仲介により改宗した〕であつたことから、彼の改宗にかける熱意の点でも弟子となろうとしたものと思われる。今は大いなる権威と権力を持つてゐるので、これを改宗のために利用しないで時を過ごすことを見まず、様々な殿と武士たち〔その軍勢として来ていた〕に我が聖教について語り、^{カテキズモ}「教理」の説教を聴くよう説得し始めた。それを一生懸命行なつたので多くの人を説得し、その人たちが改宗し、その中には、伊予の国の領主で山口の国王の叔父、九ヵ国の全權奉行小早川殿の兄弟の一人がおり、この兄弟が小早川殿には子がないため後継ぎの養子（小早川秀秋）となつてゐる。この人が説教を聴いて我らの聖教に改宗し、さらに良いことに、関白殿の仲介で國主フランシスコの娘で非常に良きキリストであるマゼンシアと結婚した。といふのは関白殿は國分けに当つて、小早川殿に、今まで有していた伊予の國の代りに、筑前と筑後を与えたので、このキリストの相続人の殿がこれらの二國を譲り受けた訳である。山口の國主の近い親類であるため、この改

宗は大いに評価された。同じく小早川殿の右筆の一人が、他の四人の名譽ある武士四人と共に、また数多くの兵士が改宗した。小寺自身の兄弟で、関白殿に仕えて、兵をつれて來ていた二人も改宗した。最後に、関白殿が小寺官兵衛殿の名譽を顕彰し恩顧を与えるため、小寺自身の息子でその唯一の後継者を訪問させたところ、これに対し最初に願つたことは、息子が自分自身の捷に従うことであり、息子に何か強制するつもりはないが、説教を聴き、心が動かされれば、キリストになつてほしいと言つた。この青年は、非常に良い性質であり、理解力も高かつたので、説教に満足し、多くの家族の者達と共にキリストになる決意をした。そして父の大いなる満足の下で洗礼を受けた。彼は改宗のことに特に熱心で、豊前に居る間中、ほんんどいつも教理の説教をして歩く二人の日本人修道士を連れて歩き、彼自身も、修道士の信用と評判を高めるため、説教の場に何回もいることがあつた。そして多数の人が改宗した。

豊後、および豊前で、このようなことが起きてゐる間、関白殿が送つた軍勢が到着し始めた。最初に関白殿の養女と結婚した三ヵ国の領主八郎殿（宇喜多秀家）が多数の兵をつれて到着し、少し遅れて関白殿の弟美濃殿（羽柴秀長）が大将として最大の軍勢を連れて來た。彼は豊後で生じたことを聴き、薩摩の兵を豊後から追い払つため、小寺官兵衛殿が先陣となることを決定した〔豊後の嫡子は、この人といつしょに國に帰れることに大いに満足していた〕。小寺はこの良い機会を逃さまいと、嫡子にキリストになつて自分自身と父である國主を満足させははどうかと勧め始めた。この頃嫡子はこの事に関心はない、我らも彼の改宗はほんとあきらめていたが、小寺が強力に勧めるので徐々に心を開いて行き、また嫡子は小寺に頼り、その助けで國に帰れる」と、さらに関白殿に対して自分を弁護してほしいと思っていたので、徐々に説得されていった。しかし未だ父の國主が改宗した時に説得されていて、豊後に帰りたいと思つてゐたので説得を続けたところ、ついに他の言い訳もできなくなつて、ペロ・ゴーメス師「山口にいた」にすぐにジョアン・デ・トルレス修道士を連れて來るようにとの書状を出したが、嫡子自身がこの修道士から説教を聴きたがつたのである。兩人が豊前に来て、嫡子は教理の説教をもう一度すべて聴いたので小寺は大いに喜んだ。嫡子は、當時彼といつしょにいた多くの武士や殿たちと共に、ペロ・ゴーメス師から洗礼を受けた。キリストとなつて、小寺と共に豊後に帰つたが、小寺がその兵と共に豊後に入つて行くと、薩摩の兵も退き始めた。最初豊後に叛いた人たちも時勢の変化を見、転向して嫡子の側につき、薩摩の敵だと公言した。薩摩の軍は官兵衛殿が来る前に退却しよようと急いだが、初め味方に付いた豊後のその同じ殿たちから少なからず損害を見、転向して嫡子の側に立たず、嫡子は彼らに相応しい罰を与え、領地、城を没収し、これらの者を殺すようにと命じた。こうして何の役にも立たず、嫡子は彼らに相応しい罰を受けた。こうして、老中、（*RonjusJ.Ronchu）國衆の朽網（宗歴）殿とその息子たちを殺し、他の國衆たちは助けを求めたが、すべて国外に追放された。義兄弟の清田殿からもその所領を没収したが、生命は許した。このように、豊後の國は破壊されたが、嫡子はより豊かになりました。以前よりも大きな領主となつた。というのは叛いた老中たちや國衆らから大きな領地や封禄を自分のために没収したからである。これらの叛いた人々は王国の最良

の部分を食いものにしており、その國主を半ば圧迫し服従させていたもので、彼らから今解放されて、より自由で強力になつた。嫡子はキリストンになつて帰つて来、官兵衛殿のような熱心な武将がついて來たので、短期間に、豊後のその他の老中、國衆、殿たちは皆キリストンになつた。ドン・パウロの祖父で國主の顧問であつた老志賀（道輝）殿はもつとも激しい敵対者でいつも我らに反対していたが、この人さえそうであつた。ただし親賢は、他の数人と共に異教徒のままであるが、近いうちに、豊後全体が、キリストンになると思われる。嫡子、およびその他の者の改宗を大いに助けたのは、小寺のほか、その嫡子の年老いた母で國主の奥方の死去で、彼女のことを我らはイザベルと呼んでいた。といのもキリストン宗団の強力な迫害者だつたからであるが、ペストのような疫病がはやつた時、嫡子がキリストンになつて豊後に帰る前、臼杵で頑強にその異教を棄てることなく死去した。彼女の死と老中や國衆「ある程度嫡子を圧迫していいた」の失墜で嫡子はより自由になり、小寺から説得され易くなつていたが、これを國主フランシスコは極めて喜び満足していく、自分が死ぬ前に、嫡子の改宗を見たいと願つていたことが実際に見られたと言つて、我らの主に無限の感謝を捧げた。老国主は、もつとも熱心に息子がキリストンになるのを自分の生前に見たいと願つていたので、我らの主は励まされたのであり、その少し後に「後述するが」死去した。嫡子の改宗については、ペロ・ゴーメス師が副管区長師宛に書簡を認めたが、要点は次の章の通りである。

当（一五）八七年四月二十七日、親賢の城の中で、國主フランシスコの息子である豊後の嫡子に授洗した。後に豊後において、その夫人、その子供たち、並びに豊後

の重立つたほとんどの殿に洗礼を受けた。嫡子はもつと早く洗礼を受けなかつたことを大いに後悔し、洗礼名をコンスタンチノ、その夫人をジュヌタとするよう望んだ。その後継ぎの息子は、フルゼンシオ、娘たちの一人はマシマ、もう一人はサビイナとした。國主の顧問たち、豊後の顧問や奉行全員と、その長男、並びに、その他のほとんどすべての殿、臼杵の城の兵士らが洗礼を受けた。これで國主フランシスコや我が会員の喜びがいかに大きかつたかを尊師は推察されるであろう。というのも、デウスの助力のお蔭で、近い内、豊後の國全体が改宗するであろう。ここでは、すべてが失われてしまつたと思われたが、今は、従来ないような收穫を收めている。すべての國衆、および王国の殿たちの間で、もつとも名誉を高めたのは、志賀ドン・パウロ殿である。といふのは、彼はすべての敵に対し、嫡子のためもつとも強力に戦い、嫡子を信頼し、その後、彼の周辺の反乱を起こした殿たちの多くの領地を征服して以前に増して強力となり、嫡子の寵愛を得、この戦役で名をあげ名声を博したからである。この戦さの間、彼に生じた別のことの一つに、キリストン宗団のために大きな収穫^(一)をあげたことがある。

（中略）

我らの良き真の友國主フランシスコは、多くの不幸と労苦、特に豊後の破壊を経験した後、非常に弱くなつたと感じ、臼杵の城の長い期間にわたる籠城で疲れ、通常邸を置いている津久見に行くことにした。しかし、豊後全体を荒している病いのため、その病いにからぬよう、それほど早くは行けなかつた。そして数日前からすでに熱があり、津久見に着いた時には病状が悪化して、到着して三日のうちにそこで亡くなつた。死去に際しては、その救いと神聖さの究極を、改宗後常にそうであつたように示し、秘蹟を受け、自分の罪を大いに悔悟し、デウスに対しこれ以上は望めないほどの帰依と信仰を表した。

所へ来るようとに伝言させた、というのはキリストンなので助けてあげたい。そうすればその直後城に攻め入り、その他の城中のものを殺すことにすると。ドン・ジョアンは、これに対し感謝の言葉を伝えさせると共に、その重立つたほとんどの殿に洗礼を受けた。嫡子はもつと早く洗礼を受けなかつたことを大いに後悔し、洗礼名をコンスタンチノ、その夫人をジュヌタとするよう望んだ。その後継ぎの息子は、フルゼンシオ、娘たちの一人はマシマ、もう一人はサビイナとした。國主の顧問たち、豊後の顧問や奉行全員と、その長男、並びに、その他のほとんどすべての殿、臼杵の城の兵士らが洗礼を受けた。これで國主フランシスコや我が会員の喜びがいかに大きかつたかを尊師は推察されるであろう。というのも、デウスの助力のお蔭で、近い内、豊後の國全体が改宗するであろう。ここでは、すべてが失われてしまつたと思われたが、今は、従来ないような收穫^(一)を收めている。すべての國衆、および王国の殿たちの間で、もつとも名誉を高めたのは、志賀ドン・パウロ殿である。といふのは、彼はすべての敵に対し、嫡子のためもつとも強力に戦い、嫡子を信頼し、その後、彼の周辺の反乱を起こした殿たちの多くの領地を征服して以前に増して強力となり、嫡子の寵愛を得、この戦役で名をあげ名声を博したからである。この戦さの間、彼に生じた別のことの一つに、キリストン宗団のために大きな収穫^(一)をあげたことがある。

（中略）

我らの良き真の友國主フランシスコは、多くの不幸と労苦、特に豊後の破壊を経験した後、非常に弱くなつたと感じ、臼杵の城の長い期間にわたる籠城で疲れ、通常邸を置いている津久見に行くことにした。しかし、豊後全体を荒している病いのため、その病いにからぬよう、それほど早くは行けなかつた。そして数日前からすでに熱があり、津久見に着いた時には病状が悪化して、到着して三日のうちにそこで亡くなつた。死去に際しては、その救いと神聖さの究極を、改宗後常にそうであつたように示し、秘蹟を受け、自分の罪を大いに悔悟し、デウスに対しこれ以上は望めないほどの帰依と信仰を表した。

彼は病中、かつて（家族）や領国について語ったことはなく、デウスや自分の靈魂に關すること以外の何事にも関心を示す風はなく、「私に司祭様^{バテレン}私の靈魂のため、祈つて下さい」と。言つた。すでに、まつたく力がなく、彼がもつとも気にかけていた生前に嫡子がキリストianになれるを見るという主に対する願いがかなつた恩顧を感謝するため、両手を合わせて祈る力だけはまだ持つていた。ついに一人の聖人として死去した。彼はデウスのお恵みにより、すでに永遠の生命を享受しているのである。私はすぐに三つの司祭館にいたゴンサロ・レベロとジョアン・フランシスコの二司祭を呼びにやつた。というのは他の人々はすべて山口の國に引き込んでいたので、これ以外に司祭も修道士も豊後にはいなかつたからである。この二人は、冬でもっとも雨が多かつたため、小さな川が増水し、その中には馬といつしょに泳いで渡つたものもあり、少なからぬ危険を冒して、やつとのことで間に合うことができた。そして我ら三人の司祭と、私といつしょにいた二人の修道士を合わせて非常に莊厳な埋葬を行つた。司祭や修道士の数が少ない分は、この埋葬に加わつた無数の人々の群れがこれを補つた。というのはそこにいたすべての殿や領主たち「嫡子といつしょにいた者を除く。彼らは戦さで忙しく遠隔の地にいたため列席できず」が列席した。奉行やその他の主要な殿たちが、華麗に飾つた柩を肩に担い、その周囲には多数の十字架の旗、その後にジュリアと娘たち、無数の人々が続いた。それに、豪華ないくつもの段がついた棺台を造り、その段には極めて多数の金色の蠟燭をまわりに配した。ジョアン・フェルナンデス修道士は、國主の徳と、この國、およびその住民が改宗のために國主が常に働いたことに多くを負つてゐること、良い統治と業績に皆が満足して

いることを取り上げて称揚する追悼の辞を述べた。そして非常に良くでき飾られている彼の權威を示す墓所に埋葬されたが、そこでは多くの涙と、彼を埋葬する者すべての深い悲しみがあり、このような良い國主の恩顧、愛、好意を受けた我らが、國主の永眠に際し、いかに悲しんだかを、尊師は察しられるであろう。特に彼の死が、この國全体がすでに改宗しつつある時に生じ、その息子の嫡子が豊後の太身たちと共に数日前にキリストianになつたばかりの時に、この國主が急死した欠落感は大きかつた。というのも、これが神や仏の罰だと言つてゐる多くの異教徒や仏僧には、事欠かなかつたからである。しかしどうかの聖にして秘なる御裁定はすばらしく、計り知れない。彼の死が我らに起こす欠落感はあるにしても、嫡子とすべての大身たちがすでにキリストianであり、その天における國主の祈りにより、今までに劣らぬ恩顧を与えられ、豊後の國において、このように多くの靈魂の改宗が完成することを我らは期待してゐる。

三三 一五八九年二月二十四日付、ガスパール・コエリュの、イエズス会総長宛、 一五八八年度・日本年報

彼らはまた同じ書簡のなかで次のようにしたためている。國主フランシスコの娘であるレジイナは日向の國でドン・バルトロメウ・レクロン（伊東義賢）殿と結婚している。この人物は日向の出身であり、あちら（ヨーロッパ）に行つてゐる伊東ドン・マンショ殿の兄弟とは從兄弟の間柄であつた。彼は自らの伯叔父（伊東祐兵）の養子となつた。この伯叔父もまたキリストianであり、関白殿はこの人にこのたびの分割において日向の國の三分の一を与えた。彼とともに彼の兄弟であるドン・ゼロニモ（伊東祐勝）が雨露を凌いでいるが、彼らはこうしたたたかを、尊師は察しられるであろう。特に彼の死が、このからこの報せを非常に嬉しく思う。今や彼女は既述のドン・バルトロメウ・レクロン殿と結婚しているから、時が余裕を与えれば、日向には偉大なるキリストian宗団が形成されるであろうと期待できる。彼らはまた我らにこうもしたためてきた。わが主は一つの良き鞭を豊後の國主、および老中たちに与えずにおこうとされなかつたかのように思える。わが主がそななさつたわけを彼らは知られてきた。既述の國主は、過ぐる戦さのなかで薩摩の軍勢によつて焼かれ破壊された臼杵の市街を再建するために、本年大いなる努力を払つた。そして自ら命令をくだして老中たちや貴人たちもそのほかの人民と同様、そこに自分たちの家々を造るようにさせた。かの國ではもつとも堅牢で、しかも重立つた城の再建に調子を合わせるのがそのねらいであつた。某日の正午近くのことである。或る貧しい人の小さな家から火の手があがつた。その家は目抜き通りにあつた。その火は折から吹き募つていて猛烈な風にあおられて、たいへんな勢いとなり數時間後には家の目抜き通りは火で満たされてしまつた。家々は木製で、しかも大部分は藁で被われてゐることもあって、きわめてわずかの間に目抜き通りは全焼した。以上のことは大いなる熟考と驚嘆に値することだつた。城は市街から目と鼻の先ほどの距離に過ぎなかつたが、或る高い岩山の上に設けられていたし、その周囲は海であつた。市街から城へ昇つてゆくには一本の狭い通路が

あるばかりであつたが、火はデウスの裁きに導かれるかのように這いあがつて行つた。城の内部ではその周辺の家々を焼きつゝ、さらにその勢いを強め、ついに大きくしかも贅沢な諸々の屋敷に襲いかかつた。これらの屋敷は國主フランシスコが五カ國の君主だつたころに造らせたものである。家という家が焼かれたが、火勢のあまりの猛烈さにまつたく手の施しようもなく、わずかに城内にいた人々とともに豊後の國主の妻が救われたにすぎなかつた。家財道具などは救えず、すべてが焼けた。城内ではわずかに一つの倉庫が焼けずに済んだ。以上は國主が既述の城を留守にしていた時に起つたことである。

父君で先代の國主が造つたあの贅沢な家であるが、現國主はこれを所有するに値しないことを示すと、わが主は彼を懲らしめるためにそのように望み給うたかのようである。その父君はいつも良きキリスト教であったのに對して、彼は非常に悪いキリスト教であつたのだからそれも致し方あるまい。彼は徐々に類似の家々を造つてゆくだろうが、この懲らしめによつて彼が正気に戻ることを、主よ、嘉し給え。彼の身の上にこれ以上に重々しく深刻な何ごとかがふりかかるのを、主よ、望み給うことなけれ。以上が豊後の諸事のおかれている状態にほかならない。

しかも贅沢な諸々の屋敷に襲いかかつた。これらの屋敷は國主フランシスコが五カ國の君主だつたころに造らせたものである。家という家が焼かれたが、火勢のあまりの猛烈さにまつたく手の施しようもなく、わずかに城内にいた人々とともに豊後の國主の妻が救われたにすぎなかつた。家財道具などは救えず、すべてが焼けた。城内ではわずかに一つの倉庫が焼けずに済んだ。以上は國主が既述の城を留守にしていた時に起つたことである。

父君で先代の國主が造つたあの贅沢な家であるが、現國主はこれを所有するに値しないことを示すと、わが主は彼を懲らしめるためにそのように望み給うたかのようである。その父君はいつも良きキリスト教であったのに對して、彼は非常に悪いキリスト教であつたのだからそれも致し方あるまい。彼は徐々に類似の家々を造つてゆくだろうが、この懲らしめによつて彼が正気に戻ることを、主よ、嘉し給え。彼の身の上にこれ以上に重々しく深刻な何ごとかがふりかかるのを、主よ、望み給うことなけれ。以上が豊後の諸事のおかれている状態にほかならない。

しかし彼は、（息子）ドン・パウロ（親次）の所領で一人の司祭は、（志賀）ドン・パウロ（親次）の所領で

あつた志賀（竹田）の城に赴いて、そこで大勢のキリスト教徒たちが集まつた。教会は聖週間に四千名のキリスト教徒たちが集まつた。教会はいつも人々でいっぱいであり、皆の信心が非常に深いのに司祭は驚いてしまつた。（司祭）は幾人かの人々が自分たちの家々に設置しているその個人的な礼拝所を訪れた。（司祭）は復活祭後に、そこから高田（大分）へ赴き、そこにはもつと大勢のキリスト教徒たちがいたが、彼は多数の異教徒と、また幾人かの非常に高貴な人々に洗礼を受けた。

猪串（蒲江町）という所では皆がデウスの法には非常に反感を抱き誰一人としてキリスト教になろうと望まなかつたが、この地の或る重立つた人の息子が重病にかかりたので、父親はすべての財宝を仏僧たちに喜捨して、彼らの非常に迷信的な諸々の儀礼や祈禱によつて息子のために健康を回復させようとした。しかし（父親）はついにすべての努力が効果がなかつたことを知ると、そこからほど遠くない所にて司祭に次のように伝えさせた。

自分は息子が死ぬ前に洗礼を受けさせようと思つてゐる。また自分は土地の民衆に、すべての人々が福音の真理を認めて洗礼によつてデウスの教会へ行くよう勧めようと。修道士がそこへ行ってみると、（息子）はすべての意識を失つており、洗礼を授けることはできぬ状態であつた。

父親は、息子が死んでおり、また仏僧たちが回復を取り戻せることができなかつたのを見ると（息子）が彼らによつて埋葬することを拒んで、キリスト教徒たちが埋葬されている聖なる墓地に埋葬されることを許してくれるように熱心に司祭に頼んだ。司祭は答えた。息子は洗礼を受けずに死んだのだから、彼にとつてその場所は

少しも役に立たぬだらう。しかし（父親）は、（息子）のためにせめて、墓地の片隅にでも場所が与えられるようと懇願し、また他のキリスト教徒たちも同様に願つた。司祭はそれを承諾した。そして父親はついに同地の他の大勢の者たちとともに洗礼を授かつてキリスト教徒に改宗した。

異教徒である臼杵の支配者（福原右馬助直高）は、己が仲間のもとで大いなる権力をもつてゐるが、都に赴くに際して己が家臣たちにこう命じた。もし司祭が訪れたなら、彼を鄭重に迎えよ、また教会のための場所も示すがよい。もしそれに賛成が得られなかつたら、彼が望む別な（場所）を選ばせるがよいと。このことのために彼は、國主フランシスコ（大友宗麟）のものであつた幾つかの邸を与えた。（支配者）はまた一同にキリスト教にする許可を与えた。（司祭）の伴侶である修道士は、津久見やその他の地のキリスト教徒たちを訪ね、その機会に多数の貴人たちに洗礼を授けた。

三五 第九章(第一部一〇章)バルタザール・ガーヴ師が豊後に帰つた次第、およびさつそく彼に生じた苦難について

○フロイス「日本史」第6卷

ペドゥロ・デ・アルカソヴァ修道士が平戸に向かつて出発したわずか二日後に、豊後（の国）にとつても、また司祭や修道士にとつても非常に困つた重大事件が勃發した。事の次第は次のとおりである。すなわち、一行が

山口から到着した直後、府内の市は國主（大友義鎮）を

三四 一五九六年十二月十三日付、長崎発信、ルイス・フロイスの、一五九六年度・年報

殺害しようとする三人の大身によつて動乱の巷と化した。

四旬節の二日目（天文二十二年閏正月四日）になると、キリストたちが司祭に向かつて、市は焼かれ略奪されるから家財を安全な場所へ移されよ、と忠告するまでに事態は悪化した。司祭は国主が非常な苦境に置かれていたと判断して、ジョアン・フェルナンデス修道士を国主の許へ派遣した。それは、彼が国主と語り合えるかどうか（様子を）見てくるためであり、また（会うことができれば）（国主）に対し、デウスは善意の人を助け、あらゆる危険から救い給うことゆえ殿は勇気を出すように、自分は殿が敵から（無事に）解放されるようデウスに祈るであろう、と伝言させるためであった。修道士が館に赴いたところ、そこには武士たちがいっぱいいて、いずれも皆混乱し昂奮していて誰が謀叛人で誰が味方か識別できない有様であった。ただし叛逆者たちを追跡することになっている重臣たちが部下を率いているのだけは認められた。ジョアン・フェルナンデス修道士がこうして国主と談を交えるを得るかどうか思案していたところ、折りよく国主は修道士がいた側の一つの戸を開いた。そこでは修道士が斬首されてしまいかと少なからず恐れながら待機していたのであった。彼は国主を認めるとき、司祭（ガード）の伝言を伝えた。すると（国主）は自分のためにデウスに祈つてもらいたいと謙虚に頼みながら（司祭の陣中見舞いを）非常に喜んだ。

三六 第一四章（第一部一六章）山口が破

壊され、コスメ・デ・トルレス師が豊後に赴いた次第、ならびにメストレ・ベルシヨール師がその伴侶たちとともに一五六六年に日本に到着したことについて

○フロイス「日本史」第6巻

コスメ・デ・トルレス師と修道士たちが豊後に到着した後、（そして）私たちが（豊後に）着く十五日前に、國主（大友義鎮）は（家臣が）謀叛（するのではないかと）の疑念を抱きました。事実それは、さつそく本庄殿と田北殿と（いう）二人の有力な殿の間の争いとなつて勃発しました。本庄殿の側では、十三名の身分のある貴人がその館（をふくめ）、家族、家臣とともに死に、他の（田北殿の）側で（も）大勢が殺されました。そのため國主はそれまでは先祖（の人々）と同様につねに府内の市に住んでいたのですが、今や（その市を）去つて、よりいつそうの安全をはかるために新しい城に引き籠りました。

（中略）

日本では万事が上長（の意向いかん）にかかるでいるので、私は豊後に来ますと、（さつそく）國主に面会しようと努め、幾多の道理でもって（國主）を我らの聖なる教えに導こうと試みました。しかし彼は、かの臼杵の山に隠退してしまつてしまつたし、彼（自身）よく判っていますように、キリストになろうとすればやめなければならぬ罪惡に陥つていました。それにまた部下たちは、自分を國主と認めなくなるばかりか、むしろ殺（さられ）てしまうことを恐れていました。それにまた部下たちは禪宗に帰依していました。（それらの）理由によつて、私の願いは成就いたしませんでした。私は、國主に対して、彼およびその國のもつとも重立つた人々の面前へ、

や修道士たちが、いとも明快で眞実の慰めに満ちているのに接しまして、彼らが眞実の愛情において固く結ばれているのに驚いたくらいでした。彼らは、ひたすらデウス様を畏敬し、自我を捨て、節制しており、世俗のことにはなんらの執着も示してはいませんでした。そして私もつとも感嘆させましたのは、彼らが完全に従順、清貧で、魂が潔白（であること）で、私は幾度も幾度も自分がどれほど、彼らの現世を軽んじる心、危険に際しての剛毅、困難において（見出す）慰め、信心から（流す）涙等々、（キリスト教徒としての）彼らの完全さに遠く及ばないかを反省いたしました。それらはすべて私に少なからず恥ずかしい思いを起させるのです。

日本では万事が上長（の意向いかん）にかかるでいるので、私は豊後に来ますと、（さつそく）國主に面会しようと努め、幾多の道理でもって（國主）を我らの聖なる教えに導こうと試みました。しかし彼は、かの臼杵の山に隠退してしまつてしまつたし、彼（自身）よく判っていますように、キリストになろうとすればやめなければならぬ罪惡に陥つていました。それにまた部下たちは、自分を國主と認めなくなるばかりか、むしろ殺（さられ）てしまうことを恐れていました。（それらの）理由によつて、私の願いは成就いたしませんでした。私は、國主に対して、彼およびその國のもつとも重立つた人々の面前へ、もつとも賢明な仏僧を幾人か来させて、私たちが彼らと言論を（交え）、彼らの宗派の誤り（について）、また私たちの主イエズス・キリストの信仰の真理について彼らに立証できるようにしていただきたいと、切に促しました。國主は、そうしようとして約束しましたが、私たちがど

んなに促してもそれを実行しませんでした。

三七 第二七章（第一部四七章）インドから二名の司祭が渡来し、その一人がさつそクルイス・デ・アルメイダ修道士とともに豊後へ派遣された次第

○フロイス「日本史」第7巻

も内へ入ることを許さなかつた。国主がこうした敬意を（司祭や修道士たち）に示したことは、（一般）日本人が、デウスへの奉仕に関する我らのことを大いに尊重する一つの原因となつたのであり、もし国主がそれほど、温和、親切に彼らを待遇していなければ、たぶん事情は反対となつたことであろう。

三八 第三一章（第一部八二章）豊後で布教が進展した次第

○フロイス「日本史」第7巻

この頃（永禄六年）、（アルメイダ）修道士は、コスメ・デ・トルレス師からの書状を受理したが、その中には、（修道士）が豊後の国主から、ぜひとも二通の書状、すなわち、一通は有馬の国主（義貞）宛、他の一通は（有馬の殿）と激しく戦っている別の殿宛の（書状）を入手するよう努めよと述べられていた。修道士はさつそく、国主がいる邸宅に赴いた。外側の部屋には、たとえば都の絹、（その他）それに類した贈物を彼のところにもたらした大勢の殿たちがいた。国主は内から部屋の入口のところに出て来て一同を見渡すと、ただちに修道士を呼び、彼を伴つて内に入り、自分の傍に座るようによつた。

そして（国主）は、コスメ・デ・トルレス師の伝言を聞くと、では（さつそく）予の家臣二名を、かの（二人の）殿の許へそれぞれ遣わすので、彼らはかならず和を講じるであろう、と述べた。そして（国主）は、（トルレス師に対する）好意として、ただちにその場で司祭宛の一書状をしたためさせて、（修道士）に与えた。彼らが、このこと、その他のことについて互いに語らつてゐる間に、（かれこれ）一時間も経過したが、（その間）（国主）は、自分と話そうとして外で待つてゐた大勢の殿たちのうち誰

き続け、子供たちはその場から離れることができず、数日のうちに、大喜びで、また両親の喜びの許でキリストの教理を覚えてしまい、声高らかに、その地で（教え）を歌つていた。

（中略）

司祭が府内に戻つた時には、すでに四旬節の一部が過ぎていた。告白に殺到した人々は非常（な数にのぼり）、司祭は昼間と夜の大部を（当てて）それを聞かねばならなかつた。ところで国主の政庁がある臼杵のキリストたちは府内に行くことができなかつたので、司祭が彼らの信仰（熱）を満足させるために聖霊降臨の祝日（永禄十二年五月十四日）にその地に赴くことが必要だと思われた。そこでは、告白、聖体拝領、贖罪（ペニテントシア）に（見られた）ように過ぐる四旬節の熱意が新たに（発揚）された。そしてこの教会は政府（がある場所）にあるので、土地の者も他郷の者も、大勢の人々が説教を聞くためにそこにおしかけて來たので、司祭はしばらくこの地に滞在した。二人の名望があり多くの親族を有する貴婦人が改宗し、その一人の嫁と孫娘たちも（教理を）教わりにやって來た。

三九 第三三章（第一部一〇六章）豊後国

主が次男をキリストにした次第、および甥の土佐国主一条殿も受洗し

た次第

○フロイス「日本史」第7巻

この国主は徹底的に日本の宗派の本質を見きわめるこ

とにつねに非常に心を傾け、それに絶えず大いに熱中していた。そして禅宗がもつとも諸侯や大身の間で重んぜられていたので、国主は都において、紫という禅宗の本山（大徳寺）に、一人の息子を入れるための小堂（瑞峰院）と住院を建築せしめ、また同所にいたもつとも名望ある僧侶の一人（怡雲宗悦）を（豊後に）来させ、彼から同宗派の觀想の諸点について教えを乞うこととした。（この僧侶）が豊後に来た時に、国主は、自分とその政庁のもつとも身分の高い殿たちがいつも仕事をしている白杵の僧侶のために一寺院（寿林寺）を建立させ、同寺院に十二、三歳になる次男の息子（大友親家）を入れるために、（その寺院）に相当な扶持をあてがつた。

四〇 第三四章（第一部一一三章）親賢の養子シモン勝之四郎殿が改宗したために豊後で生じたことについて

○フロイス「日本史」第7巻

豊後の国には、田原親賢という一人の國衆（それは國のものとも高貴な殿たちのことである）がいた。彼は國主の義兄弟、すなわち（國主）の夫人イザベルの兄弟であつた。彼は同時にその国の宿老であり、（同）國の大部分の監督・管理（權）を有しており、ことに訴訟とか豊後に服従している諸国において（豊後）国主と交渉されねばならない種々の用件は、（親賢）の許にもたらされた。彼は四、五千の兵を有する富裕かつ貪欲な殿であり、デウスの教えならびに（キリスト教の）布教事実に

対して極度の憎悪を抱いて（いることでは）、己が姉妹イザベルに次いで豊後のすべての殿のうち第一、もしくは第二（の人物）であった。彼は後継ぎの息子がなかつたので、都に赴き、そこで九歳か十歳くらいと思われる柳原殿という公家の息子である少年を養子にした。この少年は高貴の出で上品である上に、その容貌がよかつたので、人々をして大いにその（将来を）期待せしめた。そして彼はすでに立派な素質の持主であつたので、親賢の努力のお陰で、（親賢）が彼に学ぶようにと命じたことすべてにおいて、短期間に顕著に上達し、一同が驚嘆するうち、同じ年配の他の貴人たちを凌駕してしまい、書道とか難しい書物を理解することにおいて、また彼ら（日本人）の種々の楽器の演奏において、（さらに）乗馬、剣術、弓術、銃術、礼法、儀式、政庁のもうもろの仕来り、（その他）あらゆることを大いに學習し精通するに至つたので、彼を知る人々は驚嘆して親賢に（向かい）、貴殿はあんなに稀有な素質ある若者を息子に持つたことを幸福と見なさねばならぬと言つた。そこで親賢もまた、（息子）の素質や立派な性格のことに満悦することを示した。ところでその少年は身分も高く、天性いとも優れた知識および活潑な理解力の持主であつたので、国主は、彼が必要な年齢に達したならば自分の娘の一人と結婚させよう決心した。（そして）彼は十四歳になつた時、父とともに大勢の家臣に付き添われ、豊前から白杵の政庁にやつて來た。

その際、親賢は我らの教会を見物したくなつた。そして彼は（息子）を連れていたので「冗談気味に」彼に、「デウスのことについて説教を聞いてみよ」と説得した。親賢が後で反対したことから結論されるように、もとより彼が（その時）眞面目にそう（言つたの）ではなかつた。別名を親虎と称した勝之四郎殿は連日政庁において、饗應とか祭典によつて大いに敬意を払われたが、一同が彼に示した親切や鄭重さは、これ以上のことはできまいと思われるほどのものであつた。彼がたまたまかの説教をして、彼は（現われて）、我らの主なるデウスは、惡魔を追い出す方法で、大いなる、そして公に知られる奇跡をすべてにおいて、短期間に顕著に上達し、一同が驚嘆するうち、同じ年配の他の貴人たちを凌駕してしまい、書道とか難しい書物を理解することにおいて、また彼ら（日本人）の種々の楽器の演奏において、（さらに）乗馬、剣術、弓術、銃術、礼法、儀式、政庁のもうもろの仕来り、（その他）あらゆることを大いに學習し精通するに至つたので、彼を知る人々は驚嘆して親賢に（向かい）、貴殿はあんなに稀有な素質ある若者を息子に持つたことを幸福と見なさねばならぬと言つた。そこで親賢もまた、（息子）の素質や立派な性格のことに満悦することを示した。ところでその少年は身分も高く、天性いとも優れた知識および活潑な理解力の持主であつたので、国主は、彼が必要な年齢に達したならば自分の娘の一人と結婚させよう決心した。（そして）彼は十四歳になつた時、父とともに大勢の家臣に付き添われ、豊前から白杵の政庁にやつて來た。そこで親賢は我らの教会を見物したくなつた。そして彼は（息子）を連れていたので「冗談気味に」彼に、「デウスのことについて説教を聞いてみよ」と説得した。親賢が後で反対したことから結論されるように、もとより彼が（その時）眞面目にそう（言つたの）ではなかつた。別のところでは、（ともかく）それはデウスの御攝理であった。別名を親虎と称した勝之四郎殿は連日政庁において、饗應とか祭典によつて大いに敬意を払われたが、一同が彼に示した親切や鄭重さは、これ以上のことはできまいと思われるほどのものであつた。彼がたまたまかの説教をして、彼は（現われて）、我らの主なるデウスは、惡魔を追い出す方法で、大いなる、そして公に知られる奇跡をすべてにおいて、短期間に顕著に上達し、一同が驚嘆するうち、同じ年配の他の貴人たちを凌駕してしまい、書道とか難しい書物を理解することにおいて、また彼ら（日本人）の種々の楽器の演奏において、（さらに）乗馬、剣術、弓術、銃術、礼法、儀式、政庁のもうもろの仕来り、（その他）あらゆることを大いに學習し精通するに至つたので、彼を知る人々は驚嘆して親賢に（向かい）、貴殿はあんなに稀有な素質ある若者を息子に持つたことを幸福と見なさねばならぬと言つた。そこで親賢もまた、（息子）の素質や立派な性格のことに満悦することを示した。ところでその少年は身分も高く、天性いとも優れた知識および活潑な理解力の持主であつたので、国主は、彼が必要な年齢に達したならば自分の娘の一人と結婚させよう決心した。（そして）彼は十四歳になつた時、父とともに大勢の家臣に付き添われ、豊前から白杵の政庁にやつて來た。そこで親賢は我らの教会を見物したくなつた。そして彼は（息子）を連れていたので「冗談気味に」彼に、「デウスのことについて説教を聞いてみよ」と説得した。親賢が後で反対したことから結論されるように、もとより彼が（その時）眞面目にそう（言つたの）ではなかつた。

のを見て、彼女がそのようにしてさつそく悪魔から解放され、（悪魔）がその後ふたたび彼女を苦しめることがなくなつた時、なおいっそはなはだ（不思議に思い驚嘆した）。かくて彼女とその夫は子供や家族とともにただちにキリストとなり、その後、私は幾度となく彼女の告白を聞いた。

（中略）

彼がすでに十六歳になつた時、父とともに臼杵の政府にふたたび戻つた。そして彼は「心配だったの」、外面的にはまつたくキリストになりたいような素振りを見せはしなかつたとはい、さつそくフランシスコ・カブラル師と手紙のやりとりを始め、幾度かは、家臣に気づかれないために徒步で夜分、暗闇と豪雨の中を教会にやって來た。その際、彼は素足でびしょ濡れになつて二つの小川を歩いて渡つた。しかし彼は教会に来る時は毎度、我らの司祭館で説教を聴聞し、自分に洗礼を授けてもらいたいと切願したにもかかわらず、フランシスコ・カブラル師は、あれやこれや、その際生ずべき利益または不都合、困難などを考慮した。そして彼にいつそら信仰を強めさせるために洗礼を延期したが、ついには彼の切な要請に打ち負かされ、その件で（同僚たちと）協議会を催した後、もうこれ以上（授洗）を延ばすことはできないとの見解に達した。かくてフランシスコ・カブラル師は、一五七七年の第四月の八日に彼に洗礼を授け、（親虎）はシモンの（教）名を受けた。そして彼と同時に二、三名の彼の従者が受洗した。

四一 第三六章（第二部第一章） 豊後国主大友殿とその息子義統が、国主がまだ異教徒であった時に、己が諸事、ならびに教会のことでのいかに振舞つたかについて

○フロイス「日本史」第7卷

この豊後國主は禪宗に帰依しており、（同宗に対する）好意、ならびにその宗派の知識によつて自らの名声を高めようと考えていた。そのため（彼は）都にある紫ムラサキと称される同派最高の僧院（大徳寺）に、一つの高貴な建物（瑞峰院）を造り、その維持費を豊後から送るとともに、息子の一人（大友親家）をそこに居らしめることにした。また臼杵の自分の城と向かいあつたところに多額の費用をかけて非常に莊厳な僧院寿寺を建て、都の著名な学（僧）（怡雲宗悦）をそこに住まわせるべく招聘し、領内最高の封祿を給した。彼はその事業に大いなる関心を示し、そのほとんどすべてを自らの手でなすこと欲したほどであった。また（彼は）次男（親家）をその僧院に居らしめて、将来は（その息子を）封祿を受けるその（僧院の）上長に仕立てるつもりであつた。ところでその若者は、同所に幽閉された状態であつた（ことはともかく）、

さらに僧侶になることに内心深く怒りを感じていたので、國主は彼をなだめ、叛逆的で恐るべき性質の持主であるこの息子を、万事につけ、父である（自分に）従わせるためにはキリストにするのがよいと考え、彼を僧院から出し、洗礼を受けさせた。それは先に（本書）第一部で述べたとおりである。領内の貴人や有力者たちは、國主をいつそ喜ばせようとして禪宗の信徒になつたが、

国主は他の人たちにもそうすることを勧告した。だがそうした全期間を通じて、フランシスコ・カブラル師は、國主のために多くのミサを捧げることをやめなかつたし、日本（在住）の他の司祭たちにも（そのため）ミサを捧げるよう命じた。彼はこのように役立つ國主、しかも（イエズス）会が実に多くの恩恵を手ずから授かつて来た人物を失うこと深く憂慮し悲しんでいたからである。とはいえ、國主がその（禪）宗に対して示してきた関心と恩恵は「人間的な言い方をすれば」、その改宗への希望をはるかに上廻るものがあつた。

（中略）

（嫡子）の心の中には、明らかに仏僧たちに対する嫌惡の念が擡頭していたし、（彼は）神や仏の礼拝や儀式は笑うべき行為であると考えていて、フランシスコ・カブラル師の許に使者を遣わし、自分が頼りにしている貴人や、日頃城丹生島城でもともにいる人たちがキリストになることを非常に望んでおり、自らその説得に当る（ことゆえ）、教会側としてもそれについて彼らの理解を得られるよう話しかけてほしいと申し入れた。（だが）まさに（彼らのうちの）幾人かが（教会に）来始めた時に、嫡子は出陣せねばならなくなつたので、その件はより適當な機会まで延期されることになった。

（中略）

城中丹生島城では往昔から、年に何回か偶像に奉獻される盛大な儀式が催され、その際、仏僧たちは種々の經典を（説）誦し、部屋の内外や城（内）の広場には、御守袋ノミナスとか教条がしたためられた紙が貼りつけられることになつて、たが、嫡子はそれいっさいの行事を禁じ、（それらを）除去するように命じた。

かつては學問、權威、身分によつて非常に尊敬されて

いた仏僧たちは、今やまったく零落し、城（内）の馬小屋に群をなして現われたり、有力者の邸へ、扶持や職務を哀願して参上している有様には目を見張（らざるを得ない）。

四一 第三七章（第二部二章）国主がイザベルを離別し、別の女性を娶つたこと、彼女のために説教させ、洗礼を受けしめ、彼女がジュリアと名づけられた次第

○フロイス「日本史」第7巻

老いた国主は、もはやこれ以上、苦痛と嫌気に堪えられなくなり、そうした環境を退き、遠くから己れの身の振り方を定めようとして、臼杵城^{丹生島城}を出で、町の果てにある海辺の五味浦と称する場所に引き籠るために新しい住居を造らせた。彼は領地の支配を息子（義統）に譲つた後は隠居——息子への譲渡のこと——となつて、それらの新居に移つた。ところで彼は、身分ある両親を有するある高貴な女性と密かに協定していた。彼女は、奥方の館にあつて、いわば我ら（ヨーロッパの宫廷で）の侍女^{カマラ・モール}頭のような役を務めていた。国主がこの女性に愛情を寄せたのは、彼女はすでに四十歳を数えていた（から）、その愛らしさによるのではなく、国主の意にかなつた別の面を有していたからである。すなわちこの女性は、つねに病弱である国主にまるで奴隸のように奉仕していた。彼女はそのほか器用な才覚の持主で、家事を司ることに秀で、しかも国主の次男（親家）は、この女性の娘と結婚

していたから、実のところ（息子）の義母に当つていた。（国主）は五味浦に移つた後、ある夜、密かに彼女を館から連れ出して、自分の妻として側に置いた。

イザベルが、このあまりにも突然の、夢想だにしなかつた事件に対して、必死の抵抗を試みた次第を述べることは容易ではない。前日まで幾つもの國の女主人^{セニヨーラ}として君臨し、政庁でいつも尊敬されていた人が、瞬時にしてその車輪は激しい勢いで軌道から外れたのである。彼女は（意気）消沈し、名誉と栄光を失つてしまつたが、とりわけ彼女の心を苛む苦痛は、前日まで自分に仕えていた者が、新たに奥方（の座）に収まつたのを見ることであつた。

（中略）

この話がただちに民衆（の口）から弘められ、邪魔者扱いにされたイザベルは、この出来事を知ると、その我らに対する憎悪はついに頂点に達した。とりわけ（彼女は）、我ら（司祭）が国主に対し、彼が死に至るまでジュリアと同居することを誓わなければ彼女の受洗を許さなかつたと聞くに至つて（激昂した）。城中にいた幾人かのキリストianの女たちは、（イザベル）がもらしていた言葉を案じ、密かに連絡して、司祭館では食物について毒を入れられないように、また夜間、教会に放火されないように警戒せよと注意し（て來）た。だが司祭たちは、主なるデウスの御加護の許にいる（のであるから）、いつさいを（デウスに）委ね申していた。

（中略）

フランシスコ・ガブラル師は過ぐる日、ただちに下に向けて出発して（しまつて）いた。（一方）国主は臼杵の我らの司祭館に来て、夜になるまで二時間にわたつて（そこにいる）司祭たちに質問した。彼は種々質問をし、ローマで教皇の選挙がいかにして行なわれるかを知りたがり、眞の十字架の聖木について訊ね、そのような宝を得た者をこの世における幸せ者と呼んだ。そして「アヴェ・マ

四二 第三八章（第二部三章）国主がキリストとなり、フランシスコの名が与えられた次第

○フロイス「日本史」第7巻

国主はすでに受洗する前から、朝、昼、晩にかけて聖母のロザリオの「アヴェ・マリア」（の祈り）を百二十回、「パー・テル・ノス・テル」十五回を祈り、邸ではコンタツを頸に掛けて歩いた。彼の邸には、シャムにおける禪宗の最初の説教者で、釈迦の弟子であった迦葉^{カシヨウ}と、シナにおける同宗の教祖である達磨^{ダルマ}の実物大の二つの肖像があつた。（それらは）二つとも、そのため特別に作られた建物に安置されていた。日本ではきわめて稀な品であつたから、彼はそれまでその品を尊重していたし、最大の努力をはらつて入手したものであつたから、彼は毎日、それらの像の前で合掌し、頭を地にまでつけて伏し拝んでいた。（しかるに）彼は（今や）その像を屋内から取り出して大地に投げ捨て、小姓を呼び、あの木を拾つて（どこか）外か、海に投げ捨てよ、と言つた。人々は、彼がそれまでいとも尊んでいたものを、かくも侮蔑するのを見て大いに驚いた。

リア」（の祈りの時）が告げられると、祈るために跪いた。

彼はその間に（アヴェ・マリアを）祈るわけを訊ね、

その祈りは誰に捧げるべきか、何の目的で祈るべきか、

一日にどれだけ祈るべきかと質問した。（また）後ほど一

司祭が（國主）の邸を訪ねたところ、（彼は）わざわざ（司

祭）を別室に導き、非常な関心をもって、キリストンは

教会に入る時、どのような様式で礼拝すべきか、聖水を

受ける理由、十字の印しをする理由など（について）質

問した。（彼は）どのように祈るべきかを聞いてやまない

ので、司祭は、俗人には特定の祈りやその数について義

務がなく、おのれのは自らの信心と、心に感じるデウス

のことへの好みによって祈ればよい（と言い）、（さらに）

今は亡きフランシスコ（・ザビエル）師は、そのことを

訊ねたキリストンに、一応適當と思われる（祈りの）仕

方を勧めていた（とて）、それを披露したところ、國主は、

それを日本文字で小冊子に記入するよう依頼した。そ

して、それと同じ順序で祈り、大切に覚えておきたいと

言つた。（日本）語をほどほどに話せるその司祭は、ちょ

うどよい機会であつたから、國主がデウスから賜わつた

御恵みの偉大さについて長々と話した。彼は（次のよう

に言つた）。「殿が（キリストンに）改宗するためには、

二十五年も前から、どれだけ多くのミサが捧げられて來

したことか。フランシスコ・ガブラル師は、主（なるデウ

ス）が殿をこの状態に導き給うため、いかに特別な関心

をもつてこの件を受けとめ、他の司祭たちにもミサを捧

げさせて来たことか。しかもそれは（殿が申されるよ

うに）ひたすら殿の救済を望んだからであった。殿はよ

く御承知のとおり、殿の改宗は、人間の努力や工夫によ

るものではなく、（デウスの）摂理の業であり、デウスの

まつたき御憐れみであり、デウスは万事を巧みに司り、

穩便にそれを統べ給うのである。なぜなら、我らの側か

ら殿が受洗されるよう説得したわけではなく、殿もほん

の数カ月前まではそのような気持を抱いてはおられなかつ

た。それゆえ、あらゆる善の最高の施主であるデウスに

のみ、この（たびの）御恵みについて感謝が捧げられる

べきである」と。國主はその言葉でも判るように、それ

らすべてについて理解を示した。

（中略）

そして（イザベルは）嫡子（義統）に伝言を送り、母

親の切なる勧告として、神と仏を大いに尊ぶよう進言す

る（とともに）、悪魔に直に奉仕するべてん師であり魔術

者である山伏たちを呼び、彼女の孫にあたる嫡子の息子

に（対して）祈禱を行ない、儀式を施させ、それらの山

伏たちに多額の報酬をとらせて、（彼らが）その魔術と迷

信をもつて館に留まつてもらつようせよと命じた。

（中略）

栄光の聖会博士聖アウグスティヌスの祝日にある八

月二十八日の朝、（國主）は自分に仕えていた身分ある六、

七名の若者を従えただけで、二、三挺の駕籠で（我らの）

司祭館に来訪した。これらの若者たちは、その時（國主

と）いつしょに受洗できるように、すでにすべての教理

の説明を聞き終えていた。（國主が）これまで聞いたこと

を今一度要約した長い説教がなされた後、彼は大いなる

喜悦と謙讓をもつて聖なる洗礼を受け、司祭はかねて（彼

が）願つていたようにフランシスコという（教）名を授

けた。彼は自分がいる場所（聖堂）に対して抱いている

大きな尊敬の念から、聖堂内にいることを好まず、外

（に出て）、墨と紙を（手に）取り、自筆でもつて洗礼を

受ける家臣の名をしためた。その後（彼は）ミサに与

（しかも）人々が懇請した結果、（彼は）まるで隠れるかのように聖堂の片隅に身を置いた。当日彼は（我らの）司祭館に招かれたが、自分に授けられた洗礼や、（その）もてなしに対しても満足の意を示し、後ほどあらたに處せられることを想起し、（他方では）我らの主なるデウスが自らに施された大いなる御恵みに思いを致して涙を禁じ得なかつた。

その翌日、すでに（教義）聽き終え、祈りを覚えて（中略）いる（國主）の家臣が十名ないし十二名、洗礼を受けるため来訪した。

その同じ翌日は、ちょうど金曜日にあたつて、（その日）嫡子は（父の）國主を招き、御殿において盛大な宴会を催し、日頃の習慣に従つて種々の鳥や山（で捕えられた）獸（の肉）が供された。國主はその前日に受洗し（たばかりで）、まだ教会法を弁えていなかつたが、すでに以前から金曜日と土曜日には肉食が禁じられていることを聞いていたので、肉にはいつさい手をつけようとしなかつた。それは一同をひどく驚かせ（るところとなり）、嫡子は急遽、魚の馳走による宴会に切りかえさせたほどであった。だがそれは受洗するはるか以前から、異教徒でありながら、金曜日と土曜日には（肉の）断食を実行していた者（國主）にとつては、特に取沙汰すべきことでもなかつたのである。

四四 第三九章（第二部四章）嫡子とその夫

人が聴いた説教、および彼が同國で命じた幾つかのことについて

○フロイス「日本史」第7巻

豊後（國主）の嫡子義統はまだ若くして國を統治することになつたが、彼は、父があのようない決意でデウスの教えを受け入れたのを見て、その（教え）には何か少なからぬ秘儀（ミステリオ）があるように思えてならなかつた。（そこで）嫡子は、國主が受洗してまだ一ヶ月も経っていない九月の初めに、フランシスコ・ガブラル師の許に使者を派遣し、デウスのことを聞くというかねての約束を果したいし、またそれを知りたいので、（日本人）ジョアン・デ・トルレス修道士を説教のために寄こさせたい。ところで日中は幾多の用務に追われていてゆつくり話を聞けないので、夜、（丹生島城）城内が暇になれば、（彼を）呼びにやる、と告げさせた。

（中略）

ある夜、（嫡子）は、豊後の布教長（スペリオール）であつたルイス・フロイス師に、彼から直接幾つかのことを聞きたいので、修道士と同行するようにと申し出た。彼らは夜の十一時司祭館を出た（が）、（館に着くと）まず（嫡子）の私室に通された。それは（嫡子が）特別な親密さを示そうとしたためで、（そこで彼は）奥方（アリゼー）とともにいた。（フロイス）師は、まず彼が知りたがつていたことについて、ついでヨーロッパにおける教会と世俗国家のあり方について述べた。なおまた彼は、今は亡きフランシスコ（・ザビエル）師の生涯と奇跡についてしばしば質問した。こ

れらの話に寄せた彼の嗜好と関心は非常なもので、彼らが帰るに先立つて教会の鐘が早朝の祈りを告げていたほどであった。（司祭たちは）二度も三度も暇を乞うたが、（嫡子は）その時間まで帰ることを許さなかつたばかりか、時間が少なすぎたともらしていた。

（中略）

（豊後の）全領内でもつとも著名で豪華な二つの祭典が府内で催される。一つは戦の神である八幡（ハチマン）に捧げられたもので、他を祇園（キオン）と称する。これら二つの祭典には國主が嫡子がからぬことに出でこれに加わり、行列にも参加せねばならぬことになっている。その第二の（祇園祭り）には、（國主か嫡子は）すべての奉行、ならびに一万五千ないし二万の武装兵を伴つて参加し、盛大な儀式が挙行される。（ところで）最初の八幡（の祭り）に嫡子が臼杵から（来て）参列する時期が訪れた。國主も嫡子もともに府内に向けて出発した。異教徒たちは等しく、（國主と嫡子）が以前にも増してこの祭典に好意を示すものと思ひ、両名が行列を整えて出発し、揃つて（行事に）参加することを欲したことに感謝していたところ、國主と嫡子は彼らの館から教会に直行し、その日は終日、そこで修道士たちと興じて過し、祭典に（出席するような）なんらの気配を示さなかつたので、異教徒たちの悲嘆は一通りではなかつた。第二の（祇園）祭りとなつたが、嫡子はそれに出席することを欲せず、（そのため、その）祭りは全然催されなかつた。このことは（彼らが）最初の（八幡）祭りに列席しなかつた以上に人々を驚嘆せしめた。

（中略）

嫡子は母親に気づかれることなく、密かに奥方（アリゼー）を臼杵の教会に連れて行つて、装飾や祭壇の様子を彼女に見せたいと思い、そのため、ある晩のこと、わずかの家来を

従え、小舟に乗つて十時か十一時に城の裏手から出かけた。フランシスコ・カブラル師は、彼らのために教会をほどよく整えさせておき、できうる限りの歓待を示した。そのため両名は教会とデウスのことにさらにいつそう愛情を持つに至つた。それは決して些細なことではなかつた。というのは、両名が結婚して以来、奥方が館と城から外出したということはかつて聞いたことがなかつたからである。だがそれをイザベルが嗅ぎつけないわけはなかつた。彼女は（息子の嫁）を厳しく叱り、しばしばそのことで彼女を咎めて（やまなかつた）。

四五 第四一章（第二部六章）嫡子が野津に赴いたこと、および豊後におけるキリストタン宗団の進展について

○フロイス「日本史」第7巻

この頃、戦をよりよく進めるため、また従軍の将兵の士気を鼓舞するため、嫡子が、かの地に赴くことが決まつた。出発に先立つて（嫡子）はルイス・フロイス師に、妻である奥方に洗礼を授けるようにしきりに願うところがあつた。彼女はすでに（キリストタン）教の説話を聞き（終えて）いたので、彼は彼女をキリストタンにすることを熱望していた。だが司祭は、多くの正しい見地から彼女の受洗をひとまず延期することにし、（その点について）幾多の理由を述べて嫡子をなだめたが、（嫡子は）それを（容易に）聞き入れなかつた。だが結局は、臼杵の城内にある館の中に、奥方が（他日）受洗した後、また嫡子が戦（場）から帰つた暁に、ヨーロッパの王子た

ちの習慣どおり、聖務に与かれるような聖堂を造るがよいとの話が持ち出され、そのことによつて（嫡子は、奥方の受洗を延期することに）同意した。（嫡子）は（その聖堂を建立するという提案を）喜び、さつそくそれが実現されることを希望し、奥方も彼に劣らずそれを望んだ。館の中に（キリストンの）^{イグレシャ}教会が設けられるのを見ることは、異教徒たちにはこの上なく苦惱（の種）であった。（とりわけ）聖堂^{カッラ}が建つ地点の近くに住むイザベルにとって、それは堪えられぬことであった。こうした事情にお構いなくその工事は進められ、短期間に仕事が終り、大広間の（形をした）聖堂が落成した。そこは当初、イザベルが偶像を安置していた場所であつたから、彼女にとっては二重の苦痛となつた。

（中略）

その翌日、それは月曜日のことであつたが、夕食後、嫡子の同じ邸宅では、さしあたりこれ以上望めないほど立派な祭壇が設けられ、洗礼に必要な準備が整えられた。これらの準備に際しては、嫡子は自分の手で、（祭壇）布や蠟燭立てを用意し、万事につき落度がないように手配した。彼はあたかも修道院における一人の修道士のように大いなる喜悦と愛想を示しながら、それらの仕事をなつた。修道士は洗礼に先立つて、彼らに一つの説教を行なつた。それがすむと司祭は、これら身分の高い若者たちが、よりよく（教えを）理解するよう、別の道理を通して、この（洗礼の）秘蹟の深い意義を説明したので、列席した人々は非常に喜んだ。とりわけ嫡子は誰にも増して満足の意を表し、洗礼のことと、まだ聞き終えていない他の（秘蹟）について説くように願つた。その場で、十八名の身分の高い人たちが受洗したが、そのうちの一人は、嫡子の夫人の姉と結婚している義兄もいた。司

祭は洗礼がすむと、新しいキリストンたちに与えようと、幾つかのロザリオを持って来させた。嫡子はそれらを手にとつておののに渡した。祭壇の後始末が始まると、嫡子はふたたび装飾品を折り畳むのを手伝つたが、彼に見られる（司祭たちに対する）そうした家族的な親しみは、家臣たちを少なからず驚嘆させた。

四六 第四二章（第二部七章）嫡子がその妻なる奥方の洗礼に関して行なつたことについて

○フロイス「日本史」第7卷

ところで嫡子は、シナイ山の聖女カタリーナの祝日に奥方の洗礼が行なわれることになつていて、館（の中）の聖堂の飾りつけをしようとして、十一月二十二日（天正六年十月二十三日）に臼杵に帰還した。その日はちょうど土曜日であつた。嫡子は到着すると、ただちに奥方を訪ね、かねてからの強い（洗礼の）望みにそうようとに激励した。というのは、悪魔がすでに、その（洗礼の）行事を妨害しようと陰謀をめぐらせていると耳にしていたからであつた。はたして奥方（の態度）には、かつての熱心さに比べるといくぶんか冷淡さが見受けられた。彼女は、自分は洗礼を望んでいるが、母君「この人もイザベル同様に悪辣きわまる女で、我らの敵である」が、今受洗するのは差し控え、殿がキリストンになられるまで延ばすがよいと申しておられるし、姑のイザベルも同じ意見である、と言つた。悪魔の手先であるこれら老女たちは、この哀れな若い^{モツサ}奥方に、より大きい幸せ

た。

嫡子は、こうした返事に接し、また司祭がその出来事を報告させるためにダミアン修道士を野津に遣わしたこともあって、ただちに臼杵に向かつて出発した。嫡子は、折りから豪雨による悪路を冒して遅く到着すると、そのまま館に行かず、府内から來ていた司祭や修道士たちに会おうとして教会へ直行した。彼は司祭や修道士たちがそこにいつしょにいるのを見て、大いなる愛情と喜悦を

を（慮つて）いる）ように見せかけ、（実際には）彼女を変心させようと、欺こうとしてこう言つていたのである。

そのうえ彼女の母親は、もしこんど御身が受洗するよう認めない、と言い渡した。イザベル（に至つて）は、それと比べものにならぬ厳重さと辛辣さをもつて彼女に話していた。そのため、この哀れな若い奥方は、いたく悩み、どのようにすべきかが判らず途方に暮れていた。（そこで）彼女は司祭がそこに行く前日に、嫡子の許に使者を遣わして、事の次第を報告した。この報せに接して嫡子はひどく動搖し、かつ悲嘆した。だか嫡子には、自分の母があまり騒ぎ立てないで（奥方の）受洗を受諾するようその心をなだめることはさして困難ではないと思われた。そこで嫡子はただちに自分の名代として母に話をさせるため、一人の貴人を彼女の許に遣わして、彼女（の心）を動かすに足りる、種々差し迫つた事情を述べさせた。だが彼女は悪魔に強く支配されていたので、どのような理由も受け入れなかつたのみか、もし洗礼が行なわれるならば、自分はただちに頭を剃り、「最大の悲しみを表わし、世を捨てた印し」、奥方のかくも大いなる不運を見る前に、娘たちとともに、そこらの荒野をさまよい歩くか、あるいは城^{舟生島}から身投げして死ぬであろうと、言つた。

表わした。そして自分の母のことで苦しみや悲しみを抱いていることは、いささかも表に表わさず、あたかも、自分を苦しめていることは何もないかのように、この上もなく嬉しそうな様子であった。嫡子は城に戻ると、妻子に会う前に、その足で母親に会いに行き、奥方の受洗に同意してくれるようになると、長時間をかけて説得にあたつた。だが悪魔は、（すでに）内心深く彼女を牛耳っていたので、（そこで述べられた）すべての道理は、いつそう彼女を怒り狂わせるところとなり、息子に対して残酷さを増させる以外なんら役立ちはしなかった。

嫡子はこうした（事の成行き）を見て、もはや夜もずいぶん更けていたが、自分の寝室には入らず、旅から帰つて来た時のように、外側の大部屋に身を置いた。そして自分を育てた奥女中の一人と母親の側近者の一貴人を呼ぶように命じ、この両名を通して、自分が出て行つて幾乎ようになにか成功しなかつた一件を、自分がいない間に解決できるかどうか試みることにした。（だが）イザベルは結局、その頑迷さを増すばかりで、もし奥方が受洗するならば、自分が自殺、またはそれに類する行為に出ることは一点の疑いもないことだと言い切つて憚らなかつた。

（中略）

奥方は、館の中で一大騒動が起こることを懸念して司祭のところに伝言を送つたが、天明には、他の貴人たちも同じように司察に伝達するところがあつた。それは（次のような内容であつた）。「奥方の洗礼を延期したところでなんらの不都合ありとは思えない。なぜなら、目下のところ奥方の身辺にはなんの危険もないからである。だがもし洗礼が敢行されればなんらかの騒動や混乱が生じるかもしれない。というのは、奥方の義母（イザベル）は、それを妨害しようと躍起になつていて、奥方の口か

ら（直接）嫡子に懇願するようにと奥方に願つてゐる。

このため、（事態は）嫡子をして当面、母親に同情の念を起こせることになるかも知れない。それというのも、しばらく時が経てば、（嫡子と奥方の）両名が揃つて受洗することもできようし、そうなれば、奥方の義母とて、奥方の洗礼を邪魔だてする理由はなくなるであろう」と。

四七 第四四章（第二部九章）嫡子の野津における所業、談話、および誘惑に抗して採つた方法について

○フロイス「日本史」第7巻

嫡子は館において、数名の老人を用いていた。これらの老人は、嫡子に仕えるのに、十分な資格を有していたかも知れないが、我らの聖なる教えの最大の敵であり、したがつてその教えを弘める司祭たちの大敵でもあつた。彼らは、嫡子が伴天連たちに好意と愛情と尊敬を示し、家庭的な親密さをもつて彼らを遇するのを見ると、心底

からぬ妬みと、度を越した悪意から、死ぬほど辛い思いを味わうのであつた。嫡子は、これらの老人たちがキリストになりたがらない以上、（せめても）彼らをしてその嫌惡している（教え）がどういうものかを知らせよう、デウスの説話を聴聞するように命じた。なぜなら、

彼ら（の言うところ）は、明らかに真理に楯つくるものであつたから、なんの苦もなく、ただちに論破されてしまい、彼らは答うべき言葉もなくなつた。

四八 第四七章（第一部一三章）国主フランシスコが行なつた誓願、親賢が行なつたこと、新たに豊後の教会とキリスト宗門に対する迫害が始まつたことについて

○フロイス「日本史」第7巻

こうして彼（大友宗麟）は、多年にわたつて苦難の道を歩み続け、「後ほど、その箇所で述べられるように」、やがて豊後国自体が敵の侵入を受け、焼却、蹂躪され、彼は（丹生島城）一城に閉じ籠められ敵に包囲され、投降寸前に追いこまれるほどの（憂き目）を見るに至る。

四九 第五〇章（第二部一六章）嫡子が悪習と偶像崇拜に熱中し、（人々の）改宗に反対することに熱心になつた後、教会に対する迫害が生じた次第

○フロイス「日本史」第7巻

それと時を同じくして、ベルショール・フィゲイレド師は、府内から三里距たつた戸次（ハツチ）という地に住んでいる人の病めるキリストンから呼ばれ、その告白を聞きに出かけた。折りから日向での出来事のために、國中が動

搖し荒廃していく、道すがら農夫たちは手に手に武器を携えて司祭に襲いかかり、司祭を囲繞して、槍で長靴を取り上げたり、弓を満月のように張つて脅したり、聞くに堪えないほどの呪いの言葉とか、我らに対する激しい憎悪に発する幾多の侮辱的な言葉を投げかけ、自分たちが不幸になり（豊後の）軍勢が敗北したのは、（日本の）神々が、デウスの教えとその司祭たちに怒りを発したためであるとし、我ら（伴天連）のためにこうなったのだと言つて責め立てた。（フィゲイレド）師は実状を説いたが、彼らはそれを聞こうとも受け入れようともせず、司祭を殺したく思い、司祭とその伴侶をば、歩いていた道から外させ、谷間を経て、ある山頂に運行した。村人たちは、伴天連たちはいったいどうなるか見ようとして馳せつけて来た。彼らは幾多の冒瀆の言葉を浴びせたが、そのうちの一人は、事を決着（させようと）次のように言つた。「何を遠慮しているのだ。此奴に^{こやつに}南無阿弥陀仏^{ナムアミダブツ}」^{〔こ}れは彼らの偶像への祈りである〕を唱えさせて、ばっさりやつてしまおう」と。そして、その仲間たちに向かい、御身らはどう思うかと訊ねたところ、その点で彼らの間では見解が分れた。（そこで）司祭には、彼らは自分を、もつと想いのままに殺すため、ふつうの道から外れた、どこか（人里）離れたところに連行して行くのではないと思われた。そこで司祭は勇気を出し、もうこれ以上進みたくないとの決意（を述べ）、自らの無実と彼らの不正について簡略に弁明し、もしも（この上）自分を殺すのなら、主なるデウスのため、犠牲となつて身を捧げるつもりである、と述べた。すると彼らのうちの幾人かは、この件を、彼方にある城に通報し、どのように処すべきかについて（そこの）城主と相談した。一同は、その城主が容易に彼らに同調して殺害を命じるであろうと信じ

ていた。ところがその身分の高い武士である城主は、まだ少年の頃、バルタザール・ガーゴ師によつて府内の司祭館で寝台の下に匿つて助けられた（ことがあつた。）それは、ある叛乱（を企てた）ために、國主が彼の父とその一族を殺すように命じた争闘（の間の出来事であつた。）城主はその時の恩恵を思い出し、自ら保証を与え好意を示し、（家臣らに）いかなる悪事も働いてはならぬと指示したのみか、兵士らを遣わして司祭に同行せしめた。その結果、この惡辣な兇徒らも、司祭に向かつて、このさき道をたどつて行けば、同じような危険に陥るかも知れぬから戻るようにと勧めたほどに（態度を変えるに）至つた。このようにして（我らの）主（デウス）は司祭を救い給うた。

これらと日々を同じくして、親賢が自分の妙見の城に向かう途中、府内を通過することとなつた。それはまさに臼杵において、我ら（イエズス会員）を殺害し破滅させようとの協議が終わつた直後のことであつたから、大勢の人々は、親賢が府内に行くのは、教会を破壊し、司祭や修道士たちを殺すためだと思い、また事実公然とそのように話されていた。こうして同日の午後、それらの報せはただちに司祭館に伝わり、宵の口には一人のキリスト者が同じことを言いに来た。彼は（町で）人々が話していることを通告し、それは間違いないと述べた。夜半に先立つて、沖の浜のプラスという世帯持ちの、はなはだ信心深い我らの（親しい）キリスト者が、ペトロという（教名の）兄弟とともに武装して駆けつけた。彼らは半里以上も遠いところから急遽駆けつけたのであつて、（こう）言つた。「親賢が早朝にも、同行の別の殿とともに教会を襲撃してくることは、もはや絶対に間違いありません。彼らはすでに嫡子から、そのことで許可を得て

いるのです。そのことが判明しましたので、私たちは教会で伴天連様たちと死ぬ覚悟で、こうして参上したのです」と。

（中略）

すべてこうした出来事は、我らの主（デウス）が、苦惱と難渋の時節にありながらも、御力と御知恵をますます表わそうとしてなし給うたものであり、一方、彼らが憔悴し迫害されている時でも、他方には主（デウス）の御憐れみに信頼して生きる者がかならずいるように、万事を統べ給うている（ことを示している）。我ら（イエズス会員）一同をもつとも慰めてくれたのは、この受難の折に、國主フランシスコが示した忍耐と堅固さであつた。というのは、豊後の情勢があのよくな状態に帰し、（國主の）息子の嫡子は（信仰に）背を向けてしまい、何もかもが失われ、（自らは）他のきらに大きい戦いに備えている身であるにもかかわらず、國主はしばしば告白し、驚くばかりの平静さを保ち、（國主の眼中には）國主がキリスト者になつたばかりに國が滅びたのだと言つて、國主を不斷に誹謗してやまない重立つた敵たちなど、まるでいないかのようであつた。重臣たちは、すでに嫡子が父親に服従しなくなつており、その意見に従わぬことを知つていたので、ある悪魔的な謀略を考えついた。（それは）嫡子を説得して、父親が再びふたたびイザベルを妻に迎えるよう働きかけさせることで、もしも（國主が）それを認めぬ場合には、嫡子をして臼杵の城を出さしめて軍事の処理に当らせ、（他方）自分たちは、心おきなく臼杵の教会を襲撃して破壊し、その際、國主は伴天連や伊留満たちに大きい愛情を寄せてるので、かならずや彼らの救援に介入して来るに違ひなく、その時には、國主とその地にいる（イエズス会員ら）を同時に殺してしまお

うというのであった。人の好いこの老国主は、それでもなお意氣沮喪したり、信仰を失つたりすることがないどころか、嫡子が新たにひどい偶像崇拜に陥つたことを知ると、ただその深い悲しみで病氣となり、重態に陥るに至つた。嫡子が看病に出かけたが、国主は彼が中に入ることを許さなかつたのみか、嫡子の妻や、老（國主）がこの上もなく愛していた、孫（にあたる）嫡子の子供でも、どのように頼んでも受け入れようとはしなかつた。なお、国主は、万事があまりにも凋落し脱線の一途をたどつてゐるのを見て、病体のまま臼杵を出、そこから三里離れた山間に身を潜めたが、もとより彼の忍耐と熱意と模範は多くの人々の心を動かすに足りるだけの糧となつてゐた。国主はその（山間）からあえて三里の道をたどり、たいてい日曜日には（臼杵まで）ミサと説教を聞きに來た。国主は邸にあつては、毎日家人たちをして、自分の前に跪き、声あげて聖母のロザリオの第三部を唱えさせ、またキリストの教理を言わせたりした。彼はデウスのことについて語らうことを好み、大いなる喜びと信心とをもつて（靈的）修行にいそしみ、「今こそ予は我らの聖なる教えの主義が判り始めた」と言つてゐた。身体（の具合）がきわめて不調であつたにもかかわらず、金曜日と土曜日には欠かさずに断食をし、デウスに背くことがないよう、またデウスに対する聖なる畏れの念を保つようと努力したのみならず、できうる限り家臣たちをも罪から免れさせようと尽力した。もしも（家臣たちが）芳しからぬ生活を送り、それを矯正しようとした時には、その人々を解雇した。善良なキリストのたちを賞讃し、その人々に倣うように努め、棄教した者を厳しく叱責し、悪い手本に対しても反感を示した。家臣たちには言葉で

説得するよりは、（自らの）生活の模範によつて説くことを選び、いつもそれらに關しては深い思慮をもつて対処した。というのは、家臣たちに對してキリストになればと言ふようなことはごく稀で、むしろ自らの説得によるよりは、（イエズス）会の人たちの説教を通じて、我らの主（なるデウス）がその人たちの心を動かし給うことを欲した。それは（世間の）人々が、（改宗した人を指して）あの人は教義を理解したからではなく、（國主）に対する畏敬から（キリスト）になつたのだと言ふことがないようするためであつた。

五〇 第五一章（第二部一七章）豊後で我ら

の同僚たちに生じた他の迫害、および
労苦について

○フロイス「日本史」第7巻

既述の、かの親宏（チカヒコ）という大身は、豊後の実力者のうちもつとも重立つた人物であつたが、彼は豊後に服従していた諸国が蜂起しておらず、（豊後）国自身がはなはだしい窮状にあるのを見ると、かつては自分の所有であつたのに、国主が没収して親賢（チカラカ）に与えた莫大な封禄（レンダ）を奪回する好機が訪れたものと考えた。彼は、首席老中（ヨンショウ）、すなわち（首席）統治者として臼杵にいたが、その権威、家柄、権力および勢力（の強大さ）によつて、ほとんど誰も彼の（蜂起）を疑う者がなかつた。（その）彼が突如として、ある夜密かに国主にも嫡子にも挨拶することなく、政庁を脱出したのであった。（親宏）は（政庁を）出た後、嫡子に対し、それがし某は自領に赴くが、（今は）親賢の所領であ

るが（かつて）父君なる国主が某から没収した、かの別の領地を返還するよう（親賢に）命ぜられたい、と乞われた。親宏のような絶大な実力者、こうしたまつたく予期されぬ出発は、当國にとり、とりわけ、他国の諸侯が相ついで豊後に反抗していした時期にあつては、一同にとつてあまりにも恐るべき出来事であつた。人々は、親宏が蜂起することは間違いないと見なし、もし彼が蜂起したならば、豊後にはこれを防衛する術はまつたくないものと考えた。というのは、彼はきわめて強大であり、豊後は戦争によつてあまりにも破壊され包囲されていて、親宏はその軍勢を率いて確実に（豊後の政庁所在地）に侵入し、好きなことができるからであつた。日本の戦の習わしからすれば、その最初の（合戦の）際に、目に触れるいっさいのものは焼却蹂躪され、誰に対しても容赦せず、その神社仏閣までも破壊せずにはおかぬのであって、たとえ親宏が直接にキリスト宗団や司祭たちに反対して蜂起したのではなく、また既述のように数日前には我らと友情を結んだ（人物である）とはいえ、（我らの）修道院（カーネ）が掠奪され、焼却され、司祭や修道士たちが殺されるとか虐待されるとか、大いなる危険に曝されることは確実とされた。なぜならば、親宏に従う連中は異教徒であり、我らに對して親愛の情を抱いていなかつたからである。

この恐怖は親宏の娘婿である秋月が豊後に對して蜂起し、筑前、筑後の諸国を横領したと聞かされるに及んでいつそう深まつた。このことはまぎれもなく、親宏もまた蜂起したことを告げるものであつた。したがつて、政庁の所在地であり、また我らが修道院を有している臼杵（の町）の大部分（の人々）と、豊後最大の都市（シタツ）であり、また我らの十五名の（イエズス）会員を收容している修道院

がある府内の市（の人々）は、市街から立ち退き始めた。そして人々は、生命と、できる限り（多くの）家財を救出しようとして、他の遠隔の地へ移つて行つた。というのは、それら（臼杵と府内）は重要な都市であったので、敵が最初に攻撃して破壊しに来るのは、これらの都市だと思えたからであつた。

（中略）

すべてこれら事件を收拾したのは、（ほかならぬ）國主フランシスコであつた。國主は、直接統治に参与していなかつたとはいえ、あらゆることが（豊後国）滅亡（の方向）に進行しているのを見ると、衷心から問題と取り組んで、祈禱、断食、苦行などによってデウスにすべてをお計りした。我らの主（なるデウス）は、彼の願いを聞き入れて（かくも順調に事を処理）し給うたのであつた。だが國の重立つた人々は、（あまりにも）悪習に染まつていたので、國主が、日曜日や祝日にミサに列席したり、告白をしたり聖体を捧領するのを見ても、また國主が、この上もなく賢明で日本の諸法に通じていることを知つていても、心を動かそうとはしなかつた。國主は（自らの）邸において、毎日、家臣たちが大声で（キリスト教の）教えを暗誦するよう命じ、書状や伝言を通じて、人々が（キリスト教に）改宗するよう（働きかける）心掛けを忘れはしなかつた。教会の建築や十字架の建立には進んで援助し、時には教会の守護の聖人の祝日に（その教会の祭儀に）出席して大いなる（心の）慰安と勇気を示したが、それらは新たなキリスト教を慰め勇気づけるものであつた。

五一 第五二章（第一部二二章）豊後国で起つた他の暴動について

○フロイス「日本史」第7卷

（國主は）そのことについて巡察師（ヴァリニヤー）やフランシスコ・カブラル師に宛てて多くの書状をしたためたが、それらは不憫きわまり、また愛情と恐怖に満ちたもので、しばらく前まであれほど強大で（万人に）畏れられていた國主が、洗礼を受けて後まもなく、立派なキリスト教であるにもかかわらず、その諸国もろとも、幾多の苦労と災難に見舞われ、自邸においてさえも安全な場所を見出し得ない有様で、それを見ては（誰しも）心を打ち碎かれずにはいられないのであつた。國主はこうした時に、自ら抱いていたデウスへの畏敬、（イエズス）会への愛情、キリスト教宗団に寄せる熱意を遺憾なく発揮した。事実彼は（次のように）しばしば語つたり書状にしたためた。「予の心を激しく苦しんでいるのは、予が息子とともに滅亡することではなく、伴天連様方に何の救いの手も差し伸べることができず、予が死ぬことによつてキリスト教宗団が破滅してしまうことだ」と。

五一 第五三章（第二部二二章）巡察師の豊後への旅と途次の危険、および臼杵修練院に命令を与えた次第

○フロイス「日本史」第7卷

それから数日後、紹鉄はもはや（心の中の）毒（性）

をこれ以上隠蔽できなくなり、大いなる掠奪を始めた。

彼は自らが豊後の最大の敵であると宣言し、大勢の人々を殺害し、手当り次第に破壊した。彼は強大であり、非凡の大胆さをもって知られ、万事を謀略で行ない、何事をもいとも容易に成就していたので、一同を恐怖せしめること多大であった。人々はこれで豊後（の命運）も尽きたと考えた。國主フランシスコはさつそく、我らの同僚たちに会いに行き、司祭や修道士たちを呼び、國主も、集まつて来たすべてのキリスト教徒たちもいっしょになつて、大声で「ペーテル・ノスティル」を五十回、「アヴェ・マリア」を五十回唱えることを欲した。彼は、「デウス様以外に（敵に）打ち勝つ術も、逃れる場所もなく、頼るはデウス様のみ」と言い真心をもつて（豊後）國のために主なるデウスに御憐れみを乞い願つた。（これに対し）デウスは彼の祈りを聞き入れ給うたようであつた。といふのは、（まだ）八日か十日も経たぬうちに、紹鉄は、何よりも容易に攻（略）できなかつた、ある堅固な場所に引き籠ると、名状し難い不信感と恐怖感にとりつかれ、ついに豊後の地から離れようと決意し、筑前の國で秋月（種実）と合流しようとした。だが聖なる（デウスの）御裁きと、國主フランシスコの（巧みな）手廻しによつて、彼は味方から見離され、わずか八十名の部下を率いて逃亡中、豊後の国境に陣取つていた日田の兵に襲われ、主従もろとも皆殺しにされてしまつた。この報せを受けた國主フランシスコの喜びようは格別で、主（なるデウス）に感謝して倦むところがなかつた。國主はさつそく、巡察師に書状をしたためて、これらの吉報を告げ、今日（こそ）かの男の死によつて、当初失われたかと思つた豊後も今や救われた（気がする）と述べた。そして事實そのとおりであつた。というのは、（こうして）親貴の翼

がもがれてしまうと、彼の重立った武将のうち二名は、國主フランシスコの手（腕）で、豊後側に投降してしま

い、親貴は大いに氣勢を殺がれ弱体化した。それに反して國主フランシスコは、こうした手腕によつて、当初の

ように信用と威信を挽回し、人々は皆、彼のみが、その賢明さによって（豊後）国を支えていることを認め、彼はかつて見られなかつたほどの畏敬と服従を受けるようになつた。嫡子は父の愛情を悟り、また國主がいかに自分を政権の座に留めることを欲したかということや、國主なくしては自分自身を保持できないことが判つたので、國主に服従し固く團結していた。なおこの際、（嫡子は）親貴の勢力を一挙に根絶しようとして、彼、およびその武将が立て籠つてゐる二城を包囲した。

（中略）

上記の（一五八〇）年の九月に、巡察師（アレシャン

ドウロ・ヴァリニヤーノ）は、フランシスコ・カブラル師、ならびにその伴侶とともに（下から豊後に）到着した。（巡察）団は、府内にしばしば留まつた後、ただちに親貴の城近くにいた嫡子を訪ねて行つた。（時に）嫡子は府内から三里距たつたところにいて、それらの城を包囲していたのである。（巡察）師は同所において、大いなる愛情をもつてもなされ、そこから白杵に向かい、國主

フランシスコを訪問した。國主は（巡察）師が來訪したこととに、格別な満足の意を表した。國主は、聖フランシスコの祝日を慶賀しようと、ただひたすらにその日を待つていたのであつた。その祝日は盛大に慶祝され、巡察師は、城内において立派な飾りつけがなされた中で、オル

ガンの奏楽のうち、美しい祭服をまとつてミサ聖祭を捧げた。ミサが終ると、國主はすべての司祭と修道士を館に招待した。その翌日、國主は府内に息子（義統）を訪ね、城内において立派な飾りつけがなされた中で、オルガンの奏楽のうち、美しい祭服をまとつてミサ聖祭を捧げた。ミサが終ると、國主はすべての司祭と修道士を館に招待した。その翌日、國主は府内に息子（義統）を訪

ねて行き、戦について、種々協議するところがあつた。

（中略）

その最初の人物は、國主フランシスコの三男の親盛と称する、十五、六歳の若者である。この若者はかねてより久しく受洗を望んでいたが、嫡子が邪魔をしたのと、母親のイザベルが、その望みを思い留まらせようと狂奔して妨害したために延引して來たのであつた。だが國主フランシスコは、（親盛が）親賢の後継者としてその家と封祿を繼承せねばならず、また妙見城の城主になる身であつたが、「嫡子の意に大いに反していることだが」、その息子（親盛）が受洗することなしに赴任することを欲しなかつた。かくて彼は洗礼を受けてパンタリアンという教名を授けられた。そしてこのことを親賢はひどく不快とした。

魔が入りこむことを許し給うた。同人は、聖遺物を用いることによつて、キリストianになり悪魔から解放されたものの、後ほど死去してしまつた。だが、そのことからその地には多大の成果がもたらされる結果となつた。というのは、故人の母、すなわち（國主フランシスコの娘）の義母は大いに心を動かされ、また國主フランシスコの娘ジユスタ自身も、父の激励と巡察師の説得によつて、娘をキリストianにする決心をしたからである。彼女には男の子がなく、その娘が家を継ぐため、巡察師は、彼女が娘をキリストianにする決心をするまでは、彼女らを訪問しない、と言い渡していたのであつた。こうしてキリストian志願者たちに受洗準備をさせたため、その地へは説教師が派遣されることとなり、後に巡察師も大勢の司祭や修道士を伴つてそこに赴き盛大な祝祭を催した。その折に、清田殿の娘と（清田殿の）母、ならびに一人の義姉妹、またその他多くの貴人や重立つた人々が受洗した。こうしてその地には、熱意と改宗の火がますます拡がつて、まもなく千二百名以上の者が洗礼を受けるに至つた。これらの新しいキリストianたちは大いなる熱意に燃え、さつそくにも神仏（の像）を捨て、また焼却し、その地にあつたすべての偶像を破壊した。彼らは小さな偶像是、二つの荷に（まとめて）巡察師の許に運んだが、それらはただちに一同の満足のうちに、大きい焚き火として焼き払われた。新たに洗礼を受けた人々が、かつて仏僧たちから貰つて大いに有難がついていた、迷信の御守り（札）、数珠、仏像、成仏を保証する御札などを喜び勇んで持參し、それらを火中に投棄する様は、実際に見るべきものであつた。國主の娘（である清田殿の奥方）の邸にいた重立つた婦人たちもまた受洗した。司祭たちはその地にしばしば洗礼を受けに行き、ミサを捧げ、キリストianの主（デウス）は、府内から二里の（キヨタ）において、

五三 第五四章（第二部）三章）巡察師が府内の市で（設立を）命じた学院、および他に生じた幾つかのことについて

○フロイス「日本史」第7卷

この白杵の城から七里のところに府内（といふ）人口八千人あまりの、豊後におけるもっとも主要な都市がある。當時、この市に（豊後國主）嫡子はその政庁を置いて居住してゐた。

（中略）

我らの主（デウス）は、府内から二里の（キヨタ）において、その地とその城の主将である、國主フランシスコの娘の義兄弟、すなわち、彼女の夫（清田鑑忠）の兄弟に悪

魔が入りこむことを許し給うた。同人は、聖遺物を用いることによつて、キリストianになり悪魔から解放されたものの、後ほど死去してしまつた。だが、そのことからその地には多大の成果がもたらされる結果となつた。というのは、故人の母、すなわち（國主フランシスコの娘）の義母は大いに心を動かされ、また國主フランシスコの娘ジユスタ自身も、父の激励と巡察師の説得によつて、娘をキリストianにする決心をしたからである。彼女には男の子がなく、その娘が家を継ぐため、巡察師は、彼女が娘をキリストianにする決心をするまでは、彼女らを訪問しない、と言い渡していたのであつた。こうしてキリストian志願者たちに受洗準備をさせたため、その地へは説教師が派遣されることとなり、後に巡察師も大勢の司祭や修道士を伴つてそこに赴き盛大な祝祭を催した。その折に、清田殿の娘と（清田殿の）母、ならびに一人の義姉妹、またその他多くの貴人や重立つた人々が受洗した。こうしてその地には、熱意と改宗の火がますます拡がつて、まもなく千二百名以上の者が洗礼を受けるに至つた。これらの新しいキリストianたちは大いなる熱意に燃え、さつそくにも神仏（の像）を捨て、また焼却し、その地にあつたすべての偶像を破壊した。彼らは小さな偶像是、二つの荷に（まとめて）巡察師の許に運んだが、それらはただちに一同の満足のうちに、大きい焚き火として焼き払われた。新たに洗礼を受けた人々が、かつて仏僧たちから貰つて大いに有難がついていた、迷信の御守り（札）、数珠、仏像、成仏を保証する御札などを喜び勇んで持參し、それらを火中に投棄する様は、実際に見るべきものであつた。國主の娘（である清田殿の奥方）の邸にいた重立つた婦人たちもまた受洗した。司祭たちはその地にしばしば洗礼を受けに行き、ミサを捧げ、キリストianの主（デウス）は、府内から二里の（キヨタ）において、

タンたちと会話を交えていたので、（彼らの）主（デウス）も（奥方）の心を一新することを嘉され、彼女は心からキリスト教になることができ、その生活は（キリスト教の）名に背かぬものとなり、人との交際も以前とは異なった態度となり、改宗の立派な模範を示した。彼女もその夫も、豊後の国では重要な人物であり、その配下には大勢の貴人や身分ならびに信用のある人たちを擁しており、府内のごく近くに住んでいたので、それによって（キリスト教宗門は）きわめて高い評判を得ることになった。彼らはさつそく立派な教会を建て、一司祭と一修道士が宿泊できる家屋を作り、巡察師に対して、常時、そこに二、三名の（イエズス）会員が駐在するよう命ぜられたとい懇願した。だがそれほど多くの司祭館を設けることは好ましくなく、できることでもなかつたので、学院の司祭や修道士たちがその地のキリスト教宗団の世話をすることとなつて、だいたい八日ごとに、（府内の学院から）その地のキリスト教徒たちのために、ミサを捧げ説教し告白を聞くため（司祭が）出かけて行つてゐる。この（清田地方の）改宗に寄せる國主フランシスコの喜びが大きければ大きいほど、ジュスターの母であるイザベル（中略）

フランシスコ・カブラル師は、（上記三）地区の上長を多年にわたつて務めて來たが、多大の労苦と年齢（を重ねた）ために、しばしば種々の病に悩まされてゐた。そこで同司祭は巡察師に対し、（上長の）役目を解き、より自由に（靈的なことに）専念できるようにしてもらひた。叔父に依頼するところがあつた。そしてもしそれに同意してくれるならば、即座に家も身分も捨てて、叔父の庇護のもとに身を委ねたいと申し入れた。だがその希望は容認されることとなつて、彼は豊後に留まることになつた。かねがね國主フランシスコは、（カブラル）師が別ことを命じ給うまでは、忍耐して待つように、根

五四 第五五章（第二部三八章）志賀殿が改宗するに至つた端緒と動機について

○フロイス「日本史」第8巻

（中略）

（その若者）には、父の弟である二十数歳の叔父（志賀親教）がいた。同人は、國主フランシスコの娘婿にあたり、豊後におけるもつとも立派で熱心なキリスト教徒の一人であった。彼はしばしばこの叔父に書状をしたためたが、それらの書状は、デウスの教えについてはほとんど何も知らない異教徒の少年のものというよりは、靈的に修行を積んだ大人のそれを思われるものがあつた。彼は遺産の点からいつても、また跡を継ぐことになつてゐる父の家柄からみても、叔父とは比べものにならぬほど高貴な身であつたが、書状を通じ、もしできうることならば、自分を僕として政厅に引き取り、洗礼を受けキリスト教として自由に生きられるようにしていただきたいと叔父に依頼するところがあつた。そしてもしそれに同意してくれるならば、即座に家も身分も捨てて、叔父の庇護のもとに身を委ねたいと申し入れた。だがその者は兵士となり、またある者は結婚し、他国へ生計の道を求めて行く者もおります。そしてこれらすべては、

援助するところがあつた臼杵の政厅にいる貴人たちにも、（カブラル）師の權威と交際は、彼らに（信仰）熱を（喚起）させるであろうと見なされた。

（中略）

かの（若者）は、政厅にいた間は、厳重な監視が付けられてゐたので、夜間も昼間も、その不斷の監視のため外出することができなかつた。それどころか彼はただちに郷里に帰されてしまつた。司祭たちは、彼が受洗を望めなかつたので、聖母マリアの像を与へ、それに祈るようにと訓戒した。彼はそれを貰つて無上に喜び、志賀に持ち帰り、そこからしばしば司祭たちに宛てて書状をしたためた。

この臼杵と府内でも改宗事業は著しい発展を示しております、身分の高い人たちがキリスト教になつています。私は、当地全域の領主である臼杵殿の一人の姉妹に洗礼を受けました。（前の奥方イザベルの姉妹と結婚している井田の領主ソウエキ、および嫡子と老奥方の側近である古荘一閑にも洗礼を受けました。（先に）老中たちはこの人物（一閑）を追放したのですが、嫡子が勢力を挽回してきた結果、四ヵ月あまり前に、彼は以前同様の寵遇を得て旧位に復しました。彼が復帰したことは、嫡子の政厅において、私たちの敵である異教徒を牽制する上において、私たちにとつて少なからぬ助けとなります。事情は今では以前とは異なつた歩みを示して、仏僧たちの寺院は姿を消しつつあります。彼らの収入は兵士たちに与えられるようになつて、仏僧たちのある者は還俗し、ある者は兵士となり、またある者は結婚し、他国へ生計の道を求めて行く者もおります。そしてこれらすべては、國主フランシスコの働きによるものです。

（中略）

気強く待つならば、デウスはからならずや御身の希望をかなえて下さるから、と訓戒した。

聖土曜日の夜が来ると、翌日の行列のために、種々の色と形をした紙の提燈^{ちゅうらん}を携えてキリストンたちがつめかけ始めた。それはまさに見事で、我らの同僚たちは、当地方において、この製品ほど、小刀細工に示された日本人の器用さを端的に物語るものはないと証言していた。

その形において、ほとんどすべてが異なつたようを見えるこれら提燈の数は、三千と推定され、それらの一つは教会を象つており、そこには礼拝堂と祭壇を備え、シナ^{フロカート}の金欄^{カーテン}の飾り布（まであり）、柱にいたるまで非常に巧妙な細工が施されていて、見る者をして驚嘆せしめた。その（教会の）戸口には、血まみれになつて鞭打ち（の苦行をして）跪いている人が（配置）されていた。その他日本の物語を表わした多くの提燈が見られた。行列が出来る頃には、街路はアーチと多くの花でことごとく掩われ、いつも麗かな気分を漂わせた。またそこでは数々の手のこんだ仕掛け（花）火が展開されたが、それらは空中で実にさまざまな形となつたので、皆の目を奪い、それを見ようとして立ち止らない者はなかつた。過ぐる聖金曜日に荆棘の冠をつけて（行列に）加わっていた少年たちは、こんどはとても華やかな黄金色や銀色の冠をかぶつていた。三つの城^{ハセ}から多くの車輪や樹木、その他（花）火細工が出て来て、行列に豪華さを加え、おびただしい数の鉄砲の射撃（音）も（賑やかさを加えた）。人出ははなはだしく、夜半には人々を門外に出して扉を閉ざした。

真夜中になると、すでにその前から教会は立錐の余地もないほどで、内庭も広場も人で埋まつた。彼らのうちの多くは海から船で入りこんだのである。國主フランシスコが、こうした行事の一つ一つに示した喜悦と満足のほどは筆舌に尽せぬものがあつた。

五五 第五六章（第二部四六章）本年、豊後

での出来事について

○フロイス「日本史」第8卷

た。

（中略）

イザベルの兄弟親賢は、己が（後継者の座から）シモン（田原親虎）を放逐し、それに代つて國主の三男パンタリアン（親盛）を養子としたが、彼は末子であつた上に立派なキリストンとして模範を示したので、（國主である）父から愛されていた。彼は妙見の城にいたが、その

ろで起居していたが、このたび同所に（定）住するため立派な家屋を建てた。そしてその入口に、ミサを拝聴するための、美しい祈禱室^{オラトリオ}、すなわち礼拝堂^{カペラ}を設置した。そして老後休養のために、その地での収入を譲つてもらいたいと嫡子に願つたところ、（嫡子）は容易にその願いに応じた。そこで（國主は）翌日、さつそくその地を収納すると、二人の修道士を呼びにやらせ、同地にあつた三つの寺院のすべての偶像を破却するように命じた。

國主はそれらを一体も残さず、ことごとく焼き捨てるよう依頼したのであるが、それは注意深く実行された。その三寺（院）のうちの一つは、國主の好みに合つた小さい僧院であつたので、彼は副管区長の司祭に、どうかそこに一人の司祭と一人の修道士を住まわせるため寄付されたいと懇願した。（國主）はその（旧寺院）が自分の（邸から）遠からぬところにあつたので、たぶん二千名以上を教えたその（付近の）村々の異教徒たちに、（そこで）さつそく説教を開始する意向を（伝達した）。彼ら（住民）の一部はすでに洗礼を受けており、他の者も受洗の準備が進んでいた。だが病身（の國主）にとつては、そもそも遠かつたので、彼は新たに、司祭や修道士たちを宿泊させ得るより設備が整つた別の教会を新たに建てた。そこは邸に近かつたので、國主はキリストンたちの励ましにもなるうと、絶えずそこへ慰安を求めて來訪し

日夜、司祭に付き添つて離れようとなかった。復活祭が来ても、彼は城で多くの異教徒に囲まれているので、そこから出て行くことができなかつたから、キリストンの家臣たちを集め、立派な祭壇を設け、一同は彼とともに長い時間祈りを捧げた。彼は全員の頭に薔薇の冠を付け、頸にはコンタツを掛けさせた。そしてその後で一同を食事に招き、貧しい人々にも食物を施した。

五六 第五七章（第二部五五章）豊後の妙見

城で引き続き生じた幾つかのこと、

および国主フランシスコがその息子たちに行なつた一訓話について

○フロイス「日本史」第8巻

日本人修道士が、パンタリアン（田原親盛）^{妙見岳城}の城で説教していた時、聴聞者の中に、豊後の主要人物の一人の兄弟に当る式部殿という貴人が混じついていた。この人は説教を全部聞き終わると、洗礼を受けてバスチアンの教名を与えられた。彼はその翌日、司祭と日本人修道士を自宅に伴つて帰り、妻や家族、および一族の人々に洗礼の準備をさせ、約八十名が洗礼を受けた。

その城では、偶然にパンタリアンを訪れていた一人の若い貴人も同様に受洗して、シモンという教名が授けられた。この若者は、聴聞した説教に発奮し、それまで偶に仕えて来たことの誤りを後悔して、次のようにして過去を改めようと決意した。

（中略）

このような状態にあつた時に、ペドウロ・ゴーメス師が妙見城に来て、パンタリアンの妻に対し、彼女の父の意に反することであつたが洗礼を受け、マルタという教名を与えた。司祭はそこには一日しか滞在せず、ただちに由布の司祭館に向かつた。司祭はその地に（着いてから）、パンタリアンが飛脚によつて自分の許に届けて来た伝言に接したが、それには次のように述べられていた。シモンとその叔父の一件は（こうして）すでに解決済みである。すなわち、その決定は二人の審判官（を選んで）彼らに委ねられた。そして親賢は（約束した）言葉を撤

回し、老人を保護し匿い利用することがあつてはならぬ。老人は（国外）追放に処せられ、その所領は半ば没収され、残り半分は（老人の）息子に与えらるべし、ということになり、事実、そのように決定したと。

五七 第五八章（第二部五六章）同年、豊後で生じた他のことについて

○フロイス「日本史」第8巻

国主フランシスコの息子パンタリアン（親盛）の義父（田原）親賢は、領地の収入と支配を（パンタリアン）に手放したかのように見せかけた。パンタリアンにはその（真相）が判つており、またそれが悪意でなされたことも知れていたが、その機会を利用しようと決心し、（まだ）義父があらゆる支配権を握っていたにもかかわらず、

もはや妙見の城、収入、家臣、領地の絶対的な支配者であるかのように振舞つて、いろいろの寺院の僧侶たちのところに使者を遣わして、「予は、仏僧たちを必要とはせぬ。よつて貴僧たちが得てゐる収入をば、戦で予に仕える兵士たちに（分ち）与え、その残余は予が没収する」と言い渡した。

五九 第六〇章（第二部六二章）豊後での改宗に際して生じた他の幾つかのことについて

○フロイス「日本史」第8巻

嫡子（義統）には既述のように二人の姉妹がいた。二児とも國主フランシスコとイザベルの（間に生まれた）子供で、イザベルはその二人を、今まで館で自分の許に置いていた。嫡子は一番年下の妹を嫁がせたく思つたが、彼女は（相手との）性格の違いを理由にその結婚には同意したがらなかつた。嫡子はそのことで大いに感情を害した上に、彼女のことで別の不愉快な出来事もあつた。そこで嫡子は戦場から白杵に帰ると、その二人の姉妹がいるところに行き、妹のほうに刀を突きつけ、殺すぞと（言つて）脅迫した。その時、折よく國主フランシスコが白杵に滯在していた。嫡子から脅迫された姫は、夜になると密かに館を抜け出て、父なる國主の邸に身を潜めた。國主はその翌日、さつそく彼女を奥方のジュリアと

五八 第五九章（第二部六一章）本年、豊後での改宗に際して生じた幾つかのことについて

○フロイス「日本史」第8巻

国主は、祝典の動力となりながら、一晩中、教会と修道院で過ごした。この祝典には、（國主の）孫に当る嫡子の子供や奥方ジュースタと（國主の）二人の娘、さらに國主の他の二人の娘も列席した。この二人の娘は受洗しておらず、キリストianになりたがつてはいたが、イザベルの子供で彼女の支配下にあつたし、その兄弟の嫡子が、彼女たちを（白杵の）館に留め置いたので、まだ受洗できずにいた。

二人の子供、すなわちキリストンの少女たちが住んでいた津久見に送り、その娘が洗礼を受けるように命じた。

彼女はかねがねそれを望んでいたので、こうした機会を得たことをこの上もなく喜んだ。豊後の上長は、御変容の祝日（天正十三年七月十一日）にその地に赴いて彼女に洗礼を授け、ドナ・マセンシアの教名を与えた。

イザベルは、息子の嫡子（義統）が妹に対して厳しい扱いをしたことをひどく悲しんだ。そして彼女がキリストンになつたことについては、たいして感情を示さなかつた。嫡子は妹と和解したくなり、マセンシアがふたたび（臼杵の）館に戻つて来るまでは出陣しようとななかつた。（マセンシア）が切に願うところは、父の許からも、またその奥方ジユリア、その他の家人が皆キリストンであるところから、その人々からも離れないことであつた。だが、幾つかの重大な見地から、国主（宗麟）は彼女が（臼杵に）戻つて行くのがよいと見なした。そこで（国主）は彼女がいた津久見から三里（の道中）、家来を伴わせて彼女を（臼杵の）館まで送り届けさせた。

（中略）

臼杵の政庁においては、キリストンと異教徒たちがこの件で最後の決定を待つていた。すると突如、ある夜のこと、嫡子の命令で、（老女の）家の警戒に当つていた兵士たちのうちの幾人か武装した者が家中に侵入し、かの不運な老女を捕えてずたずたに斬り殺してしまつた。そして（他方）子供たちおよびその母親、その他の家人には何らの危害も加えられなかつた。

六〇 第六一章（第二部六三章）志賀ドン・パウロの改宗、および彼がキリストンになる際の騒擾と苦難について

○フロイス「日本史」第8巻

我らの主なるデウスは、志賀の太郎（志賀親次）殿がキリストンになりたいと初めて（心を）動かすようにし給い、彼が臼杵の政庁に赴いた時に我らの司祭館で説教を聞いたこと、ならびに種々の事情から、彼は当分はその望みを実現することができず、国主フランシスコもその（延期）を望んだことは、（一五）八二年の（項）に記載した。そこでその若者（志賀太郎殿）は、毎日（自らが）（志賀の）名家を継ぐ（に至る）ことを待つており、七年間というもの（受洗の）望みを抱き続けて來た。

（中略）

（ドン・パウロの改宗のことが）市中に知れ始めると、彼の臣民たちが説教を聞きに教会に来るようになり、少人数ずつ受洗し、祈禱文を書き写して持ち帰つた。国主は、それとなくドン・パウロに、家臣たちをキリストンにするようにと伝言した。というのは、（ドン・パウロ）の祖父（志賀道輝）はデウスのことを大いに嫌悪していたので、キリストン宗団に対して、放埒な言葉を吐いていた。それがためにその（祖父）は、国主の感情を損ね、今は、豊後の果てなる宇目の城で流謫の境遇をかこつ身となつた。（国主）は（その祖父）に（孫になる太郎殿が受洗したこと）を知らせ、（同時に）孫（太郎殿）にも、祖父にそのことを報告するようにと働きかけた。（太郎殿）がそのようにしたところ、（祖父）は孫に対し、自分としては不本意ながら、汝としては国主の命令を守るほかは

あるまい、と答えた。

六一 第六二章（第二部六四章）ドン・パウロ（ヘ）の迫害と反抗について

○フロイス「日本史」第8巻

ドン・パウロはその（二名）の使者を鄭重にもてなし、翌日には彼らを自分の岡城の屋敷に招くことに決めた。その城は非常に高い（どころにあつた）ので、そこからは領内の一域が望見された。彼らが（城）の上に上がつた後、その近くあつた二ヵ所、あるいはそれ以上の神の社に、彼は故意に放火させた。（それらの建築物）が燃え出すと、屋敷内には尋常ならぬ喧嘩が生じた。というのは、（ドン・パウロ）の家臣たちは、それがどういう（事情）か判らなかつたし、嫡子の家臣たちに至つては、その驚愕は彼らのそれをはるかに上回つた。彼らは周章狼狽し、ほとんど（皆）血相を変え、（ドン・パウロ）が（何かに）もたれ掛つて火災を眺めていた場所の近くに寄つて來た。ドン・パウロは彼（ら使者たち）に（こう）言った。「落ち着かれよ。何のことはない。キリストンになつた拙者の家臣の幾人かが、もうずいぶん前から穢くなつていた、あれらの寺社を清掃して歩いているのだ」と。今は、豊後の果てなる宇目の城で流謫の境遇をかこつ身となつた。（国主）は（その祖父）に（孫になる太郎殿が受洗したこと）を知らせ、（同時に）孫（太郎殿）にも、祖父にそのことを報告するようにと働きかけた。（太郎殿）がそのようにしたところ、（祖父）は孫に対し、自分としては不本意ながら、汝としては国主の命令を守るほかはの許に、四回ないし五回にわたつて使者を遣わし、祖父

その頃、彼の祖父（志賀）道輝は宇目の監視を担当していた。同城は、日向の国境に（近く）、（豊後）の国との境界内にあつて、薩摩との戦の気配を感じさせるものがあつた。ドン・パウロは、その（宇目城）にいる祖父の許に、四回ないし五回にわたつて使者を遣わし、祖父

(道輝)が嫡子(義統)に自分のことを告発したことについてひどく憤慨し、遺憾の意を表し、次のように述べた。「祖父というようなごく近い間柄の親族は、末裔の繁栄を念願し、子孫をば恩恵をもつて引き立て援助するのが世上一般の慣習である。しかるに祖父様は老齢であられ、豊後においては絶大な権威を有し、深い経験の持主であられる(にもかかわらず)、それとまったく相反することをなされるは理解に苦しむところである。ついでにはぜひとも祖父様と(懇)談申さねばなりません、幾多の御苦労をおかけするとは存ずるも、後日事態が收拾つかぬことになるに先立つて、かならず志賀まで御来駕賜わりたく、幾重にもお願ひ申す」と。老人は、三度も四度も拒否したが(孫のドン・パウロ)があまりにも執拗にせがむので、ついにかの地に赴いた。

六二 第六三章（第二部六五章） ドン・パ

ウロに対する迫害と反抗が進展した

いに秀で、貞淑で、家事を見事に司つてゐることに感服して戻つて来たのである。

(中略)

ドン・パウロは戦（場）から自宅に帰りたく思うと、出発するに先立つてペドウロ・ゴーメス師の許に使者を遣り、自分が帰城する前こ、一人の司祭と幾人かの修道

ドン・ペウロは戦（場）から自宅に帰りたく思うと、出発するに先立つてペドウロ・ゴーメス師の許に使者を遣り、自分が帰城する前に、一人の司祭と幾人かの修道士が、家臣たちをキリシタンにするために（自）邸に（着いて）いるよう（配慮）されたないと切願した。

ドン・パウロはこの言葉に接すると、自邸に帰つて行き、妻および家人に洗礼を受けさせようと、臼杵へ一人の司祭と修道士を呼びにやらせた。（かくて）修練生の指導司祭であり臼杵修練院の院長でもあるペドゥロ・ラモン師が、一人の日本人修道士を伴つてかの（志賀の）地に赴いた。ドン・パウロは、司祭と修道士が来訪しつつあることを知ると、相当遠方まで出迎えに行つた。彼はわずかの日々しか家に留まれなかつたので、戦の準備に

いに秀で、貞淑で、家事を見事に司っていることに感服して戻つて来たのである。

ドン・ペウロは戦（場）から自宅に帰りたく思うと、出発するに先立つてペドウロ・ゴーメス師の許に使者を遣り、自分が帰城する前に、一人の司祭と幾人かの修道士が、家臣たちをキリシタンにするために（自）邸に（着いて）いるよう（配慮）されたないと切願した。

アン親盛は、ある（種の）罪に陥り、その結果、彼はさうにひどい別の罪悪に陥った。多くの日本人が大部分陥る罪悪である。すなわち、（彼らは）何らかの罪に陥ると、ただちに（自分はもうキリストンの）教えを棄てたのだと（いうように）考えて、教会から離れ、司祭の前に姿を現そうとしないのである。悪魔は彼らの頭に、「もうお前はキリストンではないのだ」との考え方を注ぎこむ。一般的にいって、それはすべての人々に生じるわけではないが、とりわけ身分や信用のある貴人によく見受けられるところである。パンタリアンもそのことで心を痛め沈み切つて（いたので）、ペドウロ・ゴーメス師は、彼が、教会に駆けつけて来るよう、そして教えを棄てたのだと考えないようにさせようと、万策を講じて立ち返らせようとしたが何の効果もなかつた。

司祭も国主も彼に宛てて書状をしたためた。一人の修道士は、かの地に彼を訪れ、その後、彼と非常に親しい司祭も訪問した。しかしどのように手を尽くしても彼は（正しい）己れに戻らなかつた。そこで司祭は、こうして人間的手段ではいかんともし難いことが判つたので、心して本件を我らの主（デウス）に願うこととし、修道士や（他の）司祭たちにも同様に祈るように頼んだ。（パンタリアン）は、この罪に何カ月か留まつた。司祭たちにしてみれば、彼に寄せる愛情が深かつただけに悲しみも大きかつた。というのは、彼は国主の子息であるとともに國衆であり、妙見城の周辺にいる二十名の殿の終身の指揮官として、豊後の国で要職に就いており、豊後に
セニヨーレスおける最大の領主の一人だつたからである。

六四 第六六章（第二部八〇章）副管区長

の司祭と豊後の嫡子との間に生じた

こと、および国主フランシスコが閑白の許へ薩摩に抗する（ための）援助を乞いに赴いたこと

○フロイス「日本史」第8卷

城を防衛することだけに専念されよ、と命じた。

六五 第六七章（第二部八四章）豊後国の破滅が始まった次第

○フロイス「日本史」第8卷

豊後の国には、肥後との国境に（近い）南郡^{ナンゲン}と呼ばれる地方に封禄と領地を有する、幾人かの強大な殿^{セヨーレス}である老中^{レジエ}たちがいた。その地方はすでに敵が占領しており、それらの殿はかならずや（豊後に對して）叛逆し、薩摩勢に投（降）するものと推測されていた。それらの殿のうちもつとも重立つた人は、入田殿^{ニウタド}と言ひ、他は、ドン・パウロの父の道易^{ドウエキ}であり、そのほかに、多くの兵と立派な城を有する彼の近隣の武将が幾人かいだ。

嫡子がこれらの城主たちに、危惧の念をいだいていることに動かされて、國主フランシスコは、既述のように、関白殿に援助を求め、重大な（豊後の）危機から自分を救つてもらいたいと願い出た。

（中略）

豊後の側からは、関白殿の援助を求める以外何もなかつた。関白からは（豊後に對して）すでに山口の國主である毛利の三万の兵を豊前に遣わしたと伝えて來た。さらに（伝えて）、さしあたっては真冬のことであり、海路は（三、四語分、空白アリ）、五畿内からは途次甚大な損害なしに派兵（でき）ない（ので）、明年早々（豊後國主の許）へ兵士を派遣するであろうし、（関白）自らも残余の軍勢を率いて、三月の初めには大坂を出発の予定である。したがつて、（関白）が赴くまでは（豊後では）自らの諸

薩摩軍は、事、戦いにかけてはただ一点たりとも疎かにせず、その迅速さと狡猾さに長けていることでは、あたかも蜂のようで、豊後の国では、軍兵が不在で、自分たちに抵抗する者がいないと見ると、自分たちを待ち受けている（豊後国内の）裏切り者としめし合させ、薩摩國主の第三番目の兄弟、中務（家久）は三千の兵士だけを率いて土持の道からただちに進（撃）して來た。すると既述の（裏切り）者たちがただちに彼の許に降り（そして彼らは）、ドン・パウロ（志賀太郎）は降伏しようとして、豊後の敵だと（言つて）彼の所有地や町村を焼却し始めた。大勢の者が（ドン・パウロ）の岡城に立て籠つた。彼らは、男女子供合わせて三、四方を数えたということで、そのうちの七、八千名は戦闘ができる人たちであつた。だが、（ドン・パウロ）は嫡子に（次のように）書き送つた。「某の大半の家来は、すでに敵に降伏している父（道易）と心を通じているから信用がおけないし、家臣の多くは父（道易）に降つてしているので、もし父が、自らに降つた連中を守ろうとして援軍を派遣してくるようなことがあれば、某は生命を賭して身を守るであろう」と。だが嫡子は、（ドン・パウロ）のことでは、いつものようにほとんど何の反応も示さず、彼のいいなりにはならなかつた。

リアンはその（城塞）に、中央に聖（なるキリスト）像を付した大きな十字架を建立した。そしてそこで一同

中務（家久）は、日向から三千の兵と、薩摩から五百名、および叛乱軍を率いて、すでに豊後領の宇目に入り、嫡子の数名の家臣に属する小さな三つの城を無抵抗裡に占領した。それからさらに進撃し、幾人かの身分ある人たちと老臼杵殿がいる別の城の所在地である三重に向かつた。これらの者はただちに降伏して豊後の敵に廻つた。中務はそこに留まることとし、（家臣に）ごくわずかの兵を伴わせ、叛乱者たちに道案内をさせて（前方へ）送りこんだ。

（中略）

野津の善良な老人リアンは、敵軍がその地に到着するに先立つて、約三百名のキリシタンとともに、鍋田といふある城塞^{ブオルチ}に妻子とともに籠居した。敵軍が来て、二度にわたつて彼らと交戦した。その後、敵は彼に対して百五十名の女たちを人質とし、また子供たちを渡すようになると既述の（裏切り）者たちがただちに彼の許に降り（そして彼らは）、ドン・パウロ（志賀太郎）は降伏しようとせず、豊後の敵だと（言つて）彼の所有地や町村を焼却し始めた。大勢の者が（ドン・パウロ）の岡城に立て籠つた。彼らは、男女子供合わせて三、四方を数えたということで、そのうちの七、八千名は戦闘ができる人たちであつた。だが、（ドン・パウロ）は嫡子に（次のように）書き送つた。「某の大半の家来は、すでに敵に降伏している父（道易）と心を通じているから信用がおけないし、家臣の多くは父（道易）に降つてしているので、もし父が、自らに降つた連中を守ろうとして援軍を派遣してくるようなことがあれば、某は生命を賭して身を守るであろう」と。だが嫡子は、（ドン・パウロ）のことでは、いつものようにほとんど何の反応も示さず、彼のいいなりにはならなかつた。

は祈りを捧げたが、彼はその人々の間に一人として異教徒が混入することを許はしなかつた。その後、五十名（の異教徒）が入つて來たが、彼ら全員は、機会があり次第キリストンになることをリアンに誓つた。

リアンは過ぐる年、司祭たちのために、居室や倉庫グドンを備えた木造建築の美しい教会を建て終えていた。その教会は、それに劣らず広く、また立派であつた以前の教会の代りとして造られたものであつた。以前の教会は、一夜、すべて焼かれてしまい、（リアン）とその妻は、祭壇の裝飾物と幾枚かの祭服をそこから搬出するのがやつとのことであった。このたびはまたしても、デウスの御前に於ける彼の功徳を増やすために、彼の（屋敷の）真正面を流れる川の対岸に寺院を有する仏僧たちは（既述の）新しい教会と、彼の新しい屋敷、および家臣たちの家屋、なおそのうえに、鍋田の城塞に運んで行けなかつた彼の家財の大半を焼いてしまつた。

その後（城塞内の）人たちの間には、いくらか弱気が感じられるようになり、生き延びるために薩摩軍に投降したほうがよいと考える者が現れ出したので、リアンは妻およびごくわずかの家来を従え、少なからぬ危険を冒して臼杵白生島越の城に赴き、国主フランシスコが亡くなる場所で死にたいと言つて、國主と合流した。（リアン）の妻は、道中の費用として幾ばくかの銀子を懐に入れていたが、敵に没収される危険に遭い、その後、非常な不自由を味わうこととなつた。

（中略）

このジョアンの父の兄弟にパウロという教名の伯叔父がいた。身分の高い人で裕福であり、大家族を有していた。薩摩の兵士たちが豊後の（諸街）道を荒らしながら進撃してくると、親族や友人や隣人たちは、彼の保護を

求めて同家に集合した。彼は、ある嶮山に屋敷を有しており、その背後は何よりも突破し難い深山となつてゐた。

受洗してまだ日は浅いが立派なキリストンであつた。

敵は、彼の（家）の戸口まで来ると、後で誰かが当家に害を加えることなきよう、当家が薩摩軍に属しているという書文かみぶみを与えることなきから（戸口を開いてほしい）と言つた。だがそれは、彼を欺くための虚構であつた。

（中略）

マグダレナは家を出た時、特に自分が愛情を注いでいるものしか携えなかつたが、それは二つの肖像であり、一つはキリストの、他は聖母（マリア）のそれであつた。

折から厳寒で、彼らは、（より）よく歩けるように衣服を少なくし、（途次）脱ぎ捨てて行く（有様であつたのに）、それら聖像だけでは決して身体から離はしなかつた。彼らは荊棘くじらで（身体を）傷つけられて血に染まり、二日二晩山中を歩き通し、かくて疲れ果て精根尽きて清田の城にたどり着いた。そこでは国主フランシスコの娘ジユスターが彼らを手厚くもてなした。その地のキリストンは皆、マグダレナならびにその夫パウロの信仰と徳操に少なからぬ感銘を受けた。

彼女は我らの臼杵の教会に来て、司祭や修道士たちが（臼杵）の城に引っ越して来ないことを、ある意味で咎め始めた。というのは、すでに敵軍がごく近くに迫つていたからで、（彼女は）臼杵から七里距たつた府内の学院にいた豊後の（イエズス会）上長ペドゥロ・ゴーメス師に進言して、（臼杵）の修練院ではどうすべきかを（一刻も早く）命ずるよう、ただちに連絡なされよと（告げた）。

司祭はその通知に接すると、さつそく臼杵に向かつたが、その途次、国主フランシスコの娘マセンシアの書状を受け取つた。彼女も（カタリナと）同じことを司祭に進言していた。（ゴーメス）師は、本年（すなわち一五）八六年十二月四日（天正十四年十月二十四日）、聖バルバラの祝日にあたる木曜日に臼杵に到着した。ところで臼杵にいる一同には、敵があえて危険を冒してまで臼杵に侵入するというような無謀を働くことなどあり得ないと想われて、我らの同僚たちは民衆の噂をたいして気にしていなかつた。

そのような折り、国主フランシスコ（宗麟）がフラン

あたる兵士もいない（状態であつた）。（しかも）この城以外に豊後の国の支えとなるものはなかつた。

そこには、嫡子の母親のイザベルが、二人の娘、すなわちマセンシアとまだキリストンになつていらないもう一人の娘、さらに嫡子の妻とその子供たち、およびたいしで重要な幾人かの男たちと（ともに）いた。

マセンシアにはカタリナという（教名）の腰元アーマーがいた。すでに年配の婦人で、徳操の鑑であり不動の信仰の持主で、彼女の説得によつてその城で五十名を超える貴婦人がキリストンになつた。彼女たちはこのカタリナを、生活ならびに所業において母とも師とも仰いでいた。彼女は頻繁に（目下）修道院において告白をしている。

彼女は我らの臼杵の教会に来て、司祭や修道士たちが（臼杵）の城に引っ越して来ないことを、ある意味で咎め始めた。というのは、すでに敵軍がごく近くに迫つていたからで、（彼女は）臼杵から七里距たつた府内の学院にいた豊後の（イエズス会）上長ペドゥロ・ゴーメス師に進言して、（臼杵）の修練院ではどうすべきかを（一刻も早く）命ずるよう、ただちに連絡なされよと（告げた）。司祭はその通知に接すると、さつそく臼杵に向かつたが、その途次、国主フランシスコの娘マセンシアの書状を受け取つた。彼女も（カタリナと）同じことを司祭に進言していた。（ゴーメス）師は、本年（すなわち一五）八六年十二月四日（天正十四年十月二十四日）、聖バルバラの祝日にあたる木曜日に臼杵に到着した。ところで臼杵にいる一同には、敵があえて危険を冒してまで臼杵に侵入するというような無謀を働くことなどあり得ないと想われて、我らの同僚たちは民衆の噂をたいして気にしていなかつた。

六六 第六八章（第二部八五章）敵が臼杵

に到達した次第、ならびに我ら（の身）に生じ始めた困苦について

○フロイス「日本史」第8卷

三方が海面に囲まれている臼杵城にあつては、守備に

シスコ・ラグーナ師を伴つて三里あまり（離れた）津久見から白杵の城に身を寄せるために来訪した。（津久見は）それより先、主要な物品はすでに（白杵に）送つていて無事であったが、国主が出発するやいなや、ただちに教会も、そして国主の邸もすべて掠奪された。

このような火急の際には、父は子のためになく、夫は妻のためにない。各自は己が身を庇い救うことに精一杯である。そのために修練院は、外部の誰からもまったく救助もされず援助もされないままとなつた。こうして同じ木曜日に、修道士たちは、運び得る状態にあるあらゆる家財を天秤棒で搬（出）した。城は我らの修道院から少しばかり距たつてるので、家財の一部は陸から、そして他の一部は海から運んだ。満潮時に海から行くと大きく迂回することになるが、家財を小舟に積んで、（城の）海（沿いの）側にある擬戸まで運び、そこから城内に搬入することにした。（擬戸）から上（の城塞）までは、かなり長い登り坂となつており、折から雨が降つていたが、（このような）降雨雪の際には道は泥濘（ぬかるみ）となり、（人々は）足をずるずる滑らせ、泥まみれとなつて非常に登りにくかつた。

国主の娘マセンシアと、まだ異教徒であった姉妹は、

できる限り教会の用事を手伝い援助した。彼女たちは城中の女中たちを全員下に遣わし、これら女中たちは雨の中を履物もはかずに教会の道具を（上へ）運ぶのを手伝つた。彼女たちは非常に熱心かつ入念にそれを行つた。国主の娘たちは手ずから荷物を受け取つて、自室にそれを納めた。彼女たちは、教会の下僕たちが家財を運搬し、疲れて自分たちの前に着くと、彼らに食事を与えて元気づけ、その労を讃え、荷物を全部城内に運び終えるまでは休まないと注意するなど、まるでその作業

の一つ一つが自分のことであるかのように細かな注意と配慮を示した。

（ゴーメス）師が府内から（白杵に）到着したその同じ夜、幾人かの日本人修道士は（ゴーメス）師に、（白杵にいる）司祭と修道士全員を伴つて城に避難するよう懇願した。だがそれほどまでに事態が緊迫している様子もなかつたので（ゴーメス）師は同夜そこに留まつた。

待降節の最初の金曜日に当る、その翌日、ペドゥロ・ゴーメス師がミサを捧げていると、ただごとならぬ動きが生じて、すでに敵がやつて來たので避難せねばならぬ（ようと思われた）。そこで司祭はミサ（の一部）を省略してそれを捧げ終えると（修練院を出発して）城に入つて行つた。（修練院では）祭壇を取りはずす時間がなかつたので、そこは飾られたままであつた。だが後になつてまだ敵が來ていないことが判明し、修道士たちはただちに、家財とか修道院に置いてあつた食料を城に搬入する仕事をふたたび続行した。（修道士たちは）棒で荷物を担いで運んでいたが、折から異教徒たちもあちらこちらから城へ避難して來ており、その数はおびただしかつた。

修道士たちは、時々（棒の）前部の荷が重くなり後方のが軽くなるのに気がついた。実は、後から付いて來ていた異教徒たちが、人数が多いと道路が狭いことをこれ幸いと、遠慮会釈もなく失敬できるものは失敬して自腹を満していたのであつた。

白杵の我らの修道院は広大であり、我らは何年もそこに（居住して）いたので、修道士たちの力では、短時間にそこの家財を小さな品まで全部持ち出すのに十分でなかつた。かくて幾多の品品が、その重量のため、また取扱いの難しさから搬出されないままとなつた。たとえば三口の鐘とか一台の大時計、それに非常に美しく大きく、

かつ見事な出来栄えの被昇天の聖母の（画）像である。これはナポリ生まれのジョアン・ニコラオが、数日前に、白杵の国主フランシスコの教会用として完成したばかりのもので、一枚の厚く重い板の上に油絵で描かれていたことを望んでも、（城）内に入られるのにそれが通れるほどの（大きい）戸口が城にはなかつたからである。そこで（画）像の上部を板で釘付けにして教会に（留め）置き、運を天に任せることにした。

聖アンブロジオの祝日（の前日）にあたる土曜日（十月二十六日）の朝、修練院の院長であり修練生たちの教師であるペドゥロ・ラモン師は数名の修道士を伴つて、まだ何か運べる物はないかと（修練）院に戻つてみた。というのは、当地では、たとえ買いたくともヨーロッパやインド産の品を見つけることができないからである。数名の修道士は、安全に仕事を運び、下方で家財を集めている人々の見張役をするために、修練院の屋根上に登つて行つた。もし、敵が突如襲来しておれば、彼らはなんら手の施しようもなかつたのであるが、（幸い）敵（兵）は、（途上）眼前にあるものすべてを掠奪し破壊し焼却しながら援慢に前進して來ていたのである。

すでに正午近くになつて、敵はいつそう近くに出現し

た。そこで我らの同僚たちは、全員（修練院から）出て、

急遽、城（内）に退避した。

敵の先發隊は約二百名あまりであつたろう。彼らは我々の教会から城に通ずる真直ぐな街路（ルア）に侵入して來た。その通りには、すでに家財も人（影）もまつたく見受けられなかつた。（人々は）他の（通りの）人たちとともに避難してしまつっていた。

柴田リイノは国主フランシスコの家臣で、豊後のヘル

クレスと呼ばれていた。彼は日向における合戦、その他参加したあらゆる戦において、その礼節を弃えた行為によってつねに名声を博していた。そのため薩摩の軍勢は、彼に対する特別の憎しみを抱いていた。(柴田リイノ)は、己が息子と数名の家臣を従え、街路に出て敵に立ち向かった。彼は勇猛果敢な戦士であったので、敵に損害を与える(彼ら)後退せしめた。ところが敵勢のうちの幾人かが、その辺りの(民)家に隠れしており、彼のちょうど背後にあたるところにいたが、彼はそれに気づかずいた。これらの敵が背後から(彼を)槍で貫き、矢を射かけ、彼およびその息子をその場で殺害してしまった。

敵はこの二人の首を斬りとると、その首を槍の穂先に突き刺し、城の麓に来て「汝らの主将の首は、もうここに見られるとおり。おのおの方、降参されよ」と呼ばわつた。

その後、敵はこの地の領主である白杵殿(白杵鎮尚)が、(白杵城)の真向かいに設けていた別の城に向つた。(白杵殿の)家臣たちが(寝返って)自ら敵の案内人となつて同行した。そのために敵は何の苦もなくその城を占領し、城内にいた者は降伏した。

(中略)

大群衆が白杵の城に避難して来たために、そこではこ

れら民衆の悲惨な光景と嘆かわしい状態が(展開されたが)、今ここでそれを叙述することは容易ではない。すなわち、その(白杵の)町とその周辺の(村落の)住民は「下層の人々についてであるが」非常に貧しかつたので、彼らはその小さい家屋、およびそこに居住することを断念し、家具を持ち運ぶことができなかつたので(せめてもと)、米、衣類、台所用品、その他貧素な所持品を地中に埋めるよう努めた。女たちは、あるいは幼子を抱き、

あるいは手をひいて歩き、後で子供たちに与えるものとてはごくわずかしか携えておらず、(子供たちの)生命だけでも助けようと泣きながら城に逃れて行つた。城にたり着いたところで、そこには家屋も寝室もあるわけではなく、水が少ない小さな井戸はたちまち干上がつてしまい、それは遠いところにあった(上に)深く、かくも大勢の人々に飲ませることはできなかつた。薪もなければ食料もなく、折からの十二月の酷寒から身を守る隠れ場もなく、冷たく堅い地面か、さもなければ、城に避難して来た群衆のために一面泥濘(ぬかるみ)と化して不潔で悪臭を放つ泥土の上で、雪と夜露を堪えねばならなかつた。

(中略)

一同が深刻な恐怖に襲われた原因は、(丹生島)城には守備に必要なものが何一つなかつたことである。敵が来攻した時に、彼らと一戦を交え抵抗できるだけの頼るべき兵士はいなかつた。なぜなら嫡子は、こうしたことでは何の準備も残しおかずには城から出て行つており、老国主は津久見にいたのでは生命がおぼつかないので、急遽(白杵)城に避難して、全然何の用意もせずに來ていたからである。その緊迫した様子は、城中からペドウロ・ゴーメス師が、府内の学院長ペドウロ・フランシスコ・カルデロン師に宛てた書簡中の次の言葉から察するに足りる。曰

く、「私どもは(敵に)包囲されており、(今は)主(な

るデウス様)が私たちに何をお望みか待つているところです」と。國主の苦惱は深刻さを増して、もしここ三日以内に府内から援軍が到着しない場合には、(城中の人々が)生き長らえたにせよ、あるいは敵に手渡されたにせよ、城は放棄せざるを得ない(状態となつた)。敵(兵)の数はまだごくわずかで、城内にいる人々の数とは比べ

ることは)デウスの正義の鞭であり懲罰であつたから、豈後の人々が薩摩軍に對してあまねく抱いている卑劣不安、戦慄的な恐怖が大きくのしかかり、万事に先行していたのである。こうした恐怖感は人々の心に染みこんでおり、彼らは頭を上げることもできず、その眼前にはかの恐ろしい死の光景と悲しい死の影だけがつきまとつていた。人々はこうした焦躁や不安に堪えきれなくなつて、ペドウロ・ゴーメス師に向かつて敵と交渉し、敵が自分たちの生命を保証して無事に帰させてくれるならば、城を明渡す用意があると話合いをつけてもらいたいと願い出るに至つた。

ペドウロ・ゴーメス師は、彼らがなぜこのように弱気であるかが判つたので、激励する一方、彼らが懇願してもやまないので次のように答えた。「皆さんがそのように考え、そうすべきだと決心しておられるのなら、私としても伝言を携えて行き、(敵と)交渉しないわけにはいかない。だがそれには一つ条件がある。すなわち國主フランシスコ様とか嫡子の奥方様とか、その他城中の重立つた方々が私にそうするように命じた署名(入りの文書)を授けられる必要がある。さもなければ、嫡子様は、そのような行為を私の責任に帰せしめることになろうから」と。

そこで人々は考え直し、後刻生ずべき不測の事態を案じて、城に残り、そこに留まるほうがより安全であるとの合意に達した。

デウスが、(先に)我らに対して百俵の米を城内に搬入するよう命じ給い、そして(我らが)修練院から(それらを)運んだことは、デウスの偉大な御摶理であつた。というのはその食糧によつて司祭たちは(露)命を繋ぐを得たのみならず、城内に避難した身分の高い重立つた

人々も助かつたからである。

(中略)

國主フランシスコは万人にとつて忍耐と信仰の生ける模範であった。彼は己れをデウスの御意志に従え、デウスの御恵みに感謝し奉ることを忘れず、貧しい人々の救助にいそしみ、城を救出するための方策を練る一方、コントラツを決して手から放すことなく、彼にはこのようない

時こそ、もつとも（人々）改宗させるのにふさわしいと思えたので、（人々の）靈魂を助けることに精を出し、改宗事業に対してもう深く注意を払うことを見失なかつた。なぜなら、いつも日本においては、（海上に譬えるならば）このような難破の際にあたつて（多大の）靈的漁獲があるものだからである。こうして國主は、マゼンシアの姉妹にあたる娘に（キリシタンの）説教を聞くように命じた。彼女は山口の九ヵ國の國主である。（毛利）輝元に嫁することになつて、彼女はその腰元たちとともにキリシタンになり、彼女がすでに以前から願つていたとおりレジイナという教名が授けられた。

(中略)

臼杵の城には、ドン・パウロおよびこの若者の祖父も避難していた。（老人）は道輝といい、宿老であり、豊後における重臣の一人である。既述のようにこの老人は、デウスの教えに対してはなはだ頑迷であり、つねにキリスト教の名を憎悪する者で、孫のドン・パウロが改宗する際には幾多反対し妨害したのであった。（しかし）この老人は、その妻とともに説教を聞き、（臼杵の）城で洗礼を受けるに至つた。妻は善い性質の持主で、つねに立派なキリスト教であることを証した。

(中略)

敵勢が臼杵を包囲していたのは、わずか三日間に過ぎ

なかつた。彼らは城内が悲惨で無力な状態にあることが判ると、野津に駐留している主将に対して千名だけ援軍を寄こしてくれれば臼杵の城は容易に降伏すると通知した。（だが）我らの主（なるデウス）は、その主將が兵士を（増）派することを承諾せぬよう望み給うた。かくして敵の軍勢は戻つて行つた。人々が証言するところによれば、敵は臼杵地方からだけで、婦女子を含めて三千の捕虜を連行したらしいのことである。

敵が立ち去つた後、深刻な恐怖から免れた（臼杵の）地では、一夜が明けて早朝に城門が開かれるやいなや、（城内にいた）窮民は、分捕品を求めてたり自分たちや他人が地下に埋めておいたわずかばかりの（日用）品を掘り出しに行くために我先にと重なり合いながら出て行き、そのすさまじい光景は、人々に恐怖感を抱かせるばかりであった。彼らはそれら（の食料）を見つけると、妻子に食べさせるために携えて（城に）遅く帰つて来た。

すべての者が瘦せこけて容貌が変つており、どれほど悲惨な日々を過ごしたかを物語つていた。

司祭たちは城内では毎日ミサを捧げ、残りの時間中、彼らのうち三名は絶え間なく続く告白を聞き、日本人修道士たちは、新たにキリスト教になりたがつてゐる異教徒たちのため説教に従事した。

(中略)

嫡子と伯叔父の親賢、および閑白から派遣された二人の主将は、遠く豊後を離れたところで、さして重要でもないことに従事していた。彼らは豊後での出来事について報せを受けると、府内の市にやつて來た。彼らは準備し全力を挙げて敵を攻撃し破滅させ、彼らを国外に放逐しようとするどころか、まったく平然と府内に留まるこ

ととし、敵が来攻した場合に備えて防塞を築くのに汲々たる有様であつた。彼らは国内で敵が荒らしまくつており、すべてが焼き払われ、婦女子の大群が各地から捕虜となつて拉致されて行くのを毎日耳にしながら、それについてはそ知らぬ風を装つてゐた。そうしたことにして耳をかそうとはせぬ（ばかりか）、したい放題に酒宴を張り遊興に耽つてゐた。

(中略)

臼杵城の正面にあたり、中に入江（を挟んだ）対岸に、國主フランシスコがまだ異教徒であった時に建てた禪宗の一僧院（寿林寺）があつた。その僧院は、今は嫡子に属しており、そこでは偶像崇拜のほか、他にもデウスに対する罪（となること）が数々行われていた。このたびの戦時中、仏僧たちはそこに寄寓していた。だが敵の軍勢も地元の異教徒たちも、仏寺や仏僧たちの家屋に対しても何の害も加えなかつた。

一人の勇敢なキリストンの女がいた。彼女は異教徒たちが、我ら（イエズス会）の教会や修道院に対して行ったことをいたく悲しみ、かつ無念に思い、自ら何らかの復讐と報復をしようと考えた。彼女は、人々が早朝に食物を探しに城から出て行った時に、自分（も）食物を求めて行くとの口実のもとに城から出た。そして入江に沿つて歩いて行き、なんら恐れることもなく、かの（僧院）の幾つもの建物の中に入つて行つた。彼女は、あるいは仏僧たちが身を潜めてはいまいかと訝りながら、高価な仏像はないものかと入念に物色して歩き、一生懸命に捜した結果、はるか上方の非常に暗いある天井裏に、大切に保管されている貴重な一体の仏像を見つかった。それはかつて國主フランシスコが同寺に所有していた品で、手作り（の彫像）であつたから、彼女は着物の中に包み（隠して）司祭の許にもたらした。彼女は異教徒の誰からも見つかることなく知られもせずにこれを行なつたので、（異教徒たちが）嫡子に告げることもなかつた。彼女はその寺院を出るに先立つて、そこには人影を見受けず、自分ひとりだけであつたので、それらの建物が一つとして残ることのないよう随所に火を（仕掛け）おいた。

彼女は巧妙にそれを準備したので、彼女がまず避難し、城に着いた頃には、その寺院も（仏像たちの）家屋もすべて燃え始めて何一つ残らず灰燼に帰した。

（中略）

官兵衛殿の船が（準備のため）時間が足りず、また逆風に遭つて途中で数日費やしていた間に、白杵において司祭たちは、府内から五里のところに、荷物を運ぶのに（誰がよい）雇主は（ないものか）と待機している一隻の大型船があることを知つた。その船ならば我らのすべての人員と家財を下関まで輸送することができ（そうに

ちが、我ら（イエズス会）の教会や修道院に対して行ったことをいたく悲しみ、かつ無念に思い、自ら何らかの復讐と報復をしようと考えた。彼女は、人々が早朝に食物を探しに城から出て行った時に、自分（も）食物を求めて行くとの口実のもとに城から出た。そして入江に沿つて歩いて行き、なんら恐れることもなく、かの（僧院）の幾つもの建物の中に入つて行つた。彼女は、あるいは仏僧たちが身を潜めてはいまいかと訝りながら、高価な仏像はないものかと入念に物色して歩き、一生懸命に捜した結果、はるか上方の非常に暗いある天井裏に、大切に保管されている貴重な一体の仏像を見つかった。それはかつて國主フランシスコが同寺に所有していた品で、手作り（の彫像）であつたから、彼女は着物の中に包み（隠して）司祭の許にもたらした。彼女は異教徒の誰からも見つかることなく知られもせずにこれを行なつたので、（異教徒たちが）嫡子に告げることもなかつた。彼女はその寺院を出るに先立つて、そこには人影を見受けず、自分ひとりだけであつたので、それらの建物が一つとして残ることのないよう随所に火を（仕掛け）おいた。

彼女は巧妙にそれを準備したので、彼女がまず避難し、城に着いた頃には、その寺院も（仏像たちの）家屋もすべて燃え始めて何一つ残らず灰燼に帰した。

（中略）

副管区長の司祭が下関から長崎へ出発した三日後に、ペドウロ・ゴーメス師から（使者によつて數通の）書簡が下関に届けられた。それらの書簡にはもっぱら白杵が（敵に）包囲されている次第、そしてもし、府内にいる嫡子が援軍を寄こさなければ、（白杵）城は失われるか、または降伏する恐れが多分にあることなどが述べられていた。

思われた。そこで百クルザード以上を払つてその船を借りきり、さらに幾多の困難と危険を冒して、より小さな（数隻の）舟を雇い、周辺の海上に大勢の盜賊や海賊が横行している中を、それらの小舟で、かの大型船のところまで家財や司祭や修道士たちを輸送した。ペドウロ・ゴーメス師は、フランシスコ・ラグーナ師および二名の日本人修道士だけは國主フランシスコ、およびすべてのキリストンとともに残留するように命じた。

○フロイス「日本史」第8卷

第六章 第六九章（第二部八六章）府内の学院、および白杵の修練院の司祭や修道士たちが豊後国を退去するに決した次第

教会で用いられていた祭服や銀は、それより先、あらかじめ國主フランシスコの娘、ジュスタが城主（夫人）である清田城に保管されていた。だがその城もたいして安全ではなかつたので、ふたたびそれらを城に取りにやらせ、府内から船で（山口へ）運ぶことにした。だが（人々）に悟られぬように学院からそれを持ち出して、半里も離れたところにある海の港まで、人目につかずして運搬するためには、大箱とか籠に入れて行くことは不可能であつた。なぜならば（そのようにすれば）ただちにそれらの荷物は損失物として差し押さえられ、運搬人は殺されたからであつた。このように他に方法がなかつたので、彼らは別の策略を用いることにした。すなわち、祭服と聖杯、その他の祭具や書物を、古く汚れた藁の米俵で包み、持ち下げ（て歩け）るくらいの大きさにして腕の下（に抱えて）運んだ。そのためには長白衣の飾り縁をほどいて、白衣は修道院に残し、上祭服、腕帛、それに襟垂帶だけを、すべて嵩張らないよう、もみくちやに押しつぶして人目につかず持ち出した。このように一回ごとにごくわずかしか搬出できなかつたから、その準備にはひどく時間がかかつた。シナ製の塗金された非常に美しい木製の大きい聖遺物入れも持ち運ぶことができなかつたの

で、（彼らは）遺物だけを取り出し、それらの容器は *buyoens*、その他これに類したものとともに府内に残さざるを得なかつた

六八 第七〇章（第二部八七章）豊後の最

後の破壊、および本年当初の出来事について

○フロイス「日本史」第8巻

（豊後国主）嫡子（義統）は、薩摩軍が攻めて来た時に身を守り得るために、他の二名の（閥白の）主将とともに上原（ウエノヘル）と称するある場所に一城を築くことに決心した。だが彼らは心して眞面目に築城の作業に従事しなかつた。彼らの不用意ははなはだしいもので、（日夜）饗宴や淫猥な遊びとか不正行為に現をぬかしていたので、その城（の備え）は笑止の沙汰であった。したがつて（薩摩軍が来襲した時に、彼らが）助かるなど思いもよらないことであつた。

ところで國主フランシスコの息子パンタリアン親盛は、司祭に対し、もし府内で何事かが起こつた場合には、司祭は家財を携えて（自分の）城（妙見岳城）に身を寄せるようにと伝えていた。

（中略）

本年（すなわち）一五八七年の一月十六日（天正十四年十二月八日）に、薩摩の軍勢は、府内から三里離れたところにある利光（トシシタ）と称するキリシタンの貴人の城を襲つた。城主は府内からの援助を頼りに力の限り善戦した。だが敵は攻撃の手をゆるめず、ついに武力によつて城内

に侵入し、その城主、ならびに多数の兵士を殺害した。

府内にいる味方の（豊後）勢は、（利光殿の）城が占拠されているかどうか確かなことを知らないまま、赴いて囲みを解くべきかどうか評定を続けていた。結局、彼らは出動することに決め、榮えある殉教者聖フイビアンと聖セバスティアンの祝日（天正十四年十二月十二日）に府内を出発した。

（中略）

府内の学院にいた我らの同僚たちはそうした動きを見て、上原（ウエノヘル）の新しい城に身を寄せた。同城へは、それより先に家財を送つてゐたのであり、（他方）教会には幾人かのキリストを置いて見張りをさせた。一同は、敵がそのままの同じ夜に府内に侵入しなければよいがと大いなる不安に怯えながら、その晩は城内で過ごした。というのは、もしそうなれば市民も城内の者もお手上げだったからである。だが（同夜は）豪雨に見舞われたので、敵は市（まち）を攻撃して來なかつた。

朝になつて司祭は一同がいるところは、後日薩摩の連中（まで）が語つていたように、人間が住む城というよりは、野獸の洞窟にも等しいものであるのを見て、國主フランシスコの息子パンタリアン（親盛）に相談した。司祭が府内に踏み留まつたのは、ほかならず彼のことと思えばこそであつた。（これについてパンタリアンは司祭に）「この場所は安全ではないので、明日、カルヴァリヤー

ル師と日本人修道士が住んでゐる予の妙見城に移るがよろしかろう。そしてそこで府内のこれから先の様子を窺うことにしておられるがよい」と。かくて（司祭たちは）同所から学院に戻つて待機していた。まさにアヴェ・マリア（の祈り）の時間にパンタリアンは使者を寄こして、話したい用件があるからジョアン・デ・トルレス修道士を

（至急）派遣されたいと伝えて來た。（その後）修道士は戻つて來ると（次のようにパンタリアンの伝言を）語つた。「嫡子と二名の主將（長宗我部と仙石）は、かの城にいたのでは安全でないので、（同城を）手放して嫡子の伯叔父（田原）親賢が監視している、府内から三里離れた高崎城（タカザキ）に行くことに決めていい。ところで（今後）どの

ようすに情勢が變るか判らないから、伴天連殿は（上原の）城や学院に置いてある家財のことは断念して、ただちに今晩（にでも）妙見（城）に赴かれるがよいと思う。そのためには伴天連殿に同行する人を派遣することにする。伊留満方は教会に留まり、城が放棄されるのを見届け城が（実際に）放棄されたならば、予が学院に立ち寄つて二人の伊留満をお連れしよう」と。

この伝言によつて司祭は急ぎ始めたが、さりとてすでに（時計は）夜の八時を告げていて、そう早く行動に移るわけにはいかなかつた。司祭は一人の修道士とともに、それぞれ馬に乗り、修道院の使用人たちは何も携えないで出發した。というのは、同所から妙見城までは十三里もあつたし、大雪が降つていていたからである。こうしておののは修道院からは（わずかの）持物、すなわち衣服と一個の聖杯（カリス）と一冊のミサ典書以外に何も運び出すことができなかつた。しかもその聖杯さえ、のちほど、道中で失う始末であつた。

修道院を出ると、一同はそのあたりの田畠（カント）から大勢の人々が出て來るのを見て驚いた。我らの同僚たちは、すでに殿たちが城を放棄したのかしないのかを知らなかつた。だが司祭に付き添つて來た男たちは、あまりにも大勢の人々が逃げて行くのを見て、皆が修道士と司祭に急ぐよう（と督促）し始め、脚をしつかり馬につけるようと言つた。こうして彼らは他の人々と同じように野（カント）

道を精一杯走った。

(中略)

嫡子もまた妙見にたどり着いた。彼がそこに身を寄せた時は（わずか）八名の家来（しか）従えて（いなかつた）。彼は日用品が入った小さな籠を自分の手で整え、それをある武士の召使いに渡したが、そこには一人として自分の小姓モツシがいなかつたからで、ふだんならそういう折には寝床をしつらえたりする（小姓がいたのである）。

（それより先）同夜、（嫡子）は高崎に避難したが、そこも安全ではなかつたので、彼は伯叔父の親賢とともに、その城から逃れて来たのであつた。妙見にいる時、嫡子（義統）は弟のパンタリアン親盛に、妙見城に（居所を）移したいと告げさせた。（だが親盛）は食料（の備え）がない（ことを理由に）、それは不可能である、と答えた。

(中略)

このたびの戦で、とりわけ日向方面における出来事は次のとおりである。薩摩の軍勢はすでに豊後の国を征服し、（豊後の）国のもとては、白杵城舟生島城と佐伯の諸町村サカベと、ドン・パウロ（志賀太郎）の軍勢が残るのみであつた。

薩摩の大屋形（島津義久）弟の中務（家久）は、すでに豊後の国主を名乗り、（豊後の）国の土地や収入や位階を自分が兵士たちの間に分配し始めていた。（その時）突如として閑白殿から遣わされた、その弟（美濃殿）が率いる五万近くの兵士から成る軍勢が（豊後に）到着したのである。官兵衛殿は、つねに前衛の主将として参戦していた。薩摩勢は、自分たちの身に襲いかかって来る軍勢の（実）力（がどれほど強大なものか）が判り、その上関白が自ら薩摩の国を討伐するため来ようとしていることを知るに及び、（閑白の）軍勢が府内に達する三日前に全兵士は逃走し、占領していた諸城を放棄した。

それから諸城の城主や豊後の老中レジエドーレスたちは、（それまで）敵に降伏していたが、状況が一変したのを見て、己が身にふりかかるこれから後の災難から免れようと、ふたたび豊後（方）に降る以外になすべき方法とてはなかつた。

(中略)

（志賀）ドン・パウロの領地の近くに、豊後の叛逆者の一人、一万田殿の所有する一城邑屋城があつた。薩摩軍はその城に、天草五島の五名の城主たちを監視と警護の役として配置していた。彼らのうち、ドン・ジョアンとその部下だけがキリストンであつた。薩摩軍が敗走するやいなや、ドン・パウロはただちに、その五人の城主を殺して（一万田殿に属する）城を奪還しようとし、自らの兵をもつて敵軍のこれら城主たちを包囲した。（ドン・パウロ）は多数の精銳の兵士たちを率いていた。これに対し

て城中の者は外部からの援助を断たれていたので、ひどい不安と焦燥感に陥っていた。ドン・パウロは城の麓に来ると、城内に天草のドン・ジョアンがいるかどうかと訊ねた。彼は（天草の）ドン・ジョアンが（そこにいると）聞くと、彼の許へ使者を遣わして（次のように）伝えた。

「某、貴殿とはいまだ面識なきも、貴殿がキリストンたることを存じ申す。某、ただそれのみの理にて、貴殿ならびに貴殿麾下のキリストンに対し深い愛情を示さんがために、かく罷り出でたる次第。さればただちに城から降り、某の許へ訪ね来られよ。某、貴殿ならびに御家臣に対しては、何らの害も加えることなく無事にお助け申すであろう。その他の異教徒の城主らは城に留め置かれよ。彼らは豊後および天下の敵なれば、全員殺害する所存なり」と。

(天草) ドン・ジョアンは（志賀）ドン・パウロに、

生命を助けてくれた大いなる恩恵と、自らに示された高貴で寛大な（申し出に対し）深甚なる謝意を表明させた。だが彼は、（自分たち）五名の城主は（天草において）隣同士で古い友情に結ばれており、ことにまた縁故関係にもあって、ほとんど一心同体（ともいいうべき）間柄だから、できうることならば、ドン・パウロが全員を助命し自由にされたいと懇願した。そして、もしそれができぬというのならば、仲間たちがこの戦で生命を失つていながら、自分だけが帰郷するわけにはいかないから、自分もまたここで仲間とともに死ぬ覚悟である、と告げさせた。

（志賀）ドン・パウロは心氣高尚で立派なキリストンであったので、「そのような事情があるのであらば、ドン・ジョアン（殿）に対する愛情に免じて全員を許そう」と答え。彼らが城から降りて来ると、（ドン・パウロ）は彼らをすばらしい饗宴に招待し、ドン・ジョアンには自らの立派な武具若干を、そして彼の兄弟ドン・バルトロメウには他の武具を与えた。そして彼らが日向の国に無事に入るまで付き添つて（行つて見）送つた。一同はこうした行為を目撃して驚嘆した。とりわけ（天草の）四名の異教徒の城主たちは、キリストンが互いに大いなる愛情と誠意をもつて交わつてゐるのに接して、感謝の印として、後日キリストンになる機会があれば説教を聞きたいのと意向をほのめかした。

六九 第七一章（第二部八九章）豊後の嫡子の改宗、本年、キリストになつた他の貴人ら、およびイザベルの死去について

○フロイス「日本史」第8巻

ついに（官兵衛殿）は彼と会つた後、あらためて彼に（キリストの）教理について説教を聴聞させた。（官兵衛殿）は、ペドウロ・ゴーメス師を豊前の国のキリストの名の大敵である（嫡子）の伯叔父（田原）親賢の城に召喚し、そしてその城において嫡子は（ゴーメス師から）洗礼を受け、コンスタンチノという教名を授けられた。彼は言葉でもつて、副管区長（コエリュ）師が豊後に来られた時に受洗しなかつたことを後悔していると表明した。

（中略）

ペドウロ・ゴーメス師はその地から豊後に帰つて、この吉報を国主フランシスコの許へもたらした。この善良な老人が、それから受けた慰悅には尋常ならぬものがあつた。現世を去る前に、息子（義統）がキリストになるのを見たいということは、彼がこの世で、人間的に望んでいた最大の願望だつたからである。国主フランシスコは、さつそく嫁である（嫡子の）奥方に（キリストの）説教を聞くように命じた。彼女は久しいあいだ病床に臥しており、絶えず悪魔に煩わされ苦しめられて、ほほ信仰を求める状態となつていた。彼女が教理を聞き終えると、司祭はジユスターという教名を与えて彼女に洗礼を受けた。またその二人の娘（も受洗して）サビイナとマキシマと呼ばれ、世継ぎの息子にはフルゼンシオの教名が

与えられた。彼は将来を嘱望されるに足りる若者で、この少年は城において、説教を聞いて洗礼を受けるべき人物の名簿を自分の手で書き綴つていた。

嫡子（義統）の母イザベルは、この大いなる（主デウスの）御恵みを受けるに備しなかつた。彼女は病み患い、すでに人生の最後にありながら、「（私は）戦の神である八幡（社）の身内であり、その家系の出であるからキリストにはなれない」と言い、彼女に対する娘たちの（キリストになるようとの）あらゆる説得もまったく功を奏さなかつた。こうして彼女は現世における悲しく不幸な日々をいとも惨めに終え、そして（キリスト宗門に対する）憎惡ならびにデウスに対して行なつた悪行によつて自ら招いた懲罰を来世で受けるため（この世を去つて）行つた。彼女の不仕合せはただそれだけに留まらず、白杵城（舟生島城）ではすでに全員がキリストであつたので、彼女のために日本の習慣どおりに葬儀を行なう者がいなかつた。そこで彼女の召使いたちは、幾人かの仏僧を呼びに行き、（今は亡き）彼女が（先に）期待していたような盛大さによつてではなく、密かにかつ質素に葬儀を行なつてもらいたいと依頼した。（我らの主なる）デウスは、彼女が、息子や娘たちがキリストになつた後にふたたび彼らに対して悪をなさないようにと、彼女の生命を縮め給うたのであつた。

（中略）

白杵が包囲されていた折には、しばしば告白し、告白し終えると、時には涙を浮べて私にこう申されました。

『伴天連ラグーナ（豊後の）国についてのこうした労苦は、デウス様が私の罪のために（授けることを）許し給うたものなのです。どうか主（なるデウス様）に、私の罪をお許し下さるよう願つて下さい。私は祭壇の前で「主、ミゼレ・メイ・デウス、我を憐れみ給え」（の祈り）を唱えましよう。そしてデウス様が罪を許して下さるよう鞭打ち（の苦行）を

国主フランシスコは秋月で関白と別れた後、かの薩摩

七〇 第七二章（第二部九五章）国主フランシスコ（大友宗麟）の逝去について

勢による包囲のために六ヵ月以前（から）身を寄せていた白杵（舟生島城）の城へすぐに帰つた。国主は元来健康がすぐれず、痩せかつ虚弱の身であつたが、つねに彼の身には幾多の労苦、憂慮、不安が付きまとひ重なり合つて、我らの主なるデウスは、国主がキリストとなつてからといふことは、彼がそれらの試練に身を委ね不斷に練磨されて生きることを嘉されたかのようであつた。すなわち（改宗）早々、四カ国が嫡子に対し叛起し、嫡子はそれらを失つてしまい、世継ぎである嫡子はキリストの問題でつねに国主を不快にさせ悲嘆せしめた。一方、国主は息子たちの不行跡を見せつけられ、他方、彼は自らがキリストを庇護するために、家臣たちが仕掛ける策略とか自分に示す悪意に堪えねばならなかつた。そしてついには彼に残された唯一の国である豊後すらも失われ蹂躪されて敵の掌中に帰してしまふのを目撃せねばならなかつた。一方、嫡子の生活は乱れており、統治能力はなく、彼が（豊後の）国を保持できる望みはきわめて乏しかつた。これらの一いつは深い苦しみや悲しみとなつて国主の心に浸潤し、それらは何一つ国主の靈魂に深く宿る（キリスト）信仰を弱めることができなかつたにせよ、彼の肉体をはなはだしく衰弱させることになつた。

（中略）

白杵が包囲されていた折には、しばしば告白し、告白し終えると、時には涙を浮べて私にこう申されました。『伴天連ラグーナ（豊後の）国についてのこうした労苦は、デウス様が私の罪のために（授けることを）許し給うたものなのです。どうか主（なるデウス様）に、私の罪をお許し下さるよう願つて下さい。私は祭壇の前で「主、ミゼレ・メイ・デウス、我を憐れみ給え」（の祈り）を唱えましよう。そしてデウス様が罪を許して下さるよう鞭打ち（の苦行）を

しようと存じます』と。こう言つて彼はその邸に設けられており、日曜日や祭日にミサが捧げられていました祭壇のところに行き、そこは母屋なので大勢の殿たちがいたにもかかわらず、国主は蠟燭の明りを消し、私が『主、我を憐れみ給え』を節をつけて祈る間、一人で非常に厳しい鞭打ちを行ない、しかも私が、『もうよろしい』と言

うまでおやめになりました。私は本当に自らを恥じ入りつつ、また国主は老体の上に病人で、（しかも）多くの労苦と憂慮に閉ざされておられるのを見て、同情を覚えずにはいられませんでしたが、それでも国主の（靈魂の）利益のために、また周囲の人々に対する模範となることだと考えて、国主がその熱心（な苦行）に耽ることを許しました。

（中略）

國主は、臼杵の包囲が解かれ薩摩勢が豊後から退去しました後は、津久見に赴いて静養することを望まれ、まず奥方のジュリア様と（まだ）少女である二人の娘とを（その地に）遣されました。（國主は）後に残られた二日の間に、當時臼杵で流行していました一種のペストに罹られました。それは激痛と高熱を伴うもので、患者から意識を失わせ、舌の肥大のために口がきけなくさせたのでした。日本では長期にわたって（城）の包囲が行なわれますと、よくこの病気が発生するのです。

（中略）

ミサが終ると司祭や修道士たちは棺台^{エツサ}の両側に位置し、香を焚きながら棺のまわり（を廻り）幾つかの応誦を歌いました。そしてそれから埋葬されることになつていました。國主の邸宅の庭まで教会（の地点）から行列が始まりました。ここでは詳しいことを述べませんが、日本人は幾つかの理由から、教会の中には埋葬しない（習わし

となっています）。

七一

第七三章（第一部一〇二章）豊後に滯在していた司祭たちが、すべて退去した次第、ならびに副管区長が密かに同地へ二名の司祭と二名の修道士をふたたび派遣した次第、および同所で生じたことについて

○フロイス「日本史」第8巻

（デウスの）豊後に對する懲罰がなおいつそ全うされるため（であるかのよう）に、次のような事態が生じた。すなわち、イザベルの兄弟で嫡子の伯叔父にあたり、キリストンにとって有害きわまるかの残酷な（田原）親賢は、かねがね國主フランシスコをもつとも恐れておらず、日向の破滅は親賢に原因があつたが、そのことがあつて後、國主は彼を抑制して登城することすら許さなかつた。しかるに今やその國主が逝去して好機到れりと見るやいなや、彼はさつそく（豊後の國の）政治に関与するようになり、すでに國（内）には自分に反対する者がいなかつたので、上から下まで支配し始めるに至つた。悪徳（で名）高い彼は、甥にあたる、國主フランシスコの

息子たちを、その恐るべき毒をもつて懷柔しておいた後、豊後のキリストンを消滅させようと力の限りを尽し、あれどあらゆる惡事を働いた。時に彼は府内に赴くことにいたが、関白の弟の美濃殿（羽柴秀長）がすでに來訪なつたが、関白の弟の美濃殿（羽柴秀長）がすでに來訪の途上にあることを知つており、また我ら（司祭、修道士たち）の追放のことを聞いていたので、府内の修道院

に住んでいたゴンサーロ・レベロ師を恐怖に陥れようと/or>して、美濃殿の使者を装わせた者に、自分の差し金によるのではなく、美濃殿は貴殿を殺し、家財や家屋を没収するよう命じておられる。関白がそのように命じておられるからだ、と告げさせた。

（中略）

臼杵において我らの司祭たちは、豊後（の国）中でもっとも優れたキリストンの一人を嫡子（義統）の息子（義乗）に付け、その少年に読み書きを教えたり、善良かつ聖なる習慣を仕込ませていた。同人は貴人であり、また出家していた。ところでそのことは親賢を大いに憤慨させるとこどとなり、美濃殿が臼杵城^{舟生島邊}に到着すると、彼は嫡子の息子も同席しているところで、件のことに抗議して言つた。「あの後方にいる男は、この少年にデウスの宗派が説く、無数の判りきつた虚偽とか卑劣なことを教えているが、少年には何の役にも立つていない」と。それを聞いた美濃殿はやや立腹し、腰に帶びていた立派な脇差を（手に）とつてそれを少年に渡し、「この脇差であの男の首を刎ねよ」と言つた。少年は両手でその脇差を受け取り、自ら儀礼を尽した。だが決して両眼を上げようとはせず、密かに（傍にいる）小姓に向かい、「ロマン」「そのキリストンはこう呼ばれていた」に、何らかの惨事が起ころぬうちにすぐ隠れるように告げよ」と言つた。

（中略）

かくてグレゴリオ・デ・セスペデス師は、ロマン修道士といつしょに平戸に帰つて行き、モレイラ師は、説教師のレン修道士とともに、（志賀）ドン・パウロの城に身を寄せることとなつた。ドン・パウロは、その二人が到着したことをこの上もなく喜んだ。

（中略）

嫡子がキリストとなり、彼女もまた白杵丹生島城（城）で受洗した後は、悪魔は彼女からすつかり離れてしまい、彼女を苦しめることをやめ、その身にふたたび触れることが、また（それまで彼女を）さんざんに苦しめて来たようないの恐ろしい姿で出現することもなくなった。だが悪魔は怒りと憎しみに満ちており、彼女を動搖させようとして（同家の）戸や窓を叩き、夜間、なおも彼女に不安を与えていた。彼女がそのことを司祭に語つたので、司祭は彼女が就寝する床に聖水を撒いた。彼女が語るところによれば、それから後といふものは、デウスの御慈愛と憐憫によつて、悪魔が彼女を悩ませていたといつさいの動搖や（騒）音が静止した。このことは彼女をして反省せることとなり、デウスから離れるとどれほどすぐには（人は）悪魔の支配下に陥るかを悟らせることがなつた。

七二 第七四章（第二部一二二章）当一五 八八年に豊後で引き続き生じた幾つかのことについて

○フロイス「日本史」第8巻

豊後の事情は今まで惨憺たる有様であつた。すなわち、かの地から來た土地の人々が一樣に語つてゐるところによると、その国人々は（次の）三つのうちいずれかに屬していた。その一つは薩摩軍が捕虜として連行した（人々）、他は戦争と疾病による死者、残りの第三に屬するのは飢餓のために消え失せようとしている（人々である）。彼らは、皮膚の色が變つてしまい、皮膚に数えることがで

きそうな骨がくつついており、窪んだ眼は悲しみと迫り来る死の恐怖に怯えていて、とても人間の姿とは思えぬばかりであった。どの人もひどく忌わしい疥癬サルバに（全身が）冒されており、多くの者は死んでも埋葬されず、（遺体の）眼とか内臓は鴉とかabidesの餌と化するのみであった。彼らは生きるのに食物がなく、互いに盜賊に変じた。（既述のように蔓延した）病気はいまだに収まつていなかつた。（主なる）デウスはさらに彼らの上に正義の鞭を下そうとなされ、白杵の村落は前年の（薩摩軍の）包囲によって城を残すだけですべて焼失してしまつたが、その後、豊後の新たな国主は、焼き払われ破壊されたその國を再建しようと全力を尽した。国主の要請に基づいて、持てる者も持たざるものもその力に応じて再建にいそしんだ結果、「人々の談によれば」（豊後の国は）当初の規模と外観に劣らぬほどになつたという。だが国主フランシスコのこの後継者は、父の熱意、信仰、信心、愛情、誠実さに比べるといとも堕落しており、救靈にはほど遠く異なる道を歩んでゐるので、我らの主なるデウスは苦難によつて開眼せしめようと、彼に対して災難を送り給うた。だが彼は惡癖の中に耽溺した生活をしていたので、それらのことを容易に理解できなかつた。そのうちに、かの地から一人の司祭が（我らの許に）届けて來た通信によると（次の事態が発生した）。

（志賀）ドン・パウロは、（去る）薩摩との戦において、豊後にいる誰にも優る勳功をもつて嫡子に奉仕した。彼は大勢の部下を失い（ながらも）、（嫡子に対して）蜂起した殿たちから十二、三の城を奪取した。嫡子は常日頃、彼に対して嫉妬と惡意を抱いていたが、（自分が）キリストとなつてからは、道理と真理の力に押され、ドン・パウロの武勲への報酬として彼に叛逆者たちの封禄と居城を受けた。ドン・パウロは嫡子（がいかなる人物であるか）を心得ておらず、その移り氣を熟知していたので、（他日）嫡子が自分を非難するに至ることを案じて、「もし後になつて没収されるようなら、今はお受けいたさぬほうがよい」と言つて（受領することを）断わつた。（これに對して）嫡子は、「他意なきゆえ、安堵して受領されよ」

とふたたび命じた。

七三 第七五章（第二部一二一章）

豊後国主吉統が（一五）八八年にキリストンに対し行なつた他の迫害について

○フロイス「日本史」第8巻

林ゴンサロは（神仏に）誓い、（をさせられる）に先立つて屋形と交渉して、自分はキリストンであり、キリストンをやめることはできないので、（神仏に）誓うこと（だけ）は放免させていただきたい、と願（い出ることにした）。彼には、誓いの当日になつて一同の面前において、自分は誓いを拒否すると言うよりは、あらかじめ申し出ておいたほうが國主の感情を和らげるであろうと思えたからであつた。そこで彼は、（今は亡き）國主フランシスコ（宗麟）の奥方であった、義母にあたるジュリアにそのことを話した。彼女は（さらに）レジイナに、（林）ゴンサロに代つてそのことで國主（吉統）に話してくれる館にいたのである。レジイナは徳が高く、デウスの名譽をいとも重んじる人であつたから、快くその役目を引き受けた。だが屋形は（林ゴンサロの）その一件を耳にするとひどく憤り、「（林）が誓いを拒絶するにおいては、彼から封禄を没収し、彼のみならず妻のコインタも、また本件の取次ぎをした御身もまた南蛮へ放逐するであろう」と言つた。その怒りようはあまりにも激烈であつた

から、一同は屋形が今にも（林ゴンサロ）を殺害させるのではないかと思った。そこで彼の親族、友人たちは、いまだかつてなかつたほど（の熱意をもつて）彼を取り巻き、（神仏に）誓うようにといつせいに砲火を浴びせた。それは頻繁で、あまりにも執拗な攻め立てぶりであつたから、（林ゴンサロに）その度を超えた不快と煩瑣は、たとえ屋形から処刑を命ぜられたとしても、これほど苦痛ではなかろうと思えるばかりであつた。だが彼との妻は我らの主なるキリストの強い兵士として、つねに確乎たる態度を堅持した。（レジイナ）は、心のうちに同情の念を禁じることができず、兄（吉統）に書状をしたためて（どうか）彼らを呵責するのをやめていた。彼には、誓いの当日になつて一同の面前において、（この）誓いをするだけで満足されたいと再度願い出た。（これに）対して屋形は（次のように）穏やかに答えて言つた。「予は（神仏に）誓いをすることでキリストンたちにその信仰を棄てさせようとは思つていいし、彼らとてキリストンをやめると誓わないのであろう。ところでその（誓詞だが）、國を良く治めていく上に必要な事項が含まれているので（皆に行なつてもらわねばならぬ）。だが各人が自分（独自）の書類を提出したり、個別の誓いを立てて必要はなく、國の名において一通の書類を作成し、それに全負が血判をもつて署名してもらいたいのだ。そしてその誓詞は関白（殿）の許へ送付されることになるならば、関白（殿）は、神仏（の名）を伴つていないと

いなくなろうと約束申した手前、予は關白（殿）に虚言を吐いたことになろう」と。

（中略）

これらの情報によつて、屋形の考えは変り始め、キリストンのことは忘れ（去り）、さっそく府内に赴きはしたもの、前には（一度）決めていたのにキリストンたちが同所に行くようにとの布告を出そとしなかつた。祇園祭りは催されはしたが、きわめて生彩を欠き活気のないものとなつた。屋形は府内に着いて、おびただしい数のドン・パウロの家来がそこに来ているのに接した。そしてまもなくドン・パウロも家臣全員を率いて府内に来るとの情報を耳にした。それは根拠がないことではなかつた。というのは、屋形の代理として二名の老中がドン・パウロに對して、誓詞のため府内に出て来るよう伝達しており、（ドン・パウロ）は家臣の一部の者に同行するようとに知らせてあつたからである。彼の同行者は三千名を超えたかも知れず、府内での噂では一万とのことであつた。（老中たち）一同は、ドン・パウロが（この際）突飛なことをするのではないかと恐れ、また同時に、関白（殿）が彼に好意を示してはいるものの彼はキリストンをやめないので、こうして自分たちが仕掛けた策略が徒労に終つたことを知つた。（そこで）屋形は急遽、老中たちとあらためて会議を開いた。そして屋形は老中たちに、ドン・パウロ宛の一書をしたためさせたが、その中には（次のように記されていた）。「（それが）某ら聞くところによれば、貴殿の御家臣は貴殿の府内出張を不快とし危惧の念を抱き、それがため全員が貴殿に同行を希望の由。もししかりとすれば、いたずらに不必要に國に動搖をもたらすこととなるであろう。さればもし貴殿、岡城に留まるを望まるにおいては、それもよろしかるべく、さりとて民衆に

あらぬ噂を立てさせぬため、貴殿、道中につかれ（た後）、途次気分の悪きを装い、それを理由に帰城なされは如何。されど、もし貴殿、せひとも府内へ御出張（を希望）ならば、さようになされるがよく、ただし常のことく少人数をお連れのこと」と。（これに対し）ドン・パウロは答えて言つた。「某は屋形様について疑いの念を抱いてはいなかつたが、家臣たちがあまりにもいろいろの噂を耳にするので、予と同行しようと考ふるようになったようだ。だが（このたび）あまり多くの家臣を連れて来るなどの御申し出があつたからには、さようになつたであろう」と。ドン・パウロが意図したのは、こうした伝言をやりとりすることで十分に時を稼ぎ、その間に彼らが自分に對して仕掛けた謀略をはつきり見破り、また各地から府内に参集していた人々が（いつしか）数が減つてしまふ（ようにする）ことであつた。そのうちに（府内）出頭するようとの返事が届けられた。

（中略）
ドン・パウロは白杵の館に六日間だけ滞在した。彼が自邸に戻ると、時を同じくして妻のマグダレナが女児を分娩した。それは彼にとって初めての子供であつたから、少ながらず喜んだが、既述のようにその子供は洗礼を受けた後も経ずに死亡した。

（カミ）上に向かって旅立つた屋形（吉統）は、途次、自分の事情が都においては好ましく受け取られぬであろうとの情報に接した。そこで彼はわざわざ一隻の船を豊後に送り、妹のレジナにキリシタンであることをやめ、今後はコンタツや聖遺物、その他を携えて人前に出ないようになると伝達した。この伝言を（届けるようにと）命ぜられた人たちは、彼女がどんなに感情を害するか承知しているのでいたく悲しんだ。そこで彼らはこの件について三

日間（も）協議したが、それは（主君から）命ぜられたことであつたから、結局のところそのまま彼女に伝達された。レジイナは（それに対し）次のように答えた。「教会の方は、（キリスト）信仰は、コントラツに依存しているわけではないから、コントラツや聖遺物を隠すことは罪にはならないと申しておられ、そうすることなどとるに足りないことです。でも棄教するなどとは、（たとえ）殺されてもいたしませぬから、よく憶えておきなさい。もし嫡子（吉統様）が、私がキリストであることを理由として城中に置いておくことを嫌つておられるのでしたら、私はたとえ道中、物乞いをしながらでも、教会があり、伴天連様方がおられるところへ参りとうござります」と。

（中略）
ドン・パウロと（妻の）マグダレナは司祭たちに対し、彼らが（先に）城内にいた時に倍する愛情を示し、かつ優遇し、部下の者には、自分が伴天連方を匿つてゐることを決して口外してはならぬ、これに反する者は死罪に処すると言ひ渡した。ドン・パウロは、一ヶ月の間に自ら三度、司祭たちを訪ねて行つた。そうした時には彼は、日の出よりずっと早く、鉄砲を携え、河（原）へ鳥を撃ちに行くようにして出かけ、その際、司祭たちがいる家の主人である自分の家臣の従僕を一、二名だけ連れて行つた。これらの従僕は、（ドン・パウロ）が外出する時には城の麓で出迎えた。（ドン・パウロ）が帰城するにあたつては、どこから来たか悟られないようにするために、城の近くまで人通りのない道を選んだ。ある日曜日など、遠くから目撃した者が彼（の正体）に気づかぬようにと、彼は公道に出るまでは一人の背が高く頑丈な人たちは、彼女がどんなに感情を害するか承知していないのでいたく悲しんだ。そこで彼らはこの件について三

て銃砲を担いで歩んで行つた。

七四 第七六章（第二部一二二一章）豊後の

背教した国主吉統が、ジョランを初めとして七名のキリストに殉教死を命じた次第

○フロイス「日本史」第8卷

（時に）一人デウスの名譽を熱望するキリストがいたので、デウスの聖なる御威光に對して加えられたかくも大いたる侮辱を堪えることができず、彼はジョランが磔刑にされている場所に赴き、頸に吊されていた聖画像を密かに除去したらしい。それはさつそく國主の知るところとなり、彼は激しい怒りに燃え、誰がその聖画像を除去したかを知ろうとして、高田において嚴重な誣議を行なつた。だがどのように手を尽しても（犯人が）判らなかつたので、その地の重立つた人の男の子供たちを大勢白杵^{科生湯}城に連行させ、もしあの聖画像を探し出せない時には、かならずそれらの子供たちを皆殺しにすると言ひ渡した。しかしそうした厳酷な措置も聖画像を発見するのに十分ではなかつた。吉統は小心者で意志薄弱であったので、何らかの災難があるか、もしくは（人々が）蜂起するかも知れないと恐れをなして子供たちを釈放した。そしてそれに代りジョランの善良な老妻とその子供たちをただちに処刑するように命じ、妻はさつそく殺された。二人の息子は肥前に逃れたが、兵士たちが追跡して（彼らを）その地で殺害した。その罪状は、（彼らの父）同様であつた。すなわち、彼らは全能唯一のデウス（なるもの）を

礼挙し、デウスへの奉仕と靈魂の救済といった、篤信のキリストンとしての（善）行に携わっていた父親の手助けをした、というものであった。このようにしてジョランの家族の殉教者は五名となつた。すなわち、ジョラン、その妻、二人の息子、一人の家僕である。

七五 第七七章（第二部一三一章）豊後で生じたこと、ならびに同地に駐在する司祭の追放について

○フロイス「日本史」第8巻

國主（吉統）が、暴君閑白（殿）に対する恐怖を理由として（豊後にいた）三名の司祭全員に（国外）退去を厳命した後、司祭たちは、国内が動搖しキリストンへの迫害がひどくなつて行く間に、自分たちがいた（岡）城の主君であるドン・パウロにこの件について相談した。その結果、（司祭たち）一同には、ドン・パウロの家臣の中のもつとも優れたキリストンであり、かつもつとも信頼の置けるバレンチノの親戚に当るあるキリストンの家に隠れるのがよいと思われ、前年からそこに潜伏していた。

（中略）
異教徒やドン・パウロの敵はそれを見て、多くの人々は彼が（キリストン）の教えを放棄したのではないかと考えた。そして昔の習わしどおり、大勢の仏僧や占い師たちが外から（城）内に入つて来た。これらの連中に混じつて、ドン・パウロが不在中に一人の狡猾で破廉恥な占い師がやつて來た。彼は、自分はドン・パウロが棄教

したかどうか見届けるために、暴君（秀吉）の弟美濃守殿から派遣されて都から來たのだと言つていた。彼はこのように喧伝することによつて幾ばくかの金錢を獲得しようと目論んでいたのである。そこで彼はそこらの町や村を歩き廻り、虚構と巫術^{フェイティザリヤ}をもつて巧みに金錢を（人々から）巻き上げた。彼はドン・パウロの祖父の所領で、住民のすべてが異教徒である玉来^{タマライ}という村落では数々の異なる呪術を行ない、一組の水桶を地中に埋め、街路（に面したところ）には他の呪い物を吊り下げ、これで（それらの）家屋は天災から免れたと語つていた。彼はこのようにしてその地の住民たちからなにがしかの金錢を奪取していたのである。このように巡回する間に、彼はどこへ行くとも判らぬまま歩いていて、ある午後、一味の連中といつしょにバレンチノの家にたどり着き、そしてそこで宿泊を乞うた。バレンチノはかねがねその人物に会いたく思つていたので、彼がどこから來たのか、またいかなる者かを調べだした。そして寛大にもてなした（上でこう）言つた。「聞くところによれば貴殿は悪辣な盜人で村の無知な住民を誑かして歩いており、予は（本来なら）貴殿の首を刎^はねよと命ずるところである。よつて今後はそのように誑かしたり愚劣なことを行なつてはならぬ」と。これを聞いて件の占い師は心配でいたまれたくなつてただちにそこから逃走し、ふたたび南郡といわれるその地方に顔出ししなくなつた。もしさつそくにも退散していなかつたならば、彼はそのままでは済まされなかつたろう。

七六 第七八章（第二部一三二章）豊後国主吉統が、すべての司祭を同国外へ放逐した次第

○フロイス「日本史」第8巻

彼は万事において母イザベルの助言に従つていたが、彼女はデウスの教えの眞の敵であつたから、無上の恥辱と不名誉のうちに（デウスに）見離され、白杵城^{（丹生島城）}が包围されて、いた折、いつも不幸で悲惨な最期を遂げ、彼女を埋葬する者も、その惨めさに同情する者もいないほどであった。

（中略）
白杵^{（丹生島城）}の城が戦争中に包囲された時に、城内において一人の身分の高い若者がキリストンになつた。彼は優れた戦士であり、（己れを）侮辱した者はかならず殺さずには

おかない恐るべき人物として知られていた。彼は道理について最初の説教を聞いただけであったが、非常によく理解して、このたびのキリストンへの迫害に際しては、あたかも古くからのキリストンであるかのように確乎たる態度を示し、深い信仰を培つた者のように振舞つた。

彼は野津のリアンの勧告に大いに励まされるところがあつて、デウスの教えと教会の掟とを立派に遵守しようと決心した。かくて我らの主（デウス）は、彼を助け、（かれあれほど）残酷な人殺しであつた者を敬虔で柔和で憐れみ深い人間に変え給つた。彼は四旬節の間中、断食を守つた。彼のような戦士にとつてそれは新奇なことであつたが、彼はことさらそのような方法で信心を得ようと努めたのであつた。

とんど全財産を抱えたまま、この敗北によって悲惨な貧困（状態）に陥った。

（中略）

豊後の国には、叛乱軍によつてもたらされた動搖の折にも、外敵の侵入に際しても毅然とした行動をとつた一人に志賀ドン・パウロ殿がいた。彼は叛乱者たちから幾多の勝利を博し、五、六カ城を奪取した。包囲された際には数限りない労苦を味わい、敵との戦では大勢の部下を失つた。（だが）こうした一つ一つの出来事が彼の名声を高めて行き、敵は彼に恐れをなし、弱者は彼に援助を乞いに来た。かくて彼は（豊後の）国人の人々から最高の名望と信用を受けるところとなつた。彼の功勞はそれぞれ、母の弟である叔父の豊後國主（吉統）から、名譽ある豊富な報賞をもつて報いられた（が、他方、國主が）彼に対して抱いている嫉妬と憎悪はきわめてはなはだしく、（國主と語り合う人たちの談によれば）（國主との）頻繁な話題はといえば、どのようにして（ドン・パウロ）を滅ぼし殺害できるかということであつた。（國主）はそれまでにも、豊後のキリストン宗門の支柱である彼を滅亡させてしまえば、キリストンの名はたちまち消滅すると考えて、幾度も彼を滅ぼそうと試みたのであつた。

（國主）は、暴君（秀吉）を訪れる（ことになつた）世嗣の息子（義乗）の隨員にドン・パウロを任命した時に、都において彼を殺そと（考へ）、種々の奸計や謀略を企てた。事実（ドン・パウロ）が出發するに先立つて（國主）は彼に与えていた封祿の半ばを没収したし、出發後には彼の本城である岡城を召し上げようと策していたが、ドン・パウロの家臣たちが手抜かりなく気を配つていたので、その望みを果すことができなかつたのである。

七 第八〇章（第三部三九章）当（一五）

九三年に豊後で生じたことについて

○フロイス「日本史」第8卷

（領國没収という）この悲しく不運な報告が（豊後の）國にもたらされると、時を同じくして、（老）閑白がこの不仕合せな國を接収するために遣わした奉行^{ゴヴェナドーレス}や兵士たちがすでにその途上にあつた。（この時に）豊後の國を掩つた深い悲嘆、災難、慘憺たる光景は筆舌に絶するであろう。なぜならば、日本の習慣に従えば、このように君侯や領主がその所有地や領國から追われる、その領國のあらゆる名譽や高貴さを形成していた、彼の一族郎党、（部下の）兵士の総員が（主君同様に）放逐されるからである。それのみか、（新たに）領土の引渡しを受けに来る連中は、見つけ次第にことごとくを己れの物として没収してしまう。それがために（ここ豊後の）人々の間で惹起された混乱と暴動は、地獄さながらの觀を呈した。人々は（老）閑白の命令を受けて國を接収に來た武將や兵士が、もうすでに我が家の戸口に現われているよううに思い、「果然自失したかのように泣いたりわめき声を発したり、とりわけ良家の出である婦人たちは涙に暮れて」脇の下に運べるだけの物を素早く集め、生を享けた（母）國から逃げのびるべく我が家を出るのが精一杯であった。（それまで）大勢の者にかしずかれ、敬われてもいたこれらの婦人たちは、今やいざこに行き、いざこに救いを求めてよいかも判らず、彼女たちは、自分たちは新たに豊後に入つて来る連中にやがて殺されるか捕虜

にされるように思われた。大小の街路でこれらの婦人たちが出会う時には、ただ涙だけが、その身の不運を示す言葉となつて語るのであつた。ある者は泣き叫ぶ幼児を抱いており、他の婦人たちは小さな子供にしがみつかれ、召使いか親戚の者たちといつしょに徒步で逃げていた。

折から國中のあらゆる殿や重立つた貴人が、その兵士の大部分を率いて朝鮮を征服すべく出陣していた時に起つた（という事情であつた）。そうしたわけで、これら大多数の貴婦人たちは、それぞれ（の夫から）取り残されており、このような機会に、彼女らはその常として、一方では恐怖に襲われながら、他方では羞恥心と女性らしい貞淑さを失わず、（ここに、この時に豊後）國中に生じた彼女たちの苦難なり悲嘆を如実に描写することは、とうていできることではない。それは、（前）國主の奥方、すなわち（今は亡き）善良な國主フランシスコの奥方であつたジユリア、それに林殿の妻となつてゐる（國主の）娘コインタ（まで）が、ごく少數の家来に伴われ、他のいかななる人間的な援助もなきままに、急遽この國を離れ、小舟に乗つてこの折でなければ敵（に違ひない）毛利の國へ旅立つたことを述べるだけで十分であろう。その他貴婦人たちも、いずれも同じような道をたどつて行つた。彼女たちの中には志賀ドン・パウロ殿の夫人マグダレナもいた。彼女は持ち運ぶことができた荷物や、家にあつた日用品すら携えることなく、（それまで）住んでいた岡城から出て行つた。

補遺一 曾祢崎通秀軍忠狀

○曾祢崎文書
南北朝遺文九州編三三〇一号

肥前国曾祢崎助三郎平通秀申、凶徒為退治御発向之間、
去九月十日自豊後國府致御共、立華山御陣并宗像御陣以

〔豊前国宇佐郡〕
下糸口原御合戦之時、致先懸令分取畢、其後至安心院御

陣、致御共抽忠節候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

正平六年十二月廿九日 進上 御奉行所

〔承了、源（花押）〕

補遺二 少貳頼尚書下写

○高並文書
南北朝遺文九州編三五七二号

今月十二日香志田城夜討、同十二日時枝後攻、及壹合戦
之時、被致忠勤之由承候、可注進也、仍執達如件、

正平八年七月廿三日 築後守（花押影）

高並彥八殿

補遺三 宇都宮親景代申状

○佐田文書
熊本県史料中世二

欲早被任 將軍家御下文并次第相続手縕證（文等）旨、
令知行豊前国宇佐郡佐田庄半分者當知行残 副進
〔宇都宮〕 宮掃部助親景代謹言上
〔半分〕 間事、
嘉慶貳年六月 日

補遺六 杉興重書状

○佐田文書
熊本県史料中世二

就御申之儀、帶於秀連吹拳之状、以雜掌御注進候通、依
某歡樂仕候、以沼間能登掾方、具令披露候、然者連々御

補遺四 木付頼直書状

○都甲文書
南北朝遺文九州編五六六号

一通 関東御下知案
三通 将軍家御下文
二通 探題御下知状

一通 武藏守御下文
二通 自當御方料所御下文案

三通 探題御書

一通 自探題田原吉弘入道方被遣御書

一通 公景讓状

一通 守綱證状（公景舍兄）

右、彼佐田庄事、代々相続無相違者也、然九州於 宮方
令一統之時、〔親世〕大友・少貳・親父河内守経景諸共上洛仕、

愁訴歎申之處、探題幸御下向之間、成悦喜之思、御共仕

罷下訖、其後於所々合戦致忠節、結句山崎合戦仁経景討死

忠仁也、然親景者幼稚之間、氏治伺其隙、參探題方号御

方、雖押領彼所領、無一紙證狀、而重書等祖父公景討死

時分、経景幼少之時、伯父守綱仁預置之處、氏治相語守綱

若党〔富山彈正左衛門入道、関東御下知一通誘取訖、守綱如此聞
伝法寺四郎左衛門尉〕、當城堅固次第高名之至、更無比

之、凶徒等則退詰口之、當城堅固次第高名之至、更無比

剩敵及數箇度相懸之、難儀之處、遂防戰、數十人依討捕

之、凶徒等則退詰口之、當城堅固次第高名之至、更無比

類之、殊無二可抽忠節之旨告文到来、感悦不及言語之、

仍後卷諸軍勢、計海陸同時之、加下知之間、可遂本意之

条、聊付可有遲滯候、然者今度之於忠賞々、一段可賀与

之狀如件、

明応八年十一月廿二日

〔花押〕

佐田次郎殿

補遺五 大内義興感状

○佐田文書
熊本県史料中世二

豊前国横山庄内山下村事、為株城衆兵糧斬所、先奉預候、
可有拝領候処、可致申沙汰候、恐々謹言、

八月一日 頼直（花押）

都甲人々御中

都甲人々御中

賴直

失念候て、今日申聞候之間、拝見候、く、
去四日之尊書、昨日廿一到来、拝見候、

此表之儀、自赤間関卅七八里先、豊後之内戸次と申所

居陣候、今度上勢大軍之由聞及候て、豊後府内ニ罷

三居陣候、はや日向にて候、上衆者此口へす

陣易候て行候へ者、はや日向にて候、上衆者此口へす

きにて候、此方者一列ニ秋月へ仕懸度迄候、其議定一

両日中可相澄候、日向にて候へ者、大篇之事にて候、

大軍と申候て茂大事之行候、

一、〔參臣秀吉〕關白殿近日御閑着之由候、昔之儀者不存候、大將大臣

官位人遠國之御動座承事候、併仲ア^イ天王長門府御陣

無紛事候条尤候、此度ほど多人數武具以下きれい無申

計事候、帰陣御待久敷之由尤候、既當殿之御動座之上

者、御勝利不可有程之候条、各帰國不可遲々候条、可

御心安候、先度茂御細書、至今日二御報延引迷惑候、

某所勞得大驗候、少茂御氣遣有間敷候、早如常々辛勞

候へ共不痛候、如仰母候者も得驗氣之由、安堵此事候、

此表為何遊興も無之候、豈後府内茂乱後とハ乍申、散々

事候、一所茂心之留無之候、

一以別紙申儀憑存候、貴老御伝を受までに候、次一種御

志千万候、則三竹と兩吟可有御推量候、万々期後信候

之間、不能一二候、恐惶謹言、

元長〔吉川〕（花押）

西禪寺〔周伯惠謹〕尊報

補遺一三 岡本頼氏戦場日記

○岡本本文書
熊本県史料中世三

戰場之日記

一、弘治三年六月九日卯月岡本城詰、松尾口大事之粉骨
疵三ヶ所深手、疵ヨリ骨三十一出候、十九歳ヨリ初陣、

一、永禄二年五月十九日卯日夜亥之時、辛労構コシ手

□ヶ所、

一、永禄二年六月四日辰日久米代詰、城戸五重取り先ハ構

ゴシ後敵城戸開合懸鑓、味方皆手ヲイニ成候、撲角前

ニ乗、折目仕、就夫三人安穩候、鑓疵四ヶ所、深手、

一、同末年、久米大劔之時、「城戸二重取構越シ、手一ヶ

所、

一、同半歲、宮之□取合、手詰之込、

一、同年平城所へ湯前衆懸付候、日中ニ二度之込粉骨、

一、永禄二年八月十六日卯日多良木獣野原ニテ大合戦、

敵日州ヨリ付候、太刀初仕候、無其隱、疵五ヶ所、生

取一人、又米良名字打取候、

一、永禄三年申芦北水俣口二度込、構ゴシ粉骨、手一ヶ

所、亦鉄鉋ニテ刀打ラル、敵ハ薩刃、

一、豊福坂口手詰之込構越シ鑓り、

一、真幸へ御手遣之時、万関田大手二度之込粉骨、

一、永禄七年甲子貳月十一日、真幸江大劔、筈ガ尾諸軍乱之

時、一大事ノ軍殿、擲角之粉骨、赤池殿數ヶ所深手、某

辛労ニ仍テ安穩候、殿様ヨリ御書頂戴仕、

一、永禄十年卯十二月一日午日菱薺大口町ニテ別而粉骨、

就夫マチ不破候、手一ヶ所、

一、同卯歲一山口手詰ノ込

一、永禄十一年戌正月廿日庚午日菱薺馬越口一大事之太

刀初、疵十二ヶ所、深手、敵ノ鑓始ハ、伊集院備後・鳴

津殿御兄弟鑓合候、敵ノ大將三河上左近將監、某鑓先

ニテシツメ候、其外數人仕、無其隱、儀陽公御光儀一

札、

一、天正十四季戊十月廿一日、肥後・薩摩同意ノ弓矢、豊

後南郡高城之代詰、別而粉骨、疵四ヶ所、分取二ツ打取
ル、

一、天正拾五年亥三月十五日、戌亥之時、豊后府内ヨリ薩

廣衆陳引之時『大事之軍殿、夜中ニ度々敵合、別而粉骨、

證跡人肥地鳩宮内少輔殿・高橋喜兵衛尉・有河大炊允、

無其隱、

一、鳴津屋形様ヨリ日州土持於テ御座ニ廉一札、

右、度々粉骨十九度、疵三十一ヶ所、其内合懸鑓六度、

日中ニ貳度、辛労モ有リ、然共七十歳マテ長生、

次ニ成敗者度々山拝小仕役數十度、是者右之辛労ノ外、

「戦場粉骨覚書」

岡本河内守

藤原頼氏（花押）

○中川家文書一八五

補遺一四 豊後国他領様子聞合帳

一御城は山城、西東ニなかき城、少之ふしんもなきやうニ

見へ申候、城より下ニ御やかたハ御座候と見へ申候、城

へ入申事ハ、たひ人御法度にて候由候 入不申候、そ

とる在之分ニ見申候

一たまくすりハいセ殿

〔毛利高政〕

御たいの御ぐら一ツ御座候と申

候

一御ちなミの事ハ有間左衛門助殿と御なかよきと承候

〔有馬直純〕

老寄

〔沼集人〕

御家中之衆

一子ハかもん

〔掃部〕

とくらおりへ

〔戸倉穢部〕

ましたとのも

〔益田主穢〕

同

〔鉄砲〕

てつぼう頭

但老寄わき

伊藤弥五八

その彦太夫

岡崎もんと

つね川十右衛門

つね川十右衛門

とくら四郎左衛門

とうま喜左衛門

くしろもんと

いそへ助ノ進

くさかへ文右衛門

つね川新右衛門

ちやうかけゆ

下藤市左衛門

岡田久左衛門

なたかむく

野村武左衛門

里兵へ

弓

清水安右衛門

孫兵へ

老寄わき

村上忠兵へ

弓

石川玄蕃

町奉行

弓

西兵部

弓

在々之事

弓

右之外うさんなる事ハ拙式などハ見聞不申上候

弓

一田はた上八ツ、上ノ中ハ七ツ、中ハ六ツ、下ハ四ツ五

弓

ツ、御きりせん百石ニ付五分つゝ、

弓

大豆ハ米ニはいニ引おとし御取被成候、田はたともニ

弓

米ヲ御取被成候

弓

町奉行

弓

といた右馬助

弓

うすきのやうす

弓

一御城ニハたひ人御法度三て入ル不申候、そとぶ見申やう

弓

ハ、口よこはまると申口一つと見ヘ申候、又人之物語

弓

承候ハ、かの口ヲ入、本丸へ一口、西ノ丸へ一口御座

弓

候と承候、又舟てる一口ハうとの口と申口之由申候、

弓

是ハふたん門たち候て居申候と承及申候、城之そと川

弓

ハしを入三て御座候と見申候、又人々申候ハ、内三入本

弓

丸三入申処三ほり御座候と申候

弓

家中侍衆

弓

老寄

弓

いなは左馬

弓

おかへはやと

弓

水た三式部

弓

むくし大すみ

弓

伊藤又左衛門

弓

老寄

弓

家中侍衆

弓

本丸三ハ入不申間、不存候

弓

老寄

弓

老寄

弓

御家中侍衆

弓

本丸三ハ入不申間、不存候

弓

老寄

弓

老寄

弓

御家中侍衆

弓

小川源左衛門

弓

西わき藤左衛門

弓

林かめの介

弓

百瀬庄兵へ

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

弓

同

いまたしかく不存候
（在那）
さうの事

一田はたニ米ヲ御取被成候、上八ツ、中七ツ、下六ツ、其年々の出来次第と申候、夏物ハ大豆ハ高百石ニ付一石づゝ

御取被成候か、是もいちはい引ニ御取被成候、大麦ハ二石御取被成候と申候、是又其時之やうす次第と申候

其外之事見聞不申候

補遺一五 豊州城堡記

○別府大学

豊州堡城記序
竊以盛衰興廢者無常之常也、老少病死者不定之定也、愚老喪邑之後礼拝三宝崇敬万神賴得命根未盡矣、回首疇昔

宇佐郡	古名菟狹国			
封戸郷	向野郷	辛島郷	高家郷	葛原郷
深見郷	開田郷	野間郷	弘山庄	麻生庄
日足庄	佐田庄	津布佐庄	安心院庄	岩崎庄
恒松庄	横山庄	山本庄	平田庄	

菱形山城館山城とも申 天慶三庚子年伊予掾藤原純友企叛逆西海二押渡候刻、舍弟東宮権亮純素等宇佐郡三攻入、東方之敵ヲ可防為ニ先此城ヲ築立、由利新三郎朝通ヲ籠置平常之居館と定、繼而香志田山ニ本城ヲ構へ家人數多入レ置自然之時之備とす、同八月上旬宇佐宮神主一合戦者由利朝通今津參訖、從是官軍合躰諸大將入替り翌年迄在城、其後大宮司貞節・相規・相方・公忠・公則・公相・公順・公期數代抱之、元暦元年七月六日、豊後庄司緒方三郎惟栄・臼杵次郎惟隆等令濫妨宮中二乱入神宝黃金御躰ヲモ掠取社殿城院小畠孤坂之砦等悉令破却、大郡司公通か類葉麻生山・深見谷奥ニ逃隠候由、平田之別府者元荒野空閑之地ニテ公通重代之私領

能伝事実者乎、夫文書者事之証驗也所以朝夕勉疆見覺

聞覚隨而紹之畢、世無常態人無定期仰願子々孫々秘宝斯書藏吾家之玉函、備類代之龜鑑謹勿出門戶矣云爾

慶長三年正月中六日

渡辺左馬入道淨蓮記

成、此已前開発シテ井手を通シ田数六十二町余を汲リ己か居館ヲ構置タリシカ、同年九月始方平宗盛一族中、安徳天皇ヲ奉守護八幡宇佐諱シ玉ヒ平田之館ヲ皇居と被為成七ヶ日御参籠有之、頓而緒方三郎等被追出畢、公通之子公房・公広・公仲等、鎌倉殿ニ被愁訴、文治四年ニ當社御造營す事改り神徳増輝、公高・公有連綿相続シテ威ヲ三国ニ振フ、公有之子対馬守公世宿祢、文永弘安ニ正中嘉曆之間弥強大ニ成、嫡子対馬太郎公敦・同次郎・公浦・同五郎公達・同六郎公一等各權勢ニ募リ、就中公敦惡行造意難遁ニ付大宮司職令改補訖、公連一人清潔之仁ニテ忝も後醍醐天皇之勅許ヲ蒙、聖西方寺等之末院ヲ造營シ道密上人ヲ請受テ開山と仰キ己か居館ヲ其下ニ結構シヲ館山城ト号神領守護之權ヲ執行、企救郡到津庄筑前立岩別府等ヲ兼領シテ、從五位下到津大宮司と称、其子孫公利・公規・公貞・公兼・公弘・公正・公治各到津と称、大宮司職なり、公敦之後公右・公和・公居・公内・公満・公則・公佐・公高・公統・公道等、宮成大宮司と称嫡流トゆうモ威徳薄シ、安心院大宮司公增も同家也、孫徳丸・公夏・公益・公守・益徳丸・公見・公正等八分城三在テ全盛也、出光岩根大宮司も亦同族也、併セテ四大宮司と称、何事も四家順役ニ相勤來候、抑八幡宇佐宮寺御造營奉行之義、鎌倉殿ニ宇都宮左衛門尉ヲ下遣候後、大友殿・少弐殿被賜、応永廿五年戊戌之春國主兼防長二州太守大内修理大夫盛見入道德雄大光公ニ宇佐宮司ハ造營可有之由御奉書到来、先弥勒寺修理として奉行仏日庵永震・弘

五月より八幡宮御造営始り、同八月末原彈正入道源定・

同十郎左衛門尉・波多野三郎左衛門尉明実着宮、同九月杉伯耆守重綱・同主計允重朝・同兵庫允賢重入道・

伊佐掃部介盛綱・材木奉行奈古若狭守重光・安富左衛門大夫等着宮、同廿六年己亥二月西金寺別当律師行印

着宮・在宮奉行ハ来原・安富・奈古・波多野始中村四郎左衛門尉重方・朽網弥三郎季長・内藤肥後入道智得・

三嶋孫三郎・堀彦三郎其外当郡地侍橋津・佐田等也、

大宮司公兼・公増等者一同大内家三随從シテ神勤之外無他事・館山城にて菱形刑部左衛門尉諸方・同刑部長

量・真賀江太郎晴房・同六郎晴清等在番タリ、爾後城

井之抱と成立山城と改新貝六郎守之、天文已来到津大

宮司公澄・宮成修理大夫公建・同上総權介公里、兩家

執權たりし所、永禄・天正中豊後奈多大宮司○鑑基・

同鎮基屋形近縁タルヲ以押而宇佐奉行と成、大ニ逆威

ヲ振态ニ神領ヲ掠メ公澄か館ヲ打崩、剩誅伐之公建か

所帶卅ヶ所悉令没収寺務社務領地免田一々被奪取畢、

宇佐之困窮當社之滅亡此時ニ極候、公澄か一子幼少ニ

テ秋月城ニ逃落、近來池水左馬介か子ヲ養令家督、到

津右京と称、宮成公里も無程相果て故、時枝備後か子ヲ養ヒ宮成吉左衛門と称、當時城ハ破却両大宮司者黒

田甲斐守長政殿御取立候

神樂岳城龍王城とも申 養老年中宇佐権大夫諸方八幡宮二

參籠、一國守護之城地ヲ祈念セシ所、安心院之山上ニ

当リ経津主命神樂ヲ奏スと見テ夢覺たり、即瑞夢之告ニ從ヒ彼處ニ一城ヲ築神樂岳城ト号、宇佐氏之別城ト

シ大宮司自安心院と称子孫代々居住、正中・建武之間

※1 安心院公宜父子武家ニ立交リ、深見・開田二郷ヲ始在々

所々數百町令押領、稻尚・新少武道資
新左衛門頼国太宰少式〇之命ヲ受菊池肥後守武

光以下と合戦度々也、安心院美濃守ニ至始而官軍ニ参、

貞治二年愛智左馬助義成、宇都宮大膳亮經累等と及鉢

※2 樵後、遂ニ大内介ニ属、左馬允知家・同小太郎・同豊前入道・同筑後守・同弾正・同興正入道迄在城、天文

中る宇都宮抱と成、城井三郎兵衛房親・同左馬允房統守之、弘治三年○大友左衛門督義鎮ニ明渡候、頓而如

本安堵之所田原近江入道紹忍兼而神樂城ヲ望ミ安心院

中務大輔麟生ヲ妬ミ、麟生不義顯然之由申触天正十年冬○以作略

令誅伐畢、此時内衆神樂岳ニ楯籠要害相支る共、翌閏

正月廿日遂ニ落居千世松令下城逐電院内諸士皆牢人と

成、而六町之神領地隨而亡失、紹忍か養子大友与兵衛

尉親盛之居城と定ム、加來大膳太夫朝宗義・八田権頭

破滅後豊府ニ訴出、安心院美濃守か神領之内四十八町

申受奥城ニ住候由、麟生大宮司者宮成・到津・出光四

家中ニテモ別而武威盛也シカ田紹か奸計ニ陷相果候事

返々残念也、出光大宮司者當職之身トシテ豊後方ニ一

味シ恐多も八幡宮ニ弓ヲ引候故跡断絶者当然之理也、

親盛ハ左兵衛督之御舍弟、紹忍懇望シテ田原民部太輔

と称乍若年聰と在城、天正十四年十二月左兵衛督義統

薩摩之猛勢ヲ恐レ高崎城ヲ落來翌春迄滯在、同十六年

より黒田官兵衛尉孝高ニ引渡、文禄二年黒田之家臣小

河伝左衛門・高麗陣之武功三依、龍王城下壱万石余拝

領之由ニ而帰國之砌死去、城ハ如本番代守之

△頭注▽

※1 新少式直資・中務大夫頼泰・新左衛門頼国

※2 興生当知行合百六町十代武領分四拾八町十代宇佐郡内弁分・成久・恒松名・佐野村寛寿丸名等加へ

宇佐御神領分五拾八町院内新聞庄并横山浦・高家

妙見岳城香志田城とも申 天慶三年藤原純友之課ニ依テ築之、家人ヲ籠置豊後口之押トス、香志田氏代々城番タリ、応安後大内家抱妙見十郎重基・同伊勢守昌親香志守之、弘治三年○大友左衛門督義鎮ニ明渡候、頓而如田左衛門太郎等替ニ守之、応永之末年杉七郎・同民部入道・同伯耆守重国等入部、文明已來妙見尾之城誘被仰付修理事畢、大永中仁保加賀守隆重当郡之守護代たり、夫々繼而妙見岳城代並寺社奉行トシテ杉兵庫介興重・同勘解由左衛門武道・貫備後守道敦・右田下野守興実・佐田次郎隆景・杉七郎重実・同三河守界重等連々下着、天文中迄交代寄合所トシテ郡内大小之事ヲ在山口之杉伯耆守重矩・貫兵部丞隆仲等ニ注進ス、天文之末より宇佐宮には武官三十六士ヲ附置、当城ハ宇都宮貞房ニ預ケテ城井大和守親綱・同三郎兵衛房親等守之、弘治三年より大友家抱ニ成、田原民部大輔親賢在城、豊前探題職ニテ國中大小名主小給人、豊後國東速見之諸士ニ至迄不斷登山致シ交代勤番ス、天正十六年已後城地共黒田氏ニ引渡

宇佐三十六士之事

天文年中從二位大内義隆公より八幡宇佐宮弥勒寺守護之武官トシテ郡内之豪族三十六家ヲ撰被附置候、依之三十六士とも又六々小給人とも申、妙見城代之命を受、宇佐宮寺修理祭礼等諸事一切裁判ス

安心院中務大輔 飯田専千世 佐田因幡入道

橋津掃部丞 時枝龜徳 斎藤菊千世

恵良美濃守 副兵部丞 松木勘解由

深見中務丞 矢部宮内丞 渡辺式部少輔

赤尾李允 内尾備前守 中山弥次郎

弥富十郎 惠良小次郎 櫛野彈正忠
 麻生上野助 木内雅樂助 元重次郎右衛門尉
 萩原山城守 中嶋太藏丞 佐野彈正忠
 庄中務丞 吉村下總守 芦刈玄蕃
 菱形刑部 大蔵監物 妙見奎允
 加来大膳大夫 上田三郎左衛門入道 都留掃部丞
 広崎主殿允 岩尾四郎左衛門尉 今仁藤左衛門等
 也、天文六年以來軍役着到兼宇佐宮裁判出席之覚書也、
 弘治二年並天正六年七年之着到如左
 安心院五郎・同美濃守・松木主膳・同備中守・深見壱
 岐守・同土佐守・河内守・斎藤駿河守・同藏人・同弥
 二郎・原口次郎・同与三右衛門尉・飯田但馬守・同主
 計正・同三右衛門尉・高並主税介・同惣右衛門・津房
 次郎丸・同藏人・佐田彈正忠・同宮内丞・副但馬守・
 同越中守・香志田兵部丞・矢部伊勢守・同三郎・同助
 右衛門・大蔵大膳亮・弘崎対馬守・同新兵衛尉・渡辺
 和泉守・同石見守・上田安芸守・同因幡守・是恒備前
 守・同惣左衛門・同藤右衛門尉・吉村弥六左衛門・同
 左馬允・同式部丞・都留右近・同忠五郎・橋津次郎左
 衛門・真賀江六郎・相良主水・同隱岐守・麻生攝津守・
 木内帶刀左衛門・元重隱岐守・同安芸守・赤尾式部少
 輔・同弥次郎・萩原兵部少輔・同四郎兵衛・佐野源右
 衛門・時枝平太夫・中嶋壹岐守・同伊豫守・加来次郎・
 櫛野左衛門・荒木三河守・城井三郎兵衛尉・津都見源
 三郎・同勘右衛門・照山雅樂介等也、是等之諸士者於
 郡中も權門勢家ニテ鎌倉已來公方之地ヲ食シ又者官家
 之錄ヲ受たるも有、時代之転変ニ因テ盛衰不少、或者
 本家零落支族被官ム軍役相勤、或者他姓ノ名跡を受継
 神務執行・永禄・天正之際姓名不一樣・荒木・照山・
 城井・真賀江等者名も無クテ惠良勘解由允・主計允・

下野次郎・中山進士允・左近助・彈正入道・弥富右衛
 門・対馬守・内尾治少輔・仲間藤三郎・渡瀬右京進・
 矢治大炊之介・弘山太藏丞・江熊伊豆守・岩尾兵部丞・
 岡崎・阿部・松尾等入交リ相勤タル、着到・下知状も
 有、最前者安心院・佐田・飯田・深見・松木・橋津・
 矢部・時枝・赤尾等十家斗ニ而、郡代奉行役受持・宇
 佐宮寺之惣支配せし也
 木内城丸尾城とも申 保元二年平判官兼頼之課ニ依テ千葉
 介常胤か三男武石権守成胤と申者東国ム來而築之、始
 西山之法雲寺城ニ居後東山之丸尾城ニ移ルト云、天文
 已來武石之族ニ家ニ分ル、木内ニ在ヲ武吉主殿允因貞
 と称、今成ニ在ヲ吉武伊賀守貞弘と称、宗族木内雅樂
 助喜貞・同源太郎盛貞・同帶刀左衛門種貞代迄丸尾在
 城、天正七年大友家ム為目附綾部攝津守ヲ被附置
 宇佐川東大抵佐田之手ニ属御許山領佐田庄五拾参町・
 築城郡牛丸名八町・田河郡柳原名三町・深見庄内下岩
 追屋敷・藤田・宮限等併せて百余町ニ及、今之彈正忠
 鎮綱専大友家ニ隨從、數勵戦功次郎統綱代城地破却
 弘治二年六月八日、筑前國千手馬見表動之節、宇佐郡
 一揆内屬隆居手馳走人數、但隆居召連ニ被官契約着し
 注文
 川辺源左衛門尉・川辺民部丞・上田源三郎・広崎主殿
 允・岩尾四郎左衛門尉・別府雅樂允・皆木助左衛門尉・
 皆木太郎左衛門尉・高田右京進・是恒惣左衛門尉・中
 嶋神五郎・久保宗益入道・吉富次郎左衛門尉・塩田与
 三右衛門尉・井上太郎左衛門尉・中嶋神四郎・野間与
 七郎・樋田弥七郎・矢治孫右衛門尉・津留掃部丞・原
 与一左衛門尉・森忠兵衛尉・大門三郎左衛門尉・松井
 与三右衛門尉・佐藤新左衛門尉・拔田孫左衛門尉・上
 田三郎左衛門入道代・池田源左衛門尉代・池田掃部丞
 尾兵部丞代・皆木平四郎代・是恒藤左衛門尉代・吉村
 与次郎代・吉田小太郎代・平田村三郎兵衛代・久保九
 郎左衛門尉代・成貞五郎左衛門尉代・山村小次郎代・
 津留忠五郎代・松崎村三郎左衛門代・小野新太郎代・
 秋田次郎左衛門尉代・清藤三郎代・小野次郎右衛門代・

※佐田二移、於菩提寺山築一城管領一色入道通獻○左
 京大夫○氏経・今川○貞世入道・了俊等ニ昵懇、毎々
 抽忠節佐田庄足立五郎左衛門尉遠氏か守跡並○元永村

○苅田・○伊方両庄・京都郡吉田庄・○肥前国田中
 宮鶴丸跡地頭職式拾町・肥後国岩野村・同木葉村等之
 地頭職ヲ被宛行訖、公景子河内小法師丸經景・掃部助
 親景父子大内家ニ附属、嫡男因幡守盛景・同又次郎忠
 景・同大膳亮泰景○・同彈正忠隆居三至所領益広候、

宇佐川東大抵佐田之手ニ属御許山領佐田庄五拾参町・

築城郡牛丸名八町・田河郡柳原名三町・深見庄内下岩

追屋敷・藤田・宮限等併せて百余町ニ及、今之彈正忠

鎮綱専大友家ニ隨從、數勵戦功次郎統綱代城地破却

弘治二年六月八日、筑前國千手馬見表動之節、宇佐郡

一揆内屬隆居手馳走人數、但隆居召連ニ被官契約着し

宇佐川東大抵佐田之手ニ属御許山領佐田庄五拾参町・

築城郡牛丸名八町・田河郡柳原名三町・深見庄内下岩

追屋敷・藤田・宮限等併せて百余町ニ及、今之彈正忠

鎮綱専大友家ニ隨從、數勵戦功次郎統綱代城地破却

弘治二年六月八日、筑前國千手馬見表動之節、宇佐郡

一揆内屬隆居手馳走人數、但隆居召連ニ被官契約着し

注文

川辺源左衛門尉・川辺民部丞・上田源三郎・広崎主殿
 允・岩尾四郎左衛門尉・別府雅樂允・皆木助左衛門尉・
 皆木太郎左衛門尉・高田右京進・是恒惣左衛門尉・中
 嶋神五郎・久保宗益入道・吉富次郎左衛門尉・塩田与
 三右衛門尉・井上太郎左衛門尉・中嶋神四郎・野間与
 七郎・樋田弥七郎・矢治孫右衛門尉・津留掃部丞・原
 与一左衛門尉・森忠兵衛尉・大門三郎左衛門尉・松井
 与三右衛門尉・佐藤新左衛門尉・拔田孫左衛門尉・上
 田三郎左衛門入道代・池田源左衛門尉代・池田掃部丞
 尾兵部丞代・皆木平四郎代・是恒藤左衛門尉代・吉村
 与次郎代・吉田小太郎代・平田村三郎兵衛代・久保九
 郎左衛門尉代・成貞五郎左衛門尉代・山村小次郎代・
 津留忠五郎代・松崎村三郎左衛門代・小野新太郎代・
 秋田次郎左衛門尉代・清藤三郎代・小野次郎右衛門代・

● 麻生上野介鎮里始左馬大夫と称、三牧郡上津岐之城主たり、上津岐之城者麻生小次郎頤貞之草創ニ而上総介家春か二男近江守家延か嫡子兵部大夫弘重か勇士佐守家理か二男也

狐塚山城 肥前上松浦党源次判官久より十四世之嫡孫渡辺源次左衛門尉直、正平廿一年官軍之列ニ在、新田上

野介義基之手ニ属シテ宇佐郡高家四日市ニ来住、南方之御代官たり、明徳四年南北御合体後新田小一郎義氏

之課ニ依テ狐塚山ニ一城ヲ築立、下邑ニ土井ヲ営ミ山本城跡・吉松等ヲ併せて三百貫之地頭職也、此時豊前ハ大内介義弘之領国ニ而人皆義弘之勇勢ヲ恐レ盛見か仁風ニ靡之馳走ヲ山口ニ励ミ忠節を大内ニ盡す、弘治之度始而大友家ニ属ス右馬尉五世之孫式部少輔入道淨運代一族大ニ繁昌和泉守・筑後守・三郎右衛門等兄弟豊府ニ給仕、妙見岳ニ參勤貞義粉骨之抽各切寄土井ヲ構三四家と分レ豊後国東郡田染郷之内速見郡山香郷之内都合廿余町ヲ兼領ス、即今之石見入道南世連勝寺正頼新右衛門主水等也

永禄天正之着到一族家臣之銘也

渡辺石見守統忠・同兵庫介統房・同肥前守元綱・同刑部少輔述綱・同加賀守綱吉・同大藏大夫通綱・同三右衛門・同新右衛門・同太郎・同式部丞・同主水・吉松掃部・横山兵部・今市嘉左衛門・池田美濃守・角軒宗左衛門・久保新左衛門・狐塚金右衛門・同金兵衛・今藤右近・同右京・松山源右衛門・平原大炊之介・緒方仁右衛門・同市右衛門・財津太郎・同勘六・小田九郎兵衛・同九左衛門・黒木伝六・同伝左衛門・矢染善蔵・同吉兵衛

吉田城光岡城とも申 建武年中高武藏守築之、貞和六年四月筑前原田之余流赤尾孫五郎種親か族赤尾次郎左衛門

尉種綱尊氏將軍ニ属、吉田村之地頭職ニ被補任、嫡男兵庫介弘種・嫡孫修理亮國種か代大内家ニ從、兵威ヲ輝也、文明中寺庵建立吉田村ヲ赤尾ト改、其子備後守親種入道張歎之時ニ至増々全盛也、赤尾・今仁・大稻・川並・深見庄内・山城分仲津郡大橋・小部野村八町式段五代分を領知也、宇佐宮神職ヲ兼勤ス、左衛門大夫賢

種・式部少輔武種父子始而大友殿ニ從弥次郎鎮種事、天正六年於日州高城表戦死其子孫三郎行種・孫左衛門尉信種没落ニ付、豊後より永右近行賢ヲ被附置

天文三年卯月六日豊後国山香郷大牟礼山合戦之時、備後守親種着到覚

赤尾左衛門尉信種・同弾正忠鎮種・同右京進孟種・田城内膳允玄節・合山掃部方重・相木兵庫頭兼核・了戒大内藏允征因・榎木玄蕃正伴・横光左馬允元雄・熊川六郎左衛門益幡・高原弥六左衛門定精・城原八郎能貞・林三郎左衛門次徳・川島七郎左衛門満房・山脇源五兵衛觀健・岩田大膳唯毎・落合民部伯永・吉田内記照政・松原左近行尋・田中李之丞路宣・真島与三左衛門成任・坂本弥七左衛門起直・今仁主水基実・瀧口将監広仲・僕從神左衛門・源五郎等人数多

永禄式年八月・同九年三月赤尾式部少輔武種親類被官人数着到覚

赤尾刑部丞義種・同左衛門大夫因種・同左京進朝種・松原右近孟行・今仁主水丞実知・林主計頭忠次・榎木源藏伊成・田城内記玄孝・川島八左衛門尉満信・吉田李之丞孟政・春城原八郎貞常・了戒内藏丞征基・横光

帶刀元昌・宮原右馬允精治・山脇新兵衛尉矩利・相木兵庫介兼教・落合源五郎伯房・合山掃部重政・真島新五左衛門尉成秀・田中長次郎路鎮・坂本半藏直清・岩田宮内介每重・瀧口軍次郎広高・熊川六郎左衛門益宣・僕從九郎左衛門・平右衛門・藤次郎・彦三郎等苗字不知分數不知、右廿四人者赤尾家中之由、外ニ地侍十二人有、中菌に布津部・楠本・福光・市場・岩水・池手・石井・竹内・古寺・樋口・長福寺等也

時枝城 宇佐郡弥勒寺別当留守職仲原氏代々居住、明徳中留守弾正忠、応永中時枝左馬介惟光大内家ニ奉仕ス、是より先大内介より一千六百町之地ヲ宇佐宮ニ寄附す、内

千町者社務益永肥前守支配ス、六百町者寺務時枝支配之分山下玄蕃ニ預ケ置候所、玄蕃制務不忠候故令追放、

城州八幡慶安寺之子ヲ呼下シ時枝大和守と号、留守職を勤時枝猿渡並上毛郡鬼之木村ヲ領ス、同右馬允宗繼・同兵部少輔親繼・同武藏守鎮繼○迄代々繁栄、兵威ヲ

近隣ニ振也、山下・元重・高並奥迄切靡、天正六・七年より毛利方ニ属高家中嶋壱岐守ヲ討取近郷皆敵と成、然ル所奈多大官司か乱妨ニ逢、寺務職居屋敷分並四拾町之地所悉被押領、同十三年中嶋か弟伊予守ニ打負中國ニ渡海小早川隆景ヲ頼後又黒田官兵衛ニ從、再当国ニ立帰甲州ニ隨遂シテ軍役ヲ負ミ、東六郡之曲者ヲ退治ス、此間時枝城ハ守田右京進盛吉在番、上毛郡者鬼木新五兵衛尉守之、鎮継跡式者宇佐大宮司より令相続時

枝備後守隆令と申、其子宮成吉左衛門武家卜成、中津川ニ仕官補慶長五年平太夫と並シ、黒田長政三随、筑前ニ至吉左衛門者黒田姓を冒ス、平太夫ハ有故遠賀郡鳴水村

※1 宇佐宮弥勒寺別當法運和尚四十余世続、義烈武門

ニ立、又元亨二年草創之嫡男肥前守・同弾正忠・

同左馬介等留守職仲原も代々居住、大内家ニ附属

従是前二

深見城 深見右近五郎広政跡と承ル、南北御合体後深見
弥次郎直政・同太郎政直・同次郎左衛門等代々守也、
近年河内守代落去

金屋新開堡 応永中長洲刑部左衛門尉吉綱已來代々居也

※2 遠賀郡鳴水村ニ蟄居、慶長十二年十月九日死去畢

土井城 応永中佐野助太郎重通築也、代々居住曾孫彈正

親基・同源兵衛親重一子源次郎親時代、高橋・野中等

と牒合セ豊府三叛、天正十一年十月六日大友誅伐城落

去、父親重入道舍弟清左衛門親宗之子勝寿丸宗成西豊

前二落行、十二名主抱之後ニ破却、親族被官着到覺佐

野清左衛門尉親宗・同宗範入道・奈良頼母介重尚・有

安兵部重根・筑城伝次兵衛尉重通・薗田外次郎孟卓・

後田太郎宗房・門柳七郎左衛門・野田刑部・梶谷金吾・

富田次郎・小犬丸弾平・片峰五郎

飯田城 往古安心院氏之末流と承ル、貞治中飯田小次郎
恒之築之、同彦左衛門・同但馬守・同石見入道・同但
馬・同主計頭・胴大炊允・同左京進迄守之

中山城 元応以来深見弥次郎・津布佐弥五郎入道等地頭
職之所、文明中中山丹後守親資大内家ニ頼院内之司職
たり、弘治後大友家ニ属龍王・妙見両城ニ出入中山内

記允・同内記兵衛尉・同内膳正代城被攻潰
田畠等も数町有也、藤右衛門賢直者掃部介又和泉守山
城守とも称、戦場も度々出合武勇之譽レアリ、忍可者
其養子ニテ即蓬萊女か聟也

山下切寄 山下保弥勒寺領下司田所両職二屋敷有也、下
司職者溝口ニテ紀氏蓮真以来と承ル、田所職者今仁ニ
テ藤氏覚円・覚融・千与乙丸・五郎四郎・大房丸も近
代之五郎右衛門・藤右衛門忍可迄相続、給米給麦散在

山下切寄 山下保弥勒寺領下司田所両職二屋敷有也、下
司職者溝口ニテ紀氏蓮真以来と承ル、田所職者今仁ニ
テ藤氏覚円・覚融・千与乙丸・五郎四郎・大房丸も近
代之五郎右衛門・藤右衛門忍可迄相続、給米給麦散在

元切重寄 元重四郎・同伯耆守豊後も来住と承ル、天文

年中元重次郎右衛門尉清親倅三人有、嫡男隱岐守鎮清

と云、子兵部丞鎮賴者於日州耳川討死、次男越中守統

清後安芸守ニ任入道シテ教玄と申、光嚴寺之住職たり、

子統信事禪珍と号光嚴寺之後住之契約有、後還俗市右

衛門と称兄を三郎盛清と云、三男甚介賢清と云、子掃

部助左介等有、郎等源介・源七郎・六郎・次郎等者時

枝懸合ニ被疵或戦死

高並城 高並小次郎入道妙願か族高並彦八、太宰少弐之
命ニ依正平年中築之、同孫太郎已來代々居也、弘治二

年地侍小野・佐藤・得光・江口等ヲ從、一族六人小稻

大重見所々之切寄ニ移ル、天正中高並將監・同市次郎・

同主税介・同惣右衛門迄相続

宮隈城 応永中萩原土佐守綱雄豊後萩原も來築之、太郎

綱重大内盛見公ニ属萩原土佐守盛行と称、宮隈名並敷

田邑之地頭職たり、美濃守武綱舍弟孫三郎重純代敷田

土井城ヲ築、大永六年十二月も重純か嫡男弥五郎重藏

代官職たり、武綱か一子民部丞安綱迄代々大内家ニ服

事、宮隈敷田廿四名主附添、弘治之初年も山城守鎮次・

同兵部少輔鎮宗豊後方と成、敷田土井城ニ移ル、今之
四郎兵衛尉種治三至改易、跡地者佐田弾正忠ニ預遣

辛嶋堡 延暦年中宇佐祢宜辛嶋勝与曾壳か苗裔漆嶋時守

宿称初而築之、世々赤蜂將軍辛島田居敷百町ノ新開シと号〇、天正中和泉社々

司兼辛嶋司職並時事奈多鎮基か為ニ誅伐居館破却

橋津切寄 橋津氏代々居住、橋水脇等ヲ領知す、応永中

橋津次郎正吉・同出羽守正常・同次郎左衛門澄慶・同
掃部介・同勘解由、今之掃部又兵衛等迄相続

上田切寄 上田氏代々居住、上田丸名並葛原郷内ヲ領ス、

元も代々居也

応永十年八幡宮御馬所別当職並知行分事、江嶋公国
上田弥太郎実内永世譲受、同左衛門佐道実・同宮内左
衛門・同因幡守・安芸守・新左衛門等迄相伝也

清水切寄 清水寺伽藍觀音堂、治承已來廢退せしを令再
建修造、応永年中泉福融安禪師を請シテ中興開山トシ、
八社大明神ヲ勸請屋敷○此外切寄數ヶ所有之、松木勘
解由九兵衛尉・矢部三郎左衛門・大蔵外記を始、宗像
平太郎判官光盛・土岐七郎頼基・中村十郎房信・前野
民部少輔・同右馬助吉平・長田又四郎・吉松治部丞・
庄若狭等か末葉、宇佐惣檢校益永政輔・同重輔・同通
輔・同道高・同高輔・祝宮増・同宮重・今永宮氏・永
弘新左衛門泰広・賀来神左衛門泰家・同采女丞惟家・
吉用修理・所別當助世・同采女佐明助・樋田掃部介・
徳丸大蔵・四郷司・稻積太夫・高村土器長等も各土城
を構有事時者軍役二出候、近世宇佐宮も祝宮道惣檢校
統世・恵良貴重・小田頼治・小山田氏泰・江島公善・
吉用公朝・清末秀等武家方と合戦度々なし小城切寄
等構者也、略之畢

△傍注△

○三ヶ所を構、嫡孫治郎承道貞・同彦名丸・同孫三郎二
至迄行徳富久三町四拾代清水分式町壱段其外山野荒野
等給地所帶ニ致成、代々大内家ニ隨從シテ清水寺修造
ヲ司ル、家清築城大蔵承久吉・後田甚右衛門尉友房等
三四家有

大分県文化財調査報告書 第160輯

大分の中世城館

第二集 文献史料編 2

2003年3月31日

発行 大分県教育委員会

〒870-8503

大分市府内町3丁目10-1

097-536-1111 (内5498)
